



（岡山製本）

大正三年九月二十日印刷
大正三年九月二十三日發行

有朋堂文庫
名家隨筆集下卷（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

名家隨筆集上下卷索引　終

ワ

ラ

ヤ

ム

メ

モ

マ

フ

ト

ツ

チ

タ

ソ

シ

サ

コ

ケ

ク

キ

オ、ヲ

エ、ヱ

ウ

イ、ヰ

名家隨筆集上下兩卷索引

（主要の語句思想を採りて發音に依り五十音順に排列す）

ア

筆のすさび終

一夜半ノ鐘　夜半ノ鐘のこと呉中のみにありと云ふ說もあり。また、夜あけの鐘を夜半と認めしなどいふもあり。あけて後に寺を見て、さては夜前聞きしは、あの寒山寺の鐘なりきといふ說もあり。李洞が月落長安半夜鐘といふを見れば、呉中のみにあらず。丘仲孚書をよむに、中宵の鐘を限とすといふも半夜なるべし。張繼が重泊楓橋詩にも、烏啼月落寒山寺、支レ枕猶聞半夜鐘。といふもありて、さだかなるに、月落烏啼を夜あけのけしきに見るゆゑに、色々の謬解もいでくるなるべし。

市尹―町奉行

びさらんとするに、地よりはたち颺りがたきゆゑ、羽翼ををさめて歩して歸りける。後に此の事あらはれ、市尹の廳に呼び出され、人のせぬことをするは、なぐさみといへども一罪なりとて、兩翼をとりあげ、その住める巷を追放せられて、他の巷にうつしかへられける。一時の笑柄のみなりしかど、珍らしき事なればしるす。寛政の前のことなり。

一子反の酒疾　左傳の子反が酒をのむこと、かゝることは人間にあるまじき事なるべし。予も酒の疾ありて、いろ〳〵の變態を知れども、凡世に心のなき人はあらじ。子反酔はざればよき將にて、酔ふ時事を敗るは平生の事なるべし。陣に臨み敵に對しては、かゝることはあるべからず。かゝることある人ならば、酔はざる時も、よき將にてはあらざるべし。

凡、酒の疾酔うて前後をわすれ、身をわするゝは多けれど、大酔の上の事にて、尋常にはあらじ。疲勞して、しばらくこれをもて氣を引きたてんとするは、大酔して前後をわするゝにも至らず。子反も中軍の大鼓と心づかひの多きとに、しばらく勞をたすくる心なるを、敗軍になりし故、人も奇に云ひつたへ、書にも奇にかきしなるべし。

唐絶の壓卷—唐時代の絶句の最良なるもの

有明のつれなく見えし別より曉ばかり憂きものはなし

といふを古今第一とし、「秦時明月漢時關、萬里長征人未レ還」といふを唐絶の壓卷などいふは、眼たかし。近頃小澤蘆庵のみ此の意を知れりと見ゆること多かり。諸九といへる尼、夷講にて酒もりする處にて、

客をつるいとは三筋やえびす講

といふ發句したりければ、一座興ありつれども、其のさま賤しければ、後悔したりとみづから語りき。かゝる體は俳諧の俗談平話といへるにさへいやしむを、近頃詩歌の人好みてこゝをせにして物するはいかにぞや。

一機巧　備前岡山の表具師幸吉といふもの、一鳩をとらへて、其の身の輕重羽翼の長短を計り、我が身のおもさをかけくらべて、自ら羽翼を製し、機を設けて胸前にて操り搏ちて飛行す。地より直に騰ることあたはず。屋上よりはうちていづ。ある夜郊外をかけり廻りて、一所野宴するを下し視て、もし知れる人にやと近よりて見んとするに、地に近づけば風力よわくなりて、思はず落ちたりければ、その男女驚きさけびて遁れはしりけるあとに、酒肴さはに殘りたるを、幸吉あくまで飲みくひして、また飛

人、舞臺へ飛び上り、其の役者を打ちたゝきしかば、頓て人々取り押へて、老人をつれ歸りけるを見たりといふ。おもへば虞初新志に其の事のごとき事あり。取りおさへたる人、「あはれ戲なり」といひければ、其の人「若眞ならば我が刀に膏せん」といひき。何地もおなじく善を好み惡をにくむの懿德の、おもはぬ處に發見すること、つねにあることなり。

一詩歌の語　此の頃雨ふりつゞきて、晴るゝ期も見えず。よりてふるき歌に、

住吉の松の千歳もふるばかりひさしくはれぬ五月雨の空

俳諧の發句に、

さみだれやある夜ひそかに松の月

などいふを思ひ出でて、かくあまりにふりすぎ久しすぎたるも、興さめて見ゆるものなり。おもふついでにまた歌に、

眺めじと思ひすててもとにかくに涙せきあへぬ秋の夕暮

これらも悲しすぎたり。春の曙に命をのばへ、郭公を待ちていく夜もいねざりしなども、其の類にて、古人の上手にも此の類多けれども、余はこのまず。

とす。天竺にて釋迦の居ましゝ寺に遊び、礎のみ殘りたるを見しこと、長崎夜話に見ゆ。近頃大坂にてアメリカ國の龜甲を見る。其の龜文こゝの物と大同小異なり。凹き所は金色にして、全體こゝの龜より丸くして遍ならず。これも德兵衞、媽港よりとり歸りしものなりといふ。

一産醫可レ愼事　一老醫の話次に、「鞆の浦の某難産にて、諸醫穩婆等みな死胎なりといふ。産婦もまたしかいふによりて、せめて母をたすけんとて、鍛工に命じて引き出す具を造らしむ。具すでになりて引き出さんとする時に、俄に分娩して、健なる男子なりき。今尙存在せり。又何某邑の何某の家に難産あり。是も諸老醫多くあつまり、死胎なりとて鉤をもて引き出しゝに、産聲たかくくるしげにきこえて、死胎にはあらずして、鉤の創痕より血したゝりてやまず、二日經て死したり。鞆の産はわれも與謀して引き出さんとおもひたりき」と語りぬ。かゝれば今の産醫妙術おほしといへども、亦愼むべき所あるにや。

一羞惡　文化三年三月妹なりけるたねが、京に行きしに、一日因幡藥師の戲場を見るに、一惡人出でて人を害するさま、あまりににくゝ見えければ、棧敷にをりたる一老

坡東―蘇軾
放翁―陸游
以上宋の詩人
崆峒―李得盛
滄溟―李攀龍
二李―李東陽、李夢陽の二人
はたはり―ひろがり

一栗の大樹　備後の安田といふ所に、栗末垂たるあり。遠く見れば、垂絲櫻のごとし。高さは一丈許にて、はたはり二畝許もあり。栗毬多くつきて見事なりきとて、外姪淺右衞門此の頃圖して歸り示す。

一詩語に白子を交ふる說　詩語限あれば、間に字を挿し入れてよく通ずるあり。孔子の有レ物必有レ則よりはじまり、程明道の詩を說くに、默㩸して人を省悟せしむといふも其法なり。徠翁又これにしたがひて詩をときて、語句の間に白字をまじふ。近頃の僧大典、むかし僧何某が創法とて、ことぐ\しくかきたるもをさなきや。

一唐商の遺物　京の富小路竹屋町の邊やらんに、机、硯筥やうのもの數品持たる家あり。是はむかし唐山の人年々來り、店を開き物を賣り、歸る時は賣り殘しゝ貨物を、其の町内に預け置くを例とす。一年かけて又來らず、十作を經し故、有司へ伺ひければ其の貨は一町として預りおくべきよし命ぜられ、巡檢使のたびごとに點檢せられしこと、四十年前まではしかありしよし。今はいかゞなりしか。其の頃は京南都へ來り、店出しせし唐人はいくたりもありきとなり

一天竺德兵衞　德兵衞といふは高砂の商にて、外國を廻り、天竺にもゆきし故、綽號

七才子―明の詩人七人を併稱す
高青邱―名は啓
李何―李夢陽と何景明
李于鱗―名は攀龍
以上は明の詩人

撃壤集は古詩ことに吟と命ず。

一詩文長短　饑蛟取渇虎五字にて、其の事の了然たるを賞す。然れども、夜何如其夜未央、二十五聲愁點長、仙人掌上玉芙蓉の如き、みじかきことを長くいひて味多し。是等は其の詩の體裁其の語の勢にもよりてみじかきを必とせざるなるべし。

一鹽河侯　鹽河侯は水と魚とのたとへをいはん爲に、ふとおもひ付きたる名なるべし。此魏の文侯ならんといひ、鹽河の官に侯と稱せらるゝ人あらずなどいふは笑ふべし。此の書の名字みな此の類なるに、これに人を當てんとするは、別に意ありや。

一詩人の説　ある人、もと七才子の詩を悦びしが、此頃飜然として體を變じ、宋調を學ばんといふ。余云く、詩の妙處は宋を必とせず、明を必とせず。好處は明にも宋にもあり。魔處も亦然り。高青邱、李何、李于鱗がごときは、東坡、放翁に見せても、拙とはいはざるべし。明人一時宋をそしる。流俗にも宋人才なしなどいふこと常言なれども、英雄人を欺く意多し。清の王漁洋、古來七言律の上手をかぞへて、宋に陸放翁、明に崆峒、滄溟、二李などいふこそ、平心の詞なるべけれ。今平心にて見れば、宋にも明詩あり。明にも宋詩あり。これは自ら見てみづから知るべきにや。

寸許に見ゆるは、尋常の人の目なり。されば所謂ぬか星などは、おのれが目には見えざるべし」といふ。人々皆試みし事にや。予ははじめてきゝぬ。

一詩文名題　詩體明辯に云く、樂府題を命ずる名稱一ならず。蓋、琴曲の外より其放情長言雜にして方なきを歌といふ。歩驟馳騁、疏にして滯らざるを行といふ。これを兼ぬるを歌といふ。行と述ぶる事本末先後序あり、以て其意を抽けるものを引といふ。高下長短委曲情を盡して以て、其の微を道ふ者を曲といふ。吁嗟慨嘆悲憂深思以て其鬱を伸ぶるものを吟といふ。其の辭を措くの意に因るを詞といふ。其の篇命ずるの意に本づき篇といふ。發に發し唱といふ。條理ある詞といふ。憤にして怨せざるを怨といふ。感じて言に發するを歎といふ。皆詩の變體にして、總べてこれを樂府と云ふ。歌行聲あり詞ある者、樂府に載する所の諸歌是なり。詞あり聲なき者あり、後人作る所の諸歌是なり。其の名多く樂と府と同じくして咏といふ。謠といひ、哀といひ別といふ。則ち樂府のいまだあらざる所なり。蓋、事につきて篇に命ず。既に治めざる古題を襲がせて、聲調亦復相遠し。乃詩の三變也。（以上漢語なりしを今是を和解す）かくの如くありといへども、後世になりては、構思の時、必しも何某らをわかたず。詩成りて後に題を命ずるのみ。

藤氏—藤原頼經、同類嗣

長が作れる平家は、今の四十八巻の盛衰記なり。信濃前司行長が平家は、今の十二巻にて、それは盛衰記中より擇びぬきたるなりとあれども、二書ともに作者はさだかならず。時代は、鎌倉將軍藤氏二代の中に作れるなるべし。源中納言の青侍の夢に、平家の方人したまへる嚴島明神を追ひたてて、八幡大菩薩の、日頃平家へあづけおき賜へる節刀を、賜はんと仰せければ、其の後は吾が孫にたび候へと、春日明神の仰せられしなどにても知るべし。藤原頼經關東下向なきさきに、いかでかかやうの事書きも思ひもせん。盛衰記には、入道將軍頼經の子にあたれりとさへあり。もし親王將軍の時ならば、天照大神又とりかへし賜ふなどあるべし。さて盛衰記は、其の後に平家物語と東鑑とをあはせ作りたるものと見ゆ。既に源平と名づけたれば、源氏の事をもくはしくせんとて、大庭が早打一段に、東鑑をとり入れて、東國の軍を詳にせしなり。然れども、本の早打の處をも其のまゝにおきたれば、二重になりしなどにても、源平盛衰記の後出なることあきらけし云々。

一月を見る說　友人橋本吉兵衛、名は祥、來り語る。「人の月見るに、人によりて大小あり。おのれは徑二三寸のまろき物と見しが、人によりて徑六七尺にも見ゆるあり。六

或人傍にありて予が語を聞きて、「もし此の人の文集をたづねば、記に論あるも、檄に論あるもあるべし」といひき。いかゞあらんか。王安石よくかゝる說を出して、醉白堂は韓白優劣論なりなどいひし事あり。

一書札文字死活　書札の文字にも死活あり。たとへば、一筆啓上仕候より、御無事御堅固云々、私宅無ㇾ恙、時候御自愛、猶期二後音一云々は、何事もなきにも、書くもかゝざるも知れぬほどの事なり。其の間に、此間の寒氣は、弊鄕は海濱に氷を見、或は半月一月の旱なるに、よそには夕立すれども、こゝにはふらずなどいふは、おなじ寒暄を叙ぶるにも、其の地の氣色もおもひやられて、書狀の文字も活々するなり。月日の末に、此の書認めたる時は雨しきりにふり、時鳥二聲三聲おとづれぬなどかきたるは、いよ〳〵其の時其の人のすがたもおもはるゝ樣にておもしろし。長さ三尋あまりある書札にても死したるあり、三行四行の書にても活きたるあり。これらは書札にかぎらず、詩歌連俳にては心づくべきことなるべし。

一平家物語、盛衰記　備中長尾村小野直吉よく書を讀む。其の子本太郎もまた其の意を繼ぐ。其の說に、平家物語は盛衰記より前に出でし者なり。羅山先生の說に、葉室時

書札―手紙
寒暄―時候の挨拶

斗——一升ます

てこれを名づくるの類なり。而して脛の内廉腿股に連り、腫大にして斗のごとく、青筋縱橫遮絡、これを按ずるに緊ならず寬ならず、其の脈數にして力あり、飲食減ぜず、二便自ら可し。斯症固よりこれを多骨疽に得たり。多骨疽の症、多くは遺毒に出づ。而して其の瘡勢所のごとくに至るものあり。只口内汚腐充塡緣なく、餌糖卽ち貝母も眉をあつめ口をひらくの功を奏することあたはず。文政己卯中元桂川甫賢國寧記す。

一赤壁賦、韓文公廟碑說　徠翁の說に、「文は體を識らんことを要す。東坡が赤壁は賦にあらず、韓文公の廟碑は碑にあらず。皆論なり」といへり。予おもふに、赤壁は遊記を韻語にして賦と名づけたるにて論にはあらず。文中に論もあれども、夫は客のことばと自身の語にて一座の興なり。其の事を論ぜんとて、こゝに遊びたるにもあらざるべし。韓廟碑は賢人君子の事跡、天下後世の耳目にみち〳〵たることとなれば、さらにいふに及ばず。夫ゆゑ自家の感慨をもこめてかきたるなり。其の文の體裁は、東坡もよく知りたれども、千篇一律になりては、見る人も厭ひ、自身もおもしろからぬゆゑ、かくは物せしなり。徠翁も其の意はよく知りたれども、吾が邦に文をよくする人もなく、かゝることはいかやうにいうても、人のうくるとおもひて云ひ出せるなるべし。

中元―七月十五日

荏苒―ぐづぐづと

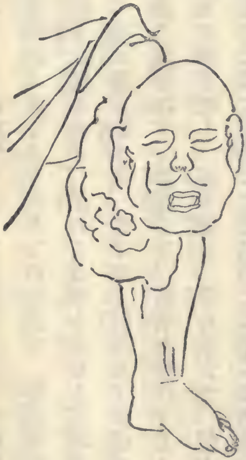
名を別つに過ぎざるのみ。人面瘡のごときも亦是なり」今茲に己卯中元仙臺の一商賈、門人に介して曰く、「或人遠くより來りて治を請く。年三十五を加ふ。始十四歳のときにありて、左の脛上に腫を生ず。潰れて後膿をながして竭きず。終に朽骨二三枚を出す。四年を經て、瘡口漸く收まる。たゞ全く腫消えず歩頗る難し。故に溫泉に浴し、或は委中の絡を刺し血を瀉す。感應せず。醫者を轉換するも、亦數人。荏苒として幾歳月、其の腫却りて自ら增し、膝を圍み、腿を襲がせ、然して再び膿管數處を生じ、彼收まれば此に發し、前に比するに甚だ同じからず。只絕えて疼苦なく、今年に至りて瘡口一處に止る。卽ち先に骨を出すの孔の傍なり。瘡口脹起哆開し、あたかも口を開くの狀のごとし。周圍淡紅く脣のごとく、微しく其の口に觸るれば則ち血を噴く。亦痛疼なし。口上に二凹あり。瘡痕相對し、凹內に各皺紋あり。あだかも目を閉ぢ笑ひを含むの狀のごとし。眼の下に二の小孔あり。鼻の孔の下に向ふがごとし。兩傍に又各痕あり。痕の邊に各堆起し、耳朶のごとく、其の面楕圓根膝蓋に基して、頭顱の狀をなす。且患ふる處惻々として動あり、呼吸のごとし。衣を揭げて一たび見れば、則ち言を欲する者に似たり。復、約略人面を具するにあらず。強ひて人面をもつ

王父—祖父

歷稽—善く考ふ

察せよ。

王父月池先生、嘗て余に語りて曰く、「祖考華君の曰く、城東材木町に一商あり。年二十五六、膝下に一腫を生ず。逐漸にして大に瘡口泛くひらき、膿口三兩處、其の位置略人面に像る。瘡口時ありて澁痛し、滿つるに紫糖を以てすれば、其の痛み暫く退く。少選ありて再び痛むこと初の如し。夫、人面の瘡は、固より妄誕に渉る。然るに、かくのごとき症人面瘡と做すも亦可ならん乎。蓋、瘍料諸編を歷稽するに、瘡名極めて繁し。究竟するに、其の症一因に係りて發する所の部分、及び瘡の形狀を以て、其の



去年此日泊辰州　衰柳蕭々客繫舟　白髮天涯嘆流落

今宵聽雨古宜州

といふあり。

一知己　知己を、おのれを知るといふは、不己知より出づるなるべし。

一韓氏の文　孤山の知圓法師の閑居編に、徒弟多く韓文を信仰のあまりに、韓氏の文字に佛をそしるあり。文は學ぶべし、僧として佛をそしるべからずと戒しめし文あり。（予いまだ其の集を見ず。西山翁の話なり。）この頃おもふに、歐陽公はじめて韓文をとなへ、やう〳〵ふるき本をさがし出だしゝよし見ゆ。智圓は公よりやゝ先輩なり。其の時僧徒まで稱せし韓文の、歐陽公の時稀なりしもいぶかし。

一白樂天、劉禹錫唱和の事　白樂天は、劉禹錫とも韓公ともよし。柳子厚も、韓とも劉ともよし。然るに柳と白との集に、そのうはさ少しもなし。唱和は勿論なり。劉は別して柳とは同黨の人にて、劉白唱和集にもあれば、白ともしたしき友なり。されどそのさだなきことはなかるべきに、いぶかしき事なり。（西山翁話）

一人面瘡の話　仙臺の人怪病の圖、竝に、記事左に載す。（本文漢語を以てすといへども、今兒童の見やすからんために和解す。覽者これを

の事を雖も、猶同事なれば、清朝にても正論といふを見るべし。先生偶忘れしにや。

一唐土四百州　東坡上書に、「毎州催欠の吏卒五百人に下らず。天下を以て是をいへばこれ常に二十餘萬の虎狼散じて民間に在るあり云々」宋の天下、北に遼あり、西に夏あり、雲南はもとよりすてたれば、幅員漢唐のごとくひろからず。このつもりにて二十萬は四百州にあたる。されば四百餘州といふは、宋の時のつもりにや。しかし一州に催欠五百人といへる一州は、なにほどの戸數なるか、さも仰山なることなり。王安石虐政のあとゝいへども、胥吏も戸數も格別の減少はなかるべし。されば、唐山土地のつもりも思ひ知らる。（此の邦三十萬石の邦、民數大抵三十二萬人。これに五百人の胥吏を設けて、其の年中のつとむべきこと催促すべきことをつもりて見ば、大抵にしらるべし。其のうち里正里甲もとよりあるべき役人は、中冗官のうちにはかぞへぬなるべし。）

國々もとより大小あれども、大抵一村に一人ありて、五百村に五百人なれば、一州五百人のつもりなり。勿論現今の一村千石の村に一人にてあるべし。或は二三百石の村あり。又三四千石の村もあり。大抵にいふべし。

一詩の一二字に同母字を用ふ　詩の第一第二の句同母の字を用ふるをいむ。それ故に、起句に通韻傍韻を用ひたる多しといふ。然れども、

千蔭は隱居して總髮なり。顏色容貌さしも歌人と見えたり。耳しひて息女を傍におきて、彼此の言を通ず。春海は半髡にて頭大に下ほそりたる顏なり。一面舊知のごとく磊落の人なりき。

蒿蹊は近江八幡の人、京に住す。小男にて剃髮す。音吐大によく談ず。

安澹泊―安積澹泊
一時の選―一代の能文

一徂徠先生　或云ふ、「徂徠先生、一生楷字をかゝず。安澹泊に答ふる書に、楷書は得かゝず、性則然りなどと見ゆ。此の人唐ずきにて、和習といふこともて人を誹られしこと多けれども、是も和習の一なり。唐山に生れたらば及第もなりがたく、學者の林にも入られざるべし」と。余おもふに、此の人唐に生れたらば、文は一時の選なるべけれども、儒學の見は異なるべし。たとひ奇說多くとも、今見るごとくにはあらざるべし。幸に日本に生れて、文字の竅をひらきたること多し。小疵を求めてそしるべからず。

又徂徠先生の書に、

如二濮議一、宋儒聚レ訟、雖二程朱二公一、無レ有二明辯一、今考二之儀禮一、不レ須二多言一、本自了々

とあるよし。文字人にきゝたる故たがひあらん。然るに、歐陽公の儀を見れば、第一に儀禮をひき、詳細に辯ぜられたり。又淸詩別裁に楊升庵が竄せられしを、程朱の正論といふ。これは嘉靖

文衡山―文徴明、明の人、書畫詩文等にて聞ゆ

蒿蹊―伴資芳

春海―村田氏

千蔭―加藤氏

一池沼　文衡山が濯足劒池詩に「都將ニ雙足塵一。濯向千年沼」といふ句あり。池沼わかつことなきにや。此の類多し。

一歌道評論　江戸の友人、長流、契沖以下の古體をよむ人の歌をあつめて一書をなす。或人見て、「眞淵以後の人、中古の歌をそしる者多し。内々は何某公の歌の中にても、きこえぬありなどいひてそしるもあり。今其のそしられし人々の歌をかくあつめ見ば、此の集と孰れかまさらん。もし今の集まさらずば、そしりし人々心に慚ぢざらめや」といひき。此の言はわれ人きゝて、みづから警むべき事なり。

近頃の歌といふものは、拘はること多くして、おもふ事もいひがたかりしを、長流以下の人々打ちやぶりしは言葉の道の大功なり。これより、女文字の文もよくする人出づ。京に蒿蹊、江戸に春海など其の選と見えたり。蒿蹊、春海みな男文字をもよくよむ人なり。春海予に逢ひしとき、「昔の歌よみ人は多半儒生なり。古今集の撰者の官職にても見るべし」などかたりき。春海名山の詩をこひあつむとて、予に淺間岳の詩をつくらしむ。其後程なく身まかりぬときゝぬ。其詩いくばくかあつまりけん。

同じ時、千蔭にもあひき。みな木村定重を介とす。定重俗稱俊藏といふ。與力衆なり。

絶域―遠國

徠學―徂徠の學なり

論語集覽―古註、古義等の說を揭げ、徂徠の說をものす

といふを贈りき。淸人もまたおなじことに、「間花只合間中看、一折歸來使不鮮」といふ句あり。絶域同情を見るべし。

一中山貞藏傳　佐渡人中山貞藏、名は惟楨字は子幹、其の地の瓦田といふ處の豪農なり。はじめ鄕師に從ひて徠學をなし、論語集覽などを悅びしが、後に覺ることありて、朱子を信じて行事に心を用ひ、子幹が父は養子にて、其の家の血脈にあらざる故、血傳の人をいれて其の家を嗣がしめ、おのれは雁坂といふ處に隱居し、數年の後、京に來り住して敎授す。貞藏もと五兵衞といふ。其の名は嗣ぐ人に讓りて、後の名にあらたむ。其の雁坂といふ處に有りしは、嗣人の行事を試みたるなり。其の國にて一二と數へられし富をすてたるにて、其の後の行も知るべし。佐渡の家に、一室、妖怪ありとて人のゆかぬ處あり。貞藏試に二三夜寢しかども何事もなき故、其の後は人もおそれずなりしよし。余が貞藏の遺像の贊に、「曾吹叔夜燭」といひしはその事なり。凡、その詩につくりたること一々その實事なり。今時めづらしき人なり。方面にて色すこし黑く肥えじしにて、溫藉なる人がらなりき。一儒生の不義なる行ありしを見て絶交せしなど、威嚴のありて全德の人なり。

に異なり。土人に容貌言語仕付方などいふ職ありて、風俗をたゞすこと、これも近頃始りしよしなり。地は暖に、多く秋ふけて樹上に蟬なき、樹木に蛬なく。蟾蜍は十月までもいで、蛙もなく類、他國に見なれぬこと多しとぞ。九州に蟾蜍をワクドウといふ。久留米の樺島勇七毎日酒をのむに蟾蜍のいで來るときを期とす。故に人皆樺島がワクドウ酒といふと云ふ。

又肥後より豐後の竹田にゆくに、九重山をこゆ。至高の所を上下すれども、路ひろくして、險阻なしといふ。筑後肥後の平地四五十里寸歩の上下なし。たゞみの上をゆくごとし。秋後鶴の多きこと、他國の烏の如しといふ。

一柳絮海腸　柳花柳絮と異なること同所に見ゆ。然れども、花の後に絮となるなれば、絮を花といふも、詩などには妨なきにや。吉貝の花を布となすといふも、絮を花といふなり。今俗に云ふ、海蛆腸は、子にて腸にはあらず。然れども、古人の詩に腸となしたれば、余また腸として作りたることあり。よく見れば異なり。

一和漢合意　大阪なる人、妓を納れんとせし時、其の友（播磨の瓢木とやらんいふ）の俳句に、

うちへいれなやはり野で見よげんげ花

長慶集―白樂天の詩文集

久太郎―頼山陽

流尾―餘派

りし事あり。魯堂先生、これを朝鮮の南秋月にかたられしに、秋月、「朝鮮にも同じ事あり。詩人自レ古韻無雖とつくりき。枕の一名を吟雖といふ外に、雖に熟字なし」といひしよし。後に長慶集に、四雖吟あるを見たり。余この事を大坂にて子琴にかたりしが、其の後、子琴二律をよせて、吟雖を押したり。余それを和して、四雖を用ひし事あり。また其の後に、宋人既に四雖を押しゝ事を、佩文韻府にて見たり。

一豐後山國川　豐後の日田より、豐前の中津へ十里ばかりみな峽中なり。川を山國川といふ。左右の峯巒樹石奇妙態をきはめて道も平かなり。千里を遠しとせずして、往遊するも、所謂一來を枉げざるなりといふ。以下久太郎話

一薩州風土　薩摩の山は、多くは肥後の山の流尾にて高山なし。海門、櫻島、霧島のみ崛起して壯觀なりといふ。城下は富庶にして金銀多きよしに見ゆ。琉人多く入りこみ人家往來すること土人のごとし。人少き家にては、琉人に子を抱かせ、其の間に水を汲みなどするをも見きといふ。琉僧は薩にて學問せざれば、國例、寺を持つことならずといふ。近頃は芝居も常にあり。上方問屋といふ家五六あり。上方の歌妓百人ばかりもわかれ宿して、日夜出でて技を賣り、士人の家にも往來す。他處にておもひやりし

れたり。たとへば、歌あはせを歌合とかく類、此方の一故事になれること故、其の稱にしたがひたるなり。兵糧入の詞も其の類なり。世の文人といふ者、和習といふことをいやしき事におもひ、しひて雅にせんとおもふより、却りて和習になること多し。御馬屋がしを白馬津といひ、目黒を驪山といふ類みな和習なり。これらの吟味は、水府にはもとより精し。

一田道公碑　田道公の碑といふもの、贋作なりといふに、蛇の字を虵に作るは古體にあらずと。予曰く、「碑は贋作にてあらん。虵字はいにしへになしとて、これを以て決するはいかゞあらんか。情竇といふ字出處なしとて、近頃の儒者たち捜索して閑情偶奇より看出だしゝ事あり。これはちかく都氏文集にも見えたり。都氏は延喜以前の人なれば、ふるき文字にもなるべけれど、今時ありふれたる書に見えじ。凡、昔には多けれども、書中に殘ることの稀なるもあるべし。仁義禮智信とつゞきたる語、むかしになし。漢儒陰陽災異などより信をそへしなどいふ説あり。これもむかしの書多く存せざればありても傳はらざるも知るべからず」

一雖の字　五山僧徒詩會に、一人、雖の字を得て、一句に「薄命小僧得ㇾ韻雖」とつく

處には古代の遺風存せるにや。

一渡瀬氣候　奥州渡瀬といふは、梁川より、西北にあり。白石へいづる川の川上にて、出羽往來の地なり。渡瀬の半道ばかり南に、六月に寒く氷あり。石などの下は皆氷にて、樹は紅葉するものあり。冬はかへりて暖にて雪なし。仙臺領なり。

一蜂馬を螫したる事　文政元年九月、讃州高松の東三里石塚といふ處の百姓嗣右衛門といふ者の馬を、馬士近所の岡に牧し、馬を叢祠の側の古墓につなぎて、おのれは草をからんとせし時、蜂多く出でて馬を螫す。馬士見てはしり行きて打ち拂へば、馬士にも數知らずあつまり螫す故、たへかねて馬をひきて歸りしに、馬人ともに大に腫れて、馬は二日を經て死す。馬を屠りて見るに、毛の間に蜂十四五くひつきて居たりしと。近所の人池戸村周藏といふもの、九月六日に吾が塾に來り、其の家をいづるまで、馬士は死せざりしが、とても治すまじきよしをかたる。予若き時備後府中の僧、大醉して山中に臥したるを、大蜂あつまり螫して死せしよし、畫史墨隨が語りし。其の後はじめて此の異をきゝぬ。

一和習　大日本史に、朝廷の公事或は人の稱號地名の類、みな用ひ來れる字にてかゝ

周勃—漢の高祖の臣

三傳—春秋の左氏傳、公羊傳、穀梁傳

三禮—禮記周禮、儀禮

はやり、これも一羽數十金にあたる。岡山藩よりいたく禁ぜられて、遂にやみぬ。芥川といふ書に、其の時の事を記せる中に、藝州廣島の上流にて、一僧佛具を川岸にあらひしが、一花の流れ來るを見れば、椿の奇種なり。其のまゝとりて挿み、三四年に奇花をひらく。城下の人日々に見に來り、「川上に其の種ありや」と尋ぬるに縱迹なし。さて奇異の花なりといひ傳へて、いよ〳〵來客多くなりぬ。ある人たはぶれに、貴僧の椿名花なりとて、國主より所望あるよしをかたりければ、其の日其の花を鉢植にして、其の夜亡命せしよしを載す。毛利家、廣島におはせし時なり。かゝる事をり〳〵にあることにや。

一血氣之說　人の血氣母に受くること多きにや。容貌賢愚も母に肖たる人多し。周勃文帝を立つる、母の賢なるをえらびしは妙なり。

一四聲　むかしの人は、四聲をわかちて誦讀す。善道直貞博學にて、大學助陰陽頭などをつとむ。三傳三禮にくはしかりしが、此人四聲を辨ぜず、教授みな世俗踳訛の音を用ふるよし、日本後紀等に見ゆ。考安云ふ、今、高野の學寮に、しやうよみとて、四聲をわかちて誦讀することあり。又其の祕教の中に、チコト點を用ふる者ありとぞ彼

岡花亭—岡本花亭

なり。この類の事、餘所にも多からん。
又筑前古川村の近き岡に、昔より貝おほく、日々石灰を燒き出す。いく千駄といふことを知らず。海より五六里を隔てたる所なり。備中大島のみだけといふ山の峯にけやきの大木あり。樹身一間計、上に太穴ありて貝を生ず。人とり盡してもまた生ず。貝は海にあるあらん。たひしやくと名づくる貝なりといふ。
一奇樹　寛政の中頃、予京に有りしに、美濃よりからたち花（平地木、地金牛の類）十盆を駄し來りひさぐ。數日の中買人來り集りて、鬻ぐ人八百餘金を得て歸る。其の頃此のものはやりて、甚しきは三百金餘にあたる。數寸の盆栽なり。其の後紀州に蘭をうゝることはやり、是も大金を費す故、官より禁ぜられても、其の禁をきかず、はては官吏家々にふみこみ其根株を斷じたり。其の後石菖蒲はやりて、京の一醫一盆を十六金にて買ふを見る。近頃文化亥子丑の頃、牽牛花奇を爭ひ、佳種百品七十金にあたる。備中の人一方金にて一種を求めしに、名種はこればかりにて買ふべきはなしとて、こぼれ種といふ、名もなき、數種を得てかへる。其の後江戸にも此のことはやりて、岡花亭その記をつくりて余に示す。文政のはじめなり。享和のころ、備中備前に文鳥を畜ふこと

釋菜—孔子を祭る儀式

れしあとにて、尾藤予をかへりみ、「主人の居ぬうちは、暫く下りて休息せばいかん」といひて打ちわらはれしに、予もまた絶倒す。やがて主人いで來り其のよしをきゝ、「實にも久しく馴れたることは改めがたく堪へがたき事あり。聖堂の釋菜に、一事を勤めてんと願ふ人あり。其の人老いたれば、事少なき役をなさしめしに、一器を持て久しく立ちてあるうち目眩して倒れし事あり。吾が邦の人は、坐にならうて立にならはず。今夜の下りて休息も宜なり」とて、又互に笑ひてわかる。文化元年の事にて、今より十四年前なり。「某先生久しく瘧を患へていえし後に、疲勞をやしなふこと數日、其の間にはやく髪そり、鬚きらんとのみおもひき。かくては清人の辮髪も昔にかへらんこと難かるべし」とかたらる。凡、生來ならひしこと、遽に改めんこと皆此の類なるべし

一變革　筑前の川には、蜆貝次第に川上にのぼりて、山川の石川清流にも生ず。寶滿山は五十町計も上る山なれど、そこまでも多し。川と海とのさかひは今もあれども、海を遠くして、あり來し處は年々少くなりて、今なき處多し。文化のはじめ頃よりのことなり。玲藏すめる木屋瀬村、もとは蜆多かりしが、今は少しも生ぜず。十里計も上流へのぼるといふ。瀬田の螢、いまは、大日山といふ處にうつりて多く、瀬田は尋常

神にそなへて祈りてぞしるしを得たりける。夫より今に至り六七十年、旱すれば必ずその歌を出して祈るに、しるしなきことなしとかや。其の歌、

世をめぐむ道し絶えずば民草の田ごとにくだせ天の川水

一烏の巢より火出づる事　烏の巢より火出づることあり。或は野にある燒土などの、たきさしの竹木をくはえ來りて、屋上におとすことあり。筑前には村落の近きあたりに巢をつくらんとするをば、かならず追ひちらせよと、胥吏より觸れ知らすることありと、竹田器甫が話なり。

一野寺の歌　備後寶泉寺は野中にあり。或ときそれに會して保之が、

松幾木山と見るまで生ひそひて野中の寺ぞふりまさりける

とよみしを、歌よむ人見て、「野寺はよみがたきものなり。かばかりには、たれくもよみ得ざらん」といひける。末の句、「年ふりにける」にてありしか、よくも覺えず。

一舊習改めがたき事　予、江戸に在りし時、柴野先生に食卓と小榻四つをおくる人あり。八月十四日、その具にて。七寶羹を饗せんとて數人を招かる。其の夜雨降りて遠人は來らず。予と尾藤博士と主人とその榻に踞して對酌す。久くして主人勝手に入ら

胥吏―村役人

小榻―小なる椅子

采地―領地

さはるものなかりしとぞ。川の埋れたること思ふべし。すべて、此川のみにあらず、山木つきて、川高くなり、左右の良田、汙邪になる事いひ傳ふることとなり。近頃は、田地の濕淫洪水の憂のみならず、井泉わくことたかく、水あしくなり、黄胖等の病、わづらふ人多くなりしやうに覺えらる。眼前の損益見えざれば、上たる人も、打ちすて給へるにや。

一龜卜　龜卜は對州にのこりてあり。其法龜甲をうらより小刀にて穿ち、一寸程を薄くするを鑽龜といふ。彼地にて、タフといふ木は、刺ある木なり。それを著のやうにして、其先に火をつけ、彼薄らげし處を裏より灼き、表にひらき入たる紋出で來たるが灼龜といふ。其紋のさけやうを見て、吉凶を卜す。其法は、或時吉田家より望まれしかども傳へず。甲は乾きたるを用ふ。生龜にあらず。

一水野義風雨乞和歌　備前士人、水野三郎兵衞、名は義風、食祿千石、大將なり。和歌を好む。一年、大旱の時、義風が采地の百姓ねがひ出でけるに、「主人、和歌に堪能にましませば、昔の小町が例に、雨乞の歌よみて給ひ候へ」と申しゝかば、義風さま〴〵辭すれどもきかず。つひに一首をよみて與へければ、百姓よろこび歸り、これを、產

僧伽―僧のこと
柴博士―柴野栗山
目を屬す―目をつけて見る

身すべきこと肝要なり。壁をうがちて入るぬす人、をどりこみなどは、此例にあらず。此用心は、また、格別なり」といひて、歸りしとなり。

一僧大典　大典は僧伽の文章家なりし。柴博士と同じく洛にありて、一面もせられざりしが、或とき權門の席にて、はからず出であひて、大典聲をかけて、「そなたは柴先生ならずや。始めて御目にかゝり候は、大幸に候」とて、近寄られければ、柴博士「われ京に在りしこと、二十年計に候ひしに、上人とは、嵯峨の花の下、廣澤の月の前にも見參らせ申すべきに、今日は、不思議の處にて、接見いたし候」と申されしかば、同座の人々、一時目を屬せしに、大典すこし赤面せられしよし。其座にありし人、「大典はさる人にはあらず。そこにて赤面せしは、さすがに學者なりし」といひけるとなり。

一川之説　備後横尾の鶴が橋は、もと鶴が渡とて、舟わたしなり。其時の舟の櫓棹など、今の橋守の宅に殘れり。いつの頃の失火にか、燒失せりとなり。今は川水至りてあさく、やゝもすれば乾涸す。同じ川上、國分寺の西に、烏岩とて、高さ三間あまり柱のごとき立石ありて、烏、年毎に其うへに巣くふ。三十年前の川浚のとき、里の老人、昔の烏岩は、此あたりにありしとて、長き竹もて、沙中にさしもとむるに、竹に

祇園會—祇園の神の祭禮

刺されて死ぬる人もあり。また人家に盜いりたるを、隣家より助けなどすれば、これも後日に其家へ仇をなすとなり。されば、夫と知りても知らぬ顏に、たすけ救ふことなし。よりて盜は公然として横行す。其他の人は、かゝることを知れども、田舍よりたまさかに行きし人は、其心得あるべきにこそ。

一盜を防ぐべき說　備後の鞆の祇園會に、某屋といふ小間物屋の前街に、人の群聚する中にて、盜の物をとらんとせしを、人に見付けられて、海濱へ引き出だして、海へ投ぜんとするを見て、店主人走り出でて、其罪を詫びて救ひければ、會終りて後、一人つと入り來り、「私は先日御たすけにあづかりし盜にて候。一命の御恩を謝し申さんとて參り候」といひしかば、主人も其本心のいまだ亡はざるを憐みて、酒のませて、物がたりし、其意屆けて、盜人を止めさせんとなり。盜も感泣して別れける。其ものがたりのうちに、「凡、ぬす人のいるは、表の戶、裡門のあきたるを見て、心を生ずること多し。人みな寢んとするとき、必ず門戶はとざせども、或はわかき男女のあそびありきなどに出で、頓て歸るべしとおもへど、とくにも歸らず、或は戶ざしすれども、眠りながらにして、かたくさしえずなどする事あり。戶ざしは、かならず主人おのれ自

膏腴—肥えたる地

抱關擊柝—門番の類

家を子弟に譲りて、隱居せし人と、僧とのみなり。膏腴の地をすてて、柳櫻を植ゑたるのみはいかがあらん。隱者といふものも、世わたりの業はなくてはかなはず。長沮桀溺も、耦耕するは世わたりなり。陶朱公があきなひも同じ。隱者といへば、風月のみにて、家のいとなみもなさざる者とおもふは、世界も知らぬなるべし。孟子のいへる抱關擊柝も隱者なり。膠鬲が魚鹽も隱者なり。僧の托鉢乞食して、世をわたるよりして、みづからなす者をそしるは誣ふるなり。

一盗入りたる時可二心得一事　いつの頃にか、備中さいちこといふ所に、細見勘介といふものありける。ある夜盗の入らんとするを知りて、其腕をとらへて、格子へ引きこみ、其うちにて物に縛りつけて、扨刀をとり出だす。盗たまりえず、自身其かひなを斬りて逃げぬ。（或は同類の盗きりたりといふ）其のち數月にして、盗また來り、勘介が寢入たるを刺し殺して去る。又、甚五郎といふ者（其所は忘れたり）盗を追ひかけいで、あやまちてつまづき倒れしかば、盗たち歸り、一刀刺して去る。是も死したり。其後大坂などの町中にて、巾著きりの盗の人の懷中をさがすを、傍より見たる人、其人に知らせなどすれば、後に盗必ず其知らせし人に害をなす。或は人多き處にて、密に小刀にて、股脇腹などを

蘇州府―支那の江蘇省にあり

沮洳―じめじめとしめれる所

する僧のいづくともなく來りて、「近きあひだに火災あらん。是を遁れんには、金いくばくを捨てよ。豆腐こんにやくいくばくを捨てよ」などといふによりたる事なりしと云ふ。世にかゝるふしぎ多かるべし。

一柳に數種ある事　予が塾に柳三種あり。一は京の下河原に摘星樓とて、六如上人の房の庭にありし柳の枝をさせるなり。もと絮綿多かりしが、水土によればにや、今はすくなし。一は蘇州府の種とて、長崎の德見茂四郎より送り來る。一は蜀柳にて、荒木爲五郎より得たり。此柳は、西洞院風月入道殿、主上より賜はりしをわかちて平松宗致に給ふ。宗致備中松山人ゆゑ、故鄕へもわかち植ゑたるなりといふ。荒木は松山人なり。予と善し。（蜀柳は近頃枯れたり）

一雅事之說　凡、用事と雅事とかねざるは、眞の雅事にあらず。障子の腰に繪をかきたるは、はめかふるとき右よ左よとまよはず。又趣もありてよしといふ。この事萬事にわたるべし。何某公の領内の沮洳の地を堤して、湖となし給ふ。形勝もまさり、又、灌漑をたすく、この類世間に多かるべけれど、吾便宜に志す人は、人の不便をもはからず、雅事に志す人は、吾家の不利をも省みざる者多し。但、雅事のみにしてよきは、

この裸國へ、藝人大海中に難船せしを、蘭船きたりたすけて、この裸國へあづけおきて、翌年日本につれ來れるなり。かやうに漂流人を連れ來れば、日本人に限らず、知らぬ國人にても、褒美金を賜はる故なりといふ。武元景文其人に逢ひて、其話をきゝ、詩に作れり。今はわすれたり。

一怪異　世に不思議なる事は、種々これあるものを、佛者は、怪異は、吾家の家業の如く、儒者は、つとめてこれを排するを、これも亦家業のごとくおもふこと、常となりたり。伏羲いまだ出でざる前に、釋迦未生の前も、天地はおなじことなるべし。いかでかくはわかれ異なる事になり來りしか。こゝを覺悟せる人、世にいくばくぞや。大徳知識と指さゝれ、吾身も大悟徹底とおもへる人も、何某寺にもと水なかりしを、住吉大明神その開山とやらんを歸依して、水を獻じたまひしより、湧泉ありといふやうなることをもて、儒生にむかひても誇る者あり。また、ある儒生周易のしるしあることを奇か偶かといふ。辻占におなじといふもあり。皆、一笑の資といふべし。

讃州金毘羅の町、文化丙子臘月に、十三四家燒失す。其前數日の間、所々に豆腐蒟蒻等すてゝあり。天狗か狸のせしにやと、あやしみ居たりしが、のちにきけば、祈禱を

大徳知識―僧侶の學徳すぐれたるもの

臘月―十二月

句、陸放翁にあり。于鱗にも此類多かるべし。これぬすみたるにあらざれども、其意念遠からざるを見るべし。今の人々、宋と明とは、事ごとに、雲泥のたがひあるやうに思ふはいかにぞや。

一扇を笏のごとくもつ説　今の人、神を拜するに、扇を笏のごとくもつことあり。曾我物語に「あらためて禮をするとき、扇を笏にとりなほして」といふ詞あり。又、考安いふ。「笏なきときは、たゝう紙を用ふること故實のよし。御厨子所預高橋若狭守が、禁庭にて鶴の庖丁せし時に、上より物賜はりければ、笏のかはりに、懷中のたゝう紙をもて拜せしかば、一時の公卿、其故實に達したるを譽め給ひしとなり」

たゝう紙―疊みたる鼻紙

一ナゲシ敷居　上はなげし、下はしきるといふは、近世のことなり。一間ごとに、其間に高きしきゐありしをなげしといふこと、源氏にも見え、また、義經記にも見ゆといふ。荒木爲五郎の話。

一裸形の國　數年前、藝州の人漂流して、一國にいたる。其國みな裸體にて、褌のみをまとふ。國の酋ときぐ巡視するにあふに、王も后もみな裸體なり。芋多く生じて、土中に入れて煨しくらふ。其葉を植ゑおけば、又、芋をなす。外に穀食することなし。

あら海や云云—芭蕉の作

興象—思想を物にかたどりてあらはしたること

老杜—唐の杜甫、字は子美。

一詩歌語勢强弱　「あら海や佐渡に横たふ天の川」などいふ發句、興象は論なし。語つよくおもみありてたけかたく、今の人の句、語弱く輕く、格ひきく、僅十七字にても、その體のわかるゝこと、語勢自妙の妙處なり。詩歌は、さらに心つくべきにや。歌に、「

まつ人の麓の路やたえぬらん軒端の杉に雪おもるなり」

これらの意は、尋常なれども、語はおもくしてつよし。選み出でば多かるべし。老杜が詩をよみて後に、後人の詩を見れば、いづれも弱く輕くおもはるゝうち、明の李空同のみ、杜が遺響ありといふ。

一古文辭　揚誠齋詩話、如山谷猩々毛筆、平生幾兩屐、身後五車書。平生の二字論語に出づ。身後の二字、張翰云ふ我をして身後の名あらしめん。幾兩屐は、阮孚が語。五車の書は、莊子の言。惠施此兩句の四處合し來るといひ、これらの句を妙なりとす。妙ならざるに非ざれども、詩は歌謠なり、必しも心を用ふべからず。同頁に四六に古語を丸にていだし、一二字かへて取り用ひたるを妙とす。明の于鱗が古文辭といふもの、古語と古語とを續けあはすること、これらより出でたるなるべし。當時の元美が輩、宋人の才なきをそしる。その肯綮を知らざるに似たり。北斗闌干南斗低などいふ

たうべし―
飲みし。

ひに座上に溺するを覺えず、發狂して死したり。食うてすぐに食傷はせざれども、つもりつもりて不治の病となるなり。一日に五合の食は、吾邦の通制なり。是にて飛脚をもつとめ、軍にもいづるなり。されば、人々心得べき事にこそ。軍行には一升、戰の日は二升のかては、其時々の事にて常にあらず。

一大酒　備後中條村に、三藏といふ人あり。其家僕に酒を好むものあり。或日三藏其ものを見て、「汝、酒いかほど飲みなば、飽くべきか」と問ひしに、其もの生來貧しければ、「心のまゝにたうべしことなし。大抵一升にては、たりなん」といふ。さらばとて、一升飲ましめければ、忽にのみつくしぬ。「こはめづらしき上戸なり。なほも飲めや」とへば、いよ〳〵悅ぶを見て、又、一升をあたへける。これも苦もなく飲みて、やがて臥したりけるが、其夜半に死にてけるとかや。外にもかゝる事三四度も聞きたり。是は三藏にきゝしまゝなり。すべて、酒は、小杯にて一日半日ものむは、覺えず量をすごし、つもりては病をなす。大杯にて、おのれが量だけ一度に飲むは、酒の力、一時に出でつくす故に害なし。是は予が數十年見およびし人、皆然り。されども、量を過せば、大杯にて一度にのむの害は、小杯にてながく飲みしにまさると見えたり。

敵國外患云—無二敵國外患一國乃亡矣（孟子）

頼千秋—山陽の父春水

夭折—わかじに

遺溺—小便をもらす

ゆるぶ事なく、國家をいたゞく念ふかし。此制も亦いにしへなき所の、良圖なるべし。晉の呉を亡さんとする時、張華、山濤など、敵國外患なき時は、あやふきよしをいひ、呉をたておくを良策といさめしかども、用ひられずして、呉につゞきて、晉も滅びたり。是は利害を見て、いひしなれば、遠慮ふかしといふべし。國家は、仁義もて物したまへるなれば、雲泥の異はあれども、暗合せる處もあらん。予この說を持して、久しくいひ出でざりしを、十餘年前、頼千秋父子と、竹原に會せし時、歴史を論ずるによりて、いひ及ぼしゝに、座上にていらへもせざりしが、數月の後、かれより書中に卓見なりとゆるし來れり。

一大食會　いつのころか、備後福山に、大食會といふことをはじめしものあり。其社の人、皆夭折せり。ひとり陶三秀といふ醫者ありしが、これは、はやくさとりて、其社を辭して、六十餘までいきたり。予が若き頃、三秀が甚だ小食なるを見て、其よしを問ひしに、「其社中、皆異病にて死し。おのれ減食して、まぬかれし」といふ。其後、近村平野村に、また、この事はやりて、人多く異病をやみぬ。其社中に淸右衛門といふ若者あり、膂力も人にすぐれ、無病なりしが、ふと遺溺す。それよりしげくなりて、つ

任子―父の官位あるによつて任官せらるゝもの

譜第―祖先以來の臣屬

たく、疑も生じやすからず。されば、妻子とともに都下におくは、國家の備のみにあらず。諸侯をたもちやすんずる良策なり。但豐臣家の時は、都下の住居にものなれずして、用度多く、領地疲弊し、人心もあやぶみたりしかど、今の世はさもあらず。唐土は、幅員廣ければ、この法は、とても行はれがたかるべし。殊に今の都、燕なれば、雲南省よりは、萬里にすぎ、往來一年も經べし。然れども、成都あたりにて、任子を成長させ、そこにて妻子をもたくはへ、子をそだてさせ、數年滯るうち、北京へもゆきなどすることやすかるべし。廣東西は抗州、秦隴は洛陽などとさだめ、遠近によりて、其法をたてなば、さばかりかたかるまじきにや。其國主死して任子必ず跡をつぎ、其子また其地にのこりて、任子とならば、のちには、そこを家とする心にもなりて、さのみはうれへざるべし。其本國にも、また他國に儲の主人ありと知らば、亂を防ぐの道も、また其中にあるべきにや。

一國家良圖　今時の制、もとよりありける大國の諸侯をもとのごとく立ておき給ひ、譜第の家をば、大國にも封ぜられず、爵位もさばかりあがめたまはざるは、國家謙讓の美事にしていふをまたず。譜第の諸侯も、我より國大に、位の高き人多きゆゑ、心

右衞門、源氏の兵衞なり。されば、これも名とはいひがたし。今時稱謂みだれて、かかるけぢめもなければ、せんかたなく、何某右衞門、何某兵衞とかくの外なし。

一在名　庶人は、在名を名乘ることをゆるされず。然るを、姓を禁ずといふはしからず。源太郎、平二郎皆姓なり。誰も咎められし人なし。秩父、熊谷などは在名なり。これには禁あり。今座頭盲目に在名といふ格あるにても知るべし。

在名―在所の名、所謂苗字なり

一韓公排佛　退之佛を排するに、遊手多くなりて、世わたりのかたくなるをいふ。世其說淺易なるを滿足せざる人多し。されども、推究して論ずればこゝにとゞまるなり。

一佛法八宗　近世佛家に、八宗をわかち、各其主領をたてられしは、良策なり。邦俗ものに迷ひやすき故に、此法なければ、末々天下一宗となりて、國家の變をなさんことはかられず。元龜天正の事にてもしるし。

一諸侯室家　諸侯妻子を具して、都下に住すること、古今になき良圖なり。創業の人、功臣をうたがふこと、昔より多し。大國に封ぜられ、遠方に離れ居るもの萬夫の雄、韓信がごとき、もとより高祖のおそるゝ處なり。一旦の讒口、かりにも叛逆のことをとかば、危ぶまざる人はあらじ。是を都下に置きて、常々に相見るならば、讒もいりが

木火土金水
ー五行といふ

俚なりー田舍びたり

一諱字の說　諱に木火土金水を次第してつくること、いつの頃に始まりしか、宋人ことに多し。張俊の子、名は拭、朱子の父は松、子は塾、在後に俊あり。その子餘多ありけれども、記せず。明の天子或は朱子の遠孫なりとて、代々の諱これに從はれしといふ。これ王相の說にとるにはあらざること知るし。世遠くなり、扁傍によりて、誰はたれの兄弟、何某は、何某の子孫などいふを知るに便あり。排行の稱呼すたれし後は、これ亦益あり。吾邦近世は俗薄くして、兄弟といへども貧なれば齡せられざる者あるにいたる。五行を必とせず、一門は、よくそれと知れる稱を用ひて、やゝ流弊をたむるにたよりすべきにこそ。

一通稱之說　記事の文に、近代の人、諱知れざるは何某右衞門何某兵衞とかくべきは論なし。しかるを、文字俚なりとて、彌三郎を單に彌と稱し、又太郎を又　平右衞門を平とかきしあり。學びがてらに、一話を記するごときはいふにたらず。記錄史志の類ならば心あるべし。太郎次郎は、通用にそへて稱するなれば、はぶきてもよしとせば、彌又は親も三郎、子も三郎なれば、其子を彌三郎、又三郎などといふにて、彌も又も同じく、通用の稱なり。其人の名にはあらず。平右衞門、源兵衞は、もと平氏の

菓木—果樹
蜡後—十二月後

其人愚昧なるにもあらず、亦信ずべきこともまゝあるべし。かゝる不稽の説ありとて、悉くもすつべからず。予香川氏の行餘醫言藥選などを讀みて、その卓識に服せしことも多けれども、また疎漏の説もあり。後藤吉益等の書は、いまだ讀まざれども、佳説もあるべし。（大抵近時の人の書は、是非相半するものなれば一概に信じがたし。）病は、丙の字なりといふ説、輟耕錄に見えて妙なり。今こと〴〵く記せず。人は一氣の陽もて生存す。この陽常ならざれば病なり。強人さむくして振ふも、弱人の寒になやむも、皆、陽氣の變にて證に寒熱といふは、枝葉の論なり。療治にいたりて、或は溫、或は涼、或は發散し、或は收濇するは、療治の手段にて、こゝにいふをまたず。

一節分に菓木をうつ事　五島の俗、節分に童子きそひて、菓木をうちたゝき、「來年は枝のたわむまでなれ〳〵」といふ。蜡後草木をむちうち、萌動せしむといふこと、おもひあはせておもしろし。

一張良隱遁　唐土の三代以後は、有力の人天子となる故に、大臣疑はるゝ者多し。張良が赤松子に從ふを始めて、堂々たる李鄴侯陶隱居なども、其類なり。其言癡人と見ゆる計なること多けれども、其愚不レ可レ及の類なるべし。

西山拙齋―備中の儒者、寛政十年歿す

河豚―毒を含める魚

烏喙―毒ある草

門戶をたてん―醫者の繁昌を希ふをいふ

とかや。此二事、一は西山拙齋、一は中山子幹二子の話なり。人の本性ものにふれて覺えず發見すること、かゝる事世に多かるべし。

一 病源藥性之說　近日醫師に、病は、一氣の留滯より生ずといふはさもあらん。魚は、水に生じて、水に養はれ、人は氣に生じて、氣にやしなはるればなり。此說につゞきて、萬病一毒といふ者あり。これは通じがたきにや。たとへば、胎毒結毒は、人にあり、魚毒菌毒は、物にあり、風毒、陰陽毒は氣にかゝる。これ皆毒とも云ふべし。打撲顚躓にてわづらひ、火傷、水溺にて死に至り、刀劍の傷よりして、命を殞し、過食にていたむは、抑何の毒なるか。米麥もと毒なけれども、多食より病をひき、挺刃もと毒なけれども、傷より患ふるなれば、毒といはんか。さらば、河豚烏喙の類、其ものにたくはへし毒とは、一にあらず。病を生ずるものをさして、皆毒といはば、萬病一毒といひても可なり。また藥に寒溫なしといふ說ありて、試に水をあげて、汝が性いかにとゝはば、水こたへて冷といはん。沸湯にしてとはば、熱といはんなどといへり。今試みに酒を擧げてとはば、溫といはんか、冷といはんか、大抵はやく人を驚かし、門戶をたてんと思ふ人は、必ずかゝることある者なり。獨儒者のみにあらず。さりとて

丑みついま云々―丑三つ時まで待ちても、待つ人の來ざるをいふ

えさらぬこと―止むを得ぬこと

一盗人縊死をとゞめし事　或家に、盗宵より忍び入りてうかゞひ居けるに、夜ふけて、家内の人、みな寢ねて後、一女子ひとりおきゐて、髪ゆひけはひなどするあり。丑みついまはたのまれずと待ちわぶる者もあらんと思ふうち、さはなくて、硯を出して、こままごと一通の書をしたゝめ、さて梁に繩をかけて、自ら縊りて、前に飛ばんとするに臨みて、盗おぼえず聲をあげて、「やよ人々おき給へ」といひつゝ、抱きとゞめたり。家内の人、其聲に驚きて、其ゆゑよしをとひければ、「えさらぬことありてかくは物せしなり」とて、只なきになきぬるを、さま〴〵とときなだめ、二人の人に守らせ、さて其とゞめたるは、如何なる人ぞと問へば、盗なり。これもあからさまに其よしを述べければ、錢そこばくとらせてかへしたりとなり。又、人の妻をぬすみかよひし人あり。ある時、其妻の許に忍び居たるに、其妻、青赤龍子を膾に調じて、酒をあたゝめて、本夫にすゝむ。本夫は、夢にも知らで、頓て喰はんとせしを、密夫覺えず、はしり出でて、「其膾には毒あり。かまへてな食ひ給ひそ」と、おしとゞめければ、本夫はおどろきて、其人の忍び居たる事など問ひけるに、是もあからさまにしか〴〵のよしを答へしかば、其の妻を追ひ出し、密夫は、命の親なりと悦びて、兄弟の約をなして、睦びし

不撤薑而食—論語鄕黨篇にあり

神を傷ましむ—心を痛ましむ

久服輕身—永く用ふればゞ身體壯健となる

學者談話の資とのみなるは、かなしき事ならずや。

一不撤薑の語　不撤薑而食は、聖人のこのみ給へるものによるか。味の和にもよるか。又、能毒にもよるか。其故は知らざれども、論語には、聖人の行事を記して、其旨をいはざるは、不敏を避くるなり。朱註に能毒を書かれたるは、只、たしみ給へるのみにてもなきやといふ意を思はせがほに、本草の文を其まゝに引かれたるべし。夫を朱子の、聖人も、通神明の功能をからんとて、心をこめて、食ひ給ふとおもへるよしにとりなして、そしる者あり。この說は、いつの頃かいひ出しゝを、近頃、又、讀みかた知らずと失笑せる說もありて、そしる人の非は、世間皆知りたるならんと思ひしに、此頃見たる書に、猶其說あれば、ちなみにこゝにしるす。神は、詩に神を傷ましむといふときも、日本の大明神、八幡宮などいふごとき神とおもへるなり。書をよみてかく解しなば、解せざる書多かるべし。あまりなる事なれば、くはしくはいふべくもあらず。本草などに、久服輕身などいへるは、必ず、鶴にのりて、飛行する類とおもふべからず。服食家の言混じて、さおもはるゝこともあれど、本草は、本草にてよみかたあるべし。これらは、一々辯駁するもをさなきことなめり。

扁鵲―周代の名醫

蜉蝣の年―忽ちに死するをいふ

所もなかりしかば、京より見に行く人多くて、茶酒の店などもこゝかしこに設くるほどの事なりしよし。六如上人より告げ知らせらる。其より四五年も後なりしか、吾郷備後神邊に、うそ鳥多く來り、予が庭の樹竹軒ちかき枝まで、この鳥ならぬ處もなかりし。かの蠟觜鳥も、その年の前後に、常より多かりし事もなかりしとなり。予が郷里のうそ鳥もしかり。山中雪ふりければ、鳥多く里に出づといへども、其歳わきて、雪多くもあらざりし。さらば、此鳥のみ多くもあらざるべきに。

一武内宿彌、小野小町之説　武内宿彌一人なれば、三百餘歲。扁鵲も一人なれば、二百餘年。小野小町も一人とは見えず。これらのこと、古書茫々として論定すべからず。撰書の人疑を傳へ、聞くまゝに記したるなるべし。今其人の疎漏といふも誣ふるにちかし。たゞ聞のまゝに記しおかば、後の考もあるべしと思ひつゝ居る中に、蜉蝣の年も保ちがたく、任を後人に殘すこと多かるべし。「前不見古人、後不見來者」といふ詩、感ずるにあまりあり。かくいはば、古書は、用にたゝぬものとやいはん。されど、其中に一人の行のためにし、天下の治の爲にして、餘りあることは、卷軸にみてり。しかるを是をすてて、いたづらに字句の異同をのみ論ずるは末なり。至竟書籍は、

當途―執政

へば、諸國に名ある人を捜し求めて、よき事を聞かんずるにて候。其よき事と申すも、忠孝の事より外にては候はず」と申しければ、「さらば、此書を講釋せよ」と、論語を一巻出されけるに、彦九郎ちつとも臆せず、辯說あざやかに、講說し終りけるによりて、またもとの領主の邸にぞ下されける。かくて數日ありて、又、かの有司邸に召されて、講釋させられて、次の間に人ありて、其說を書きとめらる。其後また數日ありて、召し出されて、命ぜられけるは、其方事、苗字を名のり、大小を帶し、諸國遊歷する事、くるしからざる旨命ぜられける。また、年を經て、薩摩に遊びてかへるさ、久留米の何某が家に宿りて、腹切りて死にてけり。其故を知らず。或人の話に、「村吏の誣ひし事を、何の尤めもなく免されしは、何某侯の當途の時なり。其後かの侯職を辭したまひければ、其身も便なき事におもひて失せにけるにや」と。されど、命を捨つる程の事にもあらざるべきに。猶此人の奇事偉行、聞き及びし事もあれども、よくも覺えざれば錄せず。

一鳥の群　寛政八九年の頃なりしか、嵯峨野に蠟觜鳥多く集り、木毎にむれゐること一樹百二百羽にくだらず。山多く樹茂りたる處なれば、いづくを見ても、此鳥ならぬ

賴萬四郎—名は惟柔、號は杏坪、山陽の叔父

大府—徳川幕府

らず。彦九郎は、正直にて、氣はやきをのこなれば、事によりては、命を捨てんも計りがたし。吾は、是より追ひ付きて、事をはからん。汝はたれかれにも告げしらせよ」と、云ひつゝ出でゆけり。夫より人々にいひつぎて、追々にしたひゆくほどに、凡、同志の輩三十人許、夜道をいとはず、路程二十里餘り、彦九郎は、翌早く馳せつき、外も追々午時ばかりに追ひ付き集まりしが、一揆は既にをさまりしかば、晩に打ち連れて、江戸へかへりし由、賴萬四郎其ころ江戸に在りて、くはしく其事を知りて、「此輩亂世にあらば、一方をふりむけて、大功を立つべし」と、時々かたりて嘆稱す。扨其地に偉人あるは、村吏などの惡むこと、いづかたも同じ事なるが、彦九郎が鄕里は、ある御旗本の領地なり。其名主年寄などいふ者、いかに云ひ入れしか、ある時領主の邸へ呼び寄せて、「彦九郎は百姓にて、平生長き大小を横たへ、家業を勤めず、書物のみ讀むは、不審の者」とて、門側の一室におしこめて、數月の間、置かるゝに、懇意の朋友、酒肴を携へ、問ひ來るもの虛日なし。ある日、大府の一有司の邸に召されて、「其方何故に諸國を遊行し、名ある人を尋ねゆくか。仔細あるべし。一々申し上げよ」と、命ぜられければ、彦九郎「亂世には、武者修行といふ事の候由承り候。今太平の御代に候

のか〳〵——泰然たるさまか

在りて、いろ〳〵の話に、そこら多年山賊をなして、深山に夜を明して、おそろしき獸などにあひしか、又、天狗などいふ者を見しかと問ひしに、賊のいへるは、十餘年山に棲みて、一度もおそろしき者を見ず。唯一度これあり。去年何某月、何某夜、何某の山中にたゝずみ、人を待ちしに、大なる男一人出で來るを見て、吾等四人立ちふさがりて、酒錢を乞ひしに、其人大音にて、慮外者めと叱りて、傍に人なきが如く、のか〳〵として過ぎ行きしかば、四人はおの〳〵尻もちつきて、暫く物もいはざりし。其聲の大きさ、山に響きてすさまじく、やゝありて、其人を見れば、半町許も行き過ぎて、跡を見かへりし眼、光りておそろしき事、限りなかりし、是こそ天狗などいふものにてもありつらめといひし。其賊の顏もおそろしげなりし」と。此事を彼主人聞きて、月日を數へ、「其時刻と、其地とを考ふるに、其人は必ず彥九郎ならん。かの山中を節季の夜半に、一人すぐる人外にはよもあらじ」と、舌を卷きしよし。彥九郎江戸に在りし時、新田のあたりに百姓一揆起りしと聞きて、取る物も取りあへず、急ぎ歸る。頃は未すぎ申の時許なりしが、相識人のもとに立ちよりて、其人の妾にしか〴〵と語りて出づ。其夫の歸るを待ちかねて、其由をいふに、其夫驚きて、「それは聞き捨てにな

節季―年の暮

内侍所―今の賢所に同じ

一高山彦九郎の傳　彦九郎は上野新田の人なり。余二十許の時、來りて一宿す。其話、中古より王道の衰へし事を嘆きて、甚しき時は涕流をなす。歴代天子の御諱、山陵まで諳記して、一つも誤らず。亂世には、武者修行と云ひて、天下を周遊する者あり。今治世なれば、德義學業の人を尋ねありくも、少年の稽古なりとおもひて、六十餘國を遊觀せんと志し、一冬袷衣一つを著て、露宿して試みしに、風をもひかざりしによりて、出遊をはじめしなりといふ。其人、鼻高く、目深く、口ひろく、たけたかし。總髪なり。此人備前の閑谷の學校に宿して、其學制規約などを尋ねしかば、教授の人、本一册を出して示し、その翌早くかの寢たる所にゆきて見れば、彦九郎は、なほ燈に對して、其本を寫し、既に半頁ばかり殘りたるを、やがて寫し終りぬ。凡、五十葉許の寫本なりしよし。それより播磨に赴き、姫路の北郊に相識の人ありて一宿す。翌日晩際にいとまを乞ひて出でんとするを、主人とゞめて、「時は節季なり。日はくれかゝれば、明朝たゝれよ」といへども、「但馬に行きて、年内に京へ出でて、内侍所の御神樂を聞くに、日數限りあれば」とて、强ひて出でしが、扨其翌春、かの姫路北郊の百姓小罪ありて獄に入り、其赦され歸りて、獄中の事どもかたる中に、「山賊と同じ獄に

廳前—役所の前なり
箕子—朝鮮をひらきし人
塢主—村長

げゆくに、半途にて、其中の嘉味をとり食ひ、又燭臺に立てたる蠟燭をぬすみ食ひ、或は、席上に尿し、座側に唾きす。僕從など廳前に鼾睡するもあり。物知れる輩も、詩を人に送るに、號を書する類、あげて數へがたし。箕子の化も、年久しくて、かくなり下りしか、唐山の人これを禮儀なりといふもいぶかし。

一備後三郎姓氏　備後三郎高德は、兒島三郎と云ふ。兒島は、在名にて、姓は三宅なり。父備後守なりし故、備後三郎と稱す。佐々木盛綱に、兒島を賜はりし事ある故、其子孫ならんと推量して、系圖などあつめし書に、近江源氏なりといふは、謬說なり

一忠僕伊平左平の事　伊平左平が忠義といふこと曲本に見え、いづれも烏有先生なりとおもひしに、備後の府志を修むる時、六郡志といふ書に、本洲安那郡湯野村の人とあるゆゑ、こゝかしこの古墓をさぐり尋ねたれども知れず。此頃聞きしに、其の西隣道上村に、伊平、左平が墓ありて、除地二十步あり。今は、伊平が子孫のみありて、左平が田宅も、伊平が子孫に併せたもつとぞ。其墓古塚にて、二三百年の後のものとは見えず。伊平、左平は入江といふ家の家僕にて、入江は杉原の家族、藪路村の塢主なりとぞ。

はむ―食ふこと
宋朝の云々―孔子の語
眼睛―ひとみ

された、十五口俸を賜ひけるに、藩例にて、禮廻とて、老臣の家に歴拜する事あり。かれはそれをせず、

千里ゆく末たのみある荒駒のはむにはたらぬ露の下草

といふ歌をかき出しゝよし、不敬といへどもまた異人なり。

一加藤清正相法を學びし事　「宋朝の美なければ、免るゝ事難し」とのたまへるを、男色といふ說あれども、色には盛衰ありて、久しきを保ち難し。凡、人にやさしくて、愛すべき顏色あり。其人の物をそしりなどするは、さばかり人意に忤らざる者なり。又、にくさげなる顏色の人は、物を譽る話をしても人信ぜぬあり。是等より推して思ふべし。或法吏の話に、「訴を聽くにその人の顏を見ず。美なるをのこは、必ず、其言やさしくきこえ、醜なるは、其言もまたにくさげに聞え、臆病なるは、眼睛定まらず。人を惑はす事多し」と云ひしよし。加藤清正も人の視がたきを苦み、相術を學ばれしとぞ。其心崇ぶべく、亦あはれむべし。

一朝鮮人の說　四方の國、北狄より强きはなく、琉球より貧弱なるはなく、朝鮮より禮儀なるはなしと、書中に見えたれど、今時の朝鮮人、威儀なき事甚し。膳案をさゝ

烏有先生—實際には無かりし人

露下軍營云云—霜滿軍營秋氣清云云といひ傳へたると同じきや

軍兵を籠め置きて、軍しても強かりしかば、一貫といふもの、右の二説より多かりしにや。

一烏有先生　垂氷廣信は、烏有先生なり。垂氷といふ姓は、昔より聞かずといふ人あり。然れども、姓氏錄に、垂見史は、彥狹島命之後、又垂氷公は、賀表眞雅命之後と見ゆ。北條士讓は、志摩の人なり。伊勢には、今なほ廣信の裔孫ありといふ。近頃、南方紀傳を見るに、京より伊勢を攻めし時、國司より垂氷、鳥屋、尾方等を、岩田川、雲津川に遣はして、これを防ぎ、垂氷、藤方に何某々々等の城を守らしむる事あり。

一勇將文學の事　出羽米澤の人、神保甲作が話に、かの藩中に、直江山城の訓點したる唐本の兩漢書、前田慶二郎が自ら輯めたる圓機活法の如き書あり。大巻一本にて、軍中常に首にかけて往來せしものと見え、末巻には、自作の詩歌を錄せりとぞ。慶二郎が勇猛なる事は、野史にても多く見えたれど、かゝる事は、聞きも傳へず。すべて野史の類、其勇猛をのみ傳へて、風流文字の事はもらすもの多し。謙信の詩に、「露下軍營夜氣清、數聲過雁月三更」といへるものあり。

一大西南畝　いつのことにや。大西南畝といへる醫人ありて、讃岐の高松侯に召し出

まざるはいかなる故ぞや。讀むに前後緩急はあるべけれど、人の讀むをも、好まぬやうに、見ゆるは、あやしむべし。こゝにはさとらざれども、かしこにて知り、東にて通ぜざるも、西にはとゞこほらざることあり。人の性質いろ〳〵あるゆゑに、聖賢もさまぐ〳〵に教諭したまへり。これを大事と見定めて、其餘をすぶるは、浮屠の一宗を立つるに似たり。ひとつにてすむといはゞ、孝經にてもあまりあり。小學にても足らざることなし。

一三國人傑　三國の人才、諸葛公第一は論なし。余、其亞を魯肅と斷ず。魏の强大と吳主の才能とをはかり、二國力をあはせざれば、必ず魏のために亡されんを知り、荊州をばとらぬ心と見ゆ。其智、公瑾子明が上に出でたり。仲謀これを呂子明におよばず。みだりに大言せる人なりといふは非なり。

公瑾―周瑜の字
子明―呂蒙の字
仲謀―孫權の字

一智行貫ツモリの事　天正以前の知行千貫といふは、今の二千五百石に當ると、土佐の戸部助五郎良煕の說のよし。もと聞きし說には、永樂錢壹貫文、銀六拾匁にあたりて、米一石の直ひ六拾目と定めて、一貫は、卽一石なりと。いづれか是ならん。備後の杉原盛重は、知行七千五百貫といひ傳ふるに、亂世に城五ヶ所もちて、それ〴〵に

里正―名主、庄屋などの事
母衣―馬上にて背に負ひて敵の矢をふせぐ布

貞女の詔勅、文章、詩歌を集めて、其時の事實を小序にかきて、一書となさまくおもふよし語りしが、いまにならざるや。

一楢崎景忠　楢崎十兵衛尉景忠といふ人、備後の府中に住す。水野侯入國の時に、景忠がことをたづねられしに、此もの大坂籠城の士なれば、咎あるべしとおもひけるにや、處の里正より既に死せしよしを僞り申しければ、勝成公歎息して、「大坂城中にて二十四反の母衣をかけ、貫木を飛び越したるを、まのあたり見うけぬ。大力の精兵、當時名譽かくはしかりしもの、あはれ世にあらば、祿千石はをしからず」とのたまひける。里正これを聞きて悔ゆれども、詮かたなかりし。楢崎は、同國久佐村二子城にありし、楢崎加賀守豐氏といふ人の後なり。豐氏正慶二年、足利より蘆田郡の地頭に補せらる。

一大和小學　大和小學は、闇齋先生の著なり。其中に、禮は朱子の儀禮經傳通解に、黄勉齋の續をくはへ、其上に三禮を見るべし、春秋は四傳、扨通鑑綱目を見て、筆法をかたり、易は啓蒙本義を本とし、程易は別に見よ、樂は蔡季通の律呂新書などとあり。然るに、今の闇齋學をいふ人、一口に、四書小學にて何事もすむといひて、他書を讀

月輪殿—關白藤原兼實
欠伸す—あくびのびをすること
韓吏部—韓愈字は退之、諡して文公といふ
東坡—蘇軾の字

もの長門にあり。直實一族と、田地の堺を爭ひ、訟に及びしに、直實口吃して、對決に負けて、其憤にたへず、出家すと見ゆ」と。又考安云ふ、「法然上人傳記に、法然上人月輪殿にて、經を講ぜしとき、供に候せし僧、次の間にて、欠伸す。月輪殿いまのあくびは、坂東聲なり。いかなる人ぞと問ひ給ふ。上人こたへて、これは聞し召も及ばれ候はん。熊谷二郎直實と申して、弓取の剛の者に候ひしが、鎌倉殿に恨ありて、遁世いたし申したるにて候と申さることあるよし。其後東鑑を見しに、かの事詳に載せたり。直實は、きはめてはらあしき人と見えておばむこの直光といふ者と、訟におよび、梶原平三が、直光に黨するを憤りて、訟の庭より逐電せしとなり」

一兒敎　詩の巧拙にかゝはらず、悅ぶべく、かなしむべき事にあたりて作れるもの、杜子美諸將等の作、韓吏部の藍關、東坡の獄中、陸放翁の臨終、文天祥、方孝孺等の忠憤の作などを集め、小傳をそへて集となし、今の子弟の三體詩、唐詩選等にかへて讀ましめば、人を導く便となるべし。人にかたれども、人是とせず。ひとり西山翁のみ、是がために岳武穆を弔する詩、たれかれがつくれるを數首抄出しておくらる。余病懶いまだなすことあたはず。考安も、「吾邦の正史野史の中より、賢主、賢臣、烈士、

大野—九郎兵衛
蠹弊—國家を害しやぶる

あやしみて、人に語りしが、後におもひあはすれば、復讐の前、さらぬ體にもてなし居たるなるべし。考安云ふ、「かの萱谷三次に伯母のありて、其家に寓居せしが、毎日沈醉して、債償もおほかりしが、つねにつくなひがたくて、こまりたるを、伯母のともかうもして、つぐなひつかはしけるが、其三次を去りし後に見れば、一々債家の名を錄し、錢を殘しおきたるとなり。考安外家に一老母あり。其父はよく其の事を見聞せしよし」

一亡國弊政　赤穗國除の前つかた、大野某政を執り、蠹弊はなはだ多く、大石より〱諫をいるれども用ひられず、閉門逼塞など、年に兩三度にくだらざりしに、國除せられけるを、國人はかへりて、其弊政のやまんことぞとおもひて悦びしとなり。小人用ひらるれば、君子退き、下の人其憂をうく。其鑑あきらかならずやと。大川良平の話なり。良平は、赤穗の人、其二三十歳の頃は、元祿の變の頃の人、幾年も存生して、其事を歴々といひしとぞ。西山窗話

一熊谷直實遁世　熊谷直實出家して、敦盛の菩提を弔ふといふこと、太宰徳夫さへ實事と思ひ文にも書けり。僧圓識は、長門の人なり。其の話に、「大江廣元袖日記といふ

やごとなき―貴き

萱谷―半之丞政利といふ

ふ。備中笠岡小寺淸光記す。

一珍書考　此頃、珍書考といふ書を讀む。彼書はやごとなき家の著述にて、珍書といへば、奇妙なることと思ひしが、さはなくて、俗説辨の類なるものにて、世俗のあやまれることを標出すれども、さして學者の用をなさず。日本と諸越と、同じことも多かるべき。皆、諸越の事より誤り傳へしなどいふ事を、決せし書なり。然れども予が輩の書を讀むこと、少き人には、大益あり。みな人よむべき書なり。蟬丸の事を證せしなど、かの延喜の朝にかゝることあるべしとも見えず。こと〴〵しく辨ずるにも及ばぬ事なれど、其引證は、一つの異聞なり。書よまぬ我等が如きは、よみてたすけを得る事多かるべし。

一萱谷何某　河相周二が話に、「赤穗義人のうち、萱谷何某、國除の後、備後三次にありしが、足跛耳聾にて、毎日いでて、魚を釣り遊ぶを、市童あつまり嘲笑す。かくて半歳ばかりにして、近隣に暇乞ひて出でしが、其後、三次の郊外二里ばかりにて、三次の人、他所より歸るに行き逢ひければ、聊の用によりて、故郷へ歸るとて、いとま乞して過ぎし、其顏色常よりもゆゝしく、足も跛ならず、耳もよくきこゆと見ゆ。其人

純、春臺と號す、徂徠の門人
鱌—いしもち
語癰—原本のまゝ

て、其日より筆を起して、やがて彫刻す。其時、太宰が註は、いまだならざりしと、魯堂先生まのあたり見しまゝを、われにかたられし。四十年前の事なり。叢談にかきしは其實にあらず。

一奇病　此頃、友人小寺清光がかける記事を見るに、其事奇なるに依りて、左にしるす。

文政五年夏、本邑篁後巷文助といふ者癰を患ふ。六月二十四日、癰潰れて、二鱌魚あり、膿血に隨ひて出づ。癰亦稍愈ゆ。其子、茂平異みて、これを語癰。以て文助に問ふに、曰く、「信なり其長さ寸餘、尾ありて首なし。鱗鰭並に全し。蓋し、是嘗て此魚を好む。其沙礫多きを以て、皆、其頭を去る。然れども、已に食せざること數月、今出でて、鮮且全きは何ぞや」予文介の言を聞き、益、其異を嘆ず。夫れ、熟して後これを食ひ、糜してこれを咽む。安ぞ鮮且つ全きを得んや。人の腹中、食を受くる所あり、また、何ぞ背よりして出づるを得んや。稗官小說、或は恠疾を載せて、未だ斯類の事あるを聞かず。是によりてこれを觀れば、世の奇恠非常を傳ふるもの、概して妄誕とすることを得ず。文助少くして、我に傭す。故に其事を詳にすることを得たりとい

太宰—太宰は姓、名は

を歡賞したまひしよし。

一堀田筑州金言　麾下の士何某の町奉行になられし時、堀田筑前守殿の「必ず相手にならぬやうにあれかし」と申されしに、何某其時は、合點ゆかざりしが、「訟を聽くにいたりて、始めて、心付きし」といはれしとぞ。「訟を聞くは公の事ながら、惡しとおもひ、むづかしとおもへば、必ず、其人を我が相手と思ふやうになる者なり。我詞するどくなれば、其人言を盡すことあたはず、必ず、かたきゝになりて、取りさばき平かならず。相手になるなと言れしは、金言なり」と、子孫にもいひ置かれしとなり。

一物は漫に棄つべからざる說　魚の骨はすてて、猫犬も喰はず。長門の人何某が家に、瀧川あり。そこにてさらすこと數月の後に、粉にして味噌にまじへくらふに、其味甚だ美なりと、圓識上人のかたられし。余が家には、瀧川なし。是を聞きて後に、一大壺を地に掘り入れて、すべて捨つべき魚骨を、其内に入れて、水をたゝへおき、時を以て、樹木の根にうづむるに、樹木の蕃茂する事常ならず。物はみだりに捨つることあるべからず。敗物とて用をなさゞるものなし。

一家語の註　岡白駒が孔子家語の註をつくりしは、太宰が同じ註をつくるよしをきゝ

銀杏樹下の惨―公曉に殺されしをいふ

桑名少將公―松平定信公

造らせて、渡唐せんとせられしに、其船あまりに、大なるによりて、海濱にうかばず、其事終にやみにけり。當時鎌倉も穩ならず。いかで、この狂謀をば、なし出し給ふべき。今思ふ、其身、權臣に制せられて、やがて、害せられん勢の、朝夕に見はれし故に、いかにもして、北條を謀らんとせられしなるべし。果して、其謀のごとく、多勢を引き具して、船にうかびて、畿內、中國にもあれ、筑紫にもあれ、旗擧けし給はんに、味方せざる人あらんや。たとひ運つたなくして、討死し給ふとも、銀杏樹下の慘にはまさりなん。右大臣殿心なきにしもあらざるべし。周宣帝の宇文護を手刃せしは、格別の手段なり。和漢前後、希有の事なり。

一韓廐　備後三原の城中に、韓廐といふものあり。小早川中納言殿の建てられしなり。是は、大將の居間ちかく、馬をつなぎて、大將つねに束帶、或は甲冑にて騎り試み、或は手づから、草かひなどする爲なり。さなければ、大將を見知らず馴れず、また、よそほひのかはりたるを見て、驚きなどして、事に臨みて、意のごとくならざる事ある故に、常にかく習はしむるなりとぞ。桑名少將公、集古十種編輯し給はんとて、古書畫、古器の類を搜し求め給ふ時に、此圖を見給ひて、小早川殿の故實に達し給ひし事

芳烈公—池田光政公
許由—堯の天下を讓らんとするを聞きて、けがらはしとて潁川に耳をあらひし人

四十年前少壯時　功名聊復有私期　老來不識干戈事
只把春風桃李巵

馬上青年過　還家白髪多　殘軀天所縱　不樂其如何

一には、三句を昇平今若と此に作る。伊達譜に見ゆ。

一普源院畫讃　備前の普源院殿といふは、芳烈公の令嗣なり。ある時、許由の畫をもて、芳烈公に讃を乞ひ給ひければ、

耳をあらふ心の水はきけよれど流はくまじ世をめぐむ身は

とかゝせ給ひしとぞ。此公の心うたにも知られたり。

一後藤基次　後藤又兵衞、戰死すといふ、僞にて、潜に落ち失せて豐後日田の近側、山中村に住す。筑前の野村新右衞門といふは、又兵衞が聟なり。之にかたみに遣しゝ鎗などありとなり。又兵衞こゝに住みて、ひまをうかゞひしと見え、年を經しが、一日遠方に行く暇乞なりとて、村中の人を招きて、酒など飲ませて、人去りて後に、腹切りて死せしとぞ。大なる墓、今尙、その村の山中にあるよし、平岡玲藏の話なり。

一源實朝大船を造りし説　鎌倉右大臣、もろこし何某和尙の後身なりとて、大なる舟を

尾道屋一とせ九州の軍に、酒あまた賣りて、利を得しかば、又の軍にも行かんとせしに隣村、中條といへる所の、寛水寺の住僧、占ひをよくして、此度の軍には、利なくして、怪我あるべしといひし故、ゆかざりしに、外の行きしものは、皆、損亡して返りしとぞ。

又、同國の尾道に住屋といふ酒造家あり。大坂陣の時、酒をつみのぼりしに、とある道にて、塙團右衞門に行き逢ひしに、團右衞門初め浪人して、尾道にありし故に、住屋も時々出會せし事ありて、相識るによりて、馬上より聲をかけて、「尾道に在りしときは、大に御世話に成りたり。無事にて目出たく候へ」と、いひ捨てて、鞭を揚げて行きしとなり。されば、戰なき時は、又ゆるやかなる事もあるにや。

一伊達政宗　伊達中納言殿は、耶蘇の本國、阿媽港、呂宋などの國を、征伐せんの志のおはして、醉餘口號の作に

邪法迷レ邦唱不レ終　欲レ征二蠻國一未レ成レ功　圖南鵬翼何時奮
久待扶搖萬里風

かくはおほせしかど、事故しげくして、終に及ばざりしとぞ。又此人の詩に、

矢挾間—城の櫓などに設けたる小窓

一軍中艱難　軍中の艱難危殆は、いふことをまたず。水野侯（日向守勝成）西國におはしゝ時、宇土の城攻に從ひ給ひて、寄手既に堞下に逼りしに、後より呼はりて、「それなるは、六左衛門樣（日向守はじめは六左衛門と稱す）にておはせずや。私は主人を見失ひ候へば、御供に召し連れくだされよ」といふ。侯其聲をはやくも聞き知りて、「淸吉なるか、早く來れ」と仰せらる。淸吉悦び、侯に近づくとき、忽ち、銃丸にあたりて仆る。銃は矢挾間よりさし出して打つを見て、侯とびかゝりてもぎ取り給ひし事あり。かゝる事は、聞くもおそろし。淸吉が主人は手負ひて、半途より歸りしなりとぞ。又、備後神邊に軍ありける時、一女豇豆を採りて、歸るを見て、軍兵ども聲々に、「其豇豆を澤山に採りてひたしものにしておけよ。やがて立ち寄らん」といふ。女はおそろしながら、其言のごとくにせしに、程なく多勢入り來りて、手ごとに取りくらひ、錢をあまた、投げ出してかへりける。其家には、餘程德つきたるよし。今七日市といふ巷の中程の南側の家なりといふ。杉原の時の事なるべし。

又、同じ所に、尾道屋といへる酒造家あり。其頃軍ある所を聞きて、遠方までも、酒を舟にて、運送し賣りあるきけるが、いづれの酒造家も、皆、かくのごとくなりしが、

後架—便所

して、妄りに論孟の註を著はし、古賢の傳註を毀る者あり。聖賢の語と、己が身の行とを、くらべ見ばいかゞあらん。

一大石良雄　大石内藏介、細川侯の邸に在りし時、茶坊主二人を附けて、其使用に供せらる。其明日は、切腹ときはまりし前夜に、内藏介後架にゆかれしに、彼の茶坊主一人は、手燭を持ち、一人は湯をとりて從ひしが、たがひに涙を流して、聲を呑みてかなしびければ、内藏介之を見て、「何故にさは泣かるゝにか」と尋ねられしかば、二人答へて、「吾等此ほど御傍にありて、御懇意をうけ申しゝに、明日は、御別れ申すになり候ひぬ。御名殘惜く候て、覺えず、かくはなげき候」といひつゝ、又むせかへりて泣きければ、内藏介は、顏色もかはらず、「こは吾覺悟にもなるべき事を、よくこそ知らせたまひつれ。扨久しき間、御苦勞にあづかりし事、一方ならず、吾もなごりをしく候。何ぞかたみに參らせたく候へども、持ち來りし物も候はねば、是は持ちふるしたるものなれど」とて、一人には、紙いれの囊、一人には、腰さげの巾著を與へられけるを、その二人の家に、今に寶とし傳へたり。「大石はかりそめにも、人のなづきしたしむ人なりし」と、西依先生の話なり。

下になりなんもはかるべからず。されば、北朝のたち給ひしは、楠公諸將の力による事あきらけし。

一小早川黃門　小早川中納言殿、三原の館におはしける時、京の人來りて、此頃京わらんべの謠に「おもしろの春雨や、花のちらぬほどふれかし」とうたふよし語りければ、中納言殿感じ給ひて、「夫はすべての物事に渡りて、ことわりある謠なり。いかばかりおもしろき物も、能き程といふ事ありて、茶や香や、おもしろくても、猿樂がおもしろくても、學問がおもしろくても、本業を喪はぬほどになすべき事なり」と、仰せられし。いかにも、茶香猿樂の類は、さる事なれども、學問して本業を喪ふとおほせしは、本意違へり。學問は身を修め、家を齊へ、國天下を平治する道なれば、其本業を失ふは、學問にはあらず。身修り、家齊ひては、いかで本業を失ふべき。此人は、當時學校を建て給ひし事もあるに、其時眞儒に遇ひ給はぬは、千歲の遺恨ならずや。詩文博識にふけりて、身をも家をも忘れて、亂世には國を喪ひ、治世には父母妻子を饑寒に至らしむる輩すくなからず。是等をのみ見給ひて、眞の儒學は、當時なかりし故に、かくはのたまひしなるべし。今時また、己が身をも反り視ず、聖言をも畏れず

黃門―中納言の唐名

除目—任官の式

玄旨—細川幽齋

びにやるよりそしるがはやき」の如き、其人來らんとする機、既に此に應へて、おぼえず知らず、其人を思ひ出づるに因りて、誹謗の言も出だすなり。此等の事にても思ひ半に過ぎんか。

一史類を讀むに可二心得一事　白石の說に、史類を讀むには、勝方負方といふ事を、看破せざれば、實事を思ひ取りがたしといへり。陸秀夫の舟中にて、大學を講ぜし、平家の舟中にて、除目を行はれし事など、後の世のわらひぐさなれど、衆心の動かざる爲にせし一策なるべし。さなきとて、舟中にて、軍の手配の外に、何のなすこともなければ、將は降らんとし、士卒は逃れんとする謀をなさんもはかるべからざればなり。玄旨公の、嬰城の中にて和歌を講じ給ひしも、別意にあらざるべし。されど、是をそしる人なきは、勝方なればなり。

一楠公　楠公父子は、南朝の忠臣にあらず。吾國皇統の忠臣なり。尊氏謀反して、先、大塔宮を弑し奉りしより以後のしわざ、八幡太郎義家の子孫に、必ず、天下を取らしめんといはれしなどいふ言をこしらへし事を思ひ合するに、數箇度の敗衂なくば綸旨を申し下す意を生ずることはなかるべし。尊氏初意のごとくならば、今日いかなる天

人をそしらば―うはさなすれば影がさすの類

れんことを求むるに急なるより、種々の虚説をなす。周公の吐握、伊尹寺人、瘠環百里奚の事のごとき、孟子これを辨ぜられずば、後世誰か其非を覺らん。みな、己が出進の道に恥づる事多き故に、人の謗を防ぐ爲に、こしらへたるべし。當時の勢と、人心ども思ふべし。漢興りて、挾書の律を廢し、獻書の道開かれしより、一書をいだす人は、名も利も、それに從ひしと見えて、さま〴〵の僞書を作り著しょなり。大抵、孟、荀、老、莊、韓非、呂覽等の外は、眞物はまれなり。今の書を讀むもの、此二事を知らざれば、無用に力を費し、心を惑はす事多からん。

一卜筮　卜筮の驗あるは、何を以て知れる事にかと問ふ人ありしに、或人のこたへに、「嫌疑猶豫を決するに、奇か偶かと、物を擲ちて占ふが如し。其應否は問ふに及ばぬ事なり」と云ふ。余はしからずとて、中庸先知の事を援きていひし事ありしが、今おもふに、遠く書を引きて云ふをまたず。凡、天地人は一氣にて、此に呼べば、彼に應へ、感ずれば通ずる類にて、一つも驗なきはあらじ。内眼こと〴〵く見る事を得ざる故なるべし。或はきざし變じ、きざさずして、忽然と出來るもあるべし。故に人こと〴〵く是を見ず、見ても信ぜず、意とせざるにや。俗諺に、「人をそしらば、めしろをおけ」、「呼

長沮云々―隠者の名、論語にあり、

洛閩の學―洛は程子の居處、閩は朱子の居處

ても廋しがたきに似たり。

一莊子　莊子は、身を危うする事を第一の恐とす。故に危難の地に臨まぬことを主とせり。長沮桀溺、荷蕢丈人、接輿の類の、既に聖人に取られざるを見て、必しも名教を信せざる旨を說も出し、四人の者のごとき嘲を解き、己が禮法を廢棄せしいひわけを上手にせしなるべし。其心は、阮亭稽庵いくばくも異なる事なし。

一道のうへに異說をなす事　或人の「宋以後は、明淸亦吾土にも、洛閩の學を用ひらるるは、あやしき事なり」といへり。今細論にはおよばず。聖人の道を行ふに、我身を修むるを始として、實用を宗とし、異端を闢きて、疑はしき事なくせられし故なるべし。後世宋學を詆る人、前に洛閩の諸君子なくんば、己かの諸君子には及ばずとも、宋賢の如き學はいふべし。大事を窮めずして、訓詁文字の小事にてはやむべからず。余思ふに、宋以後の學者達は、洛閩の諸君子、既に道を明かにせられたれば、洛閩の諸君子にまかせて、置くこゝろなるべし。たま〳〵道を論ずれば、「道は本なき者なるを、聖人の造作し出せるなり」といふに至る。あまりに異を立つるにあらずや。

一僞書　賓興の政すたれて、英俊の士、進取の道に遊說の外せんすべなく、聽用せら

浩然章―孟子にあり

司馬炎―魏帝を弑して國を纂ひ、晉國皇帝となる

佯狂―きちがひのまね

辮髮髠頭―所謂ちやんちやんのあたま

る〻事を、己が氣より心をおしたてて、自らやめ止る事のならぬは、皆幼少よりの驕奢放肆にて、一種の氣質をやしなひたてて、所謂、肝癪もちとはなりたるなり。予、浩然章を講ずるに、此説をいひて、直を以て、養の反對とす

一過を飾る説　凡、吾がなしてよからぬと思ふ事も、不得已にせまられては、是をなし、また、なすべき事と思ふ事も、已む事を得ず迫られて、是をなさゞれば、人の笑ひ謗らんもはづかしく、また、吾心にも慊らずして、かの氣餒うる事多かるを、告子が心にならへるか、亦、小人の過を文る類にて、人目をまぎらして、吾が羞愧をゆるめんとする歟、古人にもこれあるに似たり。司馬炎が、君を弑しても、何とやらん安からぬ所ありて、阮籍、稽康等を至孝至愼などいひて、人の視聽をまぎらし、阮籍、稽康等も、亦佯狂して、莊老の道は、かくあるべし、必しも、名敎に拘らずと人にも思はせんとせし類、王安石、張商英が類、佛に佞して、聖人の敎を必とせざる意を示す。近時に阮亭、稽庵など號せる人あるも、辮髮髠頭を愧づる心、やるかたなく、是に托して、意氣を作すべし。三代以來、人物多し。德行事業に論なし。酒を嗜む人、詩文に長ぜし人、遊行を好む人、其人亦少からず。それをすてて、稽阮をしたふ心、さ

んとおぼさば、今より心を改めて、德行を修めなば、やがて令兄よりも、上に立ちなんこと必せり」といひて、弟大に悅び、日夜言行を愼み、二年許を經て、二難の譽あるに至りしかば、弟の驕慢いつのまにかやみて、兄をそしる事なきのみならず、兄を敬ひつかへて、人の耳目を驚しゝ事あり。孟子齊梁の君に、王道を勸められしも、齊梁の君、若し、よく孟子の言に從ひ、王者の德に同じくなりなば、周室をいかゞせられん。周王もまた、二國の君をいかゞなし給はん。孟子を讀むもの、此等の事をおもふべし。

一肝癪もちの事　今の世に、肝癪もちといふ者、幼少より、親の愛を恃みて、驕奢放肆にそだち、富めるとて、人にかしづかれ、位ありとて、人に諛はれて、何事も吾意のごとくなるより、一度意に忤ふ事あれば、俄にはらたち、顏色四體に見はれ、或は物へ行かんとおもひしに、さはりありて行く事を得ざれば、庭の内をあるきまはりて、坐し得ざるあり。或はありあふ器物を庭に投げ、柱に打ちつけて、碎くもあり。或は妄りに、人を罵り、また、妻子婢僕を打擲するもあり。甚しきは、刀をぬき、鎗をひらめかすもあり。或は一日に幾度となく、手をあらひて、人の物をば、皆けがらはしくおもふもありて、大抵、他人よりは、かほどの事は、堪忍もなるべきにと、思は

陸王の學—陸象山、王陽明の學說

宋賢—程朱等の人をいふ—

訓詁—よみかた、字義

りし事をいはねば、おもしろくなきと思ひて、陸王の學を唱ふる人も、出來しなり。皆時好に趨るにて、己が爲にするの學にはあらず。其心は、放蕩をゆるすも、格別の違ひはなしと、考安が來りて話しゝ。

一學問行實　凡、大なる者を立つれば、小なる者は、夫に從ふ。學問の第一は、行實なり。其行を先として、聖經の歸趣を求め、時論に應じて、道を衛り、異なるを闢くを勤むるは、學問の大處なり。宋賢の業是なり。今時の人、訓詁文字の異同を正すを事とするは、少なる者從ふなり。前に諸君子なくんば、老佛の盛にして、後の學者、これを闢くに暇あらざるべし。大處、すでに明かなれば、今時少處を、搜索するも可なり。されど、其行實を心とせざるは、今の人の目の著かざるか、抑、自棄して、小成に安んずるか、疑ふべきなり。

一不弟を誡めし事　一弟ありて、其兄と同じく學問をなして、名望の兄にしかざるを恥ぢて、やゝもすれば、人に對して、兄の短を云ふ。或人これを敎へていふ、「足下と、令兄と、博學ひとしく、詩文ひとしく、手かきすることまで、何一つも令兄に劣りたる事なくて、名望令兄にしかざるは、德行のおよばざる故なり。若し、足下令兄にかた

一徂徠學　堤兵藏（京の人號は一雲）の話に、「朱子の學は、老人の子弟に教ふるに、謹愼なる事のみをいひて、不善なる事は、必ずしてはならぬ、よからぬ人とは、狎交るな、酒も飮まぬがよし、大食もすなと、日夜にくりかへしていふが如し。徂徠の教は、老人の偏窟な事をいふごとくにもならぬ、年少き時は、酒も少しは、飮みてもよし、娼妓の席にも、時々は遊びてみねば、人情にも通ぜず、智もひらけぬといふが如し。それを當時は、おもしろき事におもひて、我も／＼と、其說を演述したれども、近頃は、それ程に勸めずとも、わかき時は、放蕩には、なり易き者なれば、老人の深切にいはれし言は、すてられぬといふ所に、心のつきし人あれども、一度ゆるしゝ放蕩は、容易にひきかへし難し。畢竟するに、よからぬ處へは、ゆかぬがよきといふ人多し」と。また、或人の云ふ、「惡事を爲せば、地獄に墮つると云ふによりて、畏れし者を、惡事は、爲しても極樂に生るゝと云ふ教あるも、彼少き時は、放蕩も少しはくるしからぬといふに同じ心にや」と。

或人の言に、徂徠の教にては、子弟放蕩になりやすくて、其親兄弟も、學問をする事を制するやうになり、今また、朱子學を爲すにも、珍しからぬによりて、少しはかは

山岨―がけみちの所

有之と申し遺し候へ共、決斷して未だ來り申さず候。備後よりは、數十里隔り候へ共、嘸其地、此窟を見たる人も可有歟。先生へ御相談申上候。奥州南部蝦夷を望み候地に、材木村といふあり。其村の邊、山野海島に至る迄、皆材木のごとし。方四五寸ばかり、村民これを取りて、屋下の床に用ひ、或は橋に架し候。石質堅く、鐵に類し、又、奥州出羽の界に、小坂峠といふ所有之候。此山中材木石あり。山岨崩れ落ちかゝるを見れば、半倒れ掛りて、扇の骨を立つるごとし。長さ數丈なり。亦四五寸角なり。同州會津邊にも材木石あり。土人橋に作り、欄干に作り、皆、此石を用ふ。對馬にも木板石あり。長さ四尺許、廣さ四尺許、厚さ三四寸。土人橋となし、疊になす。天然の板石なり。此石重疊して、對馬一島をなすと申事に候。木崎の石窟も亦此等の類か。件の石邊竹の節のごとき者見え申候。圖を以て考ふるに、此節間の處より、欠落ち候者歟と被存候云々。此書によりておもふに、筑前にも一島、皆石にて、束ねたる薪を積みたるがごときあり。内は洞穴にして、船出入す。福岡より西にて遠からず。備後の山野村といふに、面背平かにて、厚さ二寸餘にして、鉋にて削れるが如くなる石あり。庭の飛石などに宜しけれど、取り用ふる人少し。

權謀―正道ならぬ臨機のはかりごと
蘇張―蘇秦、張儀。
栗山翁―柴野邦彦
寡君―藩主

く、その時の人情に合するやうに、種々の權謀を用ひなば、孟子も亦蘇張の徒ならん。孟子當時一策をも出さず、正理をのみ、齊梁の君に對へたまひしは、天理人義の極致にて、堯舜其時に生ずるも、これに過ぎたる事なし。彼の誹議する人を、その時出さば、如何なる事を爲さんや。必ず、商鞅のごとくなるべし。明の王元美は、宋儒を惡みし人なれども、其言に、我中庸を讀みて、孟子は子思の弟子なる事を知り、戰國策を讀みて、獨り孟子の賢者なる事を知るとあり。古人の論は、惡んでも其中に取ることありて、公論にちかき處も見ゆ。今の世の子弟の、己が心の如くに人を見て、古人を是非して、道に正すにもあらず、口にまかせて、いひ出すは、かなしむべきにあらずや。

一石材　白川藩士田井柳藏の書中に、但馬木崎の溫泉に石窟あり。栗山翁これに名づけて、玄武洞といふよし。其地に黒崎玄沖といふ老醫あり。此巖窟へ題名せんとて、先年寡君之書を、小生迄乞ひ來し間、さらば、何方へ題し、如何程にて宜しき歟、尋ね遣し候所、此圖を指越候。如此に候間、題すべき處無之候。此洞前の傍に、立石有之、此石にも鐫るべき歟と申し來り候。如此之絶壁ゆゑ、洞中壁上、猶可題所も可

釋―佛教

淳朴―すなほにかざりなきこと

天は物を生ずるを職とし、地は物を育するを職とし、聖人は物を成すを職とす。聖人は天地の生育のとゞかぬ所を輔相する者なれば、其恩の廣大なるは、言語の及ぶ處にあらず。此心を以て聖人の教を視れば、其深遠不測の所を窺ふべし。

一老子　老も、釋も、聖人の爲る所をするに心あれど、別に一道を開きしは、私意ある事をまぬかれず。末流に至りて、世の人の害をなす事、極まりなし。釋の害は、世の人皆知る所なればいはず。老の禮樂を舍てて、一道を開きしも一理あり。三代の禮樂も、年久しくなりて、末弊出できて、禮は皆虛文となり、人はますます狡猾になりにて、あしき心にもあらざれども、これより聖教をも、輕んずる人の出できて、人の下るによりて、かの無爲といふ事をいひ出だして、世を太古の淳朴にかへさんとせし心かへりてむかしにあらず。其言政に施して行はれず。遂に刑殺を用ひて、商鞅獄を聽きて、千里に血を流すに至る。其血、萬世の下、萬里の外まで、今猶をさまらず。されば、其これを始めて開きし人は、千古の大罪人ともいふべけれど、かくなりゆかんとは、おもひしにもあらざるべし。

一孟子　孟子を時勢を知らぬ人なりとて、誹議する者あり。若、其誹議者の言のごと

權衡—標準と同じ
毫釐千里—わづかの差も遂には甚しき差を生ずるに至る

るべし

一非レ我者其惟春秋乎之話　聖人の語のたふとき事、今更いふもおろかなり。さるを、學者は、よく知れども、童子の輩は、こゝに心つかざるべし。一日孟子を講じて、「非レ我者其惟春秋乎」といふ處に至りて、おぼえず感涙を落しゝ事あり。此に人あらん。其家僕三人あるを、一人はあしく、一人はよし。一人はよき事もあり。また、あしき事もあらんに、あしきと知りたるは、出し黜け、よきと知りたるはとゞめ、よきもあしきも交れるは、惡は禁じ、善は勸むべし。是は何の法によりてか施すべき。己が心のまゝに、ものしなば、此の非は、彼の是となるべし。此に一定の權衡なければ、所謂毫釐千里にて、人間世界あやしき世界となるべし。幸に聖人の規矩準繩あればこそ、其裁斷も、多くはたがはざらめ、縱ひ私に物するも、右を顧み、左を慮りて、大なる違もなきは、聖人の恩澤ならずや。

一欲レ無レ言の語　孔子の欲レ無レ言とのたまへるは、空言の人にいへる事、淺きをおぼしたまへるにや。易の爻にて、人事をさとし、春秋の事實にて、邪正をあかし給ふは、神とも妙ともいはんかたなし。われ人おろそかに、看過すまじきは論なし。

氣稟―うまれつき

ろいろと深くいへば、却つて惑ふ者ある故に、かくは云へるなり。すべて、魯堂の道を語らるゝは、かくのごとく、穿鑿に過ぎて、岐徑に迷ふを恐れしなり。

一變化氣質　目は視、耳は聽き、口は味を知る。天下の人皆同じ。目は横に、鼻は直、頭は圓く、是もまた人にかはる事なし。人の性も然り。視るに明あり、昏あり。聞くに聰あり、聾あり。味をしるにも嗜好異なるあり。目に大小、鼻に高低、頭に長短あり。これ氣質なり。かゝる事を爭ふ人多きはあやしむべしと。此話を考安にせしかば、かれも又云へるは、「藥の溫涼は性なり。形色氣味は氣質なり。譬へば、桂枝の溫は、桂枝の性なり。これを粉にすれば、形も變じ、炒るときは色も變じ、氣も薄くなれども、これを嘗めて辛溫なるところは、變ぜざるなり。然るを、藥の性を云ふを、非とする醫人のあるも、氣質の變化と、天理の本然とを疑ふの餘弊なるべし」

一性惡之說　或人の云ふ、「性惡といひ、三品ありといふ者、人と爭はんとて、假にいふにはあらず。深く考へ、潛に思ひ定めたるなり。氣稟の甚だ濁りたる人は、いか程深く考へても、善なる所は、見出すことあたはざる故に、天下の人、皆此の如くならんとて、一に惡とは斷ぜしなり。三品も、亦是に同じ」と。此は深く識得せる人の說な

所自ら明かなれども、今時の人、同じき所に意を著くる人少し。人一事を行ふに、是より外によきしかたのなきを至善といふ。行の過ぐる事も、及ばざる事もなく、心の中に、一己の私なきを中といふ。仁は人なり。天は能く生じ、人は能く愛す。其理おなじ。愛は仁の見はれたるなり。されど、人は形氣の私によりて、其愛の理にあたらぬあり。譬へば父母よりも、妻子を愛し、兄弟より朋友を愛し、人よりも馬を愛するの類、また、其父母を愛する中にも、父母の心に順ふを孝とすれども、父母過ちあるを諫を奉らずして、其意に順ふも亦愛の理にあたらぬがごとし。義は、其愛の理にあたらぬを制して、理にあたるやうにするをいふ。されば、仁を成さんとするの具なり。禮は、愛を身に行ふに、其行を文にするなり。是もまた、仁をする具なり。智は、愛の理にあたるをも、行の文になるをも、其の是非を分別するなり。是も亦仁を成さんとするの具なり。この三具を以て、愛する心も、行も、みな一様に理にあたらしむれば、仁なり。一人を成就するなり。三具は仁より出でて、仁を成就して、一となるなれば、仁義禮智合して、全仁なり。克レ己愼レ獨は、仁を養ふの術なり。中庸は、仁の成功なり。至善は、仁をするの標的なりと。此言淺易に説きしやうに聞ゆれども、い

道觀―道教の修行するところ

草蕭々」など、浮泛ならぬ處あり。これらにても佳なるを見るべし。さりとて、其座のこと、一々つくり出ださば、また混雜して、觀るにたらざる詩となるべし。劉禹錫が金陵懷古の事、隨園詩話にくはし、こゝに贅せず。又、ある詩話に、詩佳なれば、春遊に秋の詩をつくり、道觀にて、佛寺の詩をなしても、苦しからじなどいひたるは、興のさめたることなり。

一熊茄子をいむ事　熊は茄子をいむ。深山の人薪をこりにゆくに、かならず茄子を帶ぶることを見れば、熊必ず走りさる。茄子、野にあるときは、熊膽小なり、茄子なき時は大なり。茄子を見せて、とりたる熊は、膽かならず小なりとぞ。又馬に恐る。狼は馬をころし。其狼は熊に制せらる。物性いかなればかくあるにか、高橋文亮話

一道は一なり行ふにも亦二なしの條　魯堂先生の話の、いまに耳にとゞまりたる中にも、道の事を語られしに、道は一なり。行ふにも亦二なし。仁、義、禮、智、至善、中庸、克己、愼獨等人にはやく知らしめんため、とく入らしめん爲に、敎へたる名なり。人心は、一なり。豈數多の岐徑あらんや。其名に、本より工夫の着手する處より、成功をいふあれども、皆一に仁をするの術なり。其名の異なるところを知れば、同じき

草野孤居─田舍ずまひ

作り、和歌などをもつくりて、其間にはさみ入れたる事多しといふ。かゝること人物多き處にては勿論、看出す人もあり、また語りつたへて、人も皆知るべし。草野孤居の人にはめづらしき見なり。凡、此類をしるしゝに、よく人のしりたる事も多からん。我も同じく草間孤居の人なれば、めづらしとおもひてしるすのみ。今按ずるに、實錄と見ゆる書にも、をり／＼奇話を插み入れたるあり。續太平記にある堂上を海に沈め、其妻をとり、その妻尼になりて、後に夫に逢ひしこと、重編應仁記の雪たゝきのことの類、諸書に少からず。其内に實事もあるべけれども、據としがたし。

一詩句　丹波人植木簡脩（名は文剛）がいふ。「人と會して詩を作るに、其座の事かその人の事かより、趣向をたてざれば、數月前につくりてもよし。會集など、某月某日と戒ありてより、先つくりおき、持ち出でてもよし。李于鱗が、秋前一日、諸子と會せし詩など、城頭客醉蘆山月と云ふ句、會飲の語と見ゆれども、客の飲まぬ席もなく、月のなき夜飲もすくなければ、是もいづれの筵にても用ふべし。されば、三日五日前につくりたるも同じことなり」云々。其言義ありといふべし。明にて名作といふ、高啓が「百年父老見㆓衣冠㆒」又、「如今江左是長安」など、謝榛が「黄金先賜霍嫖姚」また、「脊令原上

諒潤―間違になる

桑間濮上―男女の情事

食ひけり。朽木に馬尾のかゝりたるが、化生したるにや」といひし。

一地中聲を發す　文政二年春三月、備後深津郡引野村、百姓仲介が宅の榎の根の地中に聲あり、人の呻吟のごとし。其家にては、常の人の息のごとくきこえ、三四町よそにては、餘程大きにきこゆ。よもすがら鳴りしは、三五日の間、前後二十日ばかりにて、晝は聲なし。夜もまた聞えぬ夜もあり。次第〳〵に諒潤になりて、終にやみぬ。今に至りて、凡二年になれども、かはりたる事もなしと、松岡清記來り話す。

一地名　武陵桃源の事を用ふ、其地に小桃源といふ處あるによるか。近日の人あまりにわけもなき地名を用ふるに懲りて、かりそめにも地名の文字によりて　其故事など引き用ふるを咲ふ。然れども、唐人かくのごとくなれば、中條といふ處ありて、中條の事を用ひ、牛首といふ所ありて、牛首の事を用ふるは、くるしき事にもあらざるべし。

一曾我物語、義經記　小野本太郎說に、曾我物語、義經記は、むかし物語の一變せしにて、其事により、いろ〳〵の事を演說したること、二三分その實事にて、七八分は虛飾なり。殊更兒女を悅ばしむるをむねとして、桑間濮上のあらぬことをとりそへて

政庚辰の大三十日に、一小石を産む。翌日見るに、傍にありて、其形、母石に少しもかはらず。白き筋などもあり〳〵と見えて、小なるのみ。正月中見る人市をなしゝと、同國松山人、岸惠造が辛巳二月廿五日に語る。

一カツテ　近體の詩にカツテといふは、嘗を用ひ、このといふは、此を用ひて、嘗、斯二字は、全く唐詩に見えずといふ人あり。夫を聞きて、心をつくるに、嘗も斯もあり。只、嘗此より少きと見ゆ。

一蜂　赤石退藏來り話す。「備前尺所村荳神祠の榎半朽ちて、蜂を生ず。其蜂の尾、樹を離れずして、多く死す。未だ死せざるを剪刀にてきりたれば、よろこび顔に飛び去る。常の蜂は、尾すなはち劍、別に腹にあり。形かくのごとし。奇といふべし。文化の末に、二年ばかりかくの如くにして、其後生ぜず」又、考安が話に、「其ころの事なりし。備後田房に考安が外家あり。其家に冬、薪を多く買ひて、積みたりしが、其中に櫸の半、朽ちたるに多く蜂あり。前の形の如くして、數箇珠數のごとく、一條の馬尾に蜂を貫きてあり。かくのごときもの數千條なりし。考安も一條に三四箇もつらぬきて、ありしをとりて歸り、紙につゝみおきしが、後には尾おのれときれはなれ、其包みたる紙を

貧郭窮巷―郊外、町はづれ

家たちかさなりて、紛雜たづねがたきならん。木曾が狼藉のとき、御舟神泉苑をわたり給ふなどを見るに、これより西いかばかりか邸第市廛ならん、略おもひ見るべし。然るに南郭が詩に、東村西落秋寂々、唯聞喞々草蟲鳴を作りしは、今のさまにしても、なほ荒涼にすぎたり。當時も貧郭窮巷にてはあるべけれども、王公の別莊など多かりつらん。されば、二句は、詩地不肖ともいふべし。孔雀樓主人は、御史中丞を彈正少弼にしたしといへりしも、詩佳なれば、なほ佳にせんとおもへるならん。

一、五岳　登岱五十韻は、錢謙益が詩なり。淸晨上二泰山一、下レ山未二昏黑一といふことを見れば、さばかりたかき山とは見えず。韻流の遊山見物もあり、遊憇もありて、所謂折かへしにはあらざるべし。又、五岳遊草諸記述などに、暑中の雪をいふものなし。されば、其高さ想ふべし。娥眉點蒼なども、五岳よりは高かるべし。されど、させる事はなしとなり。

一、異木　讃州金毘羅より二十町許の處、某村に異樹あり。幹枝は桃にて、葉は櫻なり。花は梅なり、實もまた桃なりといふ。

一、石分娩　豫州三津濱何某が家に盆石あり。それを裏座敷の違棚の上に置きしに、文

天子—高倉天皇
はたはり—區域

りといひにき。

江戸寛政の失火に、麻布の光明寺の後の岡にて、死せし者十餘人、其内一人土中に顔をいれて、息絶え居たりしを、引き出して見れば、胸腹猶あたゝかなる故に、とかくものしたれば、蘇生せしとぞ。すべて、火烟に取りまかれたる時は、土に顔をあててをるべきよし、平井直藏が話なり。

土藏は低きをよしとす。予が郷、文化の失火は大風にて、何も殘らず、唯、雪隱、湯殿のみ大屋の下風に殘りたる多し。伴蒿蹊が續畸人傳に失火のときの心得べき事をあぐ。皆、肝要の事にて、中にも土藏なきものは、急火にて財器を遠く出す間なき時は、塀をくづして、打ちおほひ置きて、逃れ去るべし。車長持といふもの用にたゝぬよし。考安がいふ、「近所皆燒けたる時、はやく土藏の戸を開きて内を見るべし。かならず大根を口にくはへて、それをかみながら内に入るべし。また、煙にまかれて卒絶したるに、大根の自然汁を口に灌ぐべし」

一 小督局　小督の局は、天子の寵姬にて、逃れかくれ給ふに、今のはたはりにては知れがたき事あるべからず。まして月夜に箏ひき給ふをや。されば其頃は、嵯峨山まで

計りがたし。こゝにて呼びかけしは、汝をたすくる一計なり。盗みし物をこと〴〵く返さば、外に望みはなし。いかに〳〵」と近寄りしに、盗人土に手をつき、詫言して、取りしものは、悉く返して去りけるが、其後一年ばかりすぎて、この盗人筑紫のかたより歸りぬとて、よき脇指一腰をもて來りて、「過ぎし晝盗みしてゆるされし命の恩をむくいん」といひしかば、主人「汝が物をとらんとならば、其時其儘にてかへさんや」と、叱りたれば、盗人涙をおとして、辭し去りぬとぞ。今かゝる御治世に生れて、水と火と盗との外は、おそるべきものなし。水は其の來ること漸あれば、預め用心もなるべけれど、火と盗は不意にいづれば、人皆心得べきことなり。

一火災の時心得べき事　備後福山、安永の失火に何某といへる者、客と雙六うちて居たりしが、すは近火よと呼はるをきゝて、戸外に出づれば、火燼既に、面前に飛來る。其内に馳せ入りて、先雙六盤を引きかゝへて、土藏の口に行き、さて思ひ見れば、帳面、錢箱などこれより大切なるものいくつもあり。雙六盤は燒くともまゝよとて、又、持ちかへりて、もとの處におきたりと。火後に此事を予に語りて、一笑しつ。かゝる時には、先第一に其家にて、大切の物何々、是は第一、是は第二と分別を定むべき事な

空中世界惑星光　自古談天總渺茫　此去同倫知幾國
滄波萬里大東洋

一盗を逐ふに心得べき事　備中吹屋村大塚理右衛門、名は宗俊は、銅山の事に達せし人なり。或夜ぬす人入りて、物ぬすみ出でんとするを、「やよぬす人よ」と、大音上げて追ひかけしかば、盗人あはてて、盗みし物もおとし置きて逃れさりぬ。其聲におどろき、家内のもの、皆々馳せ集りしとき、宗俊云ふ、「はじめ盗人入りて、我鼻息を伺ふこと、再度にして、爰かしこを捜し出だし、靜に荷物をとゝのへて出でんとす。其時、われ枕刀をぬきて、進み出でたるなり。始めは盗人の心專にして、勢もさかんなり。其時に向へば、或は怪我あらんもはかりがたし。彼心のまゝに仕課せて、今は氣勢もゆるみたるときに、進みかけしによりて、ぬすみし物もおとし置きしなり」と語りければ、みな感服せしとなり。

同じ國何某村に、晝盗の入りしを、主人はるかに見て、棒を提げ、其跡を追ひゆき、今市といふ町を過ぐるにも、聲をかけず。町を一町ばかりもすぎて、「待てよ盗人、町を過ぐる時聲をかけなば、わかきものども棒ちぎり木にて、馳せ集り、汝を害せんも

祖大師の坐像を安す。神靈存するが如し。側に泉あり、六祖淸水といふ。磴道里餘にして、山頂に至る。關を得。門に扁するに嶺南第一の四字を以てす。關を度えて下る。左壁に梅嶺の二字を勒す。陟降竟日、眼の觸るゝ所、悉く奇觀ならざるはなし。時に淸國嘉慶二十一年正月十一日也。實に本朝文化十三年丙子正月十一日たり。子長往々これを圖す。齎し歸り、以て示さる。士節、伊甫、又、曲にこれを言ふ。余乃其圖を寫し、其言を記し、以て峨山の月江師の淸翫に贈る爾り。己卯八月、薩摩梅隱有川貞熊。

一六惑星の說　ちか頃、六惑星の說あり。この世界さへ渺々としてかぎりなく、また新にいかなる國を見出さんもはかりがたきに、空中世界もまた奇見なり。天文は、授時の外は、何事にか用あらん。無用の辨、不急の察、いづれかこれにしかん。聖人も死をしらずとのたまへば、又、それより遠きは論じ給はず。隱れたるを索むとのたまへるは、北溟の大鵬、十萬億土の佛の類、みな惑星の說などなるべし。余常陸に遊びし時、靑塚といふ所より、東洋の濱を過ぐるに、はてなき海を望みて、河伯亡羊の嘆のみならず、一詩を賦す。

亡羊の嘆―あまり廣大にしてとりとめなきをなげく

樂—學者の道を研究し合ふこと

木に就き—死去せるを云ふ

薄り、水面曲折狹くして且長し。復、江戸品川の望む所のごとくならず。因りて憶ふ、昔年茶山中國江海の語を出す。自ら語りて曰く、「是又墨水の末流、稍大なる而已。相房二州の港口に出づるに非ずんば、則ち何ぞ復海を以て、之を稱するを得んや」乃前論を補葺して、以てこれを先達に質さんと欲す。拙齋竹山已に木に就きて、茶山の說、獨伸を得たり。人事の變遷是に於ても、亦感ずるものあらん。

一唐山漂流紀文　御醫福井近江介、薩摩の人より得しとて、寫し示さる。左に錄す。唐山に漂流するもの多けれども、かゝる事に心をとむる人少し。此外にも尚おもしろき事多かるべし。（此文、本漢字、いま和解して、是を錄す。閲者宜しく拙きを笑ふことなかれ。）

本藩の士税所子長、古後士節、染川伊甫、祇役を小琉球に抵す。乙亥の秋八月、將に歸らんとす。洋中颶に遇ふ。漂流する事數十日、冬十月始めて唐山廣東省の碣石鎭に抵り、廣東より江南を經て、凡六月にして、浙江省の乍浦港に抵り、留滯五月にして、遂に日本に還るを得たり。其南雄州より南安府に赴くや、大庾嶺を經たり。時に孟春に屬し、梅花盛に開く。道の左に唐の賢相張九齡の墓あり。芳流千古の四字を碑表に題す。又、數歩にして、張公の祠堂あり、遺像儼然。左の巖窟中に六

左袒——賛成すること
舟を焚き甖をやぶる——死を決して戰ふ覺悟
豈弟切磋之

にも、小水も亦江と稱するの句あり。されば、山陽の海も、一帶千餘里にして、形よく似たれば、江と云ふとも可なるべし。水鹹ければ、必ず、海といはば、岷江も潯陽以東は、淡水にあらず、江といひがたし。錢塘江も亦しかり。吾友廣瀨臺八、（名は典、字以寧、奥白川侯儒官）此頃余が說を憶ひて記せりとて、隨筆一則を寄せ示す。左に錄す。（此文もと漢文なるを、今幼稚の、見易からんためにこゝに、和解す。）

余二十年前の夜、船に乘じて、竹原を發し、菅茶山に投ず。月明蒼々、遠近山色、隱映波穩にして、席の如く、其水深積といへども、亦空濶にして際涯なきに至らず。以て其觀る所をもて、茶山に語る。茶山曰く、「中國之海、恐らくは海にあらず、江湖のみ」我此說を持して、以て西山拙齋、中井竹山と論ず。二子皆可とせず。今子獨我に左袒する者に似たり。因て掌を搏ちて大笑す。余が拙齋に寓するに當りて、また、書を寄せて曰く、「江海之論、勝敗竟に如何」拙齋竹山極めて大敵と爲す。苟も舟を焚き、甖を破るに非ずんば、則ちこれと周旋すべからず。是皆一時の戲話といへども、亦復、以て其豈弟切磋之樂を觀るに足る。文化七年春、我が公海防の命を奉ずるを以て、余相房の間に到り、其形勢を觀るに、二州綰束して、山岸に

竹山先生―中井積喜、父甃庵弟履軒と共に名高き儒者なり

俊寛僧都の流されしより、六百年許にて、いまかくなりたれば、蝦夷の「アッケシ」「ソウヤ」「エトロフ」「クナシリ」などいふ處も、ゆく／＼はかくなるべきにこそ。

一里程　我邦の一里は、西土の十里にあたること、彼方の書にてもしば／＼見ゆれば、記事の文、或は詩にても、吾土の一里は、十里といひても通ずべきこと論なし。然れども、誦して響のよろしからぬ事もあるやうにおもはるれば、是を竹山先生に問ひしに、竹山の云へるは、「周の時の書に、なほ夏正を用ふるもの多し。吾邦の里程、今の法に改まりしは、何時の事か明かならざれども、奥羽の地は、猶、昔の里程にて計るとぞ。されば、官府へ奉る文書にもあらず。私に記するには、いづれにても然るべきならん」と。これによりて、余が詩にも、百里を千里と用ひしなり。

一山陽の海を江と稱する説　山陽の海は、所謂海枝なり。島嶼とりかこみて、湖洳に似たればとて、朝鮮人の詩に、湖と稱す。余は多く江と稱す。或人是を規して、江は岷山より出でて、其源に濫觴の目もあり、川の大なる者にて、其一流の名なり、これを冒して、此處の名とすべからずといふ。是は正理なり。然れども、水を皆江と稱す。既に浙江三江なども岷江にはあらず。それを單に江と稱せしも見ゆ。近頃査愼行が詩

一薩州甑島　薩摩の甑島といふは、其國を距ること、西へ二十里許の海中にあり。其邊僻いはんかたなくおもはるれど、文化中、ある人、かしこに行きたるに、問ひて聞くに、上甑島は、村數六つありて、戸數千二百餘、其内鄕士三百ばかりありて、島の廣さ東西二里許、南北二里半もあり。近邊に野島、二子島、辨慶島などいふ島四つあり。西南二里程に、下甑島あり。村數八つ、戸數二千餘、其内鄕士二百五十人許ありて、島のひろさ東西二里許、南北五里餘ありて、又、唐島、由良島などいふ小島あり。上下甑島にて、貢入の歲額三千石許もあり。山も高きこと二町にすぎず。海の深さ二十尋以下なり。唐に對する方の山は、石多く樹木生せず。鳥獸草木もみなかはることなく、稻、麥を作る。綿は見えず。上甑島に里村、下甑島に濱市といひて町家もあり。神祠、佛寺もあり。女子は、三絃を彈く者ありとぞ。昇平の化、かゝる荒陬までにおよぶこと、かくの如くなるは、忝なき世の中なり。また、近江の僧、海量、薩の鹿兒島にありし時、鬼界島より來りて、仕ふる人の、老病にて歸鄕し、醫藥保養したきよしを乞ふを見て、「かの島にも醫人ありや。老病を養ふべき閑雅のこともありや」と尋ねしに、今は昔にかはりて、吳服屋などの商も、かしこに行きかよふよし聞えしとなり。

了、獸には象も生ずる所にて、邊僻といへども、また。事かはりたる事おもひやるべし。然るに、其臨安府は、雲南省より、また四百餘里の邊鄙なれば、其臨安に隷する通海縣といふは、又、邊鄙小邑なることとしるべし。其縣令の廨舍より、南六十里に秀山といふ山あり。頂に湧金寺といふ寺あり。其記に浮圖三つあり。湧金を勝とす。仰ぎて天光を射、俯して巨浸に臨む。城郭居室の壯盛なる、山林島嶼の蟠虬せる、晨鐘暮鼓、殷々として天上に在るかと疑ふ也と、雲南名勝志に見ゆ。巨浸は海をも江をも湖をもいふなり。此は湖なり。周圍八十里にて、一名長河とも、海子ともいふとぞ。凡、雲南かゝるところすくなからず。永昌などは、又、西千餘里にありて、人物も多し。其外處々繁華の地あり。雲南省は、大都會なり。揚升庵も永昌に流され、終に七十餘にして、其地に歿せらる。其書を乞ふ人、娼婦歌妓などにたのみ、醉ひたる時を候ひてかゝせたりといふ。雲南は邊僻にて、娼妓はいづれにかあるべきなど、思はるれど、此方の山陽南海などに比すれば、人才もさらにひらけたりと見ゆ。道路のうちにも、名ある橋多し。其橋の幅のひろさを見ても、往來の隙なきをおもふべし。されば、何處の果までも、年を逐ひて、人も多くなり。文物もひらくること知るべし。

左遷―配流、しまながし

科第―官吏となる試驗に及第すること

處、股に二箇處、刀にて切りたるがごとき創ありしに、衣類はきれず、筋骨にも痛なく、療治して、程なく癒えしが、其處此處に此事ありて、京中に十二三人も、此患にかゝりし者ありしと、是も越後屋多兵衛が語りき。

一潮州　韓文公の左遷ありし潮州といふ處は、極南の邊鄙にて、人も住みかぬる所ならんと思はるれど、近頃潮州の人の漂流して、奥州につき語りしに、祠廟は、文公の廟、寺は大顚の庵など、頗る壯麗なりとぞ。是を聞きても、させることとは思はざりしに、廣東名勝志に、黃景祥といふ人の記を抄するを見れば、城西に湖山といふ山あり。そこに浮瀾亭あり、其上より見れば、鰐渚其前を繞り、浮圖其上に聳かに、環顧すれば、平林疊巘、紛然として、狀を獻じ、俯瞰すれば、萬家鱗次一眄にあつまるといふ。されば、人居も稠密なるべし。又韓木といふものあり。文公の手植にて、名知れざれば、かくいふとぞ。其花の繁稀をもて、其土人の科第の盛衰を卜すとなり。人物の盛なるも亦おもふべし。

一雲南省　雲南省は唐土十五省にて、最邊僻なれば、諸葛武侯も七擒七縱にて打ちおき、宋藝祖もわが土地にあらずとて、すてられたり。其地、鳥には孔雀、鸚鵡、秦吉

扈従—御供につきしもの

らずとて、其邊の井を皆塡みたるよし。

一蛇昇天之事　文化二年丁丑三月廿一日、京都雷電して、雹をふらす。大きさ桃梅の實のごとく、六寸許もつもりけると。藝州廣島友子映雪、一尼東寺へ参る途中にて、これにあひて、ある人家に逃れ避けしとぞ。廿三日に京を出でて歸るに、途中足の冷なることいふべからずと、歸路予を訪ひて語る。筑前侯此日伏見を發して、大阪に下り給ふに、枚方にて、遙に雷聲を聞きたりしが、雨もふらざりしと。扈從せし月形梶原などの士、予に語る。後に聞けば、東六條善久寺といへる、一向宗の寺の妻女、此日頭痛すること甚だしく、髮際より小蟲はひ出でて、見るがうちに、小蛇となりしゆゑ、怖れて戸外へ掃き出だすに、忽ち黑雲下りて、其蛇を乘せて昇りしかば、頭痛はわするゝごとくに癒えしと、京都の人越後屋多兵衞が話なり。同日、備中松山にも雹ふりて、一二村は、麥油菜みななくなりしよし。京と同時なりしと云ふ。京の雹も、山科十村ほどは、田畑のもの、なにもなくなりしよしなり。

一衝風人に傷くる事　文化丙子七月十日、清水の瀧の近所にて、一陣の衝風人を吹き倒し、大宮通四條下る處の、手傳ひ淸兵衞といふものの妻、そこにて倒れ、背に二箇

蠔山—かきの山

一蠔山　松前の海中に牡蠣かさなりて、小き島をなしたるがありとぞ。唐土の書に所謂蠔山も是なるべし。

一毒井　備中に新兵衞新開といふ處あり。七夕に井を渫へて、四人井中に死す。天明年中の事なり。其時、笠岡御代官竹島左膳といふ人の支配所なるゆゑ、訴へ出でしかば、「夫は多くある事にて、檢視するにもおよばず。此藥を飮ましめ試みよ。程遠ければ、甦生することあるまじけれど」とて、散藥を與へられしよし。其後また笠岡にて、七夕に二人死す。予其井を見しに、海に至りて近く、淺き井なりし。文化八年辛未、備後浦上村に井を掘りて、水出でざれば、火を燒きて、是をよぶとて、其灰燼をとりに入りしが、立所に死せり。翌年壬申八月、同國千田村に失火して、家の燒けたる。其灰燼井中に入りしを渫ふとて、一人井中にて死せしかば、夫を救はんとて、二人また死せり。其時井に臨みたる人、惡臭衝き來りて、少時も向ひ難く、顏をそむけて、死骸を引き揚げたりとぞ。凡夏秋の間、井中に毒あり、井中に鳥羽を投ずるに、舞ひて下らざれば、かならず毒ありと聽雨紀談に見ゆ。或人のいへるは、挑燈に火をつけて井中へ下し、毒あれば火必ずきゆといふ。笠岡にて死せしのち、新開地は、井よろしか

澇雨―大雨

初更―午後八時

盤舞―ぐるぐるめぐり飛ぶこと

に彌る。明年辛卯も、亦大旱なれども、旱は米に宜しとて、米價さまで高くもならざりし。

余十五六歳の頃、前後豊年打ちつゞき、いづくまでもゆたかなりし。寅年大旱の後、澇雨しきりなりしより、世態人情も一變しぬと見ゆ。前年丑七月、彗星西方に見ゆ。一頃は伏して、また初更に見ゆ。十月頃より、西海、南海大水を主るなどと、人いひあへりし。其翌年寅五日廿八日の後、閏六月、七月、八月までも雨ふらず。此年水すくなき土地は、稲の穂出でざるも多かりしが、ならして、豊年にて、山陽の米價五十目に過ぎず。其翌年も、また旱損なれども、米價はおなじく賤し。それより澇雨つゞきていやし。同月、淺間嶽やけぬけて、隣郷に火石灰など降り、晝夜を辨ぜざること五六日、刀根川へ泥水押し出して、人畜多く死す。此前年、薩摩の櫻島燒けぬけて、是も死亡多かりき。

一鳥柱　伊豆の海中に鳥柱といふものあり。晴天に白き鳥、数千羽盤舞して、高く颺る。空は眼力の及ばざるに到る。大なる白き柱を海中に立てたるがごとし。八丈島より南にありとぞ。

初昏―夕方

をくらふ。眉一文字につゞきて、鬚長く多し。東北にクナジリといふ一島あり。また、エトラフといふあり。其地の山、六月に扇の柄にて掘れば、砂底皆氷なりといふ。會津樋口平藏其邊まで行きし記あり。頗る詳かなり。カラフトは、ソウヤの西北二十里許はなれて、北へながく、はては海なり。西は山旦といふ。夷にちかく海をへだつ。西へゆきて、滿洲より役人の出張る處あり。常陸の人、間宮林藏其地まで行きて、清の役人に逢うて歸りし記あり。

一旱米穀を不レ傷事　明和庚寅の大旱に、宇治川を小兒かちわたりするほどに、水涸れしに、平等院の上より鹿飛迄、兩岸皆石にて、種々の形をなし、魚蟲鳥獸の形、皆そなはると那波魯堂先生の記にあり。京より遊觀するもの多く、川中に處々茶酒など出だしてにぎはひしとぞ。前年七月頃、彗星を覽る。占者は洪水の兆なりといひしが、かへりて大旱にて、五月二十七八日雨降り、六月閏六月七八月雨なく、天氣は日々陰り、夜は晴朗にて涼しく、六月のはじめに、白く丸き傘のごとくなる者初昏中天に見え、五六日の間漸々に北へゆきて消す。六月三日の夜、一星月中に入る。木星なりしや、火星なりしや。今よく記せず。七月に一夜赤氣北方に見え、暫時のうちにひろがりて天

又、寛政の初、長崎の南の海中に、一里許のうち、潮一方へながれて、瀬をなしゝ處あり。彼方へ通ふ船人、數年あやしみ語りしが、後に雲泉嶽の變あり。山裂け崩れ潮出でて邑里あまた蕩壞して、隔岸の肥後海濱まで漂盡す。此夜逃れ走りて、死をまぬかれし人熱湯の中を走るがごとくなりしといひし。崩壞せしは、前山とて、雲泉の前なる山なり。はじめ火の燃え出でし時は、近傍の人、こゝかしこに逃れ避けしが、數月なにごともなき故、漸々立ち歸り。後は酒肴などもてのぼりて、遊覽せし人もありしとなり。

一新島　櫻島の中に出で來し新島、いまは松杉も生じ、水も湧出すとぞ、島原の前にも新島出で來れり。日本書紀にも、伊豆の神島といへるもおなじく、地中の火脈の怒發せしと見えたり。

一蝦夷　蝦夷は、大抵三角なる地にて、東西二百六七十里、シレトコ崎といふ處に、大なる石あり。是北端なり。北面百里許あり。西北角にソウヤと云ふ處あり。それより松前まで、二百里にたらず。地多くは山にて、大河も湖もあり。東面エリモといふところまでは、粟稗をつくり食す。其人させる異なることなし。それより奥は、魚鳥のみ

渾天―天文學

一渾天之說　文化辛未八月、彗星斗の下にあり。初昏西北に見え、曉東北にあらはる。漸々に天旋におくれて、十月十九日の夜は、牽牛の中星と一つになりて、芒ばかり見えたり。渾天の說を、常人は、疑ふもありしに、此星にて皆信ぜり。

一地震せざる家　備後の山南村何某が家、地震に動かず。其家の下一面の大石なり。徂徠が峽中紀行に、石室の僧に地震の事を問ひけるに、「近年の大地震にも、動かざりし」と答へしことあり。されば火脈の力も、大石を動かすことあたはざるか。また、石も無盡底より根ざせしものありや。備後深津村の王子山も、地震なしといふはまことにや。

雲仙岳―溫泉岳なり

一普賢嶽燒出　寛政四年亥歲、肥前雲仙岳の傍、普賢嶽は火もえて、太谷は僅のうちに山となる。終に城に及ばんことをおそれ、人民其難をさけんとするうち、四月一日泥水湧き出でて過半漂沒す。三鄕はあともなくなり。其外、小き山いくつも出來たり。たまたま逃れ生きたる人も、其ときのことをおぼえず。あるひは湯の中をはしり遁れたるやうに覺えたるもあり。また、水中泥中、また火中を遁れたるやうに覺えたるもありとなり。其禍淺間に十倍す。地の沒したるは、肥後の方かへりて多かりしといふ。

陰翳―くもりて月の面をふさぐ

安井算哲―圍碁にて名高し

水霧山雲晩未レ收　風吹二過雨一入二林頭一　嫦娥今夜難レ堪レ冷
付二與陰蟲一訴二暗愁一

ときこえければ、雨ふりしなるべし。後に備前北方の友人より來書に、中秋初更(しよかう)まで陰(くも)り二更より曉(あかつき)まで快晴なりしに、岡山は、これに反すといふ。參州は百里、須磨は四十里、播州三十里にたらず。尻海は二十里、讃州は僅に十里許、岡山は十三里、岡山と北方の間九里なるに、かゝる陰晴のたがひあり。常年もかゝるべけれども、今年はじめて、心づきてしるすなり。其九月中旬、霞亭伊勢より歸りて、話しけるは、中秋京は陰翳(いんえい)ふかく、須磨の清光をかたりても、人信ぜぬばかりなりし。伊勢は風雨にて戸をひらき、窓をあくる人もなく、大和にて芳野は、殊に大風なりしと聞きしよし。其の後筑前の月形七介來り話しゝは、其地は、近年稀なる大清光なりしとなり。

一列宿　觜宿(するしゆく)は、參宿(さんしゆく)のうちにありて、畢參觜(ひつさんする)とかぞふべきに、參の第二星を首とし數ふれば、畢觜參となると、乾隆(けんりう)二十年の頃の人の說あり。しかるを安井算哲が、貞享暦議に、既に道破せり。貞享は、康熙二十三年にあたると、備中大江の人、谷東平が話しゝ。

僧の對州に在番せしが、いづれの年か、京と陰晴殊なりしを見て、いぶかしく云ひたり。今年文化丙子中秋、予が鄕の神邊は、快晴たりしに、讃州は、陰りたりとて、友人の僧義立歌をよみ示しゝに、

はるゝやと雲に向ひてこふ月の丑みついまは賴まれぬかな

同夜、播州もくもれりとて、友人菅岱立が書中に詩を見せけるに、

方開二蕉土一起二家樓一　工役紛囂屬二仲秋一　賴レ有二佳期存二閏月一
從佗此夕少二淸遊一

同夜、備前武元(たけもと)立平は尻海といふところに舟を泛(うか)べしに、天氣不快、尙閏月は如何と、刮目すると、書中に云ひ來り、且、其詩に、西嶺夕霞魚尾赤、東洋雲氣鰲頭黑といふ句あり。北條霞亭此夜須磨の月を賞する歌に、

こよひしもいつくはあれど須磨明石淡路島山かゝる月かげ

つひの身のおもひ出ならん須磨の浦秋のもなかの有明の月

かくよみて、書中にいひ來りしに見れば、須磨は淸光なりしとおもはる。參州岡崎昌光寺の萬空上人の書中に、無月のよしにて詩に、

らく〳〵となだれ行く。其疾きこと風のごとくにして見えずなりたり。はじめは、紫に見え漸々黒くなりて、後は濃きこと墨のごとく、途中にて見たる人は、身の毛たちしとかや。小兒は怖れて、家にはしり入りたり。其さま雲とも烟とも見えざりし」と、其地の人、牧周藏（名ハ昌、字ハ百穀）より書簡にていひ來りぬ。

好事―ものずき

一バタバタ　藝州廣島の邊に、バタバタといふ異物あり。夜中屋上或は庭際に聲ありて、ばた〳〵と聞ゆる故に名とす。たとへば疊を杖にて打つ音に似たり。好事の人々是を見あらはさんとて、そこに行きて見れば、七八間も彼方にきこえて、見窮むることあたはず。川下に六町目といふ町ありて、其邊最多く、他の町々城内にもあり。狐狸の所爲かといへども、それにもあらずといふ。

一肥前國に火の降る事　肥前に火の降ることあり。夫を防ぐには、革のつきたる雪踏を以て扇ぎ逐へば、火外の家にうつるとなり。故に或は官に訟へて、今度の火災は、何某が屋上にふりかゝりしを、雪踏にて追ひし故に、吾屋に火つきたれば、新家を造作の費は、何某より辨ぜしめたまへと願ふの類ありとぞ。

中秋―八月十五夜

一中秋の月　中秋の月は、四海陰晴を同じくすといふは、東坡の説なりとて、五山の

胎孕—はらみもち

一雷臍を取るといふ事　雷の臍をとるといひて、小兒などを警むるは、雷震のときは、俯伏するものは死せず。仰仆する者は、かならず死するによりてなり。失火の烟たちこめて息をつぎがたき時は土を舐れといふも、同じをしへなり。

一豆小豆の降りたる事　文化乙亥の夏、長崎筑の前後の邊に、豆をふらせしよし。丹波には、竹に實のること多かりしとぞ。備後にもこれありし。思ふに、寛政の前二年、備後深津郡に、麥、菽、蕎麥などふりしことあり。夫を拾ひたる人、余に見せしに、眞のものによく似たりしが、其翌年は、大に餓ゑしなり。日本書紀等にも此事あり、其後かならず凶年なり。唐土の史類にも記するもの多し。天地の氣、常に變りて、異氣異物を胎孕するならん。丁亥の今年は豐なるが、明年はいかゞあるべきか。丙子四月十五日、豐前中津に、大小豆ふりて城下にては、夜行の傘に、はら〳〵と音するほどなりしとなり。其二豆を傳へ來りて見しに、前年備後に降りしよりは、實して見えし。小豆は、色赤からざりし。

一黑氣　「文化丙子正月廿七日夜、讚州金毘羅山の末に大麻といふ處より、黑氣一帶幅一間あまり、長さ一里餘なる、東西へ靡き、久しくして、漸々に薄くなり、西方へさ

既望—十六日

筆のすさび

菅　茶　山　著

一月蝕　文化丙申七月、既望の月蝕は、鏡に匣の蓋を覆ふごとく、東よりかゝり皆既におよびて、紫色に見えたり。余が姪萬年（名は公壽、字は萬年、俗稱は長作）こゝろをつけて見しに、月中に一帶の黑氣起りて、また暗くなり、復する時、又、黑氣見えしが、これはそのまゝ剝ちたり。其黑氣は、月中のみにて、外には見えずといふ。乙亥十一月の月蝕皆既の時は、西南よりかゝりて、はじめは盤の中に、墨汁をこぼし入れたるごとく、たゞ黑くして、そことも見えわかず、傍なる星は爛々たり。丙午元日の日蝕皆既は、日色茶色に見えて、薄暮のごとく、雀など棲宿せり。寛保二年壬戌五月日蝕は、白晝烏黑にして、星宿爛々たり。さながら夜のごとくなりしと云ひ傳ふ。天學家も、日行至りて高く、月行至りて低き時は、暗きこと甚しかるべし。されど、星の見えしは、いかゞありしにかといひし。

翁有世文政丁亥三十年矣。頃書肆某得二翁隨筆四册一。携來乞二一言一。嗚乎。小子何足三以辯二言一翁書一。而强匃不レ止。豈以レ余猶及レ識レ翁也歟。此著在レ翁。則所レ言挂林一枝。昆山片玉耳。而亦可三以見二其用心異常一矣。因書レ此與レ之。或足三以補二隨筆之一則一也耶。

安政丙辰重陽雨窓　後進　後藤機

歸。則吾願足矣。翁時年方七十。患疝癖而不見。但命館於驛中。既入夜。某復來曰。先生有病。不可如何。願與塾中諸君以詩會一餉時。何如。乃相共圖韻談咲。頃之。翁手自提煙盤來坐。蔽火光。一問一答。不自覺膝之前席。某竟不知其爲翁也。一日翁謂余曰。吾子必以筆墨成名者。僕有三訣。授之否。余避席曰。敢請。乃曰。凡以文筆成業。勿以飲食費陰晷。唯調和酢與醬於小甕。投以甲州白梅。乾蘿葍等。至春月。或點以山椒芽焉。可以下酒。可以過飯。是一訣也。凡始遊之境。雖疲矣。勿乘輿。往々錯過奇景。是二訣也。凡以儒得名者。諸方必多寄詩文。乞改正。正之有法。不可不知也。是三訣也。曰改正之方如何。翁咲而不答。固請。竟不言。蓋欲使余思而得之也。此距今三十又九年。

筆のすさび序

余嘗謂漢人記事。隨聞隨錄。至若其虛實有無。則聽讀焉者各自評論之。邦人則不然。每聞人談話。輒先置虛無二字於胸中。其可疑者。不問實與虛。臆斷不錄。是奇談異聞。所以不傳。豈東西人氣根。有强弱邪。將時世人情所使然也邪。但我茶山菅翁則不然。文化戊寅。余從山陽先師西遊。至神邊驛。始得謁翁。遂寓其塾三旬許。翁日夕飲酒。輒必呼余侍焉。酒間。問以異聞奇事。及國產。余亦偶問以其所著冬日影。翁唉曰。人心率貴遠賤近。喜新厭陳。近來重西洋學而輕漢學。擩染之至。或以被髮侏離語爲至極。吾爲之懼而作也。今無用。付諸丙丁矣。一日奥人某來。投謁曰。向者西遊。今也東還。一挹芝眉而

衣類耳と。

是に由て之を思へば、苟に賢者、能者、凡て世に補有る者に非ずして、强ひて生を貪るは乃ち惑なり。敝衣も惜しむ事なかれ」と。翁惘然たり。

一余江漢曰く、人は限ある命を以て、限なく存生せん事を欲す。百歳の人、今日死する事を思はず。實に愚と云ふべし。人の老耄と衣類家具の古く損じ壞れたる物と同じ。用を爲さず。頃日朔三と云ふ人百七歳なり。諸侯貴客其の壽に移ん事を思ひて、呼びて謁す。値ひたりとも、其の齡の似る事か、笑ふべし。朔三無能、世に不用の者乎。

文化八年辛未冬十月日誌之。

春波樓筆記　終

輪廻——六道に生れかはること

人を費す——人を殺すこと

氏之を謂ひて輪廻となす。顧ふに、夫の君子の死するや、譬へば火の木を燒くが如し。盡きて灰尋冷えず。小人の死するや、譬へば火の金を燒くが如し。化し難く熱亦久し。然れども亦時あつて散ず。皆亦天地の公共の氣なり」

一余江漢曰く、懶齋儒學を以て死生を云ふ。いまだ理を究めずして死す。生を盡すに似たり。夫れ人は水なり。水に火の入る時は湯となる。故に活物たり。氣は則ち天火なり。是れ太陽の氣、水と雜はりて地氣となる。和蘭之を淡水と云ふ。人は其の淡水を呼吸とし、之が爲に生を爲す。魚は濃水を呑納するは、人の呼吸の如し。其の氣人の體中の火を保つに食を以てす。薪の如し。是れ人の活きて居る所以なり。死するや薪盡き火は消ゆ。火は天に歸す。其の機何ぞ君子小人の別あらんや。

一蜀の諺に曰く、「書を學ぶ者は紙を費す。醫を學ぶ者は人を費す」余友人に告げて曰く、「謹みて初學の醫の爲に費さるゝ事なかれ」（余江漢曰く、醫は仁術と云ふ。然らず。藥は毒を以て病を打つ。其の危き事不仁術なり。）富家の翁年八十、余に問うて曰く、「老いて生を貪る。是れ惑ふか」余が曰く、「然り。先輩言へるあり。

衣敝則欲ㇾ新ㇾ之、年頽則不ㇾ欲ㇾ舍ㇾ之。達ニ於用物一、惜ニ於用ㇾ我。不ㇾ知ニ天地視ㇾ我、亦敝

月下一甌水—一つのかめ水に月のうつれること

癘—疫病神

一余江漢曰く、人薄弱にしてつねに寒風にいたむものあり。愈身を掩うて養ふ者益感ず。氣を張りて病内に入らず、旅中必ず病者少し。氣の充つる故なり。

一又曰く、四十を過ぎて後妻を娶るべからず。人四十にしては漸く精氣衰ふ。女子と小人とは養ひがたし。

一或人曰く、「子死を知るや否や」余が曰く、「未し。然るに、先輩これを論ずること備なり。彼に由りてこれを思へば、則ち言ふ可き者なきにあらず。夫れ人の生や、猶月下一甌水のごとし。甌水は吾體なり、月影は吾が氣。有明にして、甌毀れ水竭きぬれば、是吾が死なり。月影散漫す。是吾が氣の歸るなり。此の如くなるのみ」曰く、「何ぞ氣のみを說かんや」曰く、「理は是れ氣、上に泊り在らず。初より凝結せずして別に一物たり」亦曰く、「夫れ人物は天地の造化の氣となり、氣伸びて息する時は生、屈みて消する時は死。只是一氣の衆散のみ。散じて其の初に返る。故に曰く、厚レ始反レ終。又曰く、鬼は歸なりと。但其の歸る所、蓋君子小人些しく別無きこと能はず。君子は許多の道理を盡し得て斃る。故に直に天と地と其化を同じうす。小人は私意人欲死に至るまで衰へず。割捨し斷えず。其の氣之が爲に滯結して散ぜず。甚しき時は癘たり。釋

炁—氣と同字

身面嫩白—身體弱く顏蒼白し

曾—孔子の弟子曾參

む」又曰く、「大渴、酒後に茶飲むは、水腎經に入り、人をして腰脚膀胱を冷痛せしむ。兼ねて水腫攣痺を患ふ。大抵茶を飲む宜し。熟して少かるべし。飲まざる尤も佳なり」と。

一茄子の性寒、本草に皆言ふ。人を損じ炁を動かし、瘡及び痼疾を發し、人をして腹痛下痢せしむ。

一余江漢曰く、此の二の物毒ある事、本草に述ぶる如し。然れども、吾日本これを喰ふをつねとす。其の毒に當る事なし。タコバを吸ふ者と同じ。又曰く、山中米なき地、病者あれば米を以て藥とす、効驗あり。都會の人常食とす。

一余が舊識竹野氏、身面嫩白屢、風寒に感ず。藥服する事殆ど虛日なし。後其の君の爲に用ひられ、日夜に近侍す。藥灸せずと雖も、亦久しく風寒に感ぜず。二年の後氣體稍盛なり。

一或人問ふ、「妻死して子有り。再び娶るべきか否か」曰く、「曾の大賢すら尚、再び娶らず。矧や庸人をや」某側に在りて曰く、「我常に人の子繼母に鞠はるゝを視るに、其の才多くは實母ある者に過ぐ。再娶ごとに、必ず子に益なきに非ず」と。此の言理あり。

何—孟子に出づ

桂川—名は甫周、蘭醫、文化五年歿す、年五十九

一予江漢曰く、横山安之丞と云ふ人、性、馬を好む。五十年の舊友なり。然れども、其の好む處余と別なり。信友にあらず。毎々我を訪ふ、會して談話なし。所謂、白頭新なるが如し。ある時馬に乘る者と對話す。傍若無人なり。亦或は一書生あり。能辯才子、桂川の家に會す。桂川は蘭學者なり。集る者同癖。彼の書生の一言の話を發せず。吾よりして愚と視る者愚にあらず、才子と視る者才子に非ず。吾が好と不好と。

一寛永中、武城に、井上氏執事を土井公に謂つて曰く、「公の事を官に決する、當らざる所なし。吾甚だ其の明に服す」公の曰く、「明なるに非ず、吾に術あり」曰く、「何ぞや」曰く、「會議ごとに吾人の上に在り。故に先づ下坐の各に所見を陳べしめ、其の衆言の中に必ず吾及ばざる所の者あり。因りて其の言を執り、少しく之を潤飾して以て己が見と爲る、過すくなき所以なり」と。井上滋これを歎ず。土井公書を學ばずと雖も、聖人の語に幾し

一余江漢曰く。今の脇坂侯も同才。

一茶は純良の物にあらず。本草を製する者の曰く、多服を忌まざるは靡し、其言に曰く、「性和に苦寒、久しく食すれば、人をして痩せしむ。人の脂を去り、人をして睡らざらし

赧然―恥づるさま

瑟雖ㇾ工如㆓王之不ㇾ好

の人十人にして十人吸はざる者なし。蝦夷國に至りては之を嚙む。タバコの起原は、大槻玄澤著、烟錄に委し。亞墨利加のタバコ島の產なり。夫タバコの大害は田畑を損ず。又火災の患此の微火より發る。屢禁ありと雖も敗る。戾る事なき術あり。今よりして小兒に之を吸はしむべからず。若し禁を背く者あらば、父子をして共に死罪にす。大約三十年四十年にして漸々止むべし。亦煙具を鬻ぐ者いたまず。懶齋先生は正德年間、爾來百有餘年嗜む者尠しとせず。今に於てをや。其の盛なる事、吸ふ者愈多し。亦烟具を美にする事益衆し。これ制のおもき、禁ずるもの之を嗜む。嗚呼。

一又曰く、吾國、人氣、遠き慮なし。窮理を好まず。己一人の安全を禱りて子孫を思はざるか。嚮頃下總に桃花を見し時、利根川の岸に犬あり、病みて己が手足を嚙み喰ふ。奇病と謂ふべし。故に歩む事能はず。禁のおそきも斯の如きか。

一詩歌會議の間、一人卒爾として曰く、「我定家の歌を愛せず」衆口を掩うて笑ふ。其人赧然たり。一儒者側に在りて從容として曰く、「和歌を知らずと雖も、其の趣何ぞ詩文と異ならん。歐陽子不ㇾ好㆓杜詩㆒。曾眉山不ㇾ好㆓史記㆒。杜詩其文非ㇾ拙。歐陽子蘇子其人非ㇾ愚。人情各有㆓好惡㆒。瑟雖ㇾ工如㆓王之不ㇾ好何かせん」と。

莨菪—毒草おにしろぐさ

豆醤—味噌汁

銖積寸累—わづかの物がつもりつもりて

の言に曰く、「烟草味辛し。氣溫毒あり。寒濕痺を治す。胸中の痞膈を消し、經絡の結滞を開く。然るに臟腑、經絡皆氣を胃に稟く。烟、胃中に入る頃刻にして身に周し。是を以て氣道頓に開け通じ、體と倶に快し。然れども、火元氣と共に立たず、人の元氣此の邪火終日薫灼すれば、眞氣日々に衰へ、陰血日々に涸れ、暗に天年を損ずれども、人覺らざるのみ」竊に謂ふ、洞詮に言ふところ、ほゞ其の能を說くと雖も、實は則ち人をして其の毒を知らしめんと欲するのみ。豈須臾の快を爲して、終身その患を遺さんや。且、夫れ人初めてこれを吸ふ、眩暈せざる事鮮し。煙管の中に油煤あるを、禽蟲誤りてこれを甜む、卽ち死す。峻烈此の如し。咸常に見る處なり。曷ぞ洞詮に言ふ所を竢ちて、而して後多毒を知らんや。人曰く、「豆醤の能、煙草の毒を解す。故に吸者病を成さず」と、然れども豆醤の力、安ぞ其の峻烈の氣に克つ事を得ん。銖積寸累遂に大患をなす事必せり。

一余江漢曰く、タバコは天正の頃、異人持ち來る。長崎の櫻の馬場に之を種ゑ、遂に天下に流行す。此を今思ふに、長崎の者十人あれば三四人之を吸ふ。京の者十人あれば七八人之を吸ふ。江戸の者十人あれば九人之を吸ふ。其の吸ふ事甚だ夥し。東奥

褻瀆—けがすこと

林羅浮—林道春

一伊勢皇太神宮は、本朝始祖の大廟なり。公侯大人と雖も、亦輕々しく參謁せざるべし、況や微賤をや。今士庶より以て、庸奴、爨婢に至るまで、滾々として廟庭に拜する事、殆ど虛日なし。褻瀆孰か甚しからざらん。道に志す人、豈敬して之に遠ざからざるべけんや。

一余江漢曰く、聖德太子、帝と謀りて佛像を尊信す。何の事ぞや。守屋の曰く、「吾國神明の道にして異域の外道の法を用ひんや」と云つて、佛像を難波の堀江に流す。太子帝に奏して守屋を亡す。何れか是なる。佛法今自ら蔓して何奈ともする事能はず。太子天下に益なき道を弘めたる祖なり。

一又曰く、伊勢太神宮は吾國の始祖にして、上天子の拜すべき神靈なる事明なり。然りと雖も、今に至りては、萬民の祖神とす。吾國道なく、日向の國檍が原に都して人道の祖なり。故に卑賤として拜すべからざらんや。

一近世、烟草を嗜む事愈衆くして、之を樹うる者も亦多し。最も良田美地に限らず。夫の烟草これを多波古と云ふ。林羅浮以て本草に載する所の莨菪と爲るなり。いまだ知らず、然りや否や。大淸人吳興沈穆が著すところの本草洞詮に、稱㆓之烟草㆒とす。其

震旦―支那

吾國土地小にして狹し。西洋の諸邦、交を隣國にす、人の尠き事を憂ふ。故にかつてなし。

一又曰く、欲を斷ちて僧となる者なし。欲の爲に出家す。又曰く、殉死するは戰國の世軍破れ城落ち、歸るに路なし。故に主人亡ぶれば從者殉死す。古の王者病を以て死する時、近臣殉死する事あり。是全く往古、人道に闇く、死して亦往くところ有るが如く、浮屠の敎ふるに迷ふ者か。誠に愚なる哉。亦曰く、病みて死する者殉死を云ふは、是れ妄語なり。僞りて命に隨ふ事をせんや。

一北路法印玄惠が曰く、「聖德太子一代の行に分毫の誤なし。震旦といへども、いまだ曾て是の如き聖人あらず」と。愚といふべし。前輩論あり。曰く、「太子不是の處多し。君を殺す賊、之を討つ事能はず。反りて賊と共に國事を謀る。一なり。守屋無罪これを殺す。二なり。臨終に及び、唯熊凝增廣が事を奏す。三なり」熊凝增廣が事は、乃大安寺修新の役是なり。顧ふに夫れ推古は女主にして、太子攝政す。其の將に薨ぜんとする時、豈言ふべきことなからんや。一言も國家に及ばずして、唯寺院修新の役を求む。是れ震旦にも未曾有の聖歟。

宇喜公―備前の宇喜多侯
沙門―僧侶

一中家利が曰く、「財欲の斷ち易きは浮屠に如くはなし。何となれば、妻なく、子なく、父母を養はず。糧盡きぬれば、則ち行きて人に乞ふ。人悅びてこれに與ふ。隱れて山林に在れば愈餽る」余が曰く、「此の如くして猶或は財を貪る者あり。儻其をして僧たらざらしめば、天下の賤丈夫なり」

一備陽の舊君宇喜公其疾篤し。左右を顧みて曰く、「我死せば誰か殉死せん」左右いまだ答へず。老臣花房氏其側に居て、これを聞き進みて曰く、「人鬼途を異にす。冥漠の中、安ぞ臣僕を隨ふ事を得ん。且君の左右の臣良士に非ざるはなし。もし君萬歲の後は、悉く是れ嗣君の股肱耳目たり。豈是を無用の地に棄てんや。臣聞く、沙門は能く死者を導きて善所に赴かしむと。もし必ず君に從ふ者あらん事を要せば、臣當に老高僧を國中に擇み、殺して以て葬に殉せしむべし。是幽途に利あるに庶幾し」と。

一余江漢曰く、火災を息むる方、子產の曰く、德を修むるにありと。夫れ德とは天爲して受けず、上大王、下の貧民を救ひ助くるにあり。及ぶべからず。

一又曰く、子の多き事を欲せざる國、筑前、筑後のみに非ず。豐前、豐後、日向、或は常陸、出羽、奥州に至りて、農夫早く娶る故に、子を產む事十に過ぐる、殺す者多し。

昆弟—兄弟
鄭—秦時代
子産—鄭の賢臣
紫陽—筑前筑後

を訃げ來る。重宗時に聽事に在りて、書を見ても敢て其の故を言はず。公事畢へて後退き、家臣を召し咸く前に集め、從容として謂つて曰く、「汝等宜く慶ぶ事あり。吾將に之を告げんとす」とて、人をして訃書を讀ましむ。臣皆涙を垂る。重宗の曰く、「何ぞ復せんや。我家ありしより以來、父子昆弟上に事ふる、身を君に致さゞる事莫し。但いまだ忠死する者あらず、遺憾なき事能はず。然るに今重昌此の如し。慶ばざるべけんや」と言訖りて涙下る雨の如しと。岡本玄淋偶この座に在りて後に余に語る。余江漢曰く、「誠に武門の義士なり」

一近來、諸國火災頻に臻る。如何せば則ち息まん。昔鄭國に火災あり。定公之を禳はんと欲す。子産の曰く、「徳を修むるにあり」と。夫子産は博物の君子なり。若方術あらば何ぞ知らざる。苟も知る事あらば何ぞ告げざる。火を息むる術、徳を修むるにあり。

一紫陽處々の子多き事を欲せず、五子あれば二兒を殺す。習うて以て常とす。人も怪しまず。吁人を以て虎狼に如かざるべけんや。後漢の賈彪、新息と云ふ所の長として、嚴しく此の事を制して人を殺すと罪を同じうす。是よりして數年の間、生育する者千を以てかぞふ。曰く、「賈父が生む所なり」

元亨釋書―僧師錬の著三十卷あり、僧侶の實傳、佛敎傳來の事蹟等を記す

諸司―所司代の誤

ず。故に他國の事を知る者鮮し。吾等蘭學を以て之を知る。

一元亨釋書に云ふ、空海の傳に曰く、弘仁帝の時諸宗と辯論す、宮中において五色の光明を御座に放つと云ふ。是實說なれば魔法なり。古の名僧皆魔法をなすか。上天子佛像を信じ、僧を重く用ふ。故に傳敎、慈覺、弘法の如き者あり。佛書悉く不思議奇妙を以て誌せり。浮屠の說を述ぶる時、多くは此の類なり。文法の飾乎、實說にはあるべからず。

一魔法は女狐を閨房に畜ひ、之と通じて生みたる子、皆狐なり。然りと雖も心は人なり。此の事或人の話に聞けり。故に人の言を能く辨ずる者なり。古の傳敎、慈覺、弘法の如き、此術をなしたるか。今の僧にはかつてなし。

一閑際筆記は、久留米侯の醫官にして、官を告げて京師に隱居す。正德年間の人なり。名は藏、字は季廉、號は伊蒿子と云ふ。後に藤井懶齋と號す。

○懶齋筆記の拔書及評論

一板倉周防守重宗、京に諸司たる時、其の弟内膳正重昌肥州島原の耶蘇の役に死せる事

一其の原を知りて末を考ふる者は、智人のふるまひなり。人間の起は天地より涌き出でたる蟲なり。往古は土を穿ちて穴居す。而して後己の爲に爭鬪を起し相戰ふ。今太平の世となり、其の起原を知り、古を感ずる者鮮し。故に多くは人道に背き、聖賢の教を失ふ。夫れ上天子は人道の始り、神の末なる故に、民是が爲に尊び敬ひ貢ぐと雖も、上位を爭ひ、下國を奪ふ。復亦爰において人道を失ひ、漸く武を以て治むるに至る。今既に太平なり。民太平を歡び、年貢を以て其の國の王侯に奉る。然るに吾日本米穀を以て食の第一とす。世界の諸邦此の米かつてなし。五十度外にしては、牛肉を以て上食とし、其の餘は麥粟稗を以てす。人の生命食にあり。吾國の米穀味甘くして淡く、膏油あつて身體を潤す。また酒に造りて美味。他邦米ありとも日本米の如くならず。酒に造りて夏月腐り、味を變ず。故に燒酎とす。味辛し。糯米亦他になし。支那月餅と云ふ者あり。八月十五夜に造る餅なり。予長崎に遊ぶ時、之を喰するに餅にあらず、今云ふ落鴈の如し。米の粉を熬りてつくねたる物なり。吾國の如く糯米なき事知るべし。又曰く、天竺赤道に近き諸島、サーゴボームと云ふ樹の皮を製して黍の如し、これをサゴ米と云ふ。其の餘麥を以て食とす。吾國の禁にして他邦に船を出さ

お矢―親と同音

土の石となる者の如し。魚或は木の葉石となる者は、土中に籠りて其の土の石となりて、其の物の石となるにあらず。

一山領雅伯の話しけるに、ある人佐賀領の中の島人を家の奴僕とす。僕主人に向ひて答ふるに御の字を云はず。主人の曰く、「吾日本の俗語に尊敬するに、御の字を以て冠らしむ。汝之を知らず」僕諾して命に從ふ。正月元旦、嫡子始めて射御す。其の僕矢を採る。的に當らずして矢の有る所を視ず。僕の曰く、「お矢を失へり」と。主人聞いて歡ばず。

一滿つればかくると云ふ事は、今日常にある誡の教なり。月盈れば虧る。盆に水を盛る充分なれば溢る、國治まれば亂る、草木葉みてれば枯る、人老ゆれば死す。始ある者は終ある目前の事にして、酒を多く吞めば醉ひ伏す。其の中庸を知る時は君子なり。

一人婚姻を爲すに男子は三十、女子は二十、大約、唐、和蘭と共に定則とす。近年吾日本、男子二十に至らずして婚姻を爲す。男女ともに二十に足らざる者の子、必ず愚なり。壯年の者の子必ず才子なり。精氣は神經とてたましひなり。草木の實、能く熟すると熟せざるとの如し。

外にかぎるべし。此の水の傾き滿ちぬる時、國土亡び、水干て國土あらはるゝ時を開闢と云ふ。爰において草木、人間、禽獸始めて生ずべし。吾日本にて海を隔つる事、十里二十里の山頂に、貝石あり。貝は海の淺き所にあり、山下石炭を生ず。樹の土中にありて石と化し、硫黄の氣あつて石の如し。多くは筑前に生ず。これ開闢以前の物か。

一伊豆熱海より登る事五十町、日金山あり。絶頂を圓山と云ふ。文化八年未九月、亦此の頂に登りて四方を眺むるに、十國五島、山々連りて海に入る。予考へ見るに、實に水の減りたる狀、山々の皺にあり。富士のみ出現したる山なり。往古より數千年にして燒け出づる者、又砂凝り結ぼれて石となる。土は化して岩となり、岩亦年を積みて堅石となるなり。水化して石英、水晶となる。是皆開闢以前の者なり。

一紫檀、黑檀、みな埋木なり。豫州の海中、或は土中より扶桑木を出す。相州箱根山より神代杉を出す。奥州二本松の邊より埋木を出す、其の色黃なり。出羽庄內領飽海郡、文化甲子夏六月、大に地震して、最上川の水底より古木を出す。豫州扶桑木より上品にして紫檀の如し。

一蟹あるひは海老石と化する者、貝の石となると同じ。貝の內に土砂流れ入りて、其の

るに四金の中鐵の世の末に至りて、聖人ノアクス、アルゲなる者あり。是ラメキスと云ふ人の子にして、アダムの苗裔なり。天地滅亡する事を前に知り、大なる箱匣の如き物を造る。其の製船の如し。洪水にして山の頂に至る。爰において家族と共に彼の船に乘り、風に從ひ波に隨ひ、漂流して亞爾默尼亞國のタウルスと云ふ高山に至り止る。洪水一百五十餘日にして竟に收まる。人類悉く皆滅亡して、此の一族のみ助り存命す。是を第二の開闢といふ。蘭語にては、テウェーウェーレルドと云ふなり。ノアクスに三人の子あり、兄をシャム、二男をヤヘット、三男をセムと云ふ。此の三人歐羅巴諸州を開く。ヤヘットは、亞爾馬尼亞國王の累孫と今に云ひ傳ふとぞ。吾日本、唐、天竺と共に、己の國より世界は開けしやうに、古を推して傳記したる者なり。然るに能能是を考ふるに、歐羅巴を以て開闢の始とす。夫よりして天竺、唐、日本なり。和蘭近世の説に、地は圓球にあらず。僅に楕圓なりと。是水の傾を云ふ。今水の傾きて、高き所は日本の東洋海、亞墨利加の西なり。此の間無人の小島、僅に數ふる程あり。數萬の年を經るに至りては、其の小島、國となり、吾日本も亞墨利加の地と接續するならん。南北の極下に至りては、水の傾あるべからず。只赤道より南北の方へ五十度

以て用をなすべし。又曰く、世人燒刃の紋を見て劍刀の相を見る者あり、愚と云ふべし。燒刃自ら顯るゝ者に非ず。亂直燒このみに從ふ。古人は自己標的とする處、其の紋の中にあり。いま刀を作る者、刀の文裝とす。

文化八年辛未七月　東奥二本松　古山東藏誌

○西洋天地開闢

一蘭書、コロートヒストリイと云ふは、天地開闢の事を志したる書なり。天地開けざる前人なし。故に知るべき理なし。啻推量して誌したる者なり。其始め天に一の日輪を生じて、日氣の爲に水氣を生じ、水氣結ぼれて地球となる。日氣照凝して土地あらはれ、鳥魚を始とし、人類及び禽獸草木を生ずと雖も、無始にして記する事能はず。彼の國の書には、アダム、エバと云ふ男女始めて生ず。是吾國に云ふ天神、地神の時を云ふなり。アダムは壽九百三十歲、アダム子を生じて兄をカインと云ひ、弟をアベムと云ふ。兄弟爭の始とす。金の代と云ふあり、金の代終りて銀の代となり、銀の代終りて銅の代となり、銅の代終りて鐵の代ありけるに、天罪の爲に世皆滅すと云ふ。然

八月とす。是燒刃する法なり。今刀を作る者、此理を知る者鮮し。一年にして、春分秋分は寒暖の中央とす。井水は夏月涼にして、冬月温なり。水元温涼なし、人の肌躬ら天氣の爲に温涼を知る。爰を以て古人の曰ふ、湯加減是なり。今まさに西洋より齎す所のタルモメーテルと云ふ器あり。天地寒暖の氣候を計る具なり。春秋の時を待たずして直に知る妙器なり。此の物古はなし、故に古人知らざる處なり。然れども古法に傚ひて銘の傍、年月を志すに二月八月とす。然れども冬至より夏至にいたる間に燒刃する者は二月とす。夏至より冬至にいたる間に燒刃する者は八月とすべし。且又銹を生ずるは刃の方よりす。復此の理を知る者鮮し。鉛、錫の如き金は性精にして濃なり。故に氣其の中に入る事能はず。鐵は其の性麁し。剛にして氣、中に徹達して、鐵の中空徹するなり。氣は則ち地氣にして水氣なり。故に燒刃するに及びて、鋼鐵の中又々巣の如くなるなり。爰において地氣益徹通す。夏月尤も地氣厚し。故に銹を生ず。又曰く、古刀は輕く、新刀は重し。古刀は銹を生ずる事數年、亦之を研ぐ事數度。年を經る故に銹を生ずる事多し。鋼鐵の中悉く空達し、鐵氣虛となる者なり。古刀は名のみにして、斬伐の用をなすべからず。新刀

○作刀之序

一吾國之以刀劔、所謂萬邦稱利刀者。此地三十六度、而寒暖應時、天氣徹通、而爲中央。且夫近赤道地者常暑、亦近北極地者常寒。所産之萬物、順隨於此度數焉。嘗有云巴旦杏者。近赤道者味苦、去赤道者味甘。所以天氣射地、而徹通地中。爲苦甘之二種者也。蓋作刀之術有燒刃。其燒刃時沒湯焉。其湯非溫且非涼。所謂湯加減是也。古者有正宗者、實爲名家也。夫刀者不折不曲焉。知此術故乎。予雖不知造刀、然以天學知此理矣。古山氏從吾聽此理。當時作刀者、有窮理極術者哉。

文化八年辛未七月　　司馬江漢識

刀を作る記

夫れ刀は、吾國に産する鋼鐵（かうてつ）を以て世界第一と稱す。刀を作るの術は、利（よ）く截（き）れ、且折れず曲らざるを以て名刀とす。古人正宗（こじんまさむね）のたぐひ、銘（めい）に年月を志す者、必ず二月

阿侯―阿波侯

やん事なき人―高貴の人

牛はうしづれ、馬はうまづれと云ふ譬あり、關侯の隱居東鶴翁君は、隱宅に庭を造り池をほり、海邊なれば池に潮さし干す。魚を色々はなちけるに、大なるは大、小なるは小と、皆群り遊ぶ者なり。人も其の年頃にあらざれば、話も合はぬ者なり。故に諸侯は諸侯、旗本は旗本、藩士は藩士、農人は農人、町人は町人、心底をあかし、交を厚うする者、是を信友と云ふなり。然るに、予貴賤上下と交りしに、かつてわが同輩にあらざれば、心底を明けて話せず。諸侯貴客には僞り諂ひて、向うの惡しきを善しと譽め、わが善きを言はず。向うを才子とし、吾を愚とし還りて貴人を益愚にし、嘲弄するに似たり。信實の話を爲る時は、忽ち忌みきらはれ遠けらるゝ者なり。かつて阿侯のみ幼君の時より、予と會して物談す。わが本心を以て惡しきは惡しきと云ひ、善きは善きと云ひければ、一々是を聞き容れ感ぜられしに、今に至りては四十近くならせられ、大才智の稀なる侯とはなりぬ。頃日久しぶりにて謁ありしに、問もなければあるべからんの話のみして歸りぬ。兼好法師の曰く、「交りてあしき友、氣づよき人、酒好む人、高くやん事なき人」とあり。

須彌山と云ふ世界を造り、是を第一の教の基として、此の中に森羅萬象を生ずと雖も、生類を衆生と云つて水の爲にかたちづくり、火の爲に活物となり、心ある故に苦樂あり。心と云ふ者は何より來りし者と云ふ事を知り、天地人の大機を以て教を立てし者なり。また孔子はたゞ人間の上の事を以て、仁義禮智信の五行の道を立て、今日人間の交をなすに、此の道を以て定規として世を渡る時は、爭鬪起る事なし。誠を以て私する事なしと教へたり。

一老子は、佛法の道に似て、天下を治むる道に非ず。己一人を安居する法なり。天下の人おの〳〵皆志違ひて、天氣を稟けて生るれば、善人は教へずとも善人なり、惡人はどう教へても惡人なり。故に教を立てて天下を治むるは間違なり。自然天然にして治まる事なり。是を無爲と云ひて、定規ある故に曲れる物を見、寸尺ある故に長短を知る如く、光をかくして塵と交り、出る杭うたるとて、兎角名利を離れよと云ふ教なり。莊子も同じ樣なる事なれど、また別なり。人間を菌にたとへたり。ほうふりと云ふ虫にたとへ、また世の賢者をかつぱに見たて、色々と浮世の人を、皆愚物なりと笑ひたり。

ふ者の爲に佛となりかぬる事なり。故に人間とは何者を云ふ。また人間は如何なる者と知り、此の根元を知りぬくと、無と云ふ者になるなり。無と云ふ事を知れば則ち佛なり。爰において釋迦と一致して通達すれば、己と云ふ事明なり。是を出家とは云ふなり。家を捨てて出づるにおよばず。

一今の儒者は儒者にあらず。躬の持ちやうも知らず、大酒を呑み放蕩不埒者なりと誹る事なり。是は甚だ間違なり。儒者と云ふ者は漢の字を能く知り、讀みがたきを能く解し、和歌をも漢文とし、又は聖經をも能く解し、聖人の心を譬を以て教示し講釋すれば、俗人は聖人の行を爲るやうに思ふは甚だ間違なり。聖人の道を行ふは、儒者のあづかる所にあらず。是は人による事なり。いかほど利口にても邪惡の人あり、又愚にても聖人のふるまひの人あり。文學を能く知り、學者と他より譽めらるゝ人にても、一向に理の分らぬ人あり。數萬卷の書を讀み、博識なりと云はるゝ人にても、聖人の意を知らざる者あるなり。故に聖經を以て其の道を儒者に能く聽き、己に能く得て躬に行ふ者を眞の儒者と云ふなり。然れば世にある渡世儒者の事には非ずと知るべし。

一三教とて、釋迦、孔子、老子を以て名づく。釋迦のをしへは、はじめ天文より出でて

解し、心經には摩訶般若到彼岸は、梵語に般若とは智慧を云ふ。愚ではいかん事なり。凡夫では佛意は得られぬ事なり。極理分明なる人にあらざれば、出家にはなれぬなり。日本はおろか、此の世界の中に釋迦と同意の人は、今活きて居る中にかぞふる程の外はなし。今日本の中に天窓の丸い出家幾萬人もあるべし。其の人々大智の人の有るべきにや。故に皆經文は譬喩なり。夫も釋迦時代の天竺の譬にて皆俗語なれば、今時の人が日本にて彼の經文を見て解すべきやうなし。日本にて往古の辭でさへ、今にては知れざるに、何として解すべきや。天竺は元より其の外世界中、漢字はなし。皆言葉を假名にかきたる者なり。今和蘭の學問をする如く。容易には解しがたし。シンネベールとて、彼の國の譬を以て教としたる書あり。是は一向に解しがたき者なり。此の經文も譬にて、天竺ことばを漢譯したる者、間違のみ多かるべし。到彼岸はきしに到ると云ふ事にて、爰より向にいたると云ふ事なり。是も實の解しかたにはあらざれども、まづ成佛と解するなり。到彼岸と云ふも梵語なれば字義はなし。千人譯をすれば千人ながら違ひぬ。是文句に迷ふと云ふ者なり。只釋迦の極意は、世界の衆生は天の一氣より生じ、草木國土皆悉成佛とて、總て皆佛なれども、生類の中、人間は智と云

ば漢文に書きたく、予倖に文を學ばず、故に國字を以てす。是れ兩道に通じ安く、漢文意を述べがたく、視る者肯て解しがたし。吾國往古は推古帝聖徳太子の時代假名字の國にて、古事記舊事記其の後漢學を尊みけるが、國亂れ武家の天下となりて漢字を失ひ、今に至りては太平にして、諸民に至る迄文學を好めども、いにしへ菅丞相、小野篁の時代の如くならず。天下武威を以て治まる。また吾國、支那に從はずして、獨立堅固の國なる故歟。

菅丞相―菅原道眞

一今の出家は、大僧正をはじめ、皆釋迦の傳へし出家にてはなし。世の道具にして、古の出家とも違ふ事にて、士農工商僧と、世の中の渡世なれば、且て出家の出家たらざる事を咎むべからず。只釋迦の法に倣ひて、女色を斷ち魚を喰はず。また頭を丸く、衣類の上にころもとて佛衣を著るのみ。今日の理に闇き人は、出家は出家の樣になしとて、責めとがむるもの多し。然らざるなり。誠の釋迦の教の出家にならんとおもはば、たゞ心の持ちやうの事なり。寺に入るにも及ばず、剃髮するにも及ばず、佛と云ふ者は何者を指して云ひしと考へ、經文の意味を能く解し、毛の穴より三千の菩薩が現れ、大地が裂けて、百萬の寶塔出現する事は、竹田のからくりの如し。これを能く

び患ひて、此の世に居る中は懼しき夢を見ぬ様にして安居すべし。大なる歡樂をする時は、必ずまた、大なる困み心配あるなれば、其の度を能く考ふべき事なり。名利とて、此の二に迷ふ事なれば、爰を知り給へ。巨萬の富貴も、名の高く聞えたる人も、一世の中の事なり。釋迦も孔子も名のみ殘りて其の人なし。わが子、われ一人の者に非ず、夫婦の間より生ず。子また孫を生ず、孫また彥を生ず。漸々血脈の、遠く淺く淡くなりて、末に至りては悉く他人となる。然れば他人皆われなり。

一精進と云ふ事、生臭きを忌みさくる事に非ず。殺生戒とて生きたる者を殺す事なり。獸魚の類、目鼻、みな人に似たり。魚、聲なしと雖も、獸聲あり。これ人に近し。哺の物は喰ふべし。草木元より生類と同物、然れども人に似ず。出家女犯を戒む。子を生まざるは戒しむるに及ばず、色慾に迷ふがゆゑなり。子は己の體なり、人間の迷の基。愛欲は去りがたし。故に子無き者悟道に入り安し。女子經水の後、めぐり終りて十日過ぐれば孕まず。

一予老いぬれば、浮世の人の歡樂とする處、更におもしろからず。思ひ出すことあれば筆にまかせて書きぬ。後世我と同志の人あらば感じ給へ。每々云ふ如く、文學を好め

す。大日本國大王の膝下に拜禮をなす」とあり。然るに、魯西亞の使者を、半年長崎に留め上陸をも免さず。其の上彼等が意に戻り、且其の返答甚だ失敬不遜。魯西亞は北方の邊地不毛の土にして、下國なりと雖も、大國にして屬國も亦多し。一概に夷狄のふるまひ非禮ならずや。レサノットは彼の國の王の使者なり。王は吾國の王と異ならんや。夫れ禮は人道敎示の肇とす。之を譬へば位官正しきに、裸になりて立つが如し。必ずや吾國の人を、彼等禽獸の如く思ふなるべし。嗚呼慨しい哉。

一天明年間、オランダ國風說書、年々寫し置きしに、其の頃の書上に、リユス國にて、日本漂流人を抻へ置き、日本辭を學ぶよし、本國より申し來る。リユス國とは魯西亞の事なり。文化辛未の年の夏六月、蘭舶入津せず。館內のカピタン、其の餘皆衣服敗れ食盡き困窮す。蘭舶の來らざる、萬國の風說知らず。

一夫れ人間の小慮を以て瞻れば、一生は永い夢。天の大理を以て視る時は、實に短い夢。夢を夢と思はぬうちこそ、人間の境界なれ。我は夢も覺めかゝりて何事にも迷はざればおもしろからず。さつぱり覺めては夢もむすばず。此世は夢の迷の中なれば、吾も夢中の人、向ふ人も夢の人、只迷ひ惑ふ事のみをして、是を樂しみ或は苦しみ、亦歡

入津―港に入る

白川侯—老中松平定信

屬國—シベリヤ

ワシレイローチンへ

給ふ

寛政五丑年六月二十七日

右は松前表において。

一白川侯、博學敏才にはあれど、地理の事においてはいまだ究めざる事あるに近し。長崎の地へは千里の遠路にして、亦蝦夷地において交易の場を開く時は、彼の地自ら開くべし。また切支丹を甚だ懼れ恐るゝは何事ぞや。信長彼の宗法を信じ、彼の國の僧を多く渡海をゆるしければ、僧徒日本の美國なる事を知り、竊に覦ふにや、衆俗を從へなつけし故、其の後神祖大君此の宗法を惡み給ひし事は、其の殘黨相群り徒黨をなし、且は大亂の基なる事をしろしめし、大禁の命令あり。今此の宗法を以て魯西亞人弘むと雖も、誰か一人之に與せん。

一其の後十餘年を經て、文化二丑三月、肥前長崎の津に魯西亞の船を入る。使節の者、國老レサノツト、女帝アレキサンデルの印、其の書翰に曰く、「吾國は貴國と隔たる遠しと雖も、屬國貴地に近し。故に隣國のよしみをなし、年々聘使を以て交易をなさんと

権鍾—幕府の要路に立ちて政治をあつかふ

を視る。ほゞ五星暦の算術をなす。亦西洋算法をからずして萬年暦あり。然るに吾國の暦と差ひ、閏日を以て閏月を置かず。此法に倣ひて、日本萬年暦を製す。

一近年米穀安く武家に益なし。今に方りて魯西亞と交易を爲さざるを思ふは何ぞ愚ならずや。寛政五癸丑年七月、魯西亞船蝦夷地子モロと云ふ所に、幸太夫を乘せ來りし時、日本米と彼國の産物と交易を結びたく、幸太夫を以て願書を出だす。其の頃越中守白川侯權鍾を取る、則ち信牌を下さる。曰く、

一、おろしや國の船、一艘長崎に至る爲の印の事。

一、汝等、抑、切支丹の教は我國の大禁なり。其の像及び器物書册等に至るまで持參する事なかれ。必ず害せらるゝ事あらん。此の旨能く悟導して彼の地に至らば、尚研究して上陸をも免すべきなり。未が爲に此の一張をあたふる事しかり。

石川將監花押

村上大學花押

此の度政府の指揮を奉じて

アタシラクマン

何となれば、各小祿の者にして恐怖し、心中意を刻み思を苦め竭すと雖も、口より出でず。且彼等は暦算家にして、天地の窮理を知らず、問に應ずる事能はず、首を縮め舌を嚙みて退く。故に侯悦ばず。然るに小子侯を肯て懼れず。吾業つねに大侯の前に出づ。侯を視る事同僚に遭ふが如く思ふ。これに繇りて天を談ずる事、秦宓が如し。侯甚だ感ぜられ、吾をして臣たらしめんとす。時に年天命を知る。且いまだ人の臣たらず、「竊に慮ふに、曷ぞ己を養ふに己の力を以て、人の爲に勞せんや」と云ひて、竟に命に從はず。今日七十有五、心を放肆にし、諸侯召せども往かず、己の業を務めず、冬月日當に臥し、夏月は樹下に坐し、性好んで山水を愛す。數東西に旅行す。名山風景を瞻ては、家に歸りて畫に摸し、またわが天文地轉の說を好む者と窮理を談じ、樂これに過ぎず。

一文化辛未の年岩附に遊ぶ。小林源吾と云ふ者、吾門人となる。半年を經ずして天象を知る事、小星に至るまで覺えたり。實に奇人と稱すべし。奥喜三郎と云ふ者、わが門に遊ぶ。新製地轉儀を作る。其の形平圓にして徑三尺廻に、恆天の二十八宿あり。中に吾地五星ありて、日輪を中心とし地轉して、所を移せば五星おの〳〵順行と逆行と

秦宓―三國時代の蜀の人、吳に使して大に天を論ぜし事あり

天命を知る―五十にして天命を知る（論語）

岩附―武州岩槻か

喎㗂―あざわらふ

平子喎㗂して去りぬ。

一人死する時は病に因れる者、其の病苦、罪ありて刑罰に行はるゝ者と同じ。上天子、下庶民に至るまで、生ある者此の如し。又老耄して死する者、夢に苦を知る如し。

一紀州侯初めて予を召す。近臣の者予に對して曰く、「中納言殿に謁し言ふにあらず。我等に物談するを、席を隔てて之を聞しめさるゝなり」と。予謹みて諾して出づ。嚮に作る處の天球の圖、地球の圖を持ちて頓首して拜す。侯の曰く、「江漢には始めて逢ふ。然りと雖も、名は兼ねて知れり」と。予天球地球を以て近臣に對話す。時に侯の曰く、「其の兩圖は先達て所持す。わが前に寄せ近づけよ。熟視して其の味を開かん」爰に於て前に薦む。徐に云つて曰く、「吾國地轉の説を知る者なし。故に地轉儀を製して、五星の順逆、また天の冷際震雷は云ふに及ばず、霧環は水火の二氣五彩をなし、鹹と硫氣とにて五味となる。濃水淡水、風は水にして水は風なる事を釋きけり。而して後畫を作るに、和歌の浦の寫眞、及其餘の山水數品、此技をなして退く。時に侯近臣に向つて曰く、「今日は好き學問したり」と仰せられける。後に聞けば侯は天學を好むこと年あり。司天臺の吉田氏及び山路才助等を召して、天理を問はしむるに答ふる者なし。如

人おもへらく、嚮の頃吾國の佛法、此の日本に來る事あり。其ならん事を思ひて春畫を拜するかと。また法眼婦人をして三弦を引かしむ。イギリス人己の國に無き器なりと云ひて、悉く其の形狀を誌せり。其の中に神祖家康大君の御墨付の寫あり。皆彼の國の文字に譯す。イギリス人江戸へ來るとき大名の家居長屋造を見て、窓牖に玻璃を用ひざるを怪しむ。其の頃の家居、彼の國の家居におとらざるを知るべし。彼の國寒國にして、石を以て壁となし、牖はビイドロを以つて紙の如くし。右は蘭書を譯する者、大抵斯の如し。其の頃天下漸く治まり、戰國の風いまだ解けず、武家に財貨夥し。今に至りては太平の續き、人氣遊樂を好み、渾べて懦弱となりぬ。嗟。

一江戸赤坂御門松平出羽侯の藩士に、號を天寓孔平子と云ふ者あり。俗稱を知る者尠し。常に弊れたる衣服を著、草履は路々拾ひたるを、二三重ねて之をはき、刀を太刀の如く提げ、脇ざしを脫ぐときは人間の如し。其の容乞食の刀を帶びたるのみ。家に千金を積み貯へ、頗る漢字を知る。故に風流雅人を訪らひ、只己の名の他に知られん事を好みて、神社、佛閣、堂塔の小社に至るまで、己の名を誌すに、紙を以て黑く石摺の如くして、「天愚孔平子」予彼に對して曰く、「名利に溺れ、雅俗の者を誑す者か」孔

屋の名を恥ぢて近來牛屋の千場衰微す。太郎兵衛其の家を買ひ取り、千場の名を止め別號とす。熊本侯の金用達にして、帶刀の免許あり。

一予が近隣に八十餘の老人あり。大道寺某の作の落穗集を所持す。世にある落穗集に非ず。實錄なり。御入國以來の事を誌す。明暦以前は江戸の町も少く、また諸大名の家居は至りて大造にして、表門には家根の上にシャチホコあり。長屋も高く造りたる事にや。明暦の火災に皆燒失して、漸々今の如くになりぬ。其の頃の風俗、女の帶は絹巾半巾、たびは紫の皮なり。大名の火事羽織はくすべ皮なり。從者は木綿のハッピ。夫よりしば〳〵災火ありて、大名は羅紗となり、從者は皮羽織となる。故に價貴くして、たび皆木綿となるなり。又曰く、壹岐守松浦侯、予に向つて曰く、「朽木隱岐守に蘭書あり。ウエイレルドベシケレイヒングと云ふ。此の書を求めん事を欲す。余爾を以てす」余江漢諾して命に應じ、則ち朽木侯に謁して、此の事を話す。竟に其の書を松浦侯に贈る。其の中イギリス船平戸島に入津したる事を誌す。其の頃松浦法眼と云ふ人、隱居して政事を取る。或時婦女をしたがへ、イギリスの船に乘る。船の內數品の額あり。其の中に春畫ありけるを、婦人之を熟視せずして拜す。イギリス

落穗集―寫本三十卷、大道寺友山の著

虚薄—かよわきこと

一吾日本開闢近し。故に人慮の薄き事此の一事を以て知るべし。醫家欽鑑及び西洋の書中に載する處、種痘の法あり。此の法を用ふる時は死する事なく、面部に痕なく、難症なし。流行に傳染する時は、毒多き者は死す。然りと雖も、生得重壽ある者あり。必ず二度す。種痘を以て其の毒を減ず。減ぜざれば流行に感じて必ず死症あり。又虚薄の生あり。痘を種うべからず。余が親族小兒あり。此の法を傳ふるに更にうけがはず。如何と云ふに病を求むるに近し。一時其の難をのがれん事を、愚と云ふべし。竟に種う即ち輕し。

一江戸車町は芝高輪の手前、牛屋あり。是はいにしへ御入國の時、東照神君、大津牛を呼び寄せらる。百三十六疋と云ふ。御城の石垣の石を牽かせたり。二代將軍秀忠君の時に至りて、牛方共大津へ歸らん事を願ふ故、五十六疋を留めて、殘をおん返しある。飯田町邊に牛原と云ふ所あり。車置場は江戸橋の四日市にあり。牛車追々渡世薄くなり、牛三十六疋になる。其の後牛原の牛、今の車町に來る。海ぎはの地車置場になる。漸々減じて今五軒となりぬ。大八車のみ用をなす故なり。千場太郎兵衞と云ふ巨家あり。牛屋に千場氏あり。太郎兵衞もと此の家の牛牽なり。故に主人の苗字を己の姓とす。牛

人の非を言ふべからず。非を容るゝ者は君子なり。

或男の、酒菜にせんと小鳥をさしけるに、其の鳥の曰く、「我のごとき小雀を酒菜にし給ふとも奚んぞ味ふ處あらん。助けたまへ。其の酬に善き事三をしへまゐらせん。過ぎたるを悔むべからず。及ばざる事をすべからず。己の度量を知るべし」と云ふ。「いかにも汝が云ふ處の教、尤なり」とて放ちぬ。其の鳥喬木の上に飛びのぼりて曰く、「そなたは愚なる者かな。吾腹内に寶の玉あり。此の玉を持つ時は富貴心のまゝなり。あやふい哉あやふい哉」と笑ひけり。「汝小雀吾をあざむく。惡きやつめ」とて竿にモチを付け、あなたこなたと追ひけるに、彼の雀の曰く、「即いまの教をわすれたりや」と、書籍などすら〳〵と讀み、其の章句の教を直にすら〳〵と忘るゝが如し。

此の書は二百年以前の書にて、皆かな書なり。汝と云ふ事を御邊とあり。其の後お手前と呼ぶ。また貴樣と云ふ。今は武家に至るまでお前と呼ぶ。御前と稱するが如し。譬の諺に云く、お前敬薄し。同輩に向つてお前と云ふ事、諂者なる事を云ふ。亦云く。此の書は西洋書にて、シンネベールと云つて譬喩なり。いま和蘭の書を學ぶ者、解しがたき辭にして、二百年以前西洋の學をする者ある事を知るべし。

時頃まで見えて西に落ちて、二十餘日を經て天に昇る。彗星、孛星天上にある事、其の數を知らず。亦行く環も悉く異なりて、黃道より斜絡して其の環亦楕圓なり。西洋人といへども、いまだ推步窮理せざる者乎。また曰く、土星の上、二星の惑星を見出すと、蘭書中に著す。尤望遠鏡に非ればば見えず。吾日本人始めて蘭學を務むる者あつて、此の說を知ると雖も、いまだ其の星を視ず。肉眼に因りて視る者を以て五星と名け、土星の上、數十の惑星ある事を知るべがらず。

伊曾保物語―イソップの寓言

一伊曾保物語と云ふ書は西洋の譯書なり。其の原本紀州侯にあり。予直に見たり。皆譬を以て教を設く。爰に一二章を揭ぐ。

猛獸狼、喉に骨をたて喰する事能はず。既に餓に及ばんとす。時に鶴來れり。狼鶴に向つて曰く、「汝に吾たのむ事あり。長き嘴を以て咽の骨を拔くべしや否や」鶴恐れて曰く、「命に從ふべし、」竟に骨をぬく。狼の曰く、「予此の骨の爲に數日饑ゑたり。故に先汝を喰はん」と、恩を讎で報ずと云ふ事なり。

猿多く群り、躍り舞ふ事人の如し。然りと雖も人之を視るときは人の如くならず。故に其の惡しきを教へ學ばしめんとするに、還りて猿大に立腹し、群猿共其の人に仇す

光芒—ひかりのほさき

の一切法經に通ずる者を云ふ。天竺は梵語なり。支那人之を飜譯して漢字とす。皆譬喩方便にして、一言之を解すべからず。凡僧かつて佛と云ふ事を知る者なし。啻惑僧のみ多し。古の名僧人を惑はし誣ふる屬、其の遺風今にあり。吾國の神道は只正直にして、人道の始祖を以て神靈として之を祭る。孔子の道は人間の交に爭ふ事なく天を恐れ鬼神を祭る事をす。是悉く人間のふるまひなり。予昨日まで醉うて今日醒めたり。鏡裏霜を見る。嗚呼人間の終なり。一生は一睡の夢。覺むる時は亦夢。

一西洋の畫にアドホカートと云ふ者、是は窮理學者の號なり。het Stof Slik end, en is Den Swizt niet weard 人一生涯衣食住の爲に求め得る處の諸器諸家具、己に得んとて利を爭ひて求め得る處の物は皆塵なり、土や泥などにてありき。

一文化八年未七月立秋の頃より、彗星初昏西北の方北斗の上に、大尊と太陽守との間に麗りて、尾の光芒長からず。亦曉東西に現れて尾の光芒長し。白露、秋分、寒露、霜降、立冬と漸々南東に昇りて尾も長く、天頂を過ぎて、小雪、大雪頃に至りて河鼓の少し上に留まりて、尾も漸々短く、冬至の頃に天に昇りて竟に肉眼に見えず。又巳の年に彗星現れし時は、天頂より少し西によりて、光芒も至りて薄し。初昏より戌の

ゼルマニヤ—日耳曼、獨逸國なり

樂亦其の中にあり。夏月暑を惡み、冬月寒を惡み、春秋必ず天雨す」亦曰く、「生類食を以て生を保つ。夫れ食を求むるは苦を以てす。農人は耕し、祿ある者は務め力む。譬を以て云はば、食者は薪なり、神經は日輪の火なり。水を湯とする如き、體中の火、食の爲に消えず。食はざる時は火忽ち消ゆ。すなはち死なり。骨肉水土となり、神經天に歸す。燈火を吹き消すが如し。消ゆるにあらず。天火に歸るなり。良才睿智なる者は、神火厚し。能く感じ能く應ず。必ず氣剛し。愚なる者は、神火薄し。事々物々に應ぜず。火氣鈍し。必ず柔弱なる者なり。然るに世界の中、日氣の地を射る事、度に順じて所を異にす。五穀及び草木の實、日氣の爲に甘き者苦く、鹹き者辛く、もと鹹の一味より生ず。天氣のしからむる處なり。人も亦之と同じ。吾日本東西の國、其の氣質異にて、一國毎に各別なり。矧や世界の中においては、歐羅巴の中ゼルマニヤを以て開闢の久しき國とす。吾日本開闢甚だ近し。故に人智も淺し。思慮尤も深からず。神武此方の國にして、年數久しからず。人工歐羅巴に及ばず。漸く地轉の說、今にして知る者僅に二三輩。是淺慮の淡才にして、歐羅巴人に及ばざる所以なり。吾國儒者あり、聖經は支那の書、支那の文字を讀む者を云ふ。僧あり、釋迦の遺言八萬、法藏

三教―佛教
儒教、道教

天上天下、唯我獨尊、三界皆苦、我等安レ之。

釋迦は王位を捨てて乞食の行を爲す。悟道人の祖なり。孔子、仁義禮智信の規を立てて教を爲す。然りと雖も、戰爭を起し、國治れば、名利の二に爭鬪し、もし教を感ずる者は智人なり。感ぜざる者は不智なり。智と愚とを半にす。夫れ人は無始より起り無終に終る。皆此の如し。また曰く、老子無爲を以て教ふ。曰く、「言ふ者は知らず。知る者は言はず」と。是不言の教なり。莊子大小を以てす。「大は貴く小は卑し」亦云く、「大は大智、小は小智、象牛は大、蚊虻は小、大小別ありと雖も、更に大小なし」亦復曰く、「天上天下。唯我獨尊。三界皆苦。我等安レ之焉」現在我あり。無始のはじめ我なし。無終のをはり我なし。爰において我獨尊み、現在わが子あり、我に非ず。兄弟あり、我にあらず。然るに我にあらざれば我に教ふる者なし。我、我に教へて知る時は、我を安んず。我獨と云ふは釋迦己を云ふにあらず。教へ導く辭なり。三教の意皆以て同じ。愚人皆迷ふ。故に苦とす。然るに苦を以て安逸とす。惑ふを以て樂とす。人間常の情とする處なり。人各好む處を別にす。己の好む處を以て是とし、己の好まざる處を以て非とす。智人能く辨ずと雖も、苦と樂と其の中にあり。愚者辨ぜずと雖も、苦

三年の軍なり。

一上、天子、將軍より、下、士農工商、非人乞食に至るまで、皆以て人間なり。獅子、熊、狼、犬、猫に至るまで獸なり。人魚、鯨、鮫、鰯に至るまで魚なり。鸞、鳳、鴻、鴈、小雀に至るまで皆鳥なり。蛇、百足、蚯蚓に至るまで蟲なり。小は大に逮ばず。大は小を從ふ。是皆地球の水土に生ずる者にして各心あり。節骨の機、奚や、人間と同じ。食の爲に生をなし、欲念の情あり。其の中、人は智ありて其の智の爲に己を困め、生涯此の世に迷ふ事、貴賤上下皆同じ。下の賤しきより上の貴きを望み見る時は、歡樂のみありて苦なしとす。己より下の卑しきを眺め見る時は、苦のみありて樂しき事なしと思ふは、己を知りて他を知らずと云ふべし。これ苦樂皆其の中にあり。名聞利欲の爲に生ずる處なり。然るに此の欲を抛つときは卽ち安し。然りと雖も亦之に應ずる苦樂共に追うて來る。然れば悟道人となつて山林に入り、又市隱となつて安逸なるか否か。生ある者は寒暑の苦あり。一日に起伏或は二便の苦あり。矧や世に迷ふ者、苦以て樂とし、樂以て苦とす。紅塵の街に風の土を吹上ぐるが如し。玆に佛書因果經に曰く、

右に謂つて曰く、「爾曹身を終るまで碁を圍むこと勿れ」と。

一昔奥州の大亂は、宗任、貞任、源の賴義朝臣の軍功によりて治まる。是を前九年の軍と云ふ。また出羽の國の住人淸原眞人武則、共に戰ひて貞任が跡をもつて押領して、奥六郡の主となり、鎭守府將軍たり。其の子荒川太郎武貞、父が跡を相續す。嫡孫眞衡、眞人が代に至りて、威勢亦父に越えたり。爰において奥羽の二郡靜謐たり。時に眞衡嗣子なかりければ、常陸の國の住人海道小太郎成衡と云ふ者を子とせり。いまだ妻なし。故に常陸の住人多氣權守家基が女、源將軍の子を生む事あり。此の子を迎へ取りて成衡に娶す。爰に出羽の國の吉彦秀武は、故淸將軍武則が甥ながら聟にて雙無き兵なり。今は年老い一門皆從者の如く、皆眞衡が威に隨ふ。眞衡、成衡を世續として家基が女を娶る時、一門從者之を賀して色々の品を獻上す。吉彦秀武は盤に黄金をうづ高く盛り、庭上へ出でて跪き差上げたり。時に眞衡は、五條の君と云ふ奈良法師と圍碁す。近臣之を申すといへども、目は局にありて顧みず。良久しくして時を移す。秀武老の力盡き古を思ひ、今從者の如くなりたるを憤り、持ちたる金を庭上に抛げすてたり。眞衡大に怒り、秀武は淸衡、家衡をかたらひて大亂となる。これ後

永祿元年は紀元二千二百十八年

局―碁盤

なり。年四十六にして死す。齡短しと雖も其聞え高し。

一永祿年間の江戶の圖を見るに、南は金洲崎、白銀臺、西は麻布、飯倉、今井村、今の江戶見坂邊を云ふ。櫻田村、今の霞が關なり。北は神田川、湯島、忍が岡、今の上野なり。不忍池より下谷の方へ流るゝ川あり。又荒川は今の千住川、淺草觀音は島の如し。又芝通、日本橋邊の町々、小川町、下谷、本所、深川、皆淺海にして池の如し。淺草海苔の名明かなり。海の漸々皐となることは、爰を以て知るべし。今より十億萬年を經る時は、此日本亞墨利加の地と接し續くなるべし。

一圍碁は遊民の外、士農工商共に此の技を爲すべからず。奕と同じ。君子の戲にあらず。無益の暇を失ふ。務の大害を爲す事多し。舊記に云く、市佐時光笙を吹く事絕倫。一日之を召す。會時光至らず、一老人と碁を圍む。使者之を促すに、顧みずして唯眼は局にあるのみ。大伴の宿禰子麤、中臣の連東人と對局。東人失言、子麤之を斫る。亦聞く事なく、遂に召に應ぜず。太閤記に載す。公朝鮮を伐つとき、諸將を遣し役に在ること數歲。中間時、黑田如水、淺野霜臺、軍令を奉じて朝鮮に赴く。諸將を集め以て公命を告げんとす。諸將るるに二子唯心碁に爭ひ傍に人なきが如し。諸將皆出づ。公肥州名護屋に在りて之を聞き悅ばず。左

世子―よつぎ

御入國―德川家康公の江戸に入りたるをいふ

元政―寛政八年歿す

一阿波侯の世子伊豆の熱海に湯治す。かへらん事を忘れて數日を經たり。其の頃吾も同じく此の湯に浴す。二十餘日を歴て歸る。時に阿波侯の行蹟、常に朝は夜の丑の時を以て起き、讀書、弓馬、兵術を、世子をして學ばしむ。故に之が爲に僅の日を熱海に遁る。

一鵜の年十月鎌倉に遊び、光明寺に至る。時に十四日なり。堂中老若男女交座に充ちて念佛の黨なり。堂の外緣床を見れば、菰を著たる者數十人伏す。寒風の夜なり。何故と問ふに、卑賤の農夫堂中に入る事能はず。たゞ經音を聞きて成佛すと心得たり。

一江戸の町は御入國此方の事にて、其の頃よりの名主を草分と云ふ。町數八百八町ありしに、千八百八町となりぬ。正月三日帝鑑の間の大廊架において御通がけの御目見え、獻上物大臺に熨斗、一斗入酒樽十、大納言樣にも同じ。通油町、田所町、大傳馬町、總町代として三人、通油町の名主宮部又四郎、田所町の名主田所平藏、大傳馬町の名主馬込勘解由。

一深草の元政は法華宗なり。日蓮は諸宗を誹謗したる故に、我慢我意と云つて、諸宗の僧これを惡み誹る。元政は佛の理を悟り、出家の道を知り、戒を保ち、法華律宗の祖

符契—しるし

五雜俎—明の謝肇淛撰す。天、地、人、物、事の五類に分ちて雜記す

浮屠—佛

僕憖傚訴源台邑晵嘉愉慆散術の屬。これ悅の淺深、或は悲の中の悅、懼の中に悅を生じ、其意味あり。彼の國は文字を以て符契とす。故に文字を離れては言語意味通ぜず。倉卒に言ふ時は貴人と雖も頭を振り動かし形容して談話す。吾日本元來音訓の國にて、中古より支那の文字を雜へ漢語を爲す。然りと雖も、字數衆し。韻鏡圖圈一萬五千八百二十四聲の外無しと雖も字數は衆し。三萬三千二百五十六字と云ふ。夫より正字通の書出づ。韻會と字彙に校ぶれば、又字數增したり。嘗て大淸の字書正字俗字數萬となり、彼國の者學び盡す事能はず。況や日本の人をや。

一世の人古書を引きて證とす。是證に非の證多し。例へば五雜俎を引きて證とす。謝肇淛もし誤り妄に誌さば、後世の人其の僞を眞とす。諧記に曰く、漢の建武年中、長沙の歐冋、白日に屈原が亡靈に値ふ。數百年以前の屈原が顏、何を以て見知りたるか。左傳は賢者正史として、浮屠の說は夢にも見ざる時の書なり。死靈奇怪の事を記せり剏や夫より下、史記漢書をや。晉の阮瞻は無鬼論を作る。忽ち客來りて鬼の有無を論ず。客遂に屈す。卽ち云く。「我は鬼なり」と云ひ終へて、容を變じて鬼となる。鬼とは何なる形を云ふか。一笑の談なり。

永納—永樂錢にて納むること

和銅開珎—元明天皇の時に鑄たる銅錢、珎は寶の略字

州を從へ、諸士悉く下知に就きければ、氏康の云ふには、「夫錢は品々有れども、永樂に如くものなし。今より關東にては永樂を用ひ、他の錢を用ふべからず」家臣山田信濃守定信、笠原越前守守康に仰せあつて、莊郷村里の辻々に、右の趣を書き誌したる高札を建て、自然と鐚は上方へ登り、永樂のみ關東に滯る樣になしける。此の時鐚を京錢と呼ぶ。其の後、慶長九年、御代に至りて、天下一統に永樂を用ふ。然れども鐚一向に棄つべきにもあらず。永樂一錢の換に鐚四文を以てす。此の旨仰せ渡され、亦其の後慶長十年十二月八日、永樂を停止す。江戸日本橋に高札を建て、永一貫に金一兩とし、金に替ふるに百錢の中一錢宛除き、是を口錢とす。然るに今の世に於ても、年貢に永納あるは此の時の遺風なり。鐚百錢に之を移し、永一錢の價を除き、九十六文を以て通用す。小子壯年の時、相州鎌倉江の島に參詣す。漁夫の小童旅客に就き錢を乞ふ。鐚と云ふ。又府中六社に參る。同じくビツキと云ふ。キは一寸の和訓、鐚は銅にして孔穴あり。古の錢、和銅開珎あり。其の後和錢ありと雖も、銅を支那に贈り鑄させたるなり。

一支那の文字甚だ多し。爰に悅の字を掲ぐ。悅怡歡喜欣忻懌忭忔懽忡憔怏悆愉慆愡憘歖

鐚—粗悪なる錢

數品、奢慢なる事を知るべし。

一聖人釋迦の敎を一口に云へば、夫人間は今日活きて居る中、仁義禮智信の敎を設けて、生涯の間能く守れとの敎なり。釋迦は人間一生は少の夢の如し。故に僅なる夢中を安心せよと云ふ敎なり。

一永樂通寶の錢、はじめ日本へ渡りし事は、後小松の院、應永十年八月二日未の刻より、大風雨にて堂社民屋悉く倒る。翌三日巳の刻に風止む。其の日の申の刻、唐船一艘相州三崎濱へ漂ひ著す。其の時鎌倉將軍足利左兵衛督滿兼卿下知ありて、伊東次郎右衛門尉貞次、梶原能登守景宗、三浦備前守義高を奉行として詮議ありけるに、難風に仍りて爰に著岸す。船中唐銅永樂錢數萬積みたり。これにより京都前將軍義滿入道道有、新將軍義持公へ此の由を訴ふ。唐船關東へ著岸する上は、滿兼德分たりと下知しければ、船中の財寶殘らず押しとめ、其の價として此の國の產物を賜ひ、船は歸國す。其の後若干の永樂錢徒に敝るべからずとの法を立て、關東に於て之を用ふ。夫よりして遙の後年を經て天文年中の頃、永樂錢に鐚と云ふ惡錢を雜へて、同じ直段に用ひしに因りて、商賈の輩惡錢を選み論じ爭ひて已まず。然るに天正の始、北條氏康關東八

乾餅—かきもち
入定—佛者の禪定を修むること
瘻—脹ろゝやまひ

片口と呼ぶ。其の種にて生るゝ者、諸國此の類多し。

一駿州岡部の在所に、坂本村輪宋院と云ふ禪寺あり。天明五六年の頃、住僧歳八十、山に入り、一片の乾餅を喰ふ事三年、また寺に来りて入定す。時に弟子食を進む。僧の曰く、問答吾に勝たば喰ふべし。交〻當る。更に勝者なし。

一備中足守の醫杏庵の曰く、「在所に狐の寓きたる者數度療治す。或時民家の婦に狐寓く。更に去らず。故に全體を拈みければ腕先に摩り付きたり。夫故腕を縛りければ瘻の如し。鍼を打たんとす。狂人の云く、今將に去らんとすと。故に其の縛を解く。忽ち舊の如し。欺きたり。また再摩撫し肩に至る。是非鍼を以て衝殺さんとしければ、狐大に屈伏し、眞に去るべし、其の證は藪の中に體あり、往きて見るべしと。果して云ふが如し。卽ち縛を解く。狐一聲して去りぬ。然るに、狐の氣のみ人の體に入る事、人此の術は及ぶべからず。人々に寓く能はざるなり。譬へば鳥の空中に飛ぶが如し。小蟲と雖も羽翼ある者、人之に及ばざる事を知るべし」

一東都本所回向院の入口、左右淡雪豆腐の茶店、晝食せんとて爰に寄る。傍に卑賤の者二人酒を飮む。酒菜なし。予思ふに、元來酒菜と云ふは、後世の事なり。今は酒菜

招隱館漫筆―源賴紀の著

國民の膏油―國民勞苦して納めたる金錢

の舞とて火を神前に投げ振りて舞ふ。然るに、火の何れへも燃え付かざるを奇とす。是火防ぐ神なり」予考ふるに、火は天地の中間に充ちて造化の元なり。火は何物へも通徹す。目前の理なり。然れども水氣を得る時は火移らず。山上陰濕の氣多くして、萬物濕氣閉塞し、樹木茂り、地氣つねに上昇して雲霧を生じ、火氣衰へて物に移らず。故に夏月火災尠く、冬月多し。神靈火を防ぐにあらず。

一招隱館漫筆に曰く、人君は天職なり。今の君は人君ありての人民と思ひ、驕慢の心發起して、士民を視る事草芥の如し。故に君一人奢を恣にし、無用の財産を私欲の好む所に費し、耳目の歡樂を極む。國民の膏油を絞り、血涙の殘餘を歡樂に供するは、豈不仁の甚しきに非ずや。上に居る者は君子にあらざれば治まらず。君子は己に同じても與せず、己に異にしても非とせず。明君賢子は忽ち人を察し、闇君は必ず巧言令色諂諛の人を愛して、賢者を用ふる事を知らず。曇りたる鏡の如し。

一駿州藤枝の驛に橋あり。川上三里に神の祠在り。其の邊の谷川の鰻魚は　一方にのみ眼あり。此の神の使令とて人懼れて喰はず。予長崎へ遊歷する時、藤枝より僕一人を連れたり。其の者此の鰻を喰ふに祟なし。又相州鎌倉の海にて漁する鰯は、口曲りて

烹―あつもの

一筥根權現の社の前に大釜あり。文永五年辰の十一月十二日と鑄付けられたり。今年文化九年まで五百五十六年。

一日光山霧降の瀧より、五六里深く山に入り白根山あり。人家なく祠のみ。六年氷凍して寒月の如し。白鳥、雁の屬多し。

一樂羊は魏の大將にして、中山と云ふ所を攻めたるに、樂羊の子中山にあつて、中山君其の子を烹にして遣りければ、樂羊は幕の下にて之を啜り、一杯喰ひ盡す。魏の文公が堵師贊と云ふ者、人に言ひて曰く、「樂羊は子の肉を喰へり」と。答へて云く、「誰も喰はず」樂羊は中山を罷けし故に、文公其の功を賞美す。然れども心底をば疑はれたり。

一鎌倉に、どこも地藏と云ふあり。或時堂守の僧參詣もなき堂を守るより、何方へなりとも立のくべしと思ひ、其の夜夢に地藏の曰く、「どこも〳〵」と云ふ。老僧目を覺し考へ思ふに、何方も〳〵同じ事と云ふ事なるべしとて、生涯此の堂に終りぬ。

一東都麻布邊に、關榮一郎と云ふ儒者あり。歲七十餘にして病に臥せり。更に死と云ふ事を知らず。書を讀む者天理天命を知らず。愚なる者なり。

一或人の曰く、「駿河の產にして、年々遠州秋葉山に參詣す。九月十七日祭禮神事に、火

なす。虚空は實なり。質となる時は虚なり。實は以て滅亡せず。名の名たるべきにあらず。所謂無名なり。天地の間に生るゝ者皆虚なり。無情之を實とす。日輪天に麗りて無心。大地旋りて無心。氣昇降して無心。」又曰く、「岩石鐵金以て實とす。草木以て虚とす。花發け實を結び、「土を去り水を離るゝ時は死す。是生物にして非情に似たり。故に實なる者萬古亡びず。虚なる者際あり。人の存在之を虚とす」

一大學衍義に曰く、古より中國にて衣服と爲す所の者は、絲麻葛褐の四の者のみ。漢唐の世に遠夷木綿を以て貢に入ると雖も、中國にはいまだ其の種なし。故に民未レ爲ニ衣服一。宋元の間、始めて傳へて入ニ中國一。蓋此の物來たる事、外夷より閩廣の海に商舶を通じ、關陝の土壤西域に相接する故なり。我朝上世、永祿天正の下民の服皆麻葛の類なり。今に至りては貴賤共に用ふ。その故にや。古賤者は蒲團、蒲入綿なり。今わが國の綿は草綿なり。木綿に非ず。

一瞽者我に云ふ、「畫は奇なる者なり。譬へば升の如きを描くに、其の底に至りて深く入る事、如何して之を圖するか」西洋の畫法は遠近深淺を爲す。わが日本の畫法と異なり。

の困窮を悲み、無慾眞實なるに因りて、倖に雨の降りたるなり。是を德と云ふ。

一七日を以て一周とする事、七日に非ず六日なり。其の故は其の日より七日目は六日なればなり。閏月は四年にあり。實は三年に當る。天度三百六十度六分六秒とす。亦圓の半、卽ち六數なり。其の起三數より出づ。五七三十五、七七四十九とするは誤なり

一世の人を思ふに、人事の小道を知り好む者ありと雖も、天の大道を知る者鮮し。われ久しく東都に居るに、諸侯貴客畫を好む者多し。天を聞く者更になし。啻中納言紀州侯一人のみ。日本小國と雖も、罕には我を知るものあり。我往きて說く事能はず。彼來りて聞く事能はず。國を隔てて遠きが故なり。

一古之善爲レ道者、非ニ以明レ民、將ニ以愚レ之。予考ふるに下民故より淳樸、田夫の如き皆愚なり。生れながらの本性。

一怨に報ゆるに德を以てすとは老子の謂なり。讎に却りて物を與ふるを云ふ。

一或人予に虛と實とを問ふ。答へて曰く、「人の生死を云ふ。死は實なり。生は虛なり。生たる貌は水上の泡、內氣を包み外水にて掩ふ。容水氣の爲す處、虛空より出でて生を

化六年己巳の冬寒氣。十一月九日五分、二十五日同五分、廿六日二分半、卅日一分、十二月朔日一分半、二日十分、六日五分、七日二分半、九日十分、十一日三分半、十七日九分半、十九日寒無度、廿五日同廿六日二分半餘、廿八日九分、午の正月十日二分半、大雪數度、何十年にもなき寒氣なり。凡四十日餘續く。

一大和の國南都の邊へ行き見るに、婢女つねに麻を績ぐ。其の價を得て半を主人に出だす。半は己の物とす。主人の用を缺き、夜は油を費す故なり。前漢の張安世、家僮七百人。紡績皆手技あり。內産業を治むるを纖微累積して巨萬の富とす。

一享和三年丙寅秋八月、關侯隱居の話しけるに、在所新見、夏雨降らざる事六十日、草間村と云ふ處は、山田のみにて常に水なし。此の所の農夫の妻は、水を河より汲む事を力とす。河の傍までは一里を隔つ。其の路皆山坂なり。水桶を頭上に戴き、兩手にて麻を績む事を常とす。其の一村のならひなり。其の村に一寺あり。僧七日斷食して雨を禱る。果して七日にして大雨田烟を潤す。領主より其の僧に金錢米穀を賜ふに更に受けず。其の兩近村に及ぶ故に、他村より米錢を持ち來りて寺に贈りければ。已むを得ずして受けたり。是天の感應したるには非れども、彼の僧正直無心にして、只百姓

寒暖昇降―
寒暖計

一備中岡田平治兵衞が東遊雜記を見るに、南部の邊地を通行せしに、海邊に米櫃、金匣、帆柱、枕の類、波に打ち寄せ渚邊にある事限なし。所の者に云て曰く、「何ぞ拾はざる。取りて薪とせざる。今稀に金錢もあるべし」と。所の者答へて曰く、「此の物は皆破船したる者の失ふ所、之を取りてわが物とすれば、必ず亡靈祟をなす。かつて拾ふ者なし」北方の邊地愚直なる事を知るべし。

一予が家に上總の者あり。彼が話しけるに、東浦にてかつを漁舟七八艘、沖に出でて漁する時、櫃の如き物流れ漂ふ。引き揚げて見れば、内に數十金あり。皆々配分して家に還る。隣家にもこれを知らずと雖も、其の者共漁におこたり酒を呑み聚り遊ぶ。爰において竟に知れたり。

一又或時、磯邊へ流れ寄る物あり。之を見るに餅の如き物數々あり。怪しみて能々視れば蠟なり。暴風の後破船の具漂ひよるとぞ。海國ながら、吾國の人の駕航舵術に悉しからざるを視、洋人評して曰く、「支那以て盲乘、日本以て片目乘」

一佛者欲下以二方便一導上、還使レ迷レ己矣。莊子不レ究二眞理一、惟推量而安二一身一耳。

一予所持する寒暖昇降を以て暑寒を計る。毎年冬の寒十二三分、極寒は八九分なり。文

百里奚—秦の穆公に用ゐられて大夫となる

一天下に才ある者といへど、農夫商工の家に生るゝ時は、卑賤なりとして之を用ひず。諸侯貴家に生るゝ者は、才なしと雖も之を用ふ。才あれども用ひざる時は愚人の如く、不才の者時得て用ひらるゝ時は才子の如し。百里奚は虞にありては愚人の如く、秦に至りては智人なり。

一末大なれば必ず折れ、尾大なれば掉し難しと云ふ譬あり。初は何事も小にして、後に至りては漸々と奢に長じ、大となりては夫に應じ尊み貴む。卑く小にはなりがたし。末に至りては終に壞る。

一木を刻みて糸を牽けば老翁となる。鷄の皮鶴の毛を以てすれば、眞物の如し。須臾弄びて罷みて寂として無事。還つて人生一夢の中に似たり。

一善人と惡人とは生れ稟くる事なり。松を接ぎて杉とならず。聖人の敎を學び習ひても、本性を失はず。柳下惠飴を見て以て老を養ふによろしとし、盗跖は以て錠に粘るによしとす。

一予峻天理を曉明すと雖も、世俗之を知らず。畫は幼稚の時より好むと雖も、前に善畫あり。これに及ばず。故に屛風のごとく屈曲して、從俗は諸侯貴客われを視る。

常嗣を正使とし、篁は副使なり。心緒不快にして憤を含むと雖も、勅命嚴重なれば、是非に及ばず其の旨に隨ひ、斯くて太宰府に至り、艤の節、常嗣が第一の船、去年破損しければ、因りて篁が乘りたる二の船と取り替へ、常嗣へ篁が船を進め、篁は破れたる船とさだめける故に、之を怒りて竟に病と云ひて京に歸る。常嗣は已に出船す。篁は家に返りて門を閉ぢ、西道謠と云ふ文章を作りて、暗に常嗣を誹謗す。其の文章の中上を輕んじ憾む意あり。嵯峨上皇逆鱗ありて、其の罪輕からずとて、死罪を宥され、承和五年十二月隱岐の國へ流さる。筆翰の逸人なる故に時の人之を惜む。篁船中にて、

逆鱗—天子の怒らるゝこと

和田の原八十島かけて漕出でぬと人には告げよ海士の釣舟

また

おもひきや鄙の別におとろへて海士のなはたき漁せんとは

承和七年赦免六月歸京。黃衣を著朝廷に拜謝す。翌年本爵正五位の下に復し、文德天皇仁壽二年冬十二月薨ず。下野國足利鄕學校、先聖の像を安置して、其の頃敎授する者相續ぐ。今下野の阿波谷村に一寺あり。學校の跡と云ふ。

す。古の名僧、弘法、傳教をはじめ、多くの衆僧皆名利を離れず。此の玄賓一人眞の出家にて、其の名聞えず。

一承和三年春月、遣唐使選擧已に定まりて、藤原の常嗣を正使とし、篁を副使とせられ、兩人を紫宸殿に召され宴を設け、文人墨士に餞別の詩文を作らせ、兩人へ天盃を下さる。常嗣詩を獻じて壽を上る。此席に往歲本朝の命を銜みて入唐せし使者、竝に留學の輩、彼の地に在りて自沒する者八人に、各位階を贈らる。所謂、藤原清河、安部仲滿、石川道益、紀馬主、甘南備言景、紀三演、掃守宿禰明、田口歲富等八人なり。同七月遣唐使四艘の船、大使、副使、判官、主典、太宰府を出船しけるに、日氣あしく、九州の地に泊して順風を待つ。漸く天氣を得て蒼海へ漕ぎ出す。また俄に風かはり逆浪天を浸して、諸の船を淘り居う。殊に常嗣が乘りたるは、檣も折れ柁も摧け已に覆らんとす。漸く四艘とも日本の地に吹き戻さる。船も破損しければ、まづ一度歸京すべしとて各京に歸る。則ち叡聞に達し、明くれば承和四年三月、遣唐使再び催しありて、復太宰府に下り出船ある。其の時慈覺大師も同船あるべしと云ふ。然るに篁は俄に病と稱して京に歸る。其の宿意は、篁つねに學才に自負の思ありけるに、

焉。歐羅巴人未レ聞下有二利氏之子一者上也。美竊怪焉。嗣後適得二金閶鐘始振闢邪論於新增大藏函中一。因知竇本生二於廣東傍近海島間一、北學二於中國一。實非二西方人一。則前者之說果不レ誣矣。李氏徒、徒嘆二其學在一レ夷、而不レ知用レ夏變二於夷一也。故今我是編所レ採。其說係二之明人一者。蓋從二其實一。癸己之秋源君美書。

一　采覽異言は、白石先生著す所の者にして、利瑪竇及び明人の說を揭ぐ。萬國の事を誌せり。後に蘭人に遇ひて、始めて利瑪竇は歐羅巴人に非ざる事を知れり。今亦吾が黨の者、蘭學を好み、尤醫術に委し。小子は天文地理を好み、わが日本にて始めて地轉の說を開く。職方外記、天經或問、利氏の言なり。竇は廣東の西琶牛の人と云ふ。

一　日本いにしへ玄賓と云ふは河內の人なり。今世の僧侶の如く、榮達名利に繫縛せられず。南都の興福寺宜教の法嗣にして、俗姓弓削氏なり。道鏡などの作業を惡み、潛に洛陽を出でて伯州の深山に隱れ居たりしに、其の後桓武帝御不豫のをり節、詔書を下されけれど、詔命を遁れて出でず。然れども再三に及びて竟に京師に入り、玉體に近づき加持し奉る。忽ち平癒の事あり。帝深く法德を歸依ありて、位階を下し給ふと雖も更に受けず。亦辭し去りぬ。弘仁九年夏六月、暮齡八十餘にして備中湯川寺に遷化

腐爛の臭氣萬物となる。故に臭腐復化して神氣となる。神氣復化して臭腐となる。爰を以て聖人は其の一を貴ぶ。

一書采覽異言後

浙西李之藻、刻萬國坤輿圖。萬曆年間、大西利瑪竇重修改定、附以南北半來圖。事具二子所敘。而一時薦紳揚景淳。吳中明之徒贊述焉。正德己丑冬、美得遇西人。乃按其圖訪以方俗。其人曰。此圖明人所作。稍似縝密。然與地理不合。莫由依據。敢辭。美意謂、彼不解漢字、敢爲大言耳。美乃曰、是則歐羅巴人利瑪竇所携入于中州者。世稱其善、子無取焉獨何與。曰、某未嘗聞我人有其姓名者也。曰、西教東漸自利氏始。子不知其人可乎。彼笑而不答。旣而索得西圖於官府以示之披翫久之曰。是和蘭鏤板。蓋百年之物也。雖我西土亦不易得。某與此圖唯得三見之矣。於是左把右指章步而亥算。使人不待窮夫轍迹而周遊乎八極名山大川、擧望而出、殊方絕域隨顧而在、亦奇矣哉。誠得其術也。明年春和蘭入貢。美私其使者以質焉。對曰輿地全圖舊有數本。此板弊邑所刻、去今旣一百一十三年。先是西土佛來。釋古者始唱天教東南議州。其塔今在印度地。香華之盛一百七十年玆

入り世を捨つとて、山に入り食に饑ゑ、乞食となりて無欲なるとて、衣服を脱ぎすて裸になりて、野に伏し山に寐ね、寒暑に堪へかね苦しむを、名利を棄てたると心得、是を尊く思ふは更に理に當らず。予江漢も、西行は深草燒にても小兒の時より見知りてあれど、今此の選集抄を見て、初めて佛の道を知りたる道人にあらざる事を知れり。兼好法師の徒然草は格別勝れたる者なり。一席の談にあらず。

一磁石の妙なる事、いまだ解し得がたき處あり。石を水中に浮べ見るに、南北ありて東西なし。然るに、針を以て南と北との氣を磨し、亦水に浮ぶるに、南は北を指し北は南を指す。石と返覆す。此理未だ解せず。亦針二を以て北の一方に磨し、石を離るゝやいなや、忽二の針合せず、北は南につぎ、南は北につぐ。是天の空氣の引く處にして、南北極地球の軫軸、天に係りて旋る故なり。しかれば赤道以北は北を頭とし、赤道以南は南を頭とす。故に、地球の四面に人居立し、地より上を以て天とす。エレキテルを以て此の理を知るべし。

一天地の生物を見るに、生ずる者は神氣なり。死する者は臭腐なり。臭腐は人の惡む處、天氣は淸淨、大地の水氣又淸し。然るに、天は火、地は水なり。兩氣相徹して其の中

はんと。仲太歡び去りぬ。其の後大納言昇進の事ありて、硯を拜せんとするに破れてあり。若君の云く、われ破りたりと。大納言大に怒り、若君を殺せり。仲太此の事を聞きしより、出家して後、播磨の國書寫山に庵をむすび、無常を感じ住みけるが、恆に普賢菩薩を拜みたく願ひ、一心に念じける時、夢の如く一人の天童あらはれて曰く、「汝室の津の遊女を見よ、實の普賢なるぞ」と云ひをへて消え失せたり。夫よりして室といふ處に至り、遊女をもとめ見るに、常の遊女なり。席上酒肴を出だして興を催し、妓は立ちて舞ふ。性空（仲太が事なり）目を閉ぢ觀じければ、忽ち、妓女は普賢ぼさつに現じ、又目をひらけば、元の遊女なり。性空つら〳〵思ふに、此の妓女と見るは實に生きたる普賢ぼさつなりと、有りがたく思ひ、時を移して後去りぬ。六百歩を過ぎてかへり見るに、彼の女は死にたりと。普賢かりに遊女に現じ、我之を拜する事の不思議さよとて、人にも語りければ、衆俗皆性空上人とぞ貴びける。

予江漢曰く、笑ふべき事なり。西行此の愚談を集に入れたるを見れば、佛の道を知りたる者に非ず。佛道に迷ふ者なり。然れども、妻子の愛念を捨て、浮世を見かぎり、乞食となりて諸國の行脚したるは、實に世を捨てたる人にはあれど、貴き人の佛門に

大さにしてかき色、叉絞あるもあり。其の種二三品、尾は孔雀の如く、左右の脇より、雲珠巻きたる羽あり。和蘭これをパラディスホーゴルといふ。パラディスは天堂を云ひ、ホーゴルは鳥なり。故に極樂鳥と譯す。亦燕は春暖氣を得て出でて、初夏家の軒に巣を爲す。初秋に至りて天中を飛び繞る。必ず、地に下らず。秋の末になりて何方へか去りて見えず。南向の樹の洞の如き處に集りて、寒月は出でず。

一蝙蝠軒に掛りて、人の倒に歩くを怪むとは、惡人の、善人を見て、己の如くならざるを云ふ故なり。然れども、飛ぶ時或は喰する時、亦糞する時は頭を上とす。只安居するに至りては、頭を下にして倒に掛かる。人の伏すが如し。

一西行法師の選集抄に曰く、拾遺抄に載せてあるを爰に摸すとあり。むかし播磨の國書寫山と云ふ寺に、性空上人と云ふ僧のありける。是は本院の左府時平の孫にて、時朝大納言の侍に、仲太小三郎と云ふ男あり。大納言の許に、昔より傳はりて大切なる硯の有りける。官位に昇る度毎に、此硯を拜する事なり。ある時仲太彼の硯を見たく思へども叶はず。故に若君十歳足らずしてありけるを、仲太此の君を賴みて竟に硯を見たり。其の時仲太あやまちて硯をおとし破りたり。若君の曰く、われ破りたりと云

す事、森羅萬象皆此の氣の爲に生ず。人間禽獸及び草木は天地の大機にして、恆に靜動變化をなす。是妙と云はざらんや。故に神は氣なり。鬼神と云ふ。人および萬象、氣中より出でて氣中に歸る。氣の根元太陽日輪とす。故に天照神明の名あり。神道の傳書譬喩を以てし、實事を云はず。視る者能く考へ察せよ。

一夫れ佛とは釋迦の名くる者にして、天の大氣虛空を云ふ。これを無と名く、是を佛とす。日輪を指ざして阿彌陀と稱す。像を造りて人の如し。光明遍照十方世界、四方に光明を放つ。是像を作りて譬喩とす。亦三世の敎をなして、虛空を以て一世とす。虛空の天氣地球に徹通して森羅萬象を生ず。是を現世とす。生を爲す者皆悉く滅し亡びて、天氣に歸す。是往生して極樂に至るを佛になるとは云ふなるべし。窮極則ち神佛同じ。後世の僧徒、己の私の爲に不動、藍染、大日、藥師の屬、神と佛とを混じ、各人の貌となして、愚人を誑す方便とす。是悉く太陽を以て譬へたる者なり。故に其の像皆火を負ひ輪光をなす。察し知るべし。

一風鳥と云ふ者あり。生きたるはなし。皆皮むきなり。必ず、足なし。蘭書花連的印に圖ありて、此の鳥印度諸島にあり。然れども稀なり。恆に天を飛びて地に下らず。鳩の

弘法—空海
傳教—最澄

へ東西南北の農民に至るまで、つねに參禮する事虛日なし。拜禮する者かつて私願を口に言はず。神靈かつて奇瑞を垂れず。神の道の明に、佛の道の昧く、神に怪なく佛經一章每に怪語を爲す。古の弘法傳敎怪術あり。其のころ上理に闇くして之を奇妙とす。また愚ならずや。其の後賴朝、北條、足利の代に至るまで、戰爭人を殺し、其の亡靈祟をなす。故に國亂をなし、或は疾病流行し、凶年打續く。爰において僧侶其の虛に乘じて堂塔佛閣を建て竝べ、其の遺跡天下に益なく、人を惑はす。是其の始馬子、太子と謀りて佛を信じたる故ならずや。窮理に昧き愚人と云ふべし。

○神と佛と論ず

一神とは何者を云ふか。佛とは何者を云ふか。それ神は日本わが國の祖人の靈を祭れる者なり。靈とは何を云ふか。鬼なり。鬼は何を云ふか。氣なり。氣とは天地の中間に充てる虛空なり。虛空に物なしとす。然らず。大地は球にして天中に懸り上下なし。大氣之を揚ぐ。この氣宇宙に充滿して隙なし。一尺の地を穿てば一尺の天を增し、魚水に游びて水を知らず。人氣中に居て氣を見ず。天氣は地氣と感じて神變不思議をな

政たり。馬子其の後幾ならずして、果して崇峻帝を弑す。馬子主君を弑する大悪人、太子之と與す。是を聖賢の人とせんや。佛法國を治むるに設けたるに非ず。今に至りて政道に益なく、之を破り敗る事能はず。上闇く下亂を起す事此のごとし。

一予江漢考ふるに、支那及びわが日本究理の學なし。古は猶人智淺し。しかればわが國神の道を以て、他邦の教を用ふる事有るべからず。佛法は異道にして其の教別なり。いにしへ上天子下諸臣、佛像經卷を以て專拜し、晉病疾おのづから愈え、吉事福樂拜し願ふ所從ひて自ら生じ、奇妙不思議を爲す事、是何なる故ぞや。支那我國に鬼神を論ずる者あり。誠に愚論と云ふべし。鬼神とは水火の二氣を云ふ。天の火氣地に徹し、地の水氣と相混同して升降す。是を鬼神とは云ふなり。人此氣中に居て清濁を知らず。疫病、痲疹、疱瘡、皆此氣の侵す所なり。鬼神の怪異をなす者に非ず。草木花發け實を結ぶは、正理にして奇ならず。然れども、實にこれ奇とすべし、怪これを奇と云ふべからず。それ怪は狐狸の爲すところなり、亦愚恐怖し、或は患ひ、心中惑念凝り結ぼれ、目に怪を見る。皆己の迷より視る處にして、かつて怪にあらず。僧侶玆に就いて愚民を誑し、死靈亡魂なりとす。夫れわが國神明の盛なる事、伊勢皇大神

用せざる者には、物部大連尾輿、中臣連鎌子なり。故に佛像經卷を稻目にたまふ。大臣と謀りて向原の家を拂ひ淨めて寺とす。卽ち、向原寺と號す。わが朝佛法の起、僧侶の始なり。其の年天下疫病流行して人多く死す。神國異域の外道の敎を信ずる故なりとして、佛像經論を堀江に流す。寺院堂塔を燒滅す。夫より二十九年を經て、亦重ねて佛經、及禪律、佛工師、寺匠等を獻ず。時に敏達丁酉六年なり。同己亥八年、新羅より釋迦金像を貢ぐ。故に愈馬子等佛法を信じ、堂塔を建て竝べ、時に亦しば〳〵疫病流行す。乙巳十四年三月帝に奏し、守屋に詔して佛法を斷つ。爰に於て佛塔を斫り倒し、佛像及佛殿を燒き拂ふ。餘る所は難波の堀江に棄つ。其の夏六月にして、亦蘇我馬子奏して再び佛法を起す。秋八月にして天皇崩ず。同九月豐日の皇子、天皇の位に卽き給ふ。丙午春正月用明元年なり。次の年夏四月天皇病みて崩じ給ふ。爰において守屋、穴穗を帝とせん事を欲す。馬子推古に奏して、穴穗を殺す。諸王子、群臣と謀りて守屋を殺す。聖德太子其の軍中にあり。馬子は必しも義兵にあらず。守屋必しも寇賊に非ず。守屋佛を廢するは我國神國たる故なり。穴穗は皇子にして推古は女皇なり。馬子穴穗を殺して推古を立つるは、女主佛法を念ずる故なり。時に太子攝

法然上人の歌に、

墨染に心の底はそめずして世渡り衣著るぞはかなき

一古より悟道人幾たりもあり。名の聞えたるものは、眞の悟道人にあらず。天竺釋迦は天子の兄弟と云ひ、貴きを棄てて乞食の業をなす。孔子は仁義の道を弘むと雖も、人是を用ひず。竟に古郷にかへり、春秋を作りて、死後に名を揚げたり。眞の悟道人は、無極の人と云ひて、名もなく音もなし。

一天地の中、水の傾きあり。今日本水干減ずる時なり。今亞墨利加の方水高し。土地減ず。故に日本の地開けたる事、甚だ近し。故に人智も淺し。歐羅巴の地開闢も久し。又人智も深し。

○日本佛法の起、聖德太子守屋の是非を論ず

一わが日本の人、究理を好まず。風流文雅とて文章を裝り僞り、信實を述べず。婦女の情に似たり。婦女皆迷ひ惑ふ。必ず、欺を信じて是非に昧し。いにしへ欽明帝の時、壬申十三年、百濟國より始めて佛像經論を渡す。信ずる者、蘇我大臣、稻目、宿禰等、信

敎ふる法なり。又曰く、長阿含經に云ふ、此地平なること掌の如く、蚊虻蛇惡獸ある事なし。沙石ある事なし。陰陽調和せり。四時順和して、寒からず熱からず。冬夏ある事なし。華菓茂り盛なる事也。其土に自然の粳米がありて、糠糟あることなく、白花聚忉利天衆味の如く具足せり。其常に自然釜鍑あり、摩尼珠あり、名つけて焰光といふ。鍑鑊の下に置き、飯熟光滅じて人巧を勞せず。

右の忉利天と云ふは、佛ばかり住居する所にて、此上もなき樂しき世界なり。手も勞せず、自然と白米のありて、飯となり、暑寒もよいかげんにて、蚊の人をさすと云ふ事なく、蛇などのあしき蟲もなし。路も平で山坂もなし、爰が則ち極樂淨土と云ふ所なり。人死すれば無心卽ち安樂なり。爰を以て極樂に往生すとは云ふなり。今の出家は、誠に此やうなる所へ、死ぬれば往く事と思ふは、愚と云ふべし。法華經は釋迦說きをさめの眞實の經文と云へり。故に法華經を見しに、やはり奇怪なる、大地より三千の寶塔涌き出でたりと云ふが如き、機事とす。譬喩なる事を知らず。

最明寺時頼の百首の歌とて、道歌あり。其中に、

只ありの人を見るこそ佛なれ佛ももとは只ありの人

方々から、大河の水が流入する事、無量なる大水をも燃えあがる大寶殿が、皆飲み縮めかわかす故に、大海の潮は、増しも減りもせぬなり。

「地獄と云ふ所は、地の下何里程にありや」と問ふ。俱舍論と云ふ經を引て依りて曰く、

南閻浮提下過二萬由旬有無間地獄。梵云阿鼻。

長阿含經に云ふ。

先世修十善供養、沙門造塔供養者、依此福業、得生北州。北州之人者、盡得生天也。四州中北州果報殊勝也。唯有種々快樂之事。更無有苦。

此阿含經に云ふ所の趣は、前の世にて、十善を修め行うて、又は沙門塔を造り供養する者は、此爲によりて北州と云ふ所に生るゝ事を得るなり。此北州の地は、福樂の業のみにして、壽命盡きて死ぬると云ふ事なく、直に生るゝなり。四州の中、此北州と云ふ所は果報殊に勝れたり。唯常に種々快く樂む事のみにして、更に苦勞と云ふ事なし。一皆是、釋迦、阿難の云ひのこしゝ事故に、出家は釋迦聖人の道を學ぶ事故に、此經文を眞うけに請けて、譬喩と云ふ事を知らず、誠に愚なる事なり。天に生るゝと云ふは死にたる事なり。人々善事をすれば、北州に生ると云ふは、此世の事なり。皆愚民に

一佛書は、一向につまらぬ事のみ多し。出家も經文をば讀まず。只文學のみする事なり。爰に經文中にある所を拔きがきす。海水の鹹く苦き者を問ふ。阿含經に曰く、三つの因緣あり。海水の鹹苦のは、一つには成劫の時、光音天に至りて遍く大雨を降し、天宮及び天下を洗濯す。其中諸の所、穢れ惡む者あり。是鹹苦なり。其諸の不淨の物、大海に流し入れて合して一味となる。夫故に海水は鹹苦なり。又曰く、

大海中、有二諸大身衆生一。所レ吐大小便利相聚爲二鹹苦一

右は海の中に世界が有りて、大なる人にて、其人此世界の如く衆生ありて、其人々の大小便があつまりて、海の水が鹹苦となるなり。又曰く、雨降りて海に入れども海水溢れずと。華嚴經に云ふ、

大海有二四熾燃光明大寶一、其性極熱、常能飲縮、百川所レ流二無量大水一、故大海無レ有二增減一。

是は華嚴經と云ふ經文に、海の潮が盈ちたり、ひたり、又は大雨が降りても、海の水があふれもせず、是は何なる事と云ふに、四熾燃光明大寶と云ふ火の燃ゆる大なる寶がある。定めて海の眞中にある事なり。其大寶殿が極めて熱する事なり。夫故に所々

鎰—金二十両

倉圓覺寺近日來るべし」と云ふ。ある時佐賀の藩士生野圖書と云ふ者、番頭と云ふをつとめて、三十餘の人なり。文學もありて、頗る理學者なり。大機和尚に謁して曰く、「地獄極樂ありや」大機の云ふ、「あり」又問ふ、「火車ありや」大機の曰く、「あり」「何を以て薪とし、何を以て火を出すや」と問ふ。大機默してこたへず。圖書甚だ怒りて責めとふ。機の曰く、「汝が顏色赤し。是腹中に火あり。其火何れより來るか」（佐賀の藩士利昌山領氏話しける。）

一專齋江村氏諱は宗具、倚松庵と號す。もとは備前三石の城主にして、落城の後、京に登り、宗具に及ぶまで、新在家と云ふ街に住めり。始め加藤清正に仕へ、後森美作守に仕ふ。されども、躬は京に居り、壽は百歳を保つ。老人雜話と云ふ書は、此翁の話なり。

一東湖禪師の歌に、

みよしのは櫻の外に峰もなし花やつもりて山となりけん

一賣茶翁の狂歌

茶錢は黃金百鎰より半錢まではくれ次第。たゞ呑み勝手。たゞよりはまけ申さず。

達摩さへおあしで渡る難波江の流を汲める老のわが身ぞ

と云ふ人の句、

盗まうか云うて見ようか梅の花

奇人傳を見しに、尾州藩士横井孫右衛門と云ふなり。俳諧に名を得たる人なり。

一奇人傳に云ふ。峰玄知は雲州侯の茶道なり。和歌を好めるの癖あり。或日郊外へ出で、梅圃の花盛にて、梅樹の主を問ひて、樹を買はんとす。敢て背ぜざるに、高價を以て强ひてのぞみければ、已む事なく約す。翌日酒魚を以て樹下に來り慰む。農夫曰く、「根の損ぜざるやうにほりうがち、明日持ちまゐるべし」と云ふ。玄知の云ふ、「いな左樣に非ず。いつまでも爰に置くべし」「さあらば實熟せば如何すべし」と問ふ。「實は用なし。只花のみ望む所にして、吾物にして見ざればおもしろからず」とぞ。

一枝をわが物にして梅の花　小子玄知が風流をもて發句を作れり

一肥前佐賀の城下に、泰長院とて禪寺あり。住僧大機和尙は歲八十餘にして、老僧たりしが、兎角住持たる事を愁ひて、隱居せん事を欲すといへど、後住なき故に免されず。ある時、寺を欠落して逃げ去りぬ。やうやうにして尋ね出して、後住を定め、而して後に、隱居せんことを皆々責めければ、大機の曰く、「後住は我疾くに約せり。相州鎌

ほとゝぎす郭公とて明けにけり

澁かろかしらねど柿の初ちぎり

朝顔や地に咲く事をあぶながり

朝顔に釣瓶とられてもらひ水

千なりやつる一筋の心から

一歌川は越前三國の遊女なり。其後豐田屋吟と云ふ。後尼となりて、瀧谷といふ。東國の方を行脚したる女なり。

目覺しに琴しらべけり春の雨

さそふ水あらば〳〵と螢かな

爪紅のしづくに咲くや秋海棠

おく底のしれぬ寒さやうみの音

たゝいても心のしれぬ西瓜かな　是は客に贈る。

千代は常の女なり。歌川は遊女なり。孰れも其情見ゆ。

一奥州石の巻の醫、京學に行きて歸るさに、予の宅へよりし時、古式紙をもらふ。也有

三界―三世も同じ、過去、現在、未來

たわいなし―とりとめなし

道歌―心學の教にいふ歌

ぎる」と。

一三世因果經に曰く、天上天下、唯我獨尊、三界皆苦我等安之。是は釋迦の遺言にして、人の能く知る處なり。予此語を解して云ふ、天地は無始にして開け、其中無始にして人を生じ、是より先、無終の年數に人を生ずる事、無量なり。其中我と云ふ者は、予一人なり。親子兄弟ありと雖も、皆別物なり。然れば予能く吾に敎へて迷はざる時は、生涯我を安んず。迷ふ時は、三界皆苦みとなりて、我を亡す。

一一生此世の中に暮す間、若き時より老ゆるまで、誠にたわいもなき事なり。

世の中は市の假屋の一とさわぎ誰ものこらぬ夕暮の空

是は近世人のよみたる歌なり。道歌なり。

一樹木谷織田侯の隱居へ參るとき、織田某とて公家衆のよし、三十餘の方にて、客なりき。某の曰く、「江漢は西洋おらんだの事を能く知れり。おらんだは人類にあらず、獸の類なりと云ふ。然れども、細工は妙なる事をする事なり」と仰せられける。故に予答へて云ふは、「人は獸に及ばず」

一加賀の國松任の人、千代とて、人の知る俳諧女なり。美濃の盧元坊を師とす。

五嶽—東泰山、南衡山、西華山、北恆山、中央嵩山

月十一日、市谷より火出でて、芝赤羽橋にて消ゆ。其時彼種物屋の老夫焼け死にたり。焼け死ぬと云ふ事夢にも知らず。又吾相を見て、「今より三年」と云ふ。今に死なず。相と云ふ者、面部の内、各名を付け、或は五嶽に譬へ、兩眼をば日月とし、占の卦をたつると同じ事にて、地の下に風あれば、風地は觀なりと云ふが如し。埒もなき八つ當りなり。又弱く見ゆる人をば、短命と云ひ、金錢の乏しき人は誰が見ても貧相に見え、武士、町人、百姓皆人品に見ゆる者なり。又貴人にも色黒き下相あり。唐にても、日本にても、天下の主となりたる、漢の劉邦や、日本の太閤秀吉の類、卑賤より出でて天下を取りたる故に、古へ相者の見たると云ふは、後人の說にて、只文章に書きたる者なり。愚者、賢人は面體にて、誰が見ても知るなり。然れば、世には貴賤はあれど、智者は少き者なり。愚人のみ多し。智者不惑勇者不懼と云ふが如し。或とき孝安親に向ひて曰く、「人老いては餘命なし。折々は樂むがよし。終日坐して愚惑の人に應對し、花さけども是を知らず。夏月納涼と云ふ事も知らず。書を讀みてたのしむと云ふ事も知らず。何を以て樂しとするか」答へて曰く、「我は人の相を見て百錢を得、是を積みて金銀とし、又一日に三度の飯を喰ふより外におもしろき事なし。樂み是にか

一奕は下の賤しき愚人、酒食の外樂みなし、ゆゑに之を好む者多し。十人にして勝者は一人なり。負者九人、盗となるより外しかたなし。先達白川侯權を取られし時、博奕の宿は死罪、其一坐の者は遠島と有りければ、其頃は一向博奕なし。

一芝三島町と云ふ處に、年久しき人相見あり。石龍子と云ふ。生は攝州池田の產にして今に實子なし。孝安とて妻の連子なり。五歲の時養子となり、今三十歲位なり。其母は先年病死して、今の母は三人目なり。石龍子は歲七十になりけれども、至りて健にして、又孝安は至りて君子なり。親は至りて惡人なり。然るに孝安親の命に少しも逆ふ事なし。親を尊敬する事聖經に差はず。然るに、相を見せる者百錢を出す。其の迷ふ者貴賤日々何十人と云ふ事を知らず。春三月比に至りては五六十人、平日は十四五人、或は二十人。又相を學ぶ者あり。是は孝安應對して、神相前編の正儀とて、印刻の書を著し、是を講釋する事なり。初弟子入として金五百疋を出だす。又極の秘傳書と云ひて、之を傳ふるには、金七兩二分、貴人は銀二十枚、或は三十枚なり。石龍子の人となり、文盲にして他人と交る事なし。大船の船頭の如く、人に向ひて禮をなす事を知らず。門人の内一二人と交るのみ。其一人は芝切通種物賣にて、文化辛未二

迦の遺言、八萬法藏をもいはず、敎外別傳と云ひて、辭にも文にも述べがたき虛無自然たる事、天地の萬造、人間草木、皆水火の二氣より出で、又水火に歸する事を推究し知る。是を草木國土悉皆成佛と云ふ事を能々悟道するなり。是も天下を治むる事にあづからず。古は出家にならんと欲する時は、行者とて、其頃一國に一寺國分寺あり、今はなし、其國分寺へ行き、學問する事なり。學問成就して、佛經の譬喩方便の文面を能く解し、信實なる理を曉し知る。地獄極樂の諭を以て、愚民を善に導く事を得度し、その頃京に玄蕃寮あり、爰にて其學の長たるを吟味し、又戒壇とて、諸所にありて、是にて度狀と云ふを請け、是よりして剃髮し、法師となる。是を敎導師と云ふ。今の僧は、寺を己の住居の家なりとし、我は高位高官なりと驕をきはめ、民を善道に導く事を知らず。實に國用の者にあらず。故に今よりして、僧をみだりに爲すべからず。田夫の如きに至りては、子多くして、末の子をば菩提のためなりと云ひて小兒を出家にする者あり。長りて惡僧となる者多し。中年にして、佛道佛理を好む者をして、出家させる時は、名僧智識自ら出來るなり。古の法の如くして出家する時は、僧も自然と滅ずべし。今の出家は、死人を葬る事を業とするのみ。

玄蕃寮—外交、佛寺、僧尼のことを取扱ふ役所

菩提のため—死して極樂往生を遂げしむるため

智識—學德すぐれたる僧

妙手として、皆眞似をして、甚だ流行せり。今に至りては、夫も見あきてすたりぬ。又江戸は奥州の方へ屬して、氣質も京人のやうにはなし。唐畫にも、和畫にも似ぬ風は、呑み込まぬ事にて、吾が自身工夫したりと云ひては、夫は法がないと云ひて、請け取らず。然れども、畫は其物の形を見て、其形に似るをよしとす。法手本とする處は、卽ち其物なりと心得たる者も無きにもあらず。又奥州の方は、今に於て、其かたくなる事かはらず。予二十五年以前より、日本の山水富士をはじめ、名山勝景を寫眞にして、阿蘭陀の法を以て、蠟畫に畫き、諸國の寺院佛閣の額に掛け、諸侯貴客へも數々認め遣しければ、世に之を奇觀とす。需むる者多し。然るに之を求むる者は、皆上方中國筋の人なり。奥州の人は、一向に是を取らず。愚直なる事かくのごとし。

一僧を猥に爲さざる事。今の僧は、天下の遊民にして、出家の業なし。佛道も國民を治むる一助に備へたる者なれど、今の僧は、己一人を修むる事すら能はず。一體僧は出家とて、家はなし。愚民をして、譬喩方便を以て教導するを業とす。今の門徒家は、甚だ其法にかなへり。無智の凡夫を極樂へ往生する事を、常に說き聞かせ、惡念の起らざるやうに敎へ示す事なり。又禪家は、己一人を以て、佛の本原を知り得る事にて、釋

好みに從ふべし」「其紙へ美人を認めよ」と仰せられけるに、直に筆を採りて草々と、和美人の立てるすがたを描く。「是と對なる物を認むべし」と。又同じく和男子を圖す。侯興に入りて、其畫を自ら持ちて、簾屛風の内へ御入りある。女中の笑聲交々したり。夫より、絹地堅横に色々の御好みありて、後には其近臣の者に望めとありければ、多くは墨竹墨梅を筆疾に描きけり。晝の八時頃より、夜の八時に相濟む。親和と共に引き退く。伺候の間に、谷田太郎左衞門一人詰め居たり。是は其頃の留守居役にてありける。親和の曰く、「足下は唐畫描と聞きしに、和漢の人物風景山水を畫き、大名の前には、甚だ能きふるまひなり。今より二十年を經るならば、天下に名を爲す人」と云へり。「吾居所は神仙坐すなり、甚だ是より近し」と云ひければ、親和の云く、「我足下をおくらん」と戲れければ、「小人の宿には茶のなまぬるきが有るのみならん」と答へければ、「扨々能き挨拶なり。我等が宿の會日に、チトお出で」とて別れける。吾が年三十歳の時なりき

一京師に應擧と云ふ畫人あり。生は丹波の笹山の者なり。京に出でて一風の畫を描出す。唐畫にもあらず、和風にもあらず、自己の工夫にて、新意を出しければ、京中これを

殘る處、或は雲を吐き、日輪雪を照し、銀の如く少しく似たり。

一吾國畫家あり。土佐家、狩野家。近來唐畫家あり。此富士を寫す事を知らず。探幽富士の畫多し。少しも富士に似ず。只筆意筆勢を以てするのみ。又唐畫とて、日本の名山勝景を圖する事能はず。名も無き山を畫きて、山水と稱す。唐の何と云ふ景色、何といふ名山と云ふにもあらず。筆にまかせておもしろき樣に、山と水を描きたる者なり。是は夢を畫きたると同じ事なり。是は見る人も、描く人も、一向理のわからぬと云ふ者ならずや。

一予壯年の時、專ら唐畫を以て人にも教へ、墨竹など描く法は、葉は个字、點分字、節の法は、上乙、下八、小枝は雀足とて、法則を以て人に示す。ある時、仙臺侯の大夫後藤孫兵衞とて、吾を旅館にまねき、机の板に畫を請ふ。予墨梅を畫く。描きながら畫法筆法を談ず。「此花を此所へ一りん描くと、則ち此根がしまりて畫法の妙とする處なり」とかたりければ、皆々かんしんす。其後に仙臺侯へ召され、相手には深川親和父子なり。奧方は公家衆久我家の女なり。簾屛風の内より御覽にて、仙臺侯は吾が向におはしまし、用人役平賀藏人傍に居て命に應じて、絹紙を取り次ぎ出す。予曰く、「お

髣髴として—よく似たること

世界の中には、此類いか程もある事にて、蘭書中には、奇妙不思議の山水景色ある事なり。吾日本の人は、僅の天の逆鉾石を見て奇妙なりとするは、世界の事を知らぬ故なり。

一吾國にて奇妙なるは、富士山なり。此は冷際の中、少しく入りて四時、雪峰に絶えずして、夏は雪頂にのみ消え殘りて、眺め薄し。初冬始めて雪の降りたる景、誠に奇觀とす。富士は駿河の國内より見たるはあしく、二十里、三十里、隔たりて、遠くより望む時は、山を高く見る。低き地より望みては、景色なし。此山のかたちは、世界中になし。元市場と云ふ處は、白酒を賣る處なり。爰にて富士山の圖を板行に彫りて、埒もなく押してあるを、蘭人往來する時、何枚も需むる事なり。さて此山は、神代の以前より燒出し、數千年を經て、四面に砂を吹きふらし、此の如きかたちとはなりぬ。我壯年の時までは、頂より煙立ちけるが、今は煙なし。山嶽は皆世界の開けざる前の物にて、波濤の形あり。此富士のみ、出現の山なり。遠く望むべし。山には登るべからず。天の逆鉾の如き、埒もなき物よりは、此富士を稱歎すべし。夫故予も此山を摸寫し、其數多し。蘭法蠟油の具を以て、彩色する故に、髣髴として山の谷々、雪の消え

埒もなき—つまらぬ

近藤氏—有名なる近藤重藏

しよなり。尤十死一生の思ひをなして、見たるとあるが、此平治兵衛の紀行には、霧島町に宿して、庄屋の家に行き、鉾の一だんを聞きしに、昔より鉾ある事を、人々云ひ傳ふ事ながら、十里も人家なき深山幽谷の道もなき所へ行く事故、誰あつて、其路を知るものなし、身の程を知りたるものの行くべき所にあらず、此五六里の村においては、我は行きて彼逆鉾を見たりと云ふ者は、聞き傳へずとの事なり。予考ふるに、此鉾何の爲に建て置きしと云ふ理もなく、天より降りしにや、國常立の尊の建て給ひしにせよ、何になると云ふいはれもなく、埒もなき事なり。全く自然天然と鉾に似たる似象と云ふ者なるべし。吾國、神代の事は、傳記なし。神代以前は、何れの異國の人住居したるや。播州石の寶殿と云ふあり。四間四面に石を刳りて造る者人工なり。又因州に、熊權現とてあり。皆柱石を以て疊む。是も人工の者にて、何の爲に造りたりと云ふ事を知らず。民俗の云ひ傳へには、古の神、此海へ橋を掛けたまはんとし給ひしとぞ。又蝦夷地に、タサリチと云ふ處あり。是は六角の柱石の數かぎりもなく、海岸皆此石なり。是は人工にはあらず。天然の者なり。近藤氏ヱトロフ島へ、五度行かれし時、庄藏とて、南部の者畫をよく描きしに、蝦夷地を寫させ、其圖を予又寫せり。

天の逆鉾―橘南谿の西遊記にくはし

一人百歳に至れども、欲念の更にぬくると云ふ事なし。老人は恥ぢて云はず。情氣は卽ち神經にて魂なり。活きて動くうちは此念あり。老僧の杖にすがりても、此念心根にあり。鳥の囀るも啼くも、皆さかるゆゑなり。虫の翅を動し、音を出すも盛なり。秋の末に至りて、西風吹き搖落せんとする時、草中に蟲の聲かれ〴〵にす。死に至るまで聲を發するは、神經以てする所なり。天地の中の活物は、奇妙なる機にしたる者なり。是皆天火の爲すところ。

一古川平兵衛が西遊雜記に云ふ、「薩州霧島山は、九州第一の深山にて、幽谷嶮岨かぎりなし。人知る者稀にて、山奥は肥後の米良山に續きて、南は大隅にまたがり、數十里に連りし山なり。高山と云ふにはあらず、深山なり。躑躅の木あまたにして、花の頃は谷々峰々緋の如し。山一面に赤く段々と山奥は、夏までも咲く事にて、東霧島村、西霧島村あり。この山の中、嶮岨の峯に、神代に建てし天の逆鉾とて、數丈の鉾岩上に逆さまに立てり。石にも非ず、金にもあらず、神代の文字にて、銘を鐫りてありと云ふ事、昔より云ひ傳へ、誰一人見たる者なし」然るに京に住する橘石見助は、東遊記、西遊記とて、板本あり。西遊記の中、薩州に至り、此霧島の逆鉾を篤と見たる樣に誌

今日過ぐれば、亦明日となり、竟に老いて死に至る事忽なり。人生白駒の隙を過ぐるが如し。夫れ天地は水と火なり。水火の中に生じ、天地は人の視る處、視ざる處を以て、窮理する者多からず。天の廣大よりして、大地を見れば、一粟の中に生じて、微塵よりも小なり。汝も我も其みぢんの一毫ならずや。予爰を知ると雖も、之を信ぜず。小なりと思はざるは、小慮を以て、能く人間の道理を考ふるに、持つまじきは子なり。子は我後身なり、吾體と同じ。子いためば、我又いたむ。ある人の云ふ、「子なきは子孫斷絶す」と。然らず、吾先祖より糸すぢの如く、連綿として、子々孫々何れにか傳はりなん。其元を知る時は此の如し。佛道にては、此世を修羅と云ひ、亦地獄と名く。死する時は極樂なり。

　寢るは樂起きて地獄の夢を見る寢續にする是ぞごくらく

一宿に婢老婆あり。其愚なる事數々ありけり。ある時、しぶなしの榧を貰ふ。故に煮豆にせんとて、豆も鴈喰とて大なるを取りよせ、喰ひけるに、榧一つもなし。如何と尋ねければ、榧は小口より薄く切りて入れけり。夫故に微塵とくだけて無きが如し。豆もついでに小口にせよと笑ひける。

○人間感

一予七十有餘に及びて、始めて人間と云ふ事を知れり。壯年の時は、古人の遺書を讀みても、其意味深き處は知りがたし。今將に人間と云ふ事を考ふるに、不思議奇妙なる者なり。吾日本は、天照大神人道を開き給ひけれ共、其古より此國の人ありて、獸と共に食を爭ひたるを、大神日向の國、橿原の海濱に都を建てて、人間の道を敎へたるなり。（中臣の祓にあり。親を犯し、子犯の罪）然れば吾先祖も、其子孫にして、天子も我等も同物なり。世界の中には、未開古の日本の如き國、今にあり。夫、人間の道を敎ふるは、智の始めにして、漸々と人智盛んに開け、其中智ある者長となり、而して後上下君臣分れ、爰において亂世の代となり、是誠に禽獸の餌を爭ふにことならず。今方に太平の世にして、古、人間の起を知らず。啻に名利のみを是として、歡樂を極め、食にあき滿ち、此欲の爲に、大に迷ひ、賢きも智あるも、愚も智なきも、共に相爭ひ、身を立て志を得んとて、暑にも寒にも奔走し、貴は駕籠にのり、卑は之を舁き、老いて貧賤なるも、食を乞ひて生を保つは何事ぞや。日々天旋り、四季移る事、幾萬億の後も此の如し。

神祖—徳川家康

九月の末、我をともなひて、郷地に至る。翌日は雨降りて、四五日も滯留す。其時五六町かたはらに、江戸より來り居ける者とて、手習の師匠あり。主人と二人連れして、彼師匠の方へ行きける。夜に入りて歸る。其路盥山洗足寺と云ふ寺あり。是は古へ神祖源君公、此處を御通行の時、老婆の衣類をせんたくしけるを御覽じ、其寺號を御付け成されしとぞ。珍しき名の寺なり。其日の暮方、此寺に葬禮ありと云ふ。其事も知らず。夜半頃染屋主人と、二人通りかゝりしに、其寺の門前とおぼしき處に、白き衣服を著たる者の、腰より下は地よりも離れ、あなたこなたと動く者あり。世に云ふ所の幽靈なり。我も若年にて、此樣なる者今まで見たる事なし。甚おそろしく思ひけるが、其近邊に酒屋あり。寢入りたるを、戸をたゝき起しければ、酒屋六尺棒を手に持ち、「いざござれ世に化物のあらんや」と云ひて、先きに立ちて行く。跡よりおづ〳〵して就きて往き見れば、葬禮の時、紙にて造りたる幡の。木の枝に掛りたるなり。葬禮の時、幡の木に引き掛けたるを、其儘にして置きける、晝も此寺の前は、樹木茂り、薄闇き所なり。殊更夜分故、甚あやしく見えしもことわりなり。

小十人組―将軍出行の時の供奉の士

一今より二十七八年も過ぎし事にて、芝愛宕の下に、村尾權之助とて、小十人組にて、居宅を糀町法眼坂に、人の半建てたる家を買ひ取り、又建てたして住みけるに、小身なる者故に、權之助夫婦と嫡子二十二三歳、弟は十三四にて、下女一人仕ひけるが、ある時、五月雨、日々降りける時、日暮下女泣きて曰く、「今引窓を、火の玉飛びけり」と云ふ。皆聞きて誠なりとせず。其翌日も雨降り、三男玄關の後に部屋を造り、爰に書を讀み居ける時、日もくれかゝりける故、障子を開き見れば、長一丈ばかりに見えて、白髮を亂し、眼は金の如く、手に火の玉を持ち、腰切の衣を著、だん／＼と進み來る。彼童子脇差を以て貫き打ちにしけり。夫なりに氣絶しぬ。其音に皆々おどろきて行き見るに、鞘は手に持ち脇差の身は向うへ投げたり。何故と問ふに、右の如く咄しけり。此庭は法眼坂の下にてがけなり。ふしんの時、狐の穴ありしを埋めしに、必ず古狐のしわざならんと。其翌日吾宅へ父子ともに來り、直に化物に出逢ひし者に聞きしは、初めてなり。

一今より四十年以前の事なり。六郷の川上に毬子の渡りあり。則ちまりこ村なり。爰より二十町餘行きて、郷地と云ふ處の染物屋の亭主は、兼ねて予に畫を學びて弟子なり。

など呑み、又見るにおよびて、色濃くなる。金山より緑砂紺砂を出だすが如く、誠に青色は、日輪の空氣なる色なるを知る。先達て銅板を押す時、其板を日の照し、上に映じて青色に移るなり。

一人國志と云ふ書あり。北條時頼最明寺殿の作と云ひ傳ふ。疑ひ無き事能はず。然れども、天下海内をして、民情を撿察するに非ざれば、斯の如く詳に盡し知ること能はず。今太平にして、風移り化に浴し、古に異なりと雖も、民情古の遺風あり。是皆風氣水土の然らしむる所以なり。今將に此書を閱するに、信濃を以て美國と稱し、隣國の郡村を委しく知る者なり。此書を作る者、信州の人ならんか。日本諸國の人風、美濃を以て譽む。丹後の人は一人として善人なし。古、三生太夫此國の人なり。能く此國の人をかんがみるに、一向能き人なし。又伯耆因幡を以て惡しき國と云ふ。白井權八、因幡小僧、河合又五郎、此又五郎は又左衞門の子なり。又左衞門は、安藤對馬守の臣なりしに、人を殺害して、因州鳥取渡邊數馬が處へ立ちのき、而して後又五郎あり。故に又五郎は、因州鳥取の生れなり。予數々彼國の人を考ふるに、各才あれども愚なり。智あれども取り用ふる處なし。

一一夕土佐の人來りて、獨笑妄言の序を見せしに、讀む事流水の如し。若輩の人なれども才子なり。然れども、是も文字を知りたりと云ふ事を、他に知らするまでにて、其文章の意味一向に知れず。一句ごとに、篤と讀みたき者なり。

一鍋島侯の藩士利昌山領氏の話に、在所佐賀にて、佛事ありて誦經す。一人の僧經をよむ事瀧の如し。一人の僧の曰く、汝經文を疾く讀む事なかれ。音韻わからず。又汝はやくよむを自慢自負とするにおいては、予又是を摸寫せん。爰において筆に墨をてんじ、紙に點をうつ事連綿。汝が疾く讀經するは、此點と同じ。

一人は必ず移りやすき者なり。詩集を讀めば、詩を作りたく思ふ。文章を見れば、文を作りたく、旅談を聞けば、旅して他國を見まほしく、然れども一向の俗人は、書もよまず、只色欲飲酒にうつるのみ。

一和學者とて、日本往古の事を知る事なり。其書を見るに、萬葉假名とて、古事記、舊事記などの言葉を以てしるし、今の假名字のなき古のかなを以てす。古雅にはあれど、和書を讀まざる者にはよめず解せず。

一朝顏の瑠璃色なる花、前朝咲ける。一朝早く起きて、之を見るに、常よりも色淺し。茶

其著物を執へて、「是非に夫を返せ」と云ふ。時に彼男簪の股より二つにして、一分にて魚を買ひ、一分にて酒一壺を求め、揚老子いざこなたへと家に至り、「二人して賞翫し樂しむべし」と云ふ。揚老是を同心して、其魚を煮んとて、先釜の上に置く。さて酒を暖めんとする處へ、鄰の猫魚をくはへて忽ち逃げ去れり。「やれ惡き猫め」と云ひ、杖にて逐ひ撲たんとして、誤りて一壺の酒を打ちこぼし、皿は墜ちて微塵となる。

一文字も皆唐の字なり。聖賢も皆唐の人なり。然らば唐の書籍を讀み得ざれば、理非分明ならず。其意を得んとするうち、文章のおもしろきに心移り、色々と書き貽す事も、皆唐の文章にする者なり。是は心得違ひなり。人によりて書くなど、一向にきらひ、唐の文章を知らざる者に、還りて聖賢の志ある者あり。故に和語にして書くべし。兩道に益あり。大槻玄澤と云ふ人は、仙臺侯の外科にて、蘭學に名あり。頃日、タバコの起原の書を引きて、皆漢文なり、タバコは多くは愚人卑賤の好む者にて、故に此書は世の嘲弄ものとなりぬ。又京東森の隱士無外子圖通と云ふ出家、佛國曆象編と云ふ書を著せり。是は須彌山を是とし、地球を非としたる事にて、萬書を引きて、漢文なりき。文盲なる者ををどす謀事なり。又文學者にも、理に疎き者まゝあり。

談議僧—説教をする僧

を世人忽に知る者多し。名のなき者誤ると雖も、知る者なし。是名を得たるの後悔、今にして初めて知れり。愚なる事にあらずや。夫天地は限りなし。名千歳に殘るといへど、十萬歳に至るべからず。爰を以て考ふるに、名は生きて居るうちの名にして、是皆心得違ひなり。

江漢後悔記の畢

一夷賢志と云ふ書あり。皆因緣因過の事のみを誌したる書にて、談議僧の取りあつかふ者といへり。其中に崑山の揚老と云ふ人、一日門に坐して居けるに、一の婦人前を通る、銀の簪を墜せり。徑のかたはらの石にあたりて、カラリと鳴る音きこえたれば、此女の行き去るを首鼠ひ、ひそかに彼石の處へ行き拾はんとて、往き見れど、簪とてはなし。只蚓の石の間にあるのみ。揚老不思議に思ひ、今鳴りたるははたして此のあたりと見しに、其間に俄に一人の男そこを通り、うつむきて物を拾ふを見しが、彼銀の簪を拾ひ取りたり。揚老是を視て、高聲に呼びて曰く、「夫は吾墜したる物なり。是へ返せ」と云ふ。拾ひたる男は、「何か僞りを云ふ」とて、足疾に去る。揚老追ひかけて、

ひしに、母七十三にして老耄して歿しぬ。さらば家を捨てて、獨歩して、諸國名山を遊覽せんと決しけるに、親族の者頻に留め、聖人の教を以て示し、人道は妻子を以て子孫とし、之に差ふ時は人道にあらず。爰において竟に留まる。是も量見違ひなり。

一さて亦子なき者は物のあはれを知らず。我子を愛するのあまり、其愛他の子に及べり。此情は書にも文にも述ぶる事能はず。然るに段々と生長して後は、各己の志をあらはし、必ず、親の志と差ひ、己の身體、親の躬より出でたりと云ふ事を辨ずる者鮮し。且又孝をつとむる者多からず、親を親とせざる者多し。親は子を子とし、子を思ふの情深し。是己の體より出でたる故なり。今に至りて考ふるに、子は無きにしかじ。

一今西洋の天學、萬造の窮理を以て考ふるに、天地の中、一つとして靜まる者更になし。日輪、五星、地球、月皆動き旋り、一刻も留まらず。元より、生類人間走り動き、惑ひ迷ふ事、天と一物の機なり。目に物の移り、耳に音のひゞき、神經以て之を知り、物欲、色欲、飮食欲、貴も賤も此欲の爲に靜まる事能はず。然るに此三欲に迷ひ惑ふは、活きたる者の性質なり。我名利と云ふ大欲に奔走し、名を需め利を求め、此二の者に迷ふ事數十年。今考ふるに、名ある者は、躬に少しの謬ちある時は、其あやまち

窮理—理を究め調ぶること

處なし。之を寫眞するの法は、蘭畫なり。蘭畫と云ふは、吾日本唐畫の如く、筆法、筆意、筆勢と云ふ事なし。只其物を眞に寫し、山水は其地を踏むが如くする法にして、寫眞鏡と云ふ器あり。之を以て萬物をうつす。故にかつて不見物を描く法なし。唐畫の如く、無名の山水を寫す事なし。又畫を作るに。五彩の畫の具は、皆膠水を用ひず、蠟油を以て、調和して之を造る。貴人の席上、酒邊の傍にて畫く事能はず。文字と同じく戲に畫く法に非ず、國用の具なり。吾國の人は、萬物を窮理する事を好まず、天文、地理の事をも好まず、淺慮短智なり。予此日本に居て、吾國の人に差ふは、甚しき謬なり。

一予壯年の時、老母一人あり。親をば十四歳の時失ふ。かつて妻子なし。母の性質剛直にして貞實なり。孟子の母の如し。故に三十有餘にして。妻を娶らず。ある時考へ思ふに、生涯妻子を求めずして、母沒しぬる後に至りては、日本諸國を遊歷して、而後には京攝の間に住居して、昔此地に旦丹（旦丹は淡淡なり）と云ふ俳諧師歳八十餘まで存在して、妻子なし。十一二三歳なる童女を多くかたはらに置き、左右の物を取らしむ。彼が自筆を得る者鮮し。皆童女をして代筆なさしむと、予此タンタンが人となりをした

唐にても、古へは呉道玄皆神僊を畫く。多くは仙佛なり。後代となりて、花鳥山水人物も、ともに神佛に非ざる者を畫けり。今三幅畫とて稱する者、中尊左右を脇畫と云ふ。必ず、中は人物にす。世俗釋迦、觀音の類は佛なりと。人死ぬれば佛となると云ふ。爰において、中尊壽老人左右鶴龜松竹の類なり。吾日本にて、妙畫と稱する者探幽なり。咸筆の法とて、一拂にして、人物、山水、花鳥を描く。誠に奇絕の技なりとぞ。此風天下に流行す。中興唐畫風と稱するは、宋朝、明朝又は今の清朝の畫を寫し得て、唐畫家と云ふ。何れにしても國用の物にあらず。皆翫弄物にして、今にては只床の間の掛物とするのみ。床、違だな、書院とて、古の遺風なり。只名のみにして、其の古事を知る者なし。書院には必ず文出し机とて、傍に一間ほどの處に窓あり。其窓にあかり障子を四枚立つ。えんの方へ差し出したる者なり、今において田舍にはあるものなり。江戸は數々火災にて、諸侯の家にも書院の名のみにして、文出し机なし。然るに畫の妙とする處は、見ざる物を直に見る事にて、畫は其物を眞に寫さざれば、畫の妙用とする處なし。富士山は他國になき山なり。之を見んとするに、畫にあらざれば見る事能はず。然りといへども、只筆意筆法のみにして、富士に似ざれば、畫の妙とする

一唐橋世濟とて、下谷竹町と云ふ所に居て、儒者なり。吾近隣に宗元といふ醫者あり、世濟爰に來りて書を讀み、或は講釋す。ゆゑに予も行きて學びぬ。先生題を出して、詩を作らしむ。予も詩の下に誌すに、唐風に非ずば風雅にあらずとて、名は峻、姓は司馬、字は君嶽、號は江漢とす。峻嶽を以て名字とす。江漢とは、予が先祖は紀州の人なり。紀の國に日高川、紀の河とて大河あり、洋々たる江漢は南の紀なりと、故に號を江漢とす。其後如來先生に逢ひしに、江水、漢水とて二水の名なり 之を合せて名としたるを笑ひけり。略人に知られければ、江漢にして置きぬ。これも謬とぞ。

一畫は、貴賤共に好むものにて、別けて彩色すれば、俗眼に入りやすし、今唐畫と云ふも、和畫と云ふも、元は皆唐畫にて、富士は日本の名山なるを寫しても、描きかたは唐の法にて、吾日本にて、始めて工夫したる事は一つもなし。然るに日本往古は、家の內皆土間に居立したる事にて、今は總床となり、土間の遺風のこりて、床の間と云ふ處を傍に設く。總て土間の時は、主君此床に坐し、從ふ者は土間に坐す。しき物あり、坐しきと云ふ。黃檗派の禪僧拜の時、下に敷物あり。是を坐しきと云ふ。今に家の內に坐敷の名あり。其後主君に替へて掛物とす。故に釋迦、達摩或は維摩の如き、

如く石の如き物現る。之を見るの術あり。我等も是にも加はりしに、甚しき間違ひ見損じある事にて、後悔し止みぬ。

一我が先祖に畫を描きし者ありけるにや、吾伯父は、吾親の兄なり、生ながらにして畫を善くす。其血脈の傳はりにしや、予六歳の時、燒物の器に雀の模樣ありけるを見て、其雀を紙にうつし、伯父に見せける。十歲頃に至りては、達摩を描く事を好みて、數數畫きて伯父に見せけり。後長じて狩野古信に學べり。然るに和畫は俗なりと思ひ、宗紫石に學ぶ。其頃、鈴木春信と云ふ浮世畫師、當世の女の風俗を描く事を妙とせり。四十餘にして俄に病死しぬ。予此にせ物を描きて、板行に彫りけるに、贋物と云ふ者なし。世人我を以て春信なりとす。予春信に非ざれば心伏せず。春重と號して、唐畫の仇英、或は周臣等が彩色の法を以て、吾國の美人を畫く。夏月の圖は薄物の衣の裸體の透き通りたるを、唐畫の法を以て畫く。冬月の圖は、茅屋に篁繞り、庭に石燈籠など、皆雪にうづもれしは、淡墨を以て唐畫の雪の如く隈どりして、且其頃より婦人髮に鬢さしと云ふ者始めて出でき。爰において、髮の結び風一變して、之を寫眞して、世に甚だ行はれける。吾名此畫の僞に失はん事を懼れて、筆を投じて描かず。

の事を仕組みたるもの

東都—江戸

の渡と云ふ義太夫淨瑠璃、人形芝居の狂言の作をす。淨瑠璃は、大坂よりはじまりて、近松門左衞門の作多し。故に大坂言葉なり。夫を源内は、江戸言葉としたる故にや、甚だ珍しく、爰に於て世俗源内の名を知る。源内又おらんだの奇物を好みて、其頃は蘭學者も少く、杉田玄伯、中川順庵のみ名あり。源内はヨンストンスと云ふ蘭書は、五六十金の物にて、家財夜具までも賣り拂ひ、此書を得たり。此蘭書は、世界中の生類を集めたる本にて、獅子、龍、其外日本人見ざる所の物を生寫にしたる事、かずかぎりなし。今は此書も所持したる者ありけるが、其頃はかつてなし。其後に長崎へ行きけるに、昔獻上せしに、不用とて長崎へ持ち歸る。此物通詞の家に數年ありけるゆゑくづれ損じ體なしになりて有りけるを、源内東都に持ちかへり、數日工夫をばめぐらし、竟に考へきはめたり。是今ある所のエレキテルなり。大名、小名之を見物す。爰において源内を奇人と稱す。然れども、只紙の動き飛ぶと、火氣の光り見ゆるのみにして、人の體へ動ずる事なし。彼ビイドロの壺もありけれども、何にする物と云ふ事を知らず。源内死後におんらだより渡り來りて、今に至りては見せ物に出だし、世俗の人も見る事とはなりぬ。源内は嘗て金銀銅鐵の山にあるは、山頂に立と云ふ岩の

靜謐―泰平無事

火色―あざやかなる鳶色

本草者―博物學者

神靈矢口渡―新田義興

れんと思ひしに、今天下治り、國靜謐なれば、古刀の名高きを以て武門の裝とし、新刀を用ひず。亦人を伐斬する具にして、凶器なり。故に後悔し止みぬ。又目貫緣頭、皆刀脇差のかざりなり。治世には之を翫弄する者多し。則ち後藤彫とて、其家代々を以て名作とす。其頃、宗與、宗珉又躬卜とて、高彫を略して、肉あるとておきあげの如く、肉高に彫りて、人物蟲魚に至るまで、妙工をなす。又、宗珉といへるは、英一蝶の下畫にて、草々としたる咸筆をうつし、片切彫とて毛彫にして一流を工夫す。其二代目宗與も、之を次ぎて妙手とす。畫に譬へて云へば、後藤は高彫とて、金銀其外赤銅、火色、四分一、色々にまじへて形とす。是極彩色の如し。躬卜と云ふは、肉ある彫にして、薄彩色の如し。宗珉、宗與は墨畫の如し。各一流を工夫して、一家を爲せり。此上の工夫に非ずば名を得る事かたし。爰において止めぬ。其頃平賀源内とて、讃州の人なり、江戸神田お玉が池と云ふ所に住す。源内は物産家にて本草者とて仕官を好まず、浪人者なり。其頃八重霧と云ふ歌舞妓芝居の女形、兩國三つ股にて、蜆を取るとて、水に溺れて死せり。之を源内戲作して、地獄に落ち、閻魔王の前にて、狂言をする事を、讀本にして、世の人甚珍らしき新作とて、おもしろく思ひ、其後神靈矢口

眷屬―身內、中間

を忌み嫌ふ事なり。故に外に竈を造り、鼻に氣の入らぬ樣に、長き竿を以て煮たる故、あんばいあしゝと云ひければ、夫故に吾生血を呑みたる事を聞く者、鬼の如く思ふも尤ぞかし。

一佛國曆象編と云ふ書、今年開板して、全部五册、一册五十餘丁あり。京東森隱士、無外子釋の圓通撰する者なり。其書を閱するに、須彌山を以て是とし、地圓球なる者に非ず、日輪中には日天子あり、其眷屬あり、月中にも月天子とて、又眷屬あり、月食は地景にあらず、羅睺計都食をなす、暗氣と云ふ者なり、須彌山は九山八海とて上を北とし、下を南とし、日月橫を旋る。今天下に用ふる處の曆象考正及地球なる說を悉く非として、梵曆と云ひ、天竺釋迦在世の時の法を以て是としたる書なり。

〇江漢後悔記

一我今年七十有餘にして、始めて壯年よりの誤を知れり。我若き時より志を立てん事を思ひ、何ぞ一藝を以て名をなし、死後に至るまでも、名を貽す事を欲して、初め刀を作らんとせしに、刀は武門の第一の器なれば、之を造り後代に殘し、名を後世に知ら

小つか―刀に附屬せる小刀

一間宮林藏と云ふ人、蝦夷の奥へ冬月行かん事を好みて、文化午年十一月、此地を發して、辛未正月にかへる。六月二日、予が家に來る。冬月は海川皆氷となる故に其上を渡り行く。故に行きやすし。唐太の地に、トナカヒと云ふ獸あり。大さ大八車を引く牛程ありて、頭に大なる角あり。全體鹿の如し。蹄もわれてあり。牛の如く馬の如く、畜ひて甚だ用をなすと云ふ。おらんだにては、「レンシイル」と云ひ、支那にては、馴鹿と云ふなり。唐太は、領主もなし。都會の地もなし、一向の不毛の地なり。滿洲人、蝦夷人と少しの交易をなすのみ。

一備前岡山より二里過ぎて、宮内と云ふ處は、茶屋あり、遊女ある處なり。夫より二里右の方へ入る、足守に至る。爰は木下侯の領地なり。留まる事數日、予鹿の生血を啜らん事を云ふ。領主俄に狩に出でられけるに、漸く鹿一疋を獲たり。則ち生きたる鹿の耳元を小つかを以て衝き破り、血を啜りければ、人々懼れをなしける。予薄弱なれば鹿の生血は至りて肉を養ふ良藥と聞く、然れども得がたき物なり。又ある時、鹿の肉を喰はんとて、料理人に云ひ付けけるに、煙臭くして、一向に喰ふこと能はず。何なる故と問ふに、此所は吉備津の宮あり。皆其神の氏子なるにより、獸類は、穢とて之

御家人―徳川の臣

年火事あれば、武家町家共に衰微することなり。ある人の咄に、鳥見と云ふ役人四五輩、田舍へ行きたる時、村の庄屋の宅にて、晝食するとて、其飯を喰すると、忽ち死にけり。何なる事と吟味したるに、飯の中にトカゲと云ふ蟲あり。飯をめしつぎにうつす時、上より落ちたる者と思はる。其飯を炊く者、十七八の女なり。然るに五人御家人を殺したる故、此女罪なしと雖も殺されたり。予考ふるに、毒蟲の飯器に入りたるも知らずと云ふは、元疎草とは云ふべからず。迂濶の至りなり。又芝牛町の火事は、タバコの火より出でて、又谷町の火事は、一人者火を焚きかけ隣へ行きたる跡にて、火事となる。大風の時、火を恐れざるは倉卒とは云ふべからず。總て江戸の人は、京の人と違ひ、綿密にあらず。其上近國近郷の者、奴僕となり、此者共、火を恐れざる黨なり。然れば、火を出だす者は一人なり。重き罪科に行ふ時は、火事少かるべし。扨冬月火事ありて、夏月なきは、夏は天氣地を照す事つよし。故に地氣上升する事さかんなり。萬物皆濕りて、火移らず、冬月は天氣薄く、地氣升らず。故に萬物乾きかれ、水氣なし。故に少しの火にても、物に移る事早し。

安樂世界―所謂天國なり

欲の爲に迷ひ苦しむ、之を「パラディス」と云ふ、安樂世界に導き給ふ敎なり、此世は假の世、此世にて難行苦行して、首切られ、重き罪をうくと雖も厭ふ可らず、忽ち安樂世界へ產れ、天帝の憐を受け、無量劫が間死すると云ふ事なしと敎ふるなり。是れ釋迦の須彌を立て、地獄極樂の方便と同じ。又禪宗の悟と云ふも基く處は、同じ事にて、只譬喩方便を打ち貫き、天地の虛空より、人間萬造皆現れ、亦本の虛無に歸ると云ふ究理を知り曉す事なり。寔に異端の敎なれば、常人はかつて學ぶべからず。若、此悟を學ばんとならば、六十餘にして學ぶべし。壯年の者學ぶ時は、天壤の廢物となるべし。

疎草―過失

一火事の事は、每々疎草と云ふ事にて、火を出だしたる者、格別の罪なし。何故と云へば、貴人の家よりも、火を出だす事有りと云ふ事なり。貴人大家は從者多し。下々の輕き者なほ多し。火を疎末にする事は、輕き者なり。一年切の奉公人にして、家なければ、貨財なし。寒月は衣服うすければ、火を以て凌ぎ、火を少しも恐れず、火事あれば幸なりと思ふ者多し。大工、左官、屋根ふき、其下をはたらく者、火事を待つ事、吉事を禱るが如し。江戸は、昔御入國の時分は、八百八町ありしに、今は千八百八町

たり。更に妄念起らず、只松風の音のみして、如何なる凡人も心澄み、塵外に出でたる心ちし、夫より右の方山に登り、深林の中を過ぎて、裏門へ出づ。出家は律僧のみ、寔の出家なるべし。朝、粥を食し、四時過ぐるに飯を喫す。其餘食を求めず、湯茶のみなり。亦戒を保つ事、五戒、十戒、或は四十五戒とす。

一森侯は、播州赤穂なり。大川量平と云ふ醫者ありける。文人才子なり。隱居して常に京に出でて學者と交る。鬚長く白し。顏色唐人の如く、常に唐服を著て、予に生寫しを賴む。畫にしては日本人とは見えず。然るに只文學の長じたるのみにして、經學、實學、天學甚疎し。先達て七十餘にして故人となりぬ。今の醫者皆其弟子なり。其學風にして、文字の事は甚だ明なり。其中神木主膳、學醫の一人なり。

一貴賤上下共に學ぶべき者は、聖人の道なり。只、論語、大學を幾遍もくりかへし讀むべし。佛の敎は學ぶべからず。異端の敎なり。八宗、九宗共に本源の起は、西洋の天主敎なり。釋迦爰に基く者なり。天正の頃、信長切支丹を信用して、近江の國に南蠻寺を建て、宗法を弘めしに、其敎に曰く、天地の始まらざる無量劫の時、天帝天地日月を造り、後に衆生を生じ、天帝之を憐み、末の世になりては、人智の私を以て、

方丈―住職の僧の居る家

病死す。文化八年辛未まで九十七年になるなり。是義大夫節の起なり。

一蒼田變じて海となる。湖水或は河、自然と山嶽の砂石流れ出でて、河は湖中に入り、年年にして溢れ、皐に至る。今淀川稻葉侯の城内へ、水車を以て水車の水を入るゝ仕掛なれど、其水車一向に運らず。淀の川瀬の水車とて、世に名高し。故に取除けもせず。今は淀川淺くなり、城内は低くなり、河水皐に溢るゝ故なり。諸國此うれひ多し。關東の河は泥川也。中國西國は流河にして砂石多し。

一常人は悟るに及ばず。出家は出家たる名の如く、宿なし。されば物々事々に離れ、是も非もなし。然るに、釋迦須彌山を造りて、八萬法藏を說く。八萬の法藏皆譬喩方便なる事を知らず。今の僧は其經文に迷ひ、人を濟度する事はさておき、己一人に敎ふる事能はず、常人と共に大迷ひなり。釋迦が佛になれと敎へたる事を、能く考へ知るべし。

一ある日、目黑新寺とて律院あり。門に入るあたり、塵を掃ひてうるはし。しばし行けば、三界外相の碑あり。僅に登りて山の中腹に出づ。方丈は山下にあり。正面に本堂、本尊は釋迦佛、黃金泥色其作妙なり。堂中の傍、木魚を擊ちて一人の僧あり。我足音を聞きて、後を顧みる。生きたる者氣の動く處なり。然れ共實に精舍にして人跡絕え

傀儡師—人形使ひ

受領—國司の榮爵を授けられたるなり

檢校の兩法師、三味線に合すとなん。

一天正年中角澤より傳はりて、薩摩治郎右衞門、攝州西の宮傀儡師の人形に仕立て、十二段をかたる。永祿年中六字南無右衞門女大夫と、京四條川原に芝居す。

一薩摩は法體にして、淨雲と云ふ。淨瑠璃大夫の根元なり。其弟子四人あり、江戸肥前、同外記、同土佐とかや。永閑半大夫、河樂流說經與八郎、歌念佛日暮林凊、都大夫一中、是は本願寺派の出家なりと。寶永正德のころなりき。都古路國大夫は、一中の弟子、初の名は半中、又元祿年中岡本文彌一流をかたる、文彌ぶし是なり。然し、是等は皆一段淨瑠璃にて續物にてはなし。寛文の頃、大坂に井上市郎兵衞、井上播磨之掾、藤原要榮、門人井上市郎大夫、淸水理兵衞。此理兵衞は安居天神の邊の料理茶屋のよし。播磨は貞享二年丑五月十九日五十四にて病死す。其風をのみこみしにや、淸水をば今播磨と云へり。竹本、豐竹共に此風なり。

一攝州東成の郡天王寺村の百姓、井上に從ひ、淸水理兵衞に學び、貞享二年乙丑の年、道頓堀に芝居を興行す。是を義太夫と云ふ。淨瑠璃作者近松門左衞門も、其頃の人なり。義太夫は、竹本筑後之掾、藤原の博敎と受領せり。正德四年午の九月十日六十四にて

簾中—公卿諸侯の妻

福とならんと欲するには、無常を少しも觀ずる事なかれ。常に心を強く忍んで、萬事世に願を叶ふ可らず。所願は無量なり。欲に隨ひて志をとげんと思はば、百萬の金も忽ち失はん。所願心に芽す時は、我を亡すと心得、少しの事にてもなすべからず。金銀をば君の如く、神の如く恐れたふとみて、從へ用ふる事なかれ。恥に望んでも恥とせず、衣食住のつひえをはぶき、己の業をおこたらざれば、大福人となる事忽なり」然れども、金を積みて用ふる事なきは、貧乏と同じ事なり。大欲は無欲に似たり。

一淨瑠璃と云ふは、永祿年中織田信長の侍女に、小野のお通とてありけるが、信長生害の後は、太閤秀吉の簾中と稱せらる。徒然に、源氏物語にならひて、昔左馬頭義朝の末子牛若丸、金賣橘次と共に、鞍馬山を出でて、奥州伊達秀衡方へおもむく折から、三河の國矢矧の長者の娘、淨瑠璃御前と忍び逢ひたる古事を、お通草紙物語につくりしとぞ。御前と稱するは、幼若なる男女の事なり。六代御前とは、小松の内大臣重盛の息男の事なり。女と心得たる者多し。又靜御前は義經の愛妓なり。

一鳥羽の院の御宇に、信濃前司行長入道平家物語を作る。生佛と云ふ盲人節を付けて、琵琶に合せて語る。生佛に學んで、琵琶法師十二段に節を付けたり。瀧野檢校、角澤

鰥寡孤獨｜老いて妻なきを鰥といひ、老いて夫なきを寡といひ、幼にして親なきを孤といひ、老いて子なきを獨といふ

あり與ふべし。拜するとも拜せずとも、勝手次第なり。夫吉凶は、星のあづかる所にあらず。然れども火星を蘭語にては、マルスと云ふ。摩利支天の事か。眞言にては、皆星などを以て神としたる者なり。禱りても祟なし」と云ひ聞かせければ、「是は麁忽なる事を申しけり」とてかへりける。

一岩國に至り、彌山が嶽に登らんとて、其路犬戻しとて、岩石をあらはし、飛泉流れ、誠に岩國とは、爰を言ふか。農夫、樵夫の路にして、漸く過ぎて、一村に入る。五六歳の童女、三歳位の兒を背におうて行くあり。此者兩親に離れ、外によるべき者なし。一村中の食の餘りを請ひて助かりぬ。家はあると見えたり。鰥寡孤獨の者は領主より助けすくふべきに、此國の大夫舍と云ふ人は、賢人にて、學問したる人と云ふ事を、其頃に聞けり。行き渡らざる事と見えたり。世には唐めきたる事を好み、風流なる人を誤りて、學者と云ふ者多し。

一ある者子を法師にせんとて、學問させければ、佛經おもしろからずとて、文學を好みて、古人のふるまひをしたひて、色々に心移りて、佛の道は更に知らざりき。

一大福長者の曰く、「まづしくては生きたるかひなし。富めるのみを人とす。然るに、大

登るべしとて、加奈川を發して、戸塚邊にて家臣の者に逢ひたり。予チト云ひ殘したる事あり。幸に大井河の渡を賀す、飛便ありと云ふによりて、一封を賴み遣す。其事は領分巡見の小百姓を按撫するの謀事は、老いたる者をば駕の傍へよび、白扇樣なる物か、菓子樣の物をつかはされたりと云ふ事なり。百姓と云ふ者は、誠に愚直なる者にて、其國の領主をば、人間には非ず、神なりと思ひ居る事にて、一度拜すれば、一生涯あんおんにしてわざはひなし。故にや老婆老夫皆出でて、珠數を以て拜む事なり。闇君は死なざるわれを佛にするとて、嫌ふ者もあり。是は大なる量見違ひなり。上として下の百姓をば憐むにしくはなし。民の父母なりと云ふ事を知りて憐むべし。吾数の如く極老の者には、駕の前へよび、手自扇樣の物を下され、中老には菓子など下されければ、誠に有難がる事涙を流しければ、予も共に落涙せしと、吾方への文通にあり。今の諸侯には珍らしき御方なり。

一文化辛未六月五日、熊谷邊の百姓とて、六十に近き者來りぬ。其者の曰く、「先生の所に、星の圖あるよし、吉田氏の親類より承る。其星の圖を以て、毎朝水を捧げ禱れば、家繁昌して災難を免るゝよし。此守を頂戴仕度」と云ふ。予一笑して云ふ、「星の圖

左にめぐり居るもの、柱時計の振子と同じ作用をなす

本陣―貴人のとまる宿屋

一此國の風とて、無類の物を寳として、萬金を以て換ふるは愚なる事なり。たぐひ二つあれば、其價をひくうす。唐畫など一向すゝけ破れ不明をも、名の聞えたる筆跡をばたふとみ求む。假令眞物にもせよ、何の益あらん。

一往古、佛道の此國へ渡りしも、此の如き佛像を尊拜すれば、何の爲にすと云ふ事わきまへず、上天子も是を信仰して、寺院佛閣を建て竝べ、今の世となりても、寺領をそくばく付けられ、無用の僧高官に居れり。天竺にては天下を治むる爲に設けたるなり。上たる者の信仰する者にあらず。下の愚民に布き、忽ち善心とする謀事也。故に地獄極樂を以てす。

一阿部侯初めて入府の時、江戸發駕の日は、天氣もよく、品川までは皆々出入の者送りけれど、夫より先は予一人なり。又川崎本陣田中兵庫方にて出會し、箱根まで參るべき旨申上ぐ。予は歩行故に、漸く加奈川に、跡より參りしに、此所は先刻御出立と申す。日も晩景なれば、此所に止宿して、明朝早天に出立して、小田原は泊り故に、夜に入りても能きと考へ、其積に決し、翌朝起き見れば、大雨なり。夫故にとても小田原まで行く事かなはず。然れども何分箱根へ行き、湯治場を見物して、歸りに大山へ

根付時計—今の懐中時計

天府—懐中時計の中にありて右に

至りて明なり。己をはかる時は暗し。他の非を見て、己に教ふるにはしかじ。譬へば、往來にて、奴僕とはなししながら、又はいかり腹立などしたる見にくし。獨して笑ひながら行く者あり、女をふりかへり〱見て行くあり、鼻の穴へ指さしいれ〱して行くあり。見惡し。

一長田春臺と云ふ森侯の醫のはなしけるに、「某と云ふ儒者、病をうけて死にたるに、腰に金を結び付けてありけるを見て、皆々興さめぬ」

一人は兎角己が好める事のみほむる者なり。徂徠が己が國を夷狄と書きたる如し。

一文化八年四月十四日、武州大相模の不動大聖寺に居たる禪僧壽山和尚參りて、蕎麥を出だしければ、初のほどは、汁かけて喰ひけるが、後は汁かけずに喰ひける。「汁はきらひか」と問へば、「イヤ好きなり」と云ひつゝ、汁はかけざりき。歸りて後思ふに、汁の中魚味あるかと疑ひしなり。出家はさも有りなん。

一ある時、阿部侯へ參りたる時、次の間に近臣の居けるが、予根付時計持ち行きけるに、天府のせはしなく、かち〱と廻りければ、「是は命の縮む樣なる物」と云ふ。卽ち縮むなり。日々死に近寄ると云ふ事を知らず。

一友とするに悪しき者七つあり。一に高くやんごとなき人、二に若き人、三に病なく身つよき人、四に酒好む人、五にたけくいさめる人、六にそら言する人、七に欲ふかき人。

一能き友三つ。一に物くるゝ友、二にくすし、三に智慧ある友。物くれる人は、必ず、金持に非ず、大氣なる人を云ふ。又醫者は、世に多き者なり、多くは庸醫のみなり。又智ある者、皆わる智多し。

一高倉院の法華堂の三昧僧某の律師とかや云ふ者、或時鏡を取りて顔をつく〴〵と見て、吾貌の見惡き心ちしければ、其後は長く鏡を忘れて手に取らず、更に人にも交る事なし。御堂のつとめのみして籠り居たりと。良人才子も、他人の事のみ謀りて、己をば知らず、我を知らずして、外を知ると云ふ事あるべからず。己の貌の見惡くければも知らず、心の愚なるをも知らず、藝のつたなきをも知らず、身の數ならぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病の身を侵すをも知らず、死の近き事をも知らず、行ふ道の至らざるをも知らずと、兼好もかく云はれけり。

一いかなる愚人にても、己は智者なりとして、且愚と云ふ事を知らず。己の度量を知る事至りてかたし。年老いて漸く知る者ありと雖も、多くは知りがたし。他を謀る時は、

何も持たであらまほし。

一あらえびすの云ふ、「君は子を持ちたるや」と云ふに、「子なし」と答へければ、「さてはさては物の哀は知りたまはず。親妻子の爲には、世に諂ひ、恥をもわすれ、盗もする心になるなり。其ぬす人を罪せんよりは、上たる者奢をやめ、費をはぶきて、民を撫で農をすゝめ、下に利あらん事うたがひなし。衣食住に足りたる人、ひが事するこそ盗人と云ふべけれ」

一西大寺靜然上人、腰屈み眉白くして、内裏へ參られ、西園寺内大臣の云ふ、「あなたふとや」と申されければ、資朝卿の曰く、「是は年のよりたる」と申されける。

一蟻の如く集まり、東西にいそぎ、南北に奔り、貴あり、賤あり、老いたるあり、若きあり、行くところあり、歸る家あり。夕に寢ねて朝に起き、いとなむ所何事ぞや。生をむさぼり、利を求め、已む時なし。身を養ひて、何事を待つ。期する所只老と死とに有り。其の來る事速なり、念々の間に留まらず、是を待つ間何の樂みかあらん。惑へる者は、是を恐れず、名利におぼれ、先途の近き事をかへり見ず。愚なる人は、又是をかなしむ。常住ならん事を思ひて、變化の理を知らざればなり。

ほだし—束縛

以下七章徒然草よりうつす

を好みて、五十餘にして病死しぬ。今は孫の代なり。珍らしき商人なり。文化八辛未年しるす。

一大名などは心がけ大切なり。猛毅なる時は、人恐れて從はず。懦弱なれば、内より亂れ敝る。

一志の同じ樣なる人は、今始めて見ても、昔より知る人の如し。

一白頭如新、傾蓋如古、何則知與不知。おのが身に化さるゝをば知らずして、狐たぬきをおそれぬるかな。

一悟りても身より心をしばり繩、とけざるうちは凡夫なりけり。

一無と云ふもあたら言葉の障かな、むとも思はぬ時ぞむとなる。

一妙法、阿字眞言、佛阿彌陀、四十九年一字不說。莊子曰、不言敎。

一つれ〲草に、何がしとかやいひし世すて人の、此世のほだしもたらぬ身に、たゞそらのなごりのみぞをしきといひしこそ、誠にさも覺えぬべけれ。

一人死して財の殘るはあしく、又よからぬ物たくはへ置きたるもつたなし。後には誰にと心ざす物あらば、生けらんうちにぞゆづるべき。朝夕なくてかなはざらん物の外は、

者、商家にてありけるが、日野は一向往來のあらざれば、人の通行なし。故に商の手立なし。總じて近江の國の人物は、心肝大きく思慮あり。日野はみせを開き、商人の體見えず。然るに、富商多し。又此近きに八幡と云ふにも富家あり。其地貧にして渡世なりがたき邊土は、必ず、富める者あり。吾近鄕に產する物を買ひ取り、他國へ行き、之を賣り、又其國の物を求め、他所に行き、是をひさぎ、吾國に歸るに及んで、吾國になき物を求め來るを交易と云ふ。見世を開き商をするを、賈人と云ふなり。往來の路傍に、一膳飯を鬻ぐ者は、生れし其處を離れずして渡世のなる故に、生涯一膳めしを以て終る。彼源左衞門と云ふ人は、僅の元金を持ち、奥州仙臺に行き、此の地に綿を生ぜざる事を考へ、大坂より綿、木綿、古著の類を買ひ取り、仙臺へ船まはして、賣りけるに、初は少々宛の商ひして、後、年を追ひて大商となり、今に至りては、人五十人を使ふ程の見世を張り、中井新三郎と家名して、今三代目なり。其外下總の相馬、太田原邊へも見世を出し、今において三十萬金の富商とはなりぬ。予二十五年以前長崎へ行くとき、此日野に寄り、老人にも逢ひしに、俤六十位に見えしが、實は七十に餘れる老人なりき。この三年以前に、九十餘にて病死しぬ。二代目は酒など

萬騎如レ雲宇水邊　東關諸將各爭レ先　功名誰出ニ四郎上ニ　一馬化レ龍何着鞭

右は一休の狂詩

一一休は文明十三年に寂す。文化八辛未の年まで三百三十年になる。此一休ばなしと云ふ書、百八十年以前、寛永年中に出來たる本なり。畫の古風なる事、今の風俗に比せば、甚しき違なり。

○貧福の論

一貧を貧としては、貧を知らず、福を福としては、福を知らざれば、貧福一物なり。然れども、福を福とせざる者よりは、貧を貧と思はざる者、世に聞えよし。顏回の如き臂を曲げて枕とし、樂しみ此中にありと雖も、我等が量けんにては、不自由なんぎなる事なり。福を福とせず、金銀貨財一時に滅亡すといへど、少しも之を憂へず、自若たる者は、福を福とせざる者なり。是も亦難き所なれど、貧を貧とせざる者よりは、行ひ安かる可し。

一近江國水口より三里入りて、日野と云ふ所、岡本町と云ふ所に、中井源左衛門と云ふ

生年十六美男兒　身命碎珠回レ馬時　熊谷道心從レ此發　法然庵室念阿彌



人間の機を考へて云ふ

活者(いきもの)は水で包んで火で動く薪を喰うて腹は竃(へつつゐ)

文化八年三月二十八日　不言道人

景法師

元來有レ物不レ離レ身　揚レ手同揚伸レ足伸　全體分明無二面目一　起居動靜似レ侮レ人

梅法師

往昔江南沒落時　起二青道心一成二法師一　欲レ問横斜疎影古　伊勢壺底暗皺レ眉

虱

獨臥二寒衾一患幾千　余身貧極有レ誰憐　夜深依レ被二半風食一　天到二曉鐘一未レ作レ眠

男根

一生忍衆動焦レ身　八寸推根倘勝レ人　入道修行若時事　須臾老去革頭巾

女淫

元來有レ口更無レ言　百億毛頭擁二丸痕一　一切衆生迷途所　十方諸佛出レ身門

熊谷敦盛

右と同じ

四山—平—幽—源—化—佛—惱—亦

六山—夏—涼—風—煩—寂

八山—冬—素—雪

七山—里—放—光

五山—瀧—吟—落—碧—三

三山—海—浪—高—船—片—雲—社

一山—廟—等—一—扶—桑—神—片—漲—景

二山—客—成—群—數—萬—人—輪—塵—春

四山—樓—鏡—動—月—輪—惱—宮

六山—谷—洗—流—煩—本

八山—花—猶—馥

出でず。一休の曰く、「腹中に篤と納まりたれば、嘗て出でず。糞になりともいたすべし。各〻もおかへりあれ」と云はれけりと。

一或人、ふぐといふ魚を喰ひて死す。一休に引導を頼みければ、「我行くに及ばず、書付して遣はすべし」とて、

海中有二毒魚一。名云二河豚魚一。面腹白背斑。人不レ食二此魚一。嗚呼痛哉、亦治郎食レ之忽死。彼歳五十四。又彼歳五十四矣。合せて數珠の一連百八煩惱のきづなをふつゝと截りて行きたい方へとゆけ。

一一休高野山に登りて山形の詩

七山—秋—葉—落
五山—春—開—花—發—空
三山—迎—連—峰—報—佛—心—亦
一山—高—近—都—卒—內—院—土—進—空
二山—閑—表—華—藏—世—界—地—醒—寂

をさまる樣に工夫して、過度するな。是は能きあんばいぢやと云ひて、やり過すな。中位の所が大事ぢや。聖人は危を嫌ふとて、爰を踏んだら、あすこが上らう、あぶないと云うては、何も出來ず、馬にも舟にも乘る事ならず。兎角己を知るにあり。

○一休ばなし

一一休の事は、京洛中にて、不思議の名僧にて、凡僧と違ひ、魚をむしやくと喰はれける。其喰ひたる魚を吐き出だし給へば、忽ち小魚と化して、水中に游ぎあそぶ。奇妙なる事なりと、評判するを、一休聞き付け、さらば衆人の目を驚かさんとて、「來る何日下松のほとり、紫野において、魚を喰ひて、其まゝ元の魚を吐き出し、水中にてをどらしむる事なり、おのぞみの方は、見物に參るべく、大夫天下老和尙一休禪師」と自書して、町の門々へ張る。自筆の張札を各見て、其日には、京中の者、群集して、一休の門に至りければ、庭の眞中に大盥に水をだぶくと盛り、其傍に色々の魚を皿に盛りける。見物の者、今かくと待ち居る處へ、一休奥より出でて、皿にもりたる魚を殘らず喰ひつくし、夫よりして彼盥に向ひ、吐き出ださんとせられけれ共、一向に

えざるはいかん、實に愁ふる心なきか。天摩屋笑ひて云ふ。吾十年已前子なし、只十年已前の如し、なにの憂ふる事のあらんやと、さつぱりとしたる顏色。是等は彼の輪奈を拔けたる人か、未生以前の人か、生きて居るか、死にて居る人か、形は人にして情なし。人として人の情なきは、何を以て人と云はん。昔子を先だてし人の歌とて、

有るもののなきこそ本のすがたなれとは思へどもぬるゝ袖かな」

一予考ふるに、何事も耽けるよりして、躬を損ふに至る。度量過さず、中庸が宜し。片々よつてはあしく、世の中の人を善事に導き敎へても、善人になる人は生れながらに善心なり。惡人にはどう敎へても惡人なり。惡人がある故に善人も知らるゝなり。皆世上の人が善人ばかりにて、未生以前の心にては、爭ふ事なし。人此世界へ產れ出でしより、長りて、世の中の事皆珍らしく、是迷ふ樣にした者なり。中年から其の迷ひがだん〳〵と覺め、老年になりては、さつぱり覺め、爰において未生以前の人にかへり、虛無自然たる事を悟り、安樂にして死することそ、本道の人とはいはめ。若き時から悟りては、前に云ふ天摩屋の如し。ならぬ事はならぬと知れ、金も儲けられるならば、儲けろ。名もあがるならあげろ。只己の量を知りて、出來ぬ事をするな。何事も身の

損をして、後には盜となるなり。又玉章は則ち女なり。是を餌とすれば、貴賤上下老若をえらまず、輪奈にて首を縊る事なり。然れば貌は人間にて、心は獸ならずや。稻荷は狐なりと心得、獸に手を合せて拜むも尤ぞかし。

一賣卜先生糠俵と云ふ心學の書に、「兎角に慾をはかるな、貧になるぞ、無慾にしてよき。己に備はりたる業を業とし、正直にして、望を少くし、只足る事を知る時は、大福長者なり。人は元裸で出で、裸で歸る事にて、此世に居るは、すこしの齡を、永く覺えて、僅活きて居るうちを、慾の爲に地獄のあり樣、未生以前に立ち歸り。何もかも皆無と云ふ事を知れば、安樂世界なり」と敎へけるに、一人出でて、「某の隣に天摩屋善兵衛とて、悟りきつたる男あり。其人となり。寐たい時寐、起きたい時起き、喰ひたい時喰ひ、呑みたい時呑み、福をも悅ばず、禍をも憂とせず、生をたのしまず、死をも惡まず、得失存亡を釣瓶に譬へ、苦樂盛衰を確なりと、貧富貴賤を一目に見て、諂もなく、禮もなく、人譽むとも榮とせず、人毀れども恥とせず。此人寵愛の一子あり、男子なりしが、十歲の春急病にて相果てぬ。日頃は悟りきつたりとも、などか力の落ちざらんと思ひの外、憂ふる色なく、我等問ひて曰く、寵愛の一子を離し、憂ふる色の見

天地の機—自然のしかた

輪奈—係蹄、けものをとるしかけ

地道—正直正道

世となりては、出入あしく、老人など別けて難澁する事にて、是又兩全なきなり。是よりして年々順道にして豊作し、其中には老いたる者は死し、若きは老となり、飢饉と云ふ事、夢にも知らざる者の世の中となりて、圍米の倉は鼠の穴となり、言譯の爲に戸前の口に俵を積み、後は空虛にして、何がなして凶年を願ふ樣にて、食に飽き滿つるに至りて、天不順となり、夏月冬の如し。萬物實らず、爰において一年の凶年にて、人多く餓死するに至る。天地の機はかうした者なり。

一世の中、狐狸の輪奈かけて、智慧の餌にて人を釣るなり。狐狸が云ふ、我等は人と違ひ、色々に化る事を知りて、人かつて是をしらず、然れども、彼鼠の油揚のかをりが鼻に入ると、あれを喰へば、輪奈にかゝると、命を失ふ事は知れてあれど、命を捨てゝも喰ひたいと云ふは、畜生のあさましさなり。爰を以て考ふるに、人間も輪奈にかゝりさうな者じやと思ひ、人の好む物を以て餌として置けば、人悉く輪奈にかゝる。餌には盃、小判、玉章、扨て酒さかなを餌とすれば、是を好む者多し。喰ひたふれ、醉ひたふれ、後には狂人の如く、首を斬られても知らぬ樣になるなり。又小判を餌とすれば、急に金がほしくなりて、地道にしては埒があかず、夫故に山事にかゝり、大

有德院―德川吉宗公

り。豐年を以て困窮する事、表裏のさたなり。爰を以て奢りたるを知れり。小子幼時米穀、價六十目に一石五六斗餘なりき。今は漸く一石なり。定相場といふべし。今年も天氣順道にして、又々豐作疑ひなし。先年凶年打ち續きて、俄にもみ倉建つ。芝宇田川町加藤庄次郎とて、其世事に才ある者にて、算筆は云ふに及ばず、諸藝に達したる者なり。商賈にもあらず、千金の地面を持ち居て、是にて暮し居けるが、もみ倉の役人となりぬ。甚調法に思はれ、倉普請まで彼が、かゝりとなり、或とき予に對して云ふ、俵數の事など咄しけるに、彼に云ひて曰く、「咽元過ぐれば、熱わすれるといふが如し。家に盜賊入る時は、俄に用心して、後には用心をわするゝ者なり。籾倉の建つは、必豐年の續く基なり」と。總じて今年迄は米穀やすし。昔有德院殿大君の御代、予壯年の時なりしに、米安く、其時も武家勝手あしく、上にもおせわありけり。其頃錢甚不足して、六十目に四貫餘なりき。今は六貫四五百文なり。是は武家にはよけれど、又商人にはあしく、兩全なる事はなしと知るべし。豐後の國岡の城は、誠に堅城とは此事にて、岩にあらず、石に非ず、ぬめり岩にして疊み揚げ、七曲りの坂を登り、城門に至る。太閤秀吉此城を見て、かゝる堅城もある者かと感心したりとぞ。今太平の

春波樓筆記

司馬江漢著

一治久しく續きぬれば、美を好み奢に長ずる者なり。奢とはいつ奢るともなく、目にも見えず、年のよる如く、いつ老ゆるとも知らず、いつ奢るとも知らざる者なり。

一畫は書と同物と云ふは、古の風俗を、今目前に見るは畫なり、頃日寛永年中の畫を見しに、女の帶は、絹布を半巾にして、結びめなし。振袖は二尺に足らず。頭に櫛笄かうがいはなし。油も水油のみにして、今の迦羅の油と云ふはなし。此一事を以て知るにあり。吾國物産限り有り。故に祿限りあり。天下一體上貴人より下の賤しきに至るまで、懦弱となり、遊樂美觀を好み、是れ、內より亂れ敝るる基なり。今既に斯くの如し。爰に於て、下をしひたげ、民これが爲に困窮す。竟には動亂起れば、必ず、外國其虛を窺ひ來らん。遠き慮りなき時は、必ず近き愁あらん。

一米穀價安くして、諸家困窮する事は、甚しき間違なり。五穀成就するを豐年と云ふな

青柳のいと長くして、事足らざるもあなる世に、すゞむ大人の梅園拾葉をこゝに見よとあたへ給ふ。條々言葉數なくみじかくて、物よく其理をさとし給ふ。大人は足引の山のふところを立ちも出でず、窓のもとにかしの實のひとりなり出でて、誰を師としつかへず、遠くふるき世のさかしき唐書に目を遊ばしめつゝあるに、求めずして問ひよる人の多きは、たゞ三史五經のかど〳〵しきのみとおもひをりしに、皇御國の古事もよくさとり給ふよ。春樹身さかりのむかしより今六十年の老にいたるまで、遠き國に心やらずして、我生ひ出でし皇御國の禮ありしむかしのことのかたはしも知ることのあれかしと、おもひをる心肝にこたへ涙の出でくることの多きが餘り、そのしりへにほめ詞してしかいふ。

天明二つのとしむ月　　小野春樹しるす

り。げに念力岩を通すといへる諺を、昔は耳にきく。今は目に見はべり。しかれば百の事廢するは、みな懈の心よりして、天地をも感動させ、目に見えぬ鬼神をも役するは、誠のやまざるよりなるべし。

二妓の事、秀實が探り得る所にして、便稀なるかたなれば、再び人に徴する事もかたく、覺束なき筆の跡ながら、優なる心ばへを餘所に聞きなさんも罪ふかく、きけるまゝにしるし侍る。近き程たよりあるかたの人は、よく其實を得て、かうがへ給ふべし。此餘は力の及びたづねとひ侍れば、おほかたはたがふ事あらじと、おもひ侍る。

梅園拾葉 終

愚公が山―列子に出づ、馬鹿正直に山を移すに勉めし話

の心より、かゝる事は及ばじとおもふ物から、かなふべきもとめだに得かなへずして過すなり。豐前中津川は、源豐後山中より出でて、羅漢寺の下にそゝぎ、衆流と相會し、終に中津の城をめぐり、海にそゝげる大河なり。是にそうて一條の路あり、豐南に通へる往來にて、人馬ひまなくゆきかふ所なり。しかるにその間巖高くそびえ、激浪岩根にそゝぎ、春雨五月雨などいたう降り、または夕立の俄に川上に催せる頃は、人馬行きなやみ、あやまつて、水に溺るゝもの年毎の事なり。しかるに享保の頃、江戸より回國の僧禪海といふもの來り、之を見て、誓つて此岩をきり闢き、後來溺沒の難を救はんと願を起しける。されども碧嶂丹崖雲を吐納し、垂蘿長松うちしげり、空翠雨なきもつねに濕ひがちに、苔むし道滑なれば、世にその名さへ腐道といひならはして、中々此岩をうがたん事、愚公が山なりと人皆あやしみ笑ひける。されども此僧氣を屈せず、經營やむことなし。其誠怠らざれば、次第に人感化し、吏民力を合する事ともなり、石工の償出來り、終に三十餘年の星霜を經、彼の岩を切り穿つこと三所、すべての長さ百間、竪横二丈四方、洞中幽邃にして、大陽明通せざれば、處々岩に窓をうがち、これ仙宮にも通ふらんと思ふばかりなり。人馬幾ばくうちつどひても、何さはる事なき坦途とはなれ

東隅に失し云々——（後漢書馮異傳）前日の失敗を後日に取りかへす

さなきだにおもきが上の小衣ごろも我つまならぬつまなかさねそ

と社守れども、不幸にして身を落しいるゝ處も、其身のとがにはあらず。かつて人に聞きし事あり。京師の遊妓三五といへるが、「貞女兩夫にまみえずといへども、我はたらちねのために、身を河竹のうきふしに、けふのつまを待つとて」と書きて

たそやたそ誰かはけふのつまならむ定めなき世にさだめなき身は

と書捨てしよし。其情尤も憐むべし。明末南京の院妓林秋香といへるもの、人に嫁して後、むかしちぎりしものの、人していひ送りける事の有りけるに答へて

昔日章臺舞二細腰一　任二君攀折一嫩枝條　如今寫入二丹青裡一
不レ許春風再動搖

これ光武のいはゆる、東隅に失して、桑楡に收むるにて、一旦節を失するも、貞潔の操立つことあり。これを花にみる時は、梅白く桃紅に、薔薇の色の紫も、己がいろいろを春の風に綻ばすぞ、げに天地の心なるらん。これらの事思ひつゞけて考ふるに、浄僧の再び遠流の令をめぐらし、淺間が暇とくとりし、初が夜ふけて親のもとめかなへし、金左衞門が鴨を得し、事に輕重ありといへども、皆至誠のしからしむるなり。己れ怠る

河竹—遊女のこと

源賢—多田滿仲の子美女丸の僧名

は諸共に親に捨てられし子なり。孝思厚ければ、今ははや親の心にも杖とも柱ともいかに他事なくおもふらん。世に不是底の父母なしと、古賢のいひし言葉とも思ひ出で感じ侍りぬ。秀實もあまりに哀になりて、「我も古郷には父母もてる身なり。かれが物語聞くにつけてもたゞ罪深く覺え侍るなり。よしや身は河竹のうきふしに沈むとも、久堅の天津神地津神もみそなはし照し給ふべし。彌志撓まずば、などかくて朽ちはつべき。かならず志とぐる日あらん。心ぐるしくとも時のいたるを待つべし。今暫くはわれ隙得させん。とく歸りて心靜に母の介抱せよ」とて、隙遣して別れぬ。秀實闕より歸り、我を訪ひて、此事をかたりて哀を催し、八入が行衞國守の聞にも達し、素意とげよかしと、ともに祈り思ひけり。誠に世に教を立てて、人に品流を分つ時は、儒中に異端をいむ。業に俳優娼妓を退けてよはひせずといへども、其人の志行は、道の異類によつて異ならず、業の拙きによりて拙からず。此故に天地よりして觀る時は、君子の居り場に隔なし。其居る處の賤しければとて、其德を仰がずんば、天地の心にそむくべし。親の命のそむきがたければ、心にそまざれども源賢の僧となり、淺間は遊妓たらざることを得ず。誠に女の道は、

手にせ川く水〳〵爲す甲斐なきを云ふ

餘日ながらへて、終にはかなくなり侍りき。それさへあるに、又母と頼みし人も病起りて身かなはず。幼心のやるかたなく、人の賜はるものあれば、たすけにもなれかしとすれども、手に川水をせく心地しぬ。只主の情ありて、朝な夕なの事とひて、飯炊ぎ湯わかして、これを世にある人の抱きかゝへとも思ひなしぬるも、今年十六、今はうかれ女の習ひ、身にも任せがたく、かりの暇もある時は、歸り問ひ言ひ慰むることもあれども、又暇なき時は、心にこめておもふ斗り、母は身のなやましきに他事なければ、今朝は遲かりし、昨日はとはざりしなど、聞え侍るもきくに苦しく、まゝならぬ身をうらみ候ふ。せめて我貌も人に劣らず、他事なくおもはるゝ方もありて、かゝるうさの便とも頼むべき人にても有り侍らば、おもひ慰むかたも候ふべきに、かたちだに人に劣り、よしなき身を恨み候ふ」とて、さめ〴〵と泣きける。秀實かさねて「實の母の行衛いかに」と問ひければ、「されば其事にて候ふ。是も今は身を人にまかせ候へば、かゝる賤しき子もてるなど人に聞えなば、猶うき事のありもやせんと、深く我身をかくし候へば、風の音信さへ餘所に聞きなし、戀しき時は、手を合せそなたと拜むばかりなり」と、又さしうつむきて啼きけるにぞ、滿座岩木にあらざれば、袖しぼらぬものもなかりけり。けにや先に

瓜田に履をいる―嫌疑の地に足を入るゝなり

色も云々―容色も人並以下に見えたり

べき糧とても貯へなき程に、主より己にあたれる養をなかばわかち、十七の今年に至るまで養ひ侍るよしなり。秀實瓜田に履をいるゝと、人も咎めんなれど、見ずしてやまんも本意なく、此者をよびて逢ひける。此者今年十六色も異木には劣りて見えける。酒など出したうべけれども、もとより糸竹のしらべもなく、只しめやかに物語どもしつ。秀實「こゝにはいかにして來れるぞ。汝が身の上物語せよ」といひければ、八入袖かき納め、「さる事に候ふ。我は世にたぐひなき薄命なるものにて候ひつ。もと赤間町粟の屋何某と申す者の子にて候ひしが、生れて二つにして、父を失ひ侍り。其時我に一人の兄侍り。母なるものも蜑の小船の楫をたえ、世渡る道のあらざれば、人のはからふにまかせ、兄をも人に遣し、わらはをば外濱町喜三郎といへるものに託し、其身はさるかたに嫁しぬ。それより喜三郎夫婦を父母とたのみ候ふ。頼みし親も家貧しく、五つといへるに身をこゝに賣られ、夢現をもわきまへず、程なく十三といふに成りぬ。然るに此年父と頼みし喜三郎誤つて井に落入り、人の介抱にて引き上げたるを見れば、纔に息はありながら、身は只紅になりぬ」といひけるが、今の樣にや思ひなされけん、たまりかねて泣き出せり。暫くありて、「心苦しき月日さへたてばたつものにて、頼む力も今はなく、八十

ひぢりこ―泥土

なきが哀におぼえ侍る程に宿しつる也と語れり。さらば久しく相知れるにやと、かへして問ひければ、否、さにあらず。我夫ひさしく漂泊し、身病はしき頃は、世に情ある人ありて慈愛うけ、とかくして今日のあるなり。さりとて遠國波濤の末、言傳ふるほどの事だになし。人の上をこなたの事と思ひなせば、いとど哀に覺え、我夫いたはり給ひし方に、聊か恩を謝する心に思ひ侍るなりといひしよし」物語りて共にひぢりこの中に蓮の花見つけたる心地しつ。秀實「かゝらん人には目のあたりあひてこそ、家産にもせめ」とて、やがて北國屋を訪ひけるに、皆睦じげによりつどひて、父は目はさやかならねども猶健にみえ、「まらうど來り給ふを」と、親子して酒出し、肴清らに取つくろひ、しばらく酒くみ、孝女の物語聞けるに、「親の己をいたういとほしみて、心地少しにても例ならねば、神に祈り佛に頼み、賽のたゆる間もなき」など語り笑ひ興じ、夫より引手ものどもとらせて、旅舍にかへりぬ。孝子とて世にも聞ゆるは稀なるに、猶彼家にはその人あるよし奇異なる樣に思ひ、又八入が行狀を人に問へば、幼より孤となり、人に養はれ、其父もむなしくなり、母とたのみしもの、己十三の年より病の床にふして、誰頼むべきものもなき程に、主に願ひ、日毎に隙こひ、湯水寢起の介抱し、もとより炊ぐ

物色―探し求む

身とはなれり、事とひてみんと、人していひおこせたりければ、これも其志すてがたくや思ひけん。はる〲と下り、長き妹脊となりにけり。世の中の幸不幸過不過は、誠に人力の及ぶ處にあらず。淺間が松の操をすてたるは父の爲なり。時めくかたになびかざるは父の爲に操を顯したるなり。かりそめの枕に、伊兵衞に信を立てしは、遊妓の貞といふべし。遊妓の貞といふうちに、己れ純孝の者なれば、我親にもよく事へてんは、兼てしれりけるにこそと思ひやられぬ。今は名もかへて石といふよしなり。予が友滿部秀實、安永乙未、國の事ありて、赤間に行きて滯りしに、此女の孝狀きゝしかど、船いそぎければ、つぶさにとふ事なくて還りぬ。しかるに翌る申の暮、又、國の事につき、赤間にとゞまる事數旬。孝女の名おぼえわすれ、彼此と物色しける處に、淺間は北國屋の妻となり、猶八入といへる女あり、己が親のまづしければ、この年頃、我食の半をわかちて是を養ふよしなり。折柄淺間が舊里なる十兵衞といふ者にあうて、其こまかなる事どもかたりていひけるは、「親に孝なるものは他人にも厚し。我れ同鄕のちなみなればかつて訪ひし事有りしに、かたへに獨打ふしたる男あり。いかなる人にやととへば、遠き所の人なり。此町某の家に手代つとめ居れり。然るに此頃恙にかゝより、便るかたも

まねき―婿にしたる也

し四月母十三年遠忌にして、暇とるべきは八月なり。淺間おもひ煩ひける樣は、かゝる身して母の遠忌つとめんも心ぐるし。苦しとていかがせん。只願くはもとの身となりて、位牌にむかひ手を合せば、艸葉の陰のなき魂も、手むくる水のいかに心よからんと思ひ、かつ言葉にももれければ、此事いひ傳ふる人有りて、孝女の志とげざらん事を本意なく思ひ、主にかくときこへけれども、わきの妨とや思ひ、きかず。これを哀れときく人多くなりて、男のみかは女まで、其夫にすゝめ物し金遣はし、終に隙とらせぬ。淺間いはんかたなくうれしければ、家にかへり僧を請じ、本意の如く佛事つとめ、終には船木なる伊兵衛といへるをまねき、裏町に北國屋と號し、侘しき住居ながら心よく父に事へけり。抑此伊兵衛といへるもの、いかなる縁ぞとゝふに、淺間いとけなきとき、大坂屋に同じく在りけるが、かりそめの枕かはし馴れしを、主のしりてその身追ひやられね。夫より身をうき草の根をたえ、難波にさまよひ、長崎におもむき、後はあづまのかたにゆき、からうじて年月を送りける。淺間いとまとりて、老いたる親も養ひてんと誘ふ水もありしかども、父が心に得ざりければ、おもひとゞまり、手弱女のひとりも過しがたければ、其思ひける樣は、かの伊兵衛は誠にかりの契ながら、我ゆゑに世にたよりなき

心あしき時

―病氣の時

娘たくや思ひけん。父此子にむかひいひける樣は、「家貧しくして母なく霜雲のふせぎも心のまゝならず。萩にはたよりのかたもあり。しばし行きてん」とて携へて出でけるが、是道のさあらぬ樣なるを怪しみ、「萩にはかくは行くまじものを」といひければ、「否とよ。程は關のかたへ通ふ道なり。彼方にて少しの用事とゝのへ、夫より萩へ行くべし」とて、程なくかの大坂屋へ行き、十年期にうり、金とり其身はやがて歸りけり。娘始めて其事を知り、唯伏し沈み、泣き暮し泣き明しけるが、詮方なければ日數經つゝやゝ心とり直し、これも背かましかば不孝ならんと、おとなしくつかへて、翌る十四にはうかれ女の務に出でけるが、只ひたすらに故鄕の父こひしく思へども、山川へだてぬれば便だにおもふまゝならず。色々と心を盡し、やゝ少しの才覺し、人して「關のかたへ下り給へ」とすゝめければ、父も世渡る道にくるしみ殊に我子の招く方なれば、やがて來り、これをたのみに家借りて住みけるにぞ、淺間も少し思ひなぐさむ事となりて、主に願ひ日每に訪うていたはり、心あしき時つきそふ程の事こそあらね、心のおよびつかへける。此處の法に十年身を賣り、期あきて三年の禮奉公つとめ、其始ありつきし日に暇とることとなり。心ならざる月日も水の流るゝごとく十三年過し、いとまとるべき年きたれり。さあればこと

一衣裳美しくかざり、人にすかれんとするは賣女なり。人の見る時所體をなし、人に譽められんとするは歌舞戲のものなり。今の學者はどうやら此眞似する樣なり。

一碁のうち樣は、いつにても、先をとればまけぬものと、我も知れり。とかく道理はのみこみよし。わざのきかぬが笑止なり。

一足の皮はあつきがよし、面の皮はうすきがよし。人諸共に小賢しく口はきけど、行ひは女童に見限らる。さる故面の皮あつくなり、足の皮うすくなり、株ふむ事多し。よく心得てつゝしむべし。

○長州赤間關二人のうかれ女。豐前僧禪海

文字の關―門司

長州赤間は文字の關と相望みて、山陽鎭西の間只一帶の海を隔てたれば、行きかふ船たえず。さる故に稻荷町とて花街家毎に遊妓たくはへて、水は花を誘ひ花は水に伴ふが中に、大坂屋淺間といへる者あり。もと同じ國なる船木といへる里の貧しきものの子なり。朝食夕食の烟もたえぐ\なれど、ふたりが中にひととなりて十三になれり。此年母いたくなやみけるが、卯月の頃むなしくなりぬ。歎きのもとに秋も來ぬ。鰥ぐらしの世を經が

り

屐——下駄

水に潛むの魚を漁す。肌膚寒暑にたへざれば、麻を績み、繭を繰くり、支體雨雪にたへざれば、傘屐を製し、神氣の有餘を以て本氣の不足を補ふ。是より擴めて、二氣の物たる所、御考へ可レ被レ成候以上。安永庚子暮春。

○戲示二學徒一

一學問は飯と心得べし。腹にあくが爲なり。かけ物などの樣に人に見せんずる爲にはあらず。

一書物は金かしの帳のやうなるもの也。金なき人のもたらむは澁紙ふむほどの用にこそ。

一學文は臭き菜の樣なり。とくと臭味を去らざれば用ひがたし。少し書を讀めば少し學者臭し。餘計書をよめば餘計學者くさし。こまりものなり。

一學文を芥の樣におもふべからず。上に浮きたがる程に下地の水も今はのまれず。

一學文は置き所によりて善惡わかる。臍の下よし、鼻の先惡し。

一學文は輕業のやうにするがあしゝ、輕業は人を目の下に見おろし、人の天窓をふむものなり。

植物―ちぶつと訓じたるは地物の義にとる也

繳し―射取

愛憎欲惡の神も、これを己が本宅として、用をこの上に施すに候ふ。以上の條理とくと御考へ候はば、神氣本氣の別判然たるべく候ふ。天成レ人、人成レ于レ天の故に、有意の神は初生の時は猶混沌として開けず、老後は朦朧たりやすし。晝よく明なりといへども、夜は必ず本氣に歸す。前に申す如く、神本の二氣、天地も萬物も皆これを具へ候ふ。されども物によつて長短有レ之候。天地は神本に優劣なし。故にかくの如く悠久なり。物二つながら全うせざるは二の態に候ふ故に、神氣長ずる者は本氣短し。本氣長ずる者は神氣短し。植物本氣に長じ、動物神氣に長ずるは其大分にして、其神氣に長ずるの内又長短あり。又人よりして鳥獸を觀るに、鳥獸神氣に短し。故に本氣長ず。是を以てその生たる生冷堅硬の物を食つて傷られず。雨雪霜露を衝いて犯されず。産育困まず、喜怒相引かず。人は密室に爐を擁し、重綿醇酒に寒を防げども、風軒水樓にたかく倚り、絺綌水漿に暑を避くれども、猶時として時氣に病む。米は糠を去り、肉は骨をさり、猶水火の調熟をかり、妊娠の調護、嬰孩の抱負、本氣の短きことかくの如し。本氣の短きこと此くの如きを以て、神氣の長きこと萬物にまさる。是を以て天の遠きも是を測り、地の厚きも是を察す。羽翮なしといへども、空に翔るの鳥を繳し、鱗鬣なしといへども、

らず。呼吸の事、呼ぶものは故きを出し、吸ふものは新しきを納れ、其事は飮食の精をとり、査滓を去ると同じく候ふ。故に膽は營元なり、臍は衞元なり。營衞は一身を立るものにして資て繼ぐの用有レ之候ふ。精力は一身の立つものにして資て始むるの用有レ之候ふ。精奉ずるとは、物の神を挑ぐるにて、提燈にていへば、蠟燭たてにて御座候ふ。營養すべき蠟燭もあり、衞護すべき火袋もあり、照すべき火ありても、蠟燭たての奉なければ提燈ならず候ふ。此蠟燭たて眞直に下より燭火を奉じ候へば、營養衞護もとゝのひ、そこにて火の照す事明かに、高し卑し、水あり石ありと見する故、其火に敎へられて、上るとも下るとも飛ぶともまはるとも、其精力其令に從へば其役をとるなり。是を力役すといふ。故に奉は上に仕ふるにして、役は上に使はるゝなり。これを以て手まひ足踏み目見耳聞き、大小便行かんと欲すれば其道を開き、忍ばんと欲すればまどろみても其守りを失はず。是を力の役といふ。其力役を執らざるに至りては、遺尿遺矢、手足癱瘓、精神恍惚、百患萠動する事に候ふ。故に精力は、資始の氣にして、營衞を天地にたのむ。營衞は資繼の氣にして、精力を天成にたのむ。精力已に盡くれば、營衞存する事能はずして、我天地閉づ。營衞病めば精力疲る。精力支ふる所あれば營衞醫すべし。思慮知辨

食を胃中に蓄ふといへども。消化運轉の用は、全く肝脾の鼓動にあり。臟腑といふものは、腑は皮を以て相續ぎ、筋よく維持す。臟は肉にして箇々別物、脈ありてこれを聯綴す。脈といふものは、肝に始まり、腎に至り、枝椏蒙茸として一身いたらざる所なし。飮食の精氣、氣液の運動、みなこゝに導かれて行くと見えたり。膽は肝葉の内にかくれ、精汁を蓄はへ脈の根となり、膽外枝椏あり、上肝葉の内に著き、下胃の瀉口のさき腸の上頭、西洋の人はこゝを十二指腸といつて、蚘蟲の窠窟とする所あり。その上に著く是腑と臟との接する所にして、是より脈に接するに依りて脈根なり。營養の氣は地膩に資り、衛護の氣は天氣に資る。地膩口を門とし、天氣鼻を門とす。それより喉嚨に下り肺に入り、その經心に著き、其末臍に朝す。前書に先天後天の氣といへるは、馴れたる言を以ていふものにして、先天とは資て始むるの謂にして、後天とは資て繼ぐの謂なり。夫兒の胎に在る、資て繼ぐの氣未だ用ひず。故に口鼻の二門猶閉づ、此門開くるや兒即ち生る。生るゝや呼吸飮食資て繼ぐの氣を開く。我或人に聞く事あり。「兒初生已に死するが如き者、臍帶を按ずるに、浡々として動氣あるもの、猶生を望むべし。急に艾をとり臍帶に灸すべし。活する者あり」と、我未だ試みずといへども、また此理なきにしもあ

小便は其道あり。大便は右いふ如く其道あり。小便は便溺の事大に同じからず。大便は右いふ如く其道あり。小便は其口なし。此處よく工夫すべし。人は小天地といふも、造化に異なる事なければなり。易にも雲行き雨施して、品物形を流くといへり。先造化の用を觀るに、雲天を覆ひ、雨上より下るといへども、雲雨はもと地の濕氣蒸々として騰り清際に閉ぢられて、雲のかたちを顯はし雨を結ぶ事、口より出づる氣の物なければ消えて見るべからざれども、鏡を前に置くときは曇りとなりて露を結び候ふ。是も小雨露に候ふ也。今雨降らんとして、礎濕ひ絃緩ぶも、雨の本を水土にとるの一徵に候ふ。是を以て造化の狀下に水土の質あり。此もの氣の絪縕により、忽ち蒸騰して雲霧となり、雨其中に結び、むすべば其質空にとゞまる事能はず。下り灑いで萬物を潤澤生育し、潤澤生育の餘は、終に川谷に注ぎ海に歸し候ふ。若此地際水土の氣天間に充溢せず。夫より只下ざまに流れ入らば、萬物を潤澤生育することはあるべからず候ふ。然れば我天地造化の用も知るべく候ふ。水穀の質胃内に蓄へ其氣胃外に蒸騰し、肝脾の鼓動によつて、一身に充溢し、潤澤生育我身に雲霧雨露の用をなし、其査滓下に歸し、膀胱に滲入し、川谷の用をなす。かくの如くにして、尿に其口あり溺に其口なきの態、然らざる事を得ず。是を以て營氣は下飲

査滓——かす

男授け女受け、子その内になり。母乳し子吸ひ、養その内になるも、同じ絪緼の營みなり。春は花さき葉生ひ、秋は葉脱し實結ぶも、同じ天地の絪緼なり。故に養は生々を物給し、我資るの間にして、水穀鱠蔬酒漿肉味の給する所を資り、我氣液骨肉となし候ふ。此營養に傷れをうけ候へば、氣液骨肉營養の源竭きて、吐瀉閉癃血液湧溢せざれば、乾枯骨立を致し、終に天成の元氣を賤賊す。故に函籠全うして、膏膩盡るも、膏膩備つて、函籠そこぬるも、提燈の用成らざるにおいては一に候ふ。其營養といふものは飲食胃に入り畜ふるに、肝上より覆ひ、脾下より捧げ、胃をさしはさみて、鼓動をなし飲食の精をとり、轉じて氣液骨肉となし、一身に周布して造化の用をなし、その査滓腸中に下り肛門に出づ。小便は古説異同ありといへども、其大概水穀一所に混入し、然して後、便溺泌別すと觀る故に、小便も泉を筧にてうくる樣に思ひなし、其泌別の處をそれとさし、或は、膀胱に上口ありなど、壁越し推量の說のみにして、徹見の說なく候ふ。阿蘭陀などにては、奇巧勝れたる國ゆゑ、微細の器あり。よく其小經を導いて、水を膀胱にうくる隧道を得る術もありと聞けり。是は實徵の上、然あるも知らず。よしや此隧道あるにもせよ、溺の道路全く其道より洩れ注ぐとせば、造化の用はなし難かるべし。予

身獨活せず、神によりて靈をなし、神獨立たず、人の體を宅として活し候ふ。人の體は保持奉役天に得るものにして、營養衞護の物によるに依て立つ事に候ふ。衞護とは、今提燈に火袋あるも、衞護させんとの設也。夫れ火袋の用たるや、風吹き雨降りても、これが外を衞護するにより、よく燈の防ぎをなすなり。營養とは、提燈の蠟燭を具ふるが如し。蠟よく火を養ひ、其天に得る處の火の光をも熱をも營み繼いで、とこしなへにあらしむるが如し。火袋よく外來の風雨を防げども、膏膩の養なき時は火存せず。膏膩これを養へども、外來風雨の防ぎなき時は火又立たず。保持奉役は、天より得るよりしていへども、さとしやすきにしたがひ、提燈の器についていふに、蠟燭の營養によれども、蠟燭又臺なければ立たず。臺また箱棒くさり等の保持をとり、よく其火を奉じ、火よくこれにとりて、光を役す。火は膏と心とに養を資り、膏心よく養を火に給し、絪縕その間になり、火を營し出す。萬物皆しかれば、人身もとより同く一理にして、其常に寒を衝き暑に觸れ、霜露を犯し、雨雪を凌げども、これをして病ましめざるものは、わが保持奉役するものを衞護すればなり。もし苟も此衞りを失へば、風雨寒暑瘴癘の毒こも〴〵外より傷るなり。營は一身氣血精神の仕出しにして、絪縕また其内になる故に

奉ずるなり。役するは、神氣の爲につかはれて、これに奔走驅馳するなり。此故に物混淪として立つものは、本氣の幹するなり。意鬱浡として活するものは、神氣の運するなり。其本氣卽ち天にして、神氣卽ち人なり。天人の差別は、有意無意の間にて御座候ふ。古來有意無意の辨未だ立たず候ふ故、先達も是を混淆して、天を觀る事、皆人意の私に落ち候ふ。此故に天は無意、人は有意と分つて、其人の中にも亦天人あり。其故は天人を成し人天に成るを以てに候ふ。天の成す處は無意にして、人の成る所は有意に候ふ。これ又人の天人を平分する故に候ふ。其天人を成すは、本氣にして、人天に成るは、神氣に候ふ。此無意なる者あつて生の本をなし、有意なる者有りて生の精華を發する事に候ふ。先此大分を御理會ありて下文御熟玩あるべく候ふ。尤も文面は天にあるものを書留め候ふにて、文面を離れ、眞物をよく御察しなさるべく候ふ。眞物よく面前にあらはれ候へば、拙文に謬誤あらば、謬誤直に御目にかゝるべく候ふ。夫氣は物を離れず、物は氣を離れぬ物に候。古人天地未だ成らざる以前溟濛混沌たる氣のみある樣に說きなせしは、氣を知らざる故に候ふ。故如何となれば、物はなく只氣のみはある事能はざるものに候ふ。火といへば、燒くるもの其中に發し、燒くるといへば火其中にあるが如し。故に

標ーこずゑ、木の枝

候ふ。神氣の活するや、性感ずることあり、才運することある故に候ふ。精いかんがして此身を保するとなれば、內持するものあり。大物にていへば地なり。外保するものあり。大物にて、いへば天なり。力いかんがして此神を奉ずるとなれば、物其神を奉ずるの力あり。人にていへば臣の奉戴也。氣其物を役するの力あり。人にていへば權柄也。性いかんがして感ずるとなれば、情慾好惡するを以てに候ふ。才いかんがして運するとなれば、意智よく知運するを以てに候ふ。こゝに於いて神氣神を用ひて意をなし、本氣物を立てて人をなし候ふ。是を以て物を見て善と知り、惡しと知り、愛憎欲惡の感應より、或は予へ、或は奪ひ、或は活し、或は殺し、譽め毀り、興り亡ぶるも、共に有意の所作にして、思ひに運び、知るに辨へ、好惡に感應いたし候ふ。このゆゑに神氣は君の位にして、本氣は民の位なり。君民の事、位をいへば、君尊く民卑し。序をいへば、民本にして君標なり。其故は人衆ありてこれを治むる爲に、君長たつ　君長たちて後、人衆を設くるにあらず。然れ共位は君上に在り、然うして號令控掣の權をとる。民下に在り、然うして奔走驅馳の役をとる。故に本氣は民の如く、神氣は君の如し。本氣本にして、神氣標なり。神氣尊うして本氣卑し。故に奉ずるは、神氣の爲に基をなして、其神氣を

性の感じて愛憎欲惡するものを情慾といふ。卽ち是れ性にして、これを運して、守禦の態、和激の聲、行止予奪の事をなすは、其才也。生中に天より得るものあり。天より得るもの、物に依らざれば立ち難し。其物によるとは、天氣を呼吸して、よく表を衞り、地質を飲食して、よく裏を營す。卽ちこれ川にして、これに體して、臟腑の文、筋骨の維、膏血溫動の物をなすは、其體也。人かゝる身をいかがして有するぞとおもふに、これも天の有する處にして、それを人に給し、人これを天にとりてなるものにして給資の間に始繼の二氣あり。資りて始むるもの、保持奉役の精力なり。資りて繼ぐもの、營養衞護の息食なり。資りて始むるものは、天に得るものにして、資りて繼ぐものは、息に天氣をかり、食に地質を資りて、其資始の氣を營養衞護するものなり。故に精力は營衞を以て立つ。營衞敗れをうくれば精力困しむ。精力已に盡れば、營衞用ふる所なし。故に保持奉役、營養衞護して、其本氣全く、思慮知辨、愛憎欲惡して、其神氣全し。神は神妙不測の靈にして、物混淪として立つの中に活し、物は磅礴無邊にして、神鬱浡として活するの表に立つ。立つに就いて本氣といひ、活するに就いて神氣といふ。萬物に通じて皆しかなり。蓋其本氣の立つや、資りて始むるものあり。資りて繼ぐものある故に

依樣畫ニ葫蘆一、—古人の形のみを眞似て新意を出す能はざるをいふ

梅園拾葉　卷之下

〇三答ニ多賀墨卿一

神氣本氣の分、竝に前書膽者其系上屬ニ肝臟一下著ニ胃口一化ニ精於ニ飲食之氣一爲ニ脈之根一與下膻之收ニ天氣一爲ニ息之原上對の文、かさねて御尋に御座候ふ。醫家素難を金科玉條とし、從來樣に依りて葫蘆を畫き候ふ故、其垢心を染めて、物の眞體見えかね候ふ。條理の道は、天門の鎖鑰にして、流に沿うて分れ、源に泝つて合し、聊も意巧造作にて安排をなすべき物にあらず候ふ。蓋し大物より萬物に至つて、其物を成すにおいては、氣天物地の中性體といふものを具す。然して體よく用を分ち、性よく才を分ち候ふ。神本の二氣は、唯人にのみ有る物にはあらず。もと天の有するものを人資りて己が有とするものに候ふ。本氣とは體成りてよく其體を用ふるの氣也。神氣とは性具してよく其性を運ぶの氣なり。故に神氣人においては其有する所の意也。本氣人においてはかく活動する生の氣なり。意中に心性あり。心の運びて思ひ慮り知り辨ふるものを意智といふ。

越。取途愈遠其迷愈深。不亦悲乎。雖然千古之成說。人皆濡目於茲。染心於茲。未可

猝以示條理。故今唯爲子言。勿遺諸傍人。致他閲。其詳姑俟所著成　安永已亥四月望

有膀胱。但畜外來之客質。而膽不與腑相與。膽者屬系。其系上屬肝藏。下著胃口。化精於飲食之氣。爲脈之根。與臍之收天氣爲息之原對。蓋兒之在胎。宮中卵體。閉氣於其中。無假于天息地食。唯一條之臍帶。繫胞以與母通血脈。生動活育。唯特斯一路。與菓蓏之蔕。承營養於本幹同矣。其已出胎也。混沌正死。臍帶已斷。闢竅於天門地戶。噓噏已通。飲哺已求於是先天之養。移居後天之室。於是營養之氣自膽起。衛護之氣朝宗于臍。故膽後天而繼臍先天之氣。而說者取以屬腑。顚倒錯置甚矣。其所可統而剖之者何。命門者腎之一片。脾者肝之一片。有臟必有薄膜。包之。何特於心立包絡。耳目鼻舌。系皆繫于心。而說者配之於五臟。雖是失實徵猶言其所本也。至手足臍乳。則汎而不問。其佗若肝本著右。而謂之著左。脾本在胃下。而謂之在上。脈與經同出心。而有氣質之分。而不知焉。唯憒々而說之類。不可復枚擧。夫儒者。以通三才而自負。至觀人之形骸。讓之於醫典而不察。醫人無識。不知素靈周季佞者之妄言。意若有造物者。爲之而授口訣。至若五行配當。則最能糊人之耳目。人身有氣液骨肉。何必有木火土金水焉。而於佗之四行。則一之於火則分君相。以爲造化之樞要。無用之辯。不急之察。聚訟譊々。喙嚷盈耳。是猶方行者問路於越。揭標曰北。於是乎北轅走

相失。生意絶其間。極之於其所給。則天轉以保地。地持以營天。推之於人間。人能營室而居。室能保人而立。唯以物分而異其態焉爾。是以人身一臟一腑。臟則在內之肉、以能藏氣。腑則在外之皮。以能容質。古之人不能取內景以融之於外體。故歸皮肉於外。歸臟腑於內。雖立言固然。融之於天地。則臟腑與皮肉同一物。以分用有意之文。終致皮肉臟腑之別。故何則咽胃腸脬。皮而裏物。漸踰肛門。與所包身首之皮合。臟者爲鬱於皮肉。筋脈以維之。動植已隔意之有無。無意者不用用意之文。有意者不得不用用意之文。於是植無臟腑之目。而動兼皮肉之文。蓋人身以頸分上下之體。上具耳目鼻舌之文。交彩聲臭味之氣於皮裏。下具手足陰乳之文。接配嗣器地之質於皮表。內而咽胃腸脬。以皮納畜收送水穀便溺之質。心肺肝腎。以肉保運化持天地神本之氣。故臟腑本別體。其不同。猶衣與絮。故其本一臟一腑。各分內外。爲一臟一腑。各々擴親疎之用。爲二臟二腑。古之立言者。知臟腑之在內。而不知在外。其內者亦從日之所觸而數不知剖析之理有所反而合焉。五其臟數而不合。則又六其臟。於是其所可統而反剖之。其所可剖而合之。其所可剖而合之者何。咽以能納水穀。其體常虛。胃以能畜水穀。其體常實。其當數之也。拾其實者。捨其虛者。腑者一條之皮囊。岐

七此島總て平なり。濱少々あり。小石多し。高免村より子の方回り七町五十間、高さ二間餘、長さ一丁四十間、横三丁、

八此島土石なし。高免村より子の方高さ二間計、回り八十間。

右先日見分に遣はされ、於御組所所圖。

天明元年丑正月廿九日

○再答多賀墨卿

終日驅不得其到處。非馬力之罪。實取途之非也。臟腑之説。漢與西洋。雖有精麁。未得于條理。晉説之數萬言。猶未脱藥而子問而不已。欲答之。則非短簡之所盡。欲不答。則殆負友誼。託秦伯龍南還。陳一二以塞其責。夫臟者肉也。腑者皮也。腑以保內。臟以營外。蓋天地一氣物。物虛實其體。以開天地。氣陰陽其性。以活水火。虛體爲大物之府。實體爲大體之藏。水火絪縕於其間。乃化動與植。是故動植元一之分。雖反意之有無、機之動止俱資之於天地之給。是故臟腑之理。若近取譬。則觀之於一顆之粟粒。亦足通之於己也。蓋粟之爲物。稃能保米。米能營稃。稃米相得。生意通其中。稃米


此間海上一里
前中
上町
御濱
御殿
大島脇ノ町
加治木町
北
嶌崎
沖島
中島辨天
ヤタノ小島
藤村
赤生村
小池村
城山
横山
五
四
三
二
一
六
七
八


湯ノ村
作赤水
赤瀬
作野尻
守尻
雁島明神
神瀬
文明八年九月十二日燃跡
西
下町


南
萬埼
此間海上一里
北


桜島明神
神瀬
文明八年九月
十二日燃跡
御子島
西
鹿兒島

安永八年巳亥十月朔、午時火發、至十一月初、火猶不滅。然亦不甚、入夜則鹿兒島之地、猶見其光。

十一月、南種子島海上五十里灰積者二寸所。日向境亦然。

島新湧出者八、記左。

一此島潮滿れば不可見。

二此島石多、行歩不自由。巳の方高さ七八間ばかり、長さ九十五間、横五十八間、回り四町四十七間。

三此島土間々有り、回り八町、高さ七八間計、長さ三町、横一町。

四此島石多くして行歩不自由。湯坪大小四つ、汐滿つれば湯潮相交る。硫黄多し。高免邑より卯の方回七町三十間、高さ四五間計。

五此島岩少し。高免邑より卯の方回り五十町にて一里半四町三十四間、高さ二十間餘、長さ十七町、横三町。

六此島土間々石あり。高免村より丑寅の方、回り二十六町五十六間、高さ十七八間、長さ五町、横三町餘。

廢帝―淳仁天皇

福昌寺―鹿兒島にあり

るもの多し。麋鹿或は海をしのぎて吉野といふにいたるものありといへり。さきに失記する者、續日本紀に曰く、

廢帝天平寶字八年十二月。西方有レ聲似レ雷非レ雷。時當ニ大隅薩摩兩國之堺一、烟雲晦冥。奔雷去來。七日之後乃天晴。於ニ麑島信爾村之海一、沙石自聚化成ニ三島一。炎氣露見。有レ如ニ冶鑄之爲形勢一。相連望似ニ四阿之屋一。爲レ島被レ埋者民屋六十二區。口八十餘人。

とあり、薩州にても其地今は定かならざるにや。正誼もこの島なるべしといへり。その後文明八年に燒けたるよし、福昌寺の舊記に見えたりとあり、その遺跡炎崎とてあるとなん。我右火變の圖を得て後に出す。正誼の記に「公命じて、晝の見る所夜の見る所の二圖を畫かしむ」とあり。予が得るところは、いかなる人の圖せるものにやしらず。また傳へ聞きけるやうは、火變の前、猪鹿狸狐やうのもの、盡く山林を出て村落に群り、田圃をあらしたりと。火氣下にうごきて、起居安からざりしゆゑなるべし。

○櫻島火變圖說

知學事—學問の係の役人

參差—長短出入あるをいふ

藩は—鹿兒島の町は風上なるを以て

○重記火變

其後薩藩の知學事山本正誼の櫻島炎上の記を得てよむに、安永八年己亥九月廿九日夜より十月朔日にいたり、薩城及び東南北數十里の間、地震ふ事しきりなり。其日未の刻を過ぎて、城下東方對岸櫻島の上火おこる。火もゆれば地震ひ、地ふるへば火もえ、聲雷よりもとゞろき、光電よりもかゞやく。火騰る事數丈、石を激して空中に相撃つ。五日を經て、その勢漸く衰ふ。されども或は三四時をわたり、あるひは一二日を隔て、伏發常ならず。又東北五六里の海底より炎上る。其響殷々として、日夜やまず。既にして海上一洲を出す。水を出づること二丈餘、周半里なるべし。一月を經て、變動の勢やうやく舊に復す。こゝにおいて櫻島の形勢、高低參差舊觀にあらず。石つむもの五六丈に及ぶ有り。灰埋めて二三十尋にいたるあり。地の下風にあるものは沙石ひるが如し。藩は上風にあるを以て甚しきにいたらず。飛鳥走獸は沙石にあたり、魚鼈は海底の炎に傷らる。人この災にかゝるもの、百四十有四人。島に村すべて十八あり。火の起る事古里村、有根村、瀬戸村、黒神村、高免村の上にあたる。是を以てこれらの村民死す

り。是れむかしは國にてありしが、海に沈みしといひつたへたり。歷史などにも地陷るといふ事多し。空穴ひしぐる故と見えたり。是は遠き事なれば、定かにもさしがたし。出雲の國秋鹿の郡の北なる海黑島といふ有りしが、天慶三年十二月上旬、俄に落ちいりて、今は其跡とて大石など殘れる事、著聞集にも見えたり。又天武天皇の十三年地震あり、伊豫の溫泉つき埋め、土佐の田苑五十餘萬頃沒して海となり、天おびたゞしく鳴り、伊豆の島の西北三百餘丈の高山出來たる事、日本紀にも見えたり。薩摩あたりに此度の樣の變にて山出來たる事、同じ紀かにある樣にも覺えたれども諳記せず。近く慶長元年の七月大地震、速見高崎山なども石崩れ落ち、火出でたるよし、府内の記事に見えたり。この時かのあたり人七百餘も損じたりとあり。寛永の頃、八丈が島のあたり一島を湧出し、年號をとりて寛永島ともいひ、寶永の頃、富士に火起りて一丘を生じ、寶永山ともいふ。水火は時としてかはる物なれば、昔は富士の烟とよみしも、今はたゝずなり、下野室の八島の煙なども、今はたえぬ。越後蒲原郡如法寺といへるには、正保二年三月よりあつくなき火燃出でて、百有餘年を經て今にたえず。是等の事を思ひ合せ、水火の用の工夫あるべきなり」霜月望。

其内此度の如きは尤大變と見えたり。地震は其鬱氣發する勢なり。右の陽氣地に鬱し、地面を陰に閉ぢられ、無理に其處へ發すれば地震なり。天間の陰氣に閉ぢらるれば雷電なり。秋の初いなづまとて光るも、夏の地面の陽氣のこれるを、秋陰の氣に粛せらるゝ故に發して散ずるなり。雷の微にして聲なきなり。天鳴とて天のなるも雷の如くして聲ある也。此節櫻島の火も雷と同一理としるべし。傳へ聞くに、鹿兒島は北極の地を出づる三十一度位のよし也。此地は三十五度餘りなり。此處によくその音の聞えたれば、中國あたりにも定めて聞えけん。雷百里をうごかすとは、唐のみちのりにして、日本の十里にもとゞかぬことなり。誠に雷の音ほどたかきものはなき樣なれども、十里にみたず。此節の鳴動は百里にも及びぬれば、物の音にかゝる大なるものはあるまじく覺ゆる也。水の流れ、火の起り、土地の出沒するも、世界にたえぬことにして、もろこしの碣石といふは、世に類なき大石にして、むかしは陸なりしが、今は海の中に島の樣に見ゆると聞けり。からの西南のはての海に、萬里といひて、東西は二三百里、南北は七八百里も沙石のみ茫々としてあり。その邊は殊の外嶕多く、阿蘭陀船など深くつゝしむ所な

地溲し溜り水などの黄色を帯びたるもの

地中すべて此氣と水と二つあり。水は高きに結び、卑き處に化する故、地上にうかみ、燥は地下に生じ、天中に化するもの故、よく地中に伏す。水は川谷を道路として、處によりては伏流するもあり。燥は地中の穴を往來して、鬱してあつまれば火となる。其氣穴、山岳の間に通ずれは風となるものを風穴とし、火出づるものを火穴とし、又時あつて雲霧を起す處ともなる事、皆燥氣の變なり。燥氣の火となるは、水の氷となると同じ理にて、冬の雨露をむすびて霜雪となるも、夏の溫熱を鬱して雷電となるも一つ事なり。肥後の阿蘇、信濃の淺間などいふも、其氣の外にぬくるなり。其處は地膩とて、硫黄地溲樣の地あぶらの結ぶ處にあり。さる處は冷水の中にも火もゆるなり。其外世俗に地獄といふも、ひとつものにして、溫湯といふは、其氣脈の上を水の通る所にて、水の煖まりたる也。さる故に其處を流れ過れば、本性に復してひゆるなり。海の底にも其氣通ずる處いくつともなくあり。此内に右の陽氣伏し月に壓はるれば、其氣わきへ行くゆゑ潮かれ、月側なれば陽氣下よりおこり、水に入りて水泝る也。水本性は下るものなり。陽氣そのうちに入れば、釜の內の水のわく如くのほりゆくなり。されどその陽氣は客氣ゆゑに、外にぬけ出づればもとの水となり、又流れて下るなり。右の燥氣地中の空穴に

石火矢―大砲。
つるべ放つ―連發す。
絪縕―天地の氣の蒸して交り合ふ、

け、其人に送り侍る事しかり。安永戊戌七月。

○櫻島火變の說

ことし安永己亥九月廿九日の夜より翌十月朔日、南にあたつて雷の如くにして雷にあらず。天鳴ともいふべくして然にあらず。石火矢などつるべ放つ樣に聞ゆ。肥州阿蘇山燒くるかなどいへり。程へて聞くに、薩摩麑島より南にあたり、櫻島とて周十里もある樣なる島あり。晝夜八九十度も地震り、南北の端より火起り、大石を飛すこと六七里の外に及び、風起り黑煙東南に吹覆ひ、人の死傷其數いまだしれずといへり。門生其故を問ふにこたへける樣、「去年以來伊豆の大島などもやくるよし沙汰せり。是は櫻島よりは火勢ゆるく久しき樣にきけり。是誠に希代の變なり。されども天地より見れば常理なり。一體地といふ物は、水燥の二つの氣にて、絪縕造化の用をなすものなり。地の中は菌瓣蜂窠の如しと、古人もいひて、菌のうちの理の如く、蜂の窠のあなの如く、蠹ばみたる木の如く、始終あちこちと穴あるものなり。燥とは地の氣なり、故に體はなし。水の對偶のものなり。我輩かくのごとく寢つ起きつ、嘘噏を通ずる處も、其氣のうちなり。

僭上―身の分限を超えたること

海の效ひ法とる事もとより下の道なり。僭上とはいふべからず」と、こたへける。又其人の問ひけるは、「子と嗣とその隔てあり、父と嗣を養ふ人といかん」曰く、「古人我子を同姓に遣はしては、かれに養父といひ、これに本生父といへり。嗣たらん人の爲に、兄にもせよ、小父にもせよ、祖父或は他人にもせよ、父の位にある人なり。此故に嗣と子と別ありといへども、畢竟これは子の中に其別を論ずる事にて、嗣卽ち子の位なれば、其義其したしみ卽ち父子なり。古人養父嗣父の名あり、相通ずべしといへども、嗣父の稱尤も正し。父といへば、義といひ親みといひ、實の父子に異なるべからず。已に嗣の父といへば、兄を兄とし、小父を小父とし、祖父を祖父とし、他族を他族とするに妨なし。天地は有のまゝなる物なり。有のまゝにすればむづかしからず。しかるを人の智惠にて有のまゝに細工をまじふるに、いとどむづかしく相なるなり。此一事に限れる事にもあらず。しからば養子といへる、名はあたるべからざるか、否、子なきによりて、養ひて子とすれば、養子卽ち嗣なり。實の子なれば、養の字なし。唯子といふ字になづみて、我家督を讓るものは是卽ち子なりといへるやまひあり。唯嗣といへらんが勝れり」と語りし。其あらましを遺忘にもそなへよと、書きつゞけ、ひそかに自ら子嗣の辨と名づ

諒闇—天子の喪に服したまふをいふ

數へ奉れば、始は孝德皇極帝に嗣ぎ給ひ、後には齊明、孝德帝に嗣ぎ給ひし事分明なり。已に後の日嗣となり給ひ、先の帝崩れ給はん日は、四海父母をうしなひ奉る事、祖宗に對し、天下に對し、御一人の私事にあらざれば、諒闇の儀式、例の如くにぞとり行ひ給ひけん。しかれば嗣に父子の親み有りて、兄も弟に繼ぐべく、子も母に譲るべき理にて、嗣子分明に別也。此故に北畠親房の神皇正統記にも、世と代とを分ちてしるしたる例もあり。これに准じて見る時は、末々にいたりても、其家督たらん人は子にあらざればあたはずと定めしは、いにしへの道にはあらじとおもはる。まして其家にあらん女子は猶幼き打たれ髮ならんものならば、此子年長じたらん上、媒たちて後配偶すべきなれば、其子に不信不貞なし。禮典に、婚をいるゝの事ありても、故あればかへすといふ事あり。一旦婚姻の約ありては、婚禮なくても其節を守るべしといへる本文は見あたり侍らず。さして畏くも、天すべらきの御事を、賤しき末々の事に引き奉るははゞかり多かる事なれども、賢き文の中にも、

君子動而世爲天下道。行而世爲天下法。言而世爲天下則。

とありて、君子の德を風とし、小人の德を草とする事なれば、上の跡をたれ給ふ處、四

虞書―書經の中にあり

白髮帝―清寧天皇

儲の宮―皇嗣

賢德ある人を選み拔きて、是に位を讓れり。此故に舜は堯の嗣にして、堯の子にあらず禹は舜の嗣にして、舜の子にあらず。嗣の字は、虞書に、「舜讓レ于レ德弗レ嗣」として下に「正月上日受二終于文祖一」とうけたれば、其終をうくるはつげるなり。是嗣の出處也。謹んで本邦　帝統の序をいふに、神武天皇は　鸕鷀草葺不合尊の御四男にまし〳〵しかども、葺不合尊の御後をば、此　帝つぎ給ひ、御子　綏靖天皇も、御兄神八井耳手研耳の二尊を置き、　神武の嗣となり給へり。白髮帝は　雄略の御子にて、雄略帝は允恭帝の御子也。　白髮帝崩じ給ひ、御嗣なかりければ履仲帝の御孫弘計億計の二君を求め得たり。　履仲帝は　允恭帝の御兄にして、共に　仁德帝の御子なれば、此二君は白髮帝の再從兄弟にてまし〳〵しが、二君共に位を讓りあひ給ひ、弟億計の君讓りまけさせ給ひ、帝位につき給ふ、是れ　顯宗天皇也。然りしかば、兄弘計の君儲の宮にまし〳〵　顯宗程なくかくれ給ひ、其跡を嗣ぎ給へり。　皇極帝位を　孝德帝に讓り給ひ、　孝德帝崩御の後、再度位をふませ給ひしが、重祚前の位と同じうしがたきゆゑにや、御一人の御身なれども、謚號も前には　皇極と號し奉り、後には　齋明と申し奉り、世次も三十六代　皇極天皇、三十七代　孝德天皇、三十八代　齋明天皇と

嗣の辨明ならず。此難義となれる也。それ子は父の後を續ぐものなれば父の嗣なり、嗣は子なきによりてあるものなれば子と差別あり。さて子は嗣なりといふ内にも、世の中の事、常あり、變ある習なれば、嫡長必ず其家をつぐにもあらず。嫡長にして其家をつげば、嫡長卽ち其家の嗣なり。叔季にして其家をつげば、叔季卽ち其嗣なり。嫡長繼ぐべからずして庶子つぐ事あらば、庶子卽ち父の嗣なり。然れば子卽ち嗣なりといへども、嗣誰と定れる事なければ、子の父に嗣ぐも亦差別あり。右いへる如く、子なくて嗣を求むれば、其嗣は子なきに起る事なれば、子と稱を同じうせざる事分明なり。故に嗣伯仲叔季衆庶に求め、兄弟にもとめ、從兄弟從子にもとめ、孫に求め、親族に得ざれば、他族にも求むる也。彼方にては弟つぐをば及ぶといふ、及ぶといへば、やはり弟兄の家督をつぐ事にして其父母をば同じ父母とすると見えたり。是を兄死し弟及ぶといへり。殷の世には、大抵兄より位をば次第して弟に及ぼししなり。さる程に、微子は殷の紂王の兄なり、周に歸して宋國を賜りし後、その國を弟微仲に讓りしも、殷人には珍しき事にもあらず。天下も夏の禹王より後は、子に讓り嗣がしむるといふ法たちたれ共、五帝の頃は、天下は天下の天下にして、一人の天下にあらずとして同族の内にて

として、叔父季父の位に居、其兄退いて姪の禮をとるべきや。又孫二人あらんに、弟たるもの故ありて重きを承けて、祖父の後たらんに、其兄をして從子の列につかしむべきや。又己れ女子あり、他より一人を養ひ得て、配偶せんに、子といへば、同胞相配するに似たり。壻といへば、他族の稱なり。壻養子といへるは、子なきにより、引とりて子として家を讓れるとしたるなるべし。されども、壻といへば子にあらず、子といへば壻とへだてあり。名稱いづれにも穩ならず。此頃或人の問ひけるは、「こゝに人あらんに、其家主人なくなり、幼き娘のみひとりあらんに、配偶すべきとて、他よりひとりむかへ置きてんもの、いく程なく身まかり、あとつぐべき人なくて、止みがたしとて、又他の子求めて、其家の後と定めなんに、さきの死せるものの跡なれば子なり。子なれば其幼き女子は母の列なり。其幼きを他に嫁せんには、血脈を絕つなり。其死せるを父とせざらんには、其鬼をして祭を享くる處なからしめん。かゝらんかたにゆきなんずる人は、いかが名づけ、いかゞ處して、義理に害なからんか」となり。晉答へける樣は、「是等は誠に世の難義とする處なり。我を以てこれを見れば、これ難義にあらず。世に名稱の明ならざるより起れるなり。其所謂名稱とは、人の倫理、子といふあり、嗣といふあり。子

溝壑に轉ず—みぞや谷に落ち入らしむ、悲慘の境遇に陷らしむ

樣なれども、今一國の衆、その君により、老を養ひ、孤をめぐみ、妻子從類を扶助するもの幾ぞや。それを名分に拘はり、人の父母妻子を凍餓して、溝壑に轉ぜしむ。天地生生の德に負く。達者の見にあらず。もろこしの事はいざ知らず、我國のならはしより、今の人情に考へ、天地生物の德におし本づけて、これを見るに、なるべき程は、同族親戚に求め、もとめて得ずんば他に求むるも苦しからじ。熊澤子人は悉く天地の子なりと觀たるも、已む事を得ざるの上の達見なり。本邦にて、養子の始をいはば、太神宮素戔烏尊の御子天忍穗耳尊を養ひ、天津日嗣となさしめ給ひしぞ、其始なるべからん。女子にして統をたれ給ひしは、是又太神宮を始とし奉り、推古、欽明の御子として、崇峻帝の讓をうけ給ひ、元正、天武の御孫として、文武の統を嗣給ひし類、その例多し、下つかたにも昔さぞ是等に類せる事も多かりしならん。鎌倉の頃、北條政事を沙汰せしには、專女子父の家をつぐ例も多かりし事なり。さて我百歲の後、託すべき子なければ、我子ならぬ人を養ひて子とする事なり。其子とするにつきては、さまざまの難義あり。難義といへるは、譬へば伯兄なる人に子なく、其仲弟を養ひて子とせんに、猶叔季の弟あり。己れ兄の子となれば、叔季の弟、其日より席を改め、嚴然

の如く、もろこしにては、女子ありてだに、其家はつゞかずとする風ゆゑに、贅壻は人賤しむ事と見えたり。我國の風は、是には異なる事あり。帝統の如きは格別のことにして、其人ならずして繼ぐべき樣なし。末の人に至りては、已む事を得ざる日は、他族をも養ふなり。法は人の立てたるものにして、風は其國のならはしなり。男女は人の陰陽にして、男は家に居て、他族の女子をむかへて配偶し、女子は父の家を出でて、他族に嫁し、其家を家とする事、天地の條理なれば、とかくいふべき事なし。されども不幸にして、男子なきにあひては、女子とても父母の血脈に相違なければ、女子は家を續ぐべからずといふも、人の立てたる法なり。女子も其家を續ぐべしと立てたるも、人の法なり。男子あらんには男子家を有すべし。梅の條も、接げば桃の木にも附き、橘の條も接げば柚の木にも附くよりして見れば、天地に此理なきにしもあらず。さあれば男子なからん日、女子はありても斷絶と同じと立てたるも、畢竟臆なる說なり。今の學者、唐の書に見なれ、唐の敎にあはざる事をば、疑ひあやしむも、學習の弊なるべし。徂徠諸侯の國の事を論じて、「子なき時は天これを絕つなれば、國除すべし」といへり。熊澤子は、「人は盡く天地の子なり。他族もつぐべし」といへり。名分に於いては、徂徠の說正しき

梅園拾葉　卷之中

○子嗣の辨

人家不幸にして子なき時、弟あれば其弟を子とし、孫あれば其孫を子とし、女子あれば壻をとりて、其家を繼しめ、猶なき時は異姓にもとめ、其家の絶えざれば、其家の老や幼き輩も是に手より、老はやすく終をとり、幼は孤とならずしてひととなれるなり。もろこしの法は、其血脈を重んずる事にて、同族までに養ふべきものなければ、其家は斷絶する事なり。女子は有りても家督とせざる風なり。されども他族より養ふ事も絶えてなきといふにはあらず。さるを贅壻といへり。贅はこぶといふ字にて、こぶは身の外に身の樣なる肉を結べるものゆゑに、これより轉じていへると見えたり。戰國の時の淳于髡もその人なり。漢書賈誼傳かに、「家貧しく子衆ければ、出でて贅す」といふ語ありし樣に覺ゆ。又あの方の宦官といふものは、陰をたちて君につかふるもの故に子なし。是等又人の子を養ひて家を讓る。魏の曹操などいへるも、かゝるものの末なり。右

宦官―支那古代、宮中にありて天子に近侍する内官

してつたへけん、此記いたりて、方金二箇賜りぬ。野人の榮、何かこれに勝るべき。

鬅鬙—みだれがみ

困苦の内にありといへども、人に乞ひ求むるの心なし。其の操のたてばなり。されば世の人を觀るに、爵位のすゝまん事を願ひ、福澤のしげからん事を求むる故に、肩を聳かして、人にこびへつらひ、又は己を利せんとて、人を苦しめ、道ならず財寶を積みて、外はいかめしく晴がましき樣なるも、いかでこの男の心の隈なく照る月の秋の夜の潔きが如くなるには及ぶべき。されば孝は百行の本といへり。此者もとより不具の身なれば、賢き聖の敎きけるにもあらず。禮に親の喪を執るに、水漿口にいらざる事三日とあり。己れ孝心の厚ければ、自然と其本文にもかなふなるべし。此男の髮鬅鬙として、襤褸うちき、いとあはれなるさまなるも、内には聖賢にも恥ぢざる心抱けり。人もし此心にのつとらば、官に臨みては貪らず、孝悌忠信の基も立ち、禮義廉恥の心も生じ、文の端くれにてものぞき見るものの、一文不通の人に及ばざるは、憤激勉勵の始ともなりぬべし。しからば少しく己が慈愛の心をひらき、力を合せて其孝思をもたすけよと、同盟の人にすゝめ、同盟ならずとも、これをあはれともとめん人は、同じ志をはこべかしと、其行狀をしるして、此人の志をも助けよかしと、つけ侍る事しかり。安永戊戌五月日。

其後その志を感じ、遠近の贈り物多く集れり。殊に久留島侯の上大夫吉澄氏へいかが

仲由の字

涸轍の難―危急の難儀

事の思ふ儘ならざる事を、孔子に對して、「痛しきかな貧しき事。生けるには以て養をなす事なく、死せるには以て禮をなしがたし」とて歎きけり。かくばかり貧しきが中にも、廉潔の志たゆまず、親に孝に姉に友なる事、松の緑の霜雪に色かへぬ心地して、我同盟の人に告げ、其涸轍の難を救はん事をこひ願ふ、其おもむき左の如し。

人と禽獸との相距る事いくばくもなし。只慈愛廉恥の心を失ふと、失はざるとの間なり。慈愛廉恥、卽ち仁義の心也。この心を存する時は子としては孝に、臣としては忠に、父として慈に、君として惠に、衆にあつては爭はず、若し此心を失ふ時は、子としては不孝に、臣としては不忠に、父としては不慈に、君としては、下を惠むの志なく、衆にあつては悖りそむく。それ生を惜しみ、死を恐れ、親子の恩愛、夫婦の情慾、生きとし生けるものこれなきはなし。されどこれを人にたくらぶるに、只愛を推し、恥をしるの心こそ、彼になくして、我に有するものならめ。其禽獸になくして、人のみ獨有するものを持ちながら、其心に荒みなば、己れ自ら禽獸の域に陷るともいふべし。されば、古人の言にも「園林雖好主人之心則荒む」といへり。いかに衣服美しく着なし、居宅結構を盡せりとも、心の底の塵拂はざらんには、いかばかり心劣りせらるらん。此者かく

子路—孔子

などとりて、人にこひ求むる事をなさず。たま〳〵止む事を得ず物借る事のあれば、指を出だして日をかぞへ、かへすべき期を違へず。去りし安永五年中の霜月、その母死しけり。貞平かなしびにたへず、三日の間、物くらふ事能はず。親族いろ〳〵とすかしすすめて、漸く食事をすゝみけり。さてかゝる樣なれば、母葬らん事もいかがあらんと、かたへよりも思ひ煩ひけるに、終焉の設は、とくより覺悟して、被ぐべき衣、米味噌樣の物まで、隣なる村に在りける小父にあづけ置き、いかに乏しき事有りても、其代りをそなへざれば、これを用ひず、去程に其期に臨みては、終を送る心遣ひなし。母なくなりて、姉を母の如くいとほしみつかへけり。あまり貧しければ、姉袖乞せんなど思ひ立ちけれど、貞平其氣色見て、殊の外になげき、手をひろげて遮りとゞめ、涙をながし袖をひかへ、己れ働き養はんずる眞似をして出ださず。ひそかに聞けば、姉のなからん後のそなへも、母のそなへの如くいとなみつる由なり。去年曾の夏、孝狀國の守にも聞え、褒美なさしめ給ひける。貞平痛く悅べる氣色して拜納し、是にて母の石碑建てなん事をはかる。口ものいはざれば、情もるるに由なしといへども、心にいかばかりか、君の賜を榮とも思ひぬらん。推しはかられて哀なり。昔子路の賢を以ても、親に事ふる

ぬ人により、出處正しき文字を撰び、もちひ給はん事、尤可然奉存候也。九月盡。

○手野村貞平行狀竝墓志記

我豐國東の郡武藏の鄕手野村に貞平といへる者あり。ことし四十六、父は又助とて貧しき暮しけるが、二人の子をもてり。田がへし草ぎる營もつきて、姉なるよしといへるは十九、貞平十歲になりけるを引具し、妻とともに、寬保の頃、世渡るよすがもとめて筑前の國志摩の郡本岡村といへるに足を止め、十七年經ぬ其内又助も身まかり、たのむ木陰もなき心地して、又故鄕にかへりけり、里人あはれがりて、やう〳〵疊五疊ばかり敷きける小家つくりておくり、むかし親の作りすて地の少し有りけるをかへし渡しぬ。己れもとより啞なれば、物かたり物きく事もかなはず。母は年老いぬ。それさへあるに姉なるものの病めるが上に、目もさやかならず。朝食夕食の煙だに有るかなきかに、世を過しぬ。されども、此者天性至孝にして、心の及ぶ限りは、母姉に志を盡しける。其貧しき事いはん限なし。されども其潔き心からに、菜をつみて飯にかへ、水をわかして湯となし、春はいひら樣の物（錦嚢兒、豐後の民、荒年にはくらふ、方言いひらといふ、）あさり、飢渴をしのび、或は日傭

生じ、又木は土にかつなどいふこと

うて、物に配當して造化を論じ候ふ。是又聖人の學になく、天地自然に適はぬ事に候ふ。其上醫家にて申し候得ば、脣は土、喉は金、齒は水と配し候ふを、音家にては、喉は土、脣は水、牙は木、齒は金と配し候ふ類、五行配當の内にても、自ら相戻り候ふ事に候ふ。字は世々に變じ候うて、昔夏禹の頃の文字は、岣嶁山の碑とて、今に殘りて、少しも今の文字に似よる事もなく候ふ。周の頃は初は大篆とて御座候ふ。宣王石鼓の文とて、今にありて讀めぬ物に候ふ。孔子の頃は、科斗迚かへる子の形の樣なる字行はれし也。今の隸字といふものは、やう〳〵秦の始皇の頃、事繁く字むづかしければ、下つかた役人ども手はしりよき爲に設けたる物に候ふ。かゝる事に候へば、今の隸字に限り、其畫造化の機密に合し候はん樣なく候。音に五行を配し候ふは、唐土の音に候ふ。今これを呼び候ふは和音に候ふ。和漢の音、脣舌牙齒喉同じからざるもの有り。疑、和はギと呼び、漢はイヽとよび、曉、和はキヤウとよび、漢はヒヤウと呼ぶの類に候ふ。さ候へば、支那國の韵鏡は用立つまじく候ふ。さり迚こなたの韵鏡もこれなく候ふ。又文字の音韵をしらべ候ふには、音を用ひ、名を呼び候ふには和訓を用ひ候はば、いづれの音に從ひ候はんや。畢竟技者輩をてらひ口を餬ふの術と覺え候。この故に、名はくらから

名乘の字を返す—三四音を一二音に約すること

生剋—五行の運行にて木より火を

時は外に名ありて、元服の時實名をつくるなり。是は烏帽子親の役也。近頃通字といふ事をいひならはして、世々かしらの字を通じて用ふる事あり。慥なる故實なし。祖先より子孫にいたりて、氏竪につらぬけば、外に通る字意義なし。其上父の名の字を冒す事、禮にあらず。兄弟は横に貫くものゆゑに、其字を通す事もあり。今の通字といふもの、兄弟に用ふるは、然るべきかに候。名乘の事返し候うて歸納もしらべ候へとの由、此道小子も學びて、わかき時は人にもかへし遣し候ひしが、大に義理なき事をさとり候うて、後はいづかたも需を拒み候ふ也。近古の俗にも、源義朝の名、梟に返り候て、父を害せしなど、音の清濁もしらぬ人のいひ出せし妄言に候ふ。反切と申す事も、昔はなき事にて、漢人は韻に委しく、音に疎く、梵は音に委しく、韻にうとく候ひしかば、梵漢音韻を合し歸納を得て、聲音をしらべし物に候ふ。すべて世の中の吉凶といふ物を知らんとならば、天爲人爲を辨へ、當遇の天命に達すれば、斯樣の事より生ずる物にあらざる事を理會致す事に候ふ。今の名乘を返すと申す事は、先づ易の吉卦を按じ、音の五行を見て、生剋の順逆を定め、字畫を數へ、歸納の字を撰む事を面と致し候ふ。聖人の道の上に、易の六十四卦に、吉卦凶卦と申す事なく候ふ。五行生剋は、周の末より起り候

わがね—まげて輪となす

行第—次序の義、其出生の序を以て呼び名となすをいふ

いふ事など思ひ出でて口ずさみけり。かの枝をわがね葉をすかし、花ぶさをつみ色うつろへば、やがて情なく掻いやり捨つるを口惜しとは、我一人して思ふ事にや。

○答辻玄養

人の稱に、姓と氏と行第と名との四つ有り。氏は族ともいへり。今苗子といふ。行第は呼名なり、假名ともいふ。名は名乘とも、實名とも稱する也。夫れ姓は天子より賜はるものにして、木に幹あるが如し。故に氏は姓より出で、又その一族を分つ程に、時として變化する事もあれども、姓は萬世かはらぬものなり。故に姓に次ぎて重きものは氏に候得ば、故なく物好によりて他苗を冐す類、祖先に對し、不敬の至なるべし。いかんとなれば、氏は竪に貫くものにして、是によりて誰が先祖誰が子孫も分るるものなれば也。さて行第のある處、是を苗字にそへて呼名とする也。太郎、次郎、三郎是なり。餘五將軍維茂とは、將軍の號にあらず、もと十五男なる故に、余五郎と稱せしによりて也。唐土にても是等の事あり。沈三佺期、杜五審言、などいへる此類なり。されど和漢隔別の事なり。唐土行第の事は、東涯先生の輩行說に、詳にその事を辨ぜられたり。幼き

しやが―胡蝶花

○津加美佐志の説

花は生けるも投げいるるも、各〱その法ありとぞいふめる。されど片田舍なる人はしらず。知らずとて花のめでたからぬかは。軒に半垢つきたる花桶のかたくななるを、心ぼそくも綵にかけて、花のおほかる多からぬは、童山賤の手にまかせつゝ、捨てやらず、取つくろはず、つかみさゝば、おのがまに〳〵亂れあひて、仰ぐべきは垂れ、ひきかるべきは高く、思ふまゝならぬも、人の世になずらへてをかし。花の名殘はさら也、枝あぢきなく枯れ、葉哀におとろへぬるが、興深ければ、いつもさゝがにの蛛のすみかとなるまで、換へやらで、舊きに新なるをかさぬれば、余所目さぞいぶせからん。隣なる龜てふ童の、此ころ櫻惜し氣なく折り來て、元てふ子にさゝせたるが、風にさそはれ、文のはし硯の面に散りかゝりて、人の心をなやませしも、いつか昨日の昔にて、あとは若葉のわづかなる水を命とも知らず、綠をそへ、花蕊艶にのこれり。行く春のかたみと思へばいかで捨てやは遣るべき。蝶や蜂の來なれて、尋ねまよふも心くるしく、椿しやが樣のもの折りそへぬれば、かれも所得顏に遊びたはむれつゝ、萬物靜に觀れば、皆自得と

笞杖徒流死のかなしみをかけ侍るは、絶巘喬木にかくるにあらずや。さればかゝる身は、もろ人に疎みにくまれ、公に罪せられいろ〳〵と禍にあひ侍るは、熱鐵の湯をのむにあらずや。されど辛うじて命たすかれば、こりあらたむる心はなくて、やがて又かれをうらみ、これを猜み、よしなきむかしに立歸るは、又よみがへり飛行自在にあらずや。されば唐の大和の昔の文より、今の浮世の有さまになずらへて、つく〴〵とかうがへ侍れば唯此ものの生き返り死に返り、家國こゝろのさまたげをなし侍るこそ、淺間しけれ。北條高時入道の酒宴の席に、天王寺の妖靈星とうたひしは、わづかに其あとを人に見咎められたるなるべし。いでやかゝるおそろしきものを防がんずる祈は、心素直にして、優れるを敬ひ、劣れるをいとほしみ、假にもおかしあなどる心なく、物毎に己が爲につとめなば、いづくか鬼のすみかなるべき。穴賢、なしとな思ひ給ひそ」といひければ、問ひける人も心得て、「誠や此頃の人の心の時雨の空の照るも曇るも定めなきより、積れる雪のあしたの頼みがたなきも、人の世の中に喩へ侍れば、此晝の如くおもひなされ候ふ」とて罷りぬ。時は明和改元後の師走十二日、語れるまゝに梅園の南の窓にて書きつけ侍る。

おしまづき—脇息に同じ

さかしらを構へ—讒言し

る心あるをば伴ひもてゆくなれど、剛なる人をば得おかさず。己が心に逆ふものをば、或はつかみ、絶嶮喬木の上に懸け、或はもとの所にかへす。風を生じ、火を化し、身を變化して、人ともなり、鳥ともなり、顯るるもかくるるも自在なり。されど日に三度熱鐵の湯をのみ苦む事限なし。終に身死して蘇り、又飛行自在なりといへり。造化の間かゝる怪異のものも侍るべきにや」といひければ、主人おしまづきをはなれ、「我幾度もかうやうのもの見つ」といひければ、客眉をひそめ、「あな怪し。いかで幾度もかうやうのもの見るべき」といふにぞ、「いさとよ、いかでか欺き申さん。さらばかたり侍らん。それ己たかきに居て、人を見おろすは、高山にすむにあらずや。頭巾は、惡魔降伏の相を表はし、袈裟まとへるさまは、しめやかにおとなしく見え侍るにあらずや。さあつて物をよくやぶるは、爪の長きにあらずや。己才にほこり、人をば皆愚かなる樣におもひあなどるは、鼻の高きにあらずや。人の恥らひかくす事をばさぐりあばくは、目のときにあらずや。仇をせんとては、敵ながらも味方と見え、僻事ながら理と心まどへるは、變化自在にあらずや。尋ねもとめて黨をむすぶはそのともをかたちふにあらずや。賢き人をさかしらを構へ、避くるは、剛なる人をばおかさざるにあらずや。われに逆ふものをばさかしらを構へ、

るをば天狗といふ。舒明天皇の頃、星飛んで聲雷の如し、僧旻天狗なりと奏せし事あり。よばひ星は呼び星にやあらん。又經の星のうちに、井宿の分に一座七星、南にたれて懸れるを天狗とよべり。又天狗は夜を司る、天鷄は晨をつかさどるといふは、斗牛之間天鷄とならべる星にして、井宿の天狗には非ざるべし。又獾といふ獸は、狸の類にして、土に穴をほりすむものなり。蜀の國にては天狗といふ由、本草にも見えたり。爾雅にはかはせびといふ鳥をも、天狗としるせり。又山海經には、陰山に狸に似て首白きけだもの有り。天狗といふよしなり。獾とは別なるにや。又同じ書に、天犬といふも侍り。是は赤くして犬の類と見えたり。その下る所に兵有る由なれば、常にあるものにはあらざるべし。又蝦夷より能登の方の海には、いかにも鼻ののびたる魚ありて、處の俗、天狗魚といふ由聞き侍る。かゝるたぐひにや」といひければ、客頭をふりて、「否、さにはあらず。世に天狗となんいふものは、所々高き山の頂に處を占め、さだかには人目にもかゝらず。畫にかける形を見るに、そのさま人の如くにして、面いぶせく、目とく、鼻高く、爪甚だ長し。肩の後に翅生えたり。かしらに頭巾を、いたゞき身に袈裟をまとへり。されば虛空を飛行して、千里の隈も瞬きのひまに翔り、人間をうかゞひては、驕りあなど

て行ふ也。昔刑を制する日、大夫を刑する制を立てず。禮を制する日、庶人の行ふ禮を制せざるなり。禮を庶人に行はず、刑を大夫に行はずといふ事にては、あらざるか。

一禮と儀と別なりといへども、儀も亦通じて禮といふなり。

一左傳、畜龍の事見えたり。管見を以てこれを見るに、蓋し古、帝王の時、雲の瑞あれば、雲にて官名を紀し、龍の瑞あれば、龍にて官名を紀したり。雲とつけ、龍とつけても、雲にも龍にもあづかる事とも見えず。それが時代遙におしうつり、纔に豢龍氏、御龍氏、などいふ名のみ殘りたるゆゑ、終にあやしき事、附會したると見えたり。古の龍畜れ候へば、今の龍もかはれ候ふ。末世には、斯樣の事ども、附會多く候うて、書も見にくき事多く候ふ。例へば太神の無名雉を天雅彦に使し給ひし事を、無名雉を鳥といひなしたるの類なるべし。

○天狗說

客來り、天狗を問ふ者有り。主人答へていひけるは、「我聞ける處數多し。大空をとぶ星をよばひ星といふ。其中に聲なきと聲あるとの二つあり。聲なきをば枉矢といひ、聲有

弱冠―年二十

ても、睦ばぬ昔ほどは心よからぬものに候ふ。遠き慮なければかならず近き憂ありと、是等も聖人制作の日、遠慮のひとつにて候ひしかもしらず。よりて婚姻は疎族がよきものと兼て存じさふらふ。賢亂弱冠、足下なほ日月に富ませられ候ふ。時勢の可否をはかり、義理に斟酌御取はからひ候はば、いづれ賢慮に過ぎさふらふ事有るまじく候ふ。不悉。

○同

一檀弓、「禮不レ下二庶人一」といふ句、是は下の「刑不レ上二大夫一」といふ句と相對したる句也。それを兩節にわかちたるは、陳澔の誤と見えたり。禮不レ下二庶人一とは、禮に天子、公卿、大夫、士の禮あり。故に士婚禮、士喪禮、士冠禮、士相見禮、など有りて庶人の婚禮、冠禮、相見禮など云ふ事なし。凡て庶人はやつ〳〵して、物事そなはらぬものなれば、古の作者、士迄の禮を制したり。故に先儒の說にも、庶人事あれば士の禮を假りて、これを行ふとあり。刑不レ上二大夫一といふも、刑に大夫を刑すると云ふ所を制せず。此故に庶人事あれば、士の禮を假つて行ふ、大夫罪あれば、惡人の刑を以

おなじく妹にてわたらせ給へば、直に日本武尊の御爲には、姑君にてましく〳〵し也。第三十代欽明天皇は、宣化天皇と同じく繼體天皇の御同胞にてましく〳〵き。然るに宣化帝の皇女石媛をいれ給ひて、敏達天皇を生み給へり。其後もかゝる例ども多く侍りし程にや、源氏物語などの根なし言にも、いろ〳〵の見ぐるしき事ども思ひつゞけて書き連ねけるにこそと、歎かしく候ふ。さる程に男女の道、人そろ〳〵としりて、恥らふ樣にもなりしは、儒教ひろまり候ふ故と覺え候ふ。誠にその後とても、自然と人その甚しき非を存じ候ふ迄にて、制作の沙汰もなく候へば、むかしに因準して行なりの風俗に候ふ。聖人の文には、兄弟の子は猶子のごとしとありて、同行父母は吾より小父小母の輩行にてあしらひ候ふ程に、うちつけにはかゝる物語りもいむ程にこそ候ふを、こなたは昔よりのならはしにて、王公大人よりして、此沙汰はなき事にて、御來書の通、滔々たるもの皆是に候へば、起つて聖人の禮に從はんも、因準して國風に從はんも、誹る人もほむる人も有るまじく候ふ。され共晉が兼て存じ候ふは、親族はいつ迄も久しく替らず睦ばすして叶はぬ物に候ふ。夫婦は禮をもて合ひ、義をもて離るる物に候ふ。義をもて離れ候う

拱を九重の内に垂れ｜勞せずして國治るをいふ

いやしき事｜論語に孔子九夷に居らんと欲す云々、君子之に居る、何の疼しきことか是あらん

周の禮は、姓を動かぬものと定め、世隔たれば姓より族を生じ、木に枝の生ずる如く、族はさま〲かはれども、姓は決して替らぬものと定めたり。猶こなたにて、新田、足利、邊見、武田など數限なく分れても、同じ淸和の源なるが如し。さありて祖をまつるに、族人昭穆を以て皆集りまつる故に、百世經ても同姓は婚姻を通ぜずと定め給へり。されば我邦は君臣の分正しき事、萬國に類なく、神の御代より今の世にいたる迄、高御座うごきなく、拱を九重の内に垂れ、四海浪穩に治れる事、世に有りがたき例に候ふ。さればこそ、外より稱して君子國ともいひ、孔子も「卑しき事あらじ」とて、桴を浮めてをらんと欲し給ひし由に候ふ。されども男女の事は、大樸未だ開けず候ひき。恐れ多く候得共、世々のふみにも候へば、一二をあげ申し候ふ。彦火々出見尊、少童命の長女豐玉姫を娶り、彦波瀲武鸕鷀萱葺不合尊をうみ給へり。葺不合尊は豐玉姫の妹玉依姫をめとり給ひて、神日本磐余彦尊をうみ給へり。卽ち神武天皇也。是は外戚につきての小母也。さて、人皇十二代景行天皇は、垂仁天皇の御子にして、日本武尊をうみ給ふ。此尊東夷征伐の歸路伊勢能褒野にして神去りまし〲しかば、一生日嗣をしろしめさず。其御子ぞ成務天皇の讓をうけ給ひて、帝位にのぼらせ給ひき。是卽ち仲哀天皇

人情世態は常ならぬものに候へば、喪あり、疾あり、百の事故ありて、たしかには定め難ければ、三十二十は、粗其頃を擧げて、準を立て候ふものにて、究屈に心得べき事には有るまじく候ふ。さればこそ孔子も、十九にして宋の开官氏に娶り、二十にして、伯魚を設け給へり。又嫁娶の禮、上古は定まりし事もなかりしならん。其後殷周のたがひ有り。聖人の禮をまうけ給へるは、親疎をば服の輕重にわかち給へり。服は大概斬衰齊衰に三年期あり。然して、大功九月、小功五月、緦麻三月、それより遠きは服つくる也。是によりて、禮の喪服小記にも、上殺下殺旁殺して親畢ると有り。上殺は、己が身より上父祖曾高、この四を過ぎては服なく候ふ。下殺は、己が身より下子孫曾玄、是より下又服なし。是より旁とは己と父母を同じうする者は兄弟なり。父と父母を同じうするの同行は、從父兄弟也。祖父と父母を同じうするの同行は、再從兄弟なり。曾祖父と父母を同じうするの同行は。三從兄弟也。上高祖父にて殺ぎ候へば、高祖と父母を同じうするの同行は、服なきの親よりわかれ候ふゆゑ、服なく候ふ。されどもわかれて遠からぬ故、四從兄弟の死に祖免いたし候ふ。高祖の父のわかれ五世は祖免す。その父より分れたるは、六世にして祖免もなし。よりて殷の制は六世になれば、ゆるして婚姻を通じき。

梅園拾葉

豊後　三浦晉安貞　著
加藤修子睦　輯

巻之上

賢胤の昏議
―御子息の
婚禮の相談

○答ニ上田養伯一

賢胤の昏議、御親戚を置き、遠く存問に預り候ふ事、ふして相考へ候ふに、今世態人情の事に候はば、うときこなた迄に及び候はん由なく候ふ。誠に易にいはゆる、同人于レ野の意にや。君子の貞に利すと申し候へば、敢てきける處をのべて、正しく對せずんば有るべからず候ふ。嫁娶は人倫の本、夫婦義あつて、父子親しむとも、古典に出で候ふ。さる程に、妻をめとるは、人に父たるの道を知り、夫に嫁するは、人に母たるの道を知り候うて、夫婦なるべく候ふ。依て周公禮を立て、男子をして三十にして娶らしめ、女子をして二十にして嫁せしむと定め給へり。されども禮は經にて、經常の義をのべ候ふ。

梅園拾葉題言

匪華匪實。翮其墜矣。寧可供之於人之觀哉。唯子睦愛我之切。不忍於捨乎。捨而收焉。諺曰。愛其人及屋烏。於是乎觀之。其意可謝。其實可恥。及還題數言以言命名之意。

天明改元秋九月　　三浦晉

秋の嵐松より傳へて、夜の雨芭蕉におとづるる燈の下に獨坐して、人情世態、思ひつゞくるにしたがひ、藻鹽草よしなし事どもを書き集めて、かいやりなんもいかゞとて、暫く巻となし侍りぬ。さらば、これを反故といはんもよかるべし。

寛延三年庚午九月既望　　三浦安貞撰

時宜によりてはおとなげなし。是等は酢酒むしつちを米と見、露にやどり溝にすむかげを月とおもふ類にして、わが心の私にひかれ、我心を公にせざる過なり。わが私心にあらば、たとひ聖人の言を聞くとも、我私をなすの媒なるべし。

○施しをなしまた施しを受くるの心得

人に施しては忘れ難きものなり。人の施を受けたるは忘れ易きものなり。

梅園叢書 終

り。酒となり酢となりては、一時の味をきはむれども、本來の米には及びがたし。人も人の道たらんは、君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり、夫夫たり、婦婦たるの間にあり。是れ本來の人の性なり。よく〳〵考ふべし。又その我このむ處によりて物を見る事も、米の酢酒と變ずるが如し。是を好む處におもねるといふ。たとへていはんに、月は同じく大空にすむものなれども、船を浮べては水上の月とし、林下にやすらひては木間の月といひ、池に臨めば其影池にあり。露を弄べばその光つゆにとゞまるが如し。

ある人、五倫の道を人に說きて、「兄は弟をいとほしみ、弟は兄をうやまへ」と敎へけるに、弟聞きて、「あれ聞き給へ、兄たらん人は弟をばいとをしむものにて候ふ」とて、我勝手よき事のみ聞き覺えける。又子路は、百里の外に米を負ひ、父母を養ひし事を語りければ、「子路は殊の外健なる男にてこそ有りけめ」と云ひける。又ある人の、かたはらにおもひものもちて、それを妻のしりて、事に觸れて無情きよしなどわびけるを、「聖人の敎にも妬あれば去る」とて去りける。誠に婦は物にあらそはず、妬まざらんこそその道にもかなひなん。さしての事もなからんに、閨にかたかましきが、妾など有りたるに、道なく妬まんは惡むべし。さなきに我存分の僻事を働きて、婦人に聖人の道を望まんも、

おもひもの—妾

逍遙院—三條實隆、室町時代の歌人
誕—妄りに大言す
かたまし—心のねぢけたるなり

れば此心を逍遙院の歌に、

　まじりなば麻もかへりていかならん心のまゝにしげるよもぎは

と詠み給へり。人も同じく人ながら、その習ふ處の道により、何時となくその心まで同じからずなりゆくものなり。今佛者は、儒を小なりとし、儒は佛を誕なりとおもひ、佛氏も宗派をたてて心を說く事同じからず。儒者も門戸をたてて道を說く事同じからず。おの〳〵その道に入るもの、其道において發明す。ひとりこの事のみならず、盜人となり、遊俠となり、或はかたましく、あるひはへつらひ、あるひは人を欺き僞り、その品至つて數へがたしといへども、その本をとへば同じく天を戴き地を踏み、父と母とありて生れざる人はなし。已に天をいたゞき地をふみ、父と母とありて生れたるよりして見れば、父母兄弟則ち天倫といふものにて、この外に道なしとしるべし。親と子とあるがゆゑに、君と臣との禮あり。兄と弟とあるがゆゑに、朋友の交あり。天をいたゞき地をふむゆゑに、夫婦の道あり。たとひ我營みは、士となり、農となり、商人職人とかはるとも、此外には出づべからず。これより工夫するときは道自ら明かならん。酒にもあらず酢にもあらず、米の米なる處をしるべし。米はよく人の命をのべ人を養ひ、害なきものな

或は始めよろしくもてなせども、終つがざれば、かへりて辱も取るなり。然いへばとて客を悪しくあしらへといふにはあらず。是は親しからん友の事なり。

○米に譬へて五倫の道を喩す

米は同じく米なれども、水を入れて炊ぐときには、飯となり粥となり、炊いで是を釀すときは、酢となり酒となり、空しく倉廩の下にすておけば、蟲となり土となる。釀して酢酒となり、捨てて蟲土となるものを見て、米にあらずといはゞ、人信とせんや。その同じき所の米、一度酒屋の手にいりて酒となる時は、その性熱し、血脈を通じ、憂をわすれ、興を催さしむ。又その糟を釃みて、燒酒となすときその熱燒くよりも烈しく、火を點ずれば油よりも猛なり。性大熱となり、よく人を傷る。又釀すときは美酒となり、その味蜜よりも甘し。酢となれば性溫にしてよく收斂す。醴となるときは下戸の唇を[illegible]、時に痺胃の氣をたすく。その本を尋ねれば米なり。ひとり米のみならず、一切のもく〳〵より。麻は直にのぶものゆゑに、蓬その中に生ふる時は自然とよくのぶるものなり。蓬のみだれがはしき中にはえたらんには、生れつき直なる麻もはたいかならん。さ

○美服珍膳世の弊を矯むるの説

ン激する事あれば、「吾衣食の爲にせず、温飽の爲ならず」といへり。是れ誠に男子の志ながら、是れ易き事にあらず。船に枕して馴れぬ旅寐の波にゆらるる商賈、暑きより寒きに至り、春より秋を凌ぎ、田に耕し畠に耘る徒はいふに足らず、馬に跨り刀をよこたへ、墨の衣に世を背けるが如きも、十に七八衣食に走る人ならずや。故に金もつものは利根ものとときめかれ、貧しきものはうるさしとあざけらる。誠に色に酒に、博奕放埒に家をやぶるもあれば、邪慾不道に富めるもあり。貧福貴賤にては人の賢愚は定むべからず。又衣服うるはしく著かざりては人に誇るの心あり。楚々ならんは人に恥づるの心あり。人と交るにも、膳に美味を羅ね、酒に歡をかさねて、是を深切といふ。是によつて思へば、吾輩如きもの、容易く越し易き關にあらず。もし衣服の美惡に心なく、又は吾親しき友ならんには饗應の心づかひなく、麥を炊ぎ菜を煮て、心の奥底もなく語りあひなんは、誠の友なるべし。今はしからず、怨憤やゝもすれば飲食の間に起るが故に、こゝに心を勞す。心を勞すれば、しば／＼の會合も稀なり。稀なれば親しからず。

扁鵲―戰國時代の名醫

○醫は仁の術といふ論

醫は仁の術なり。しかれども醫者をさして仁の術を行ふものとはいふべからず。醫道は近くは身を護り、遠くは人をすくふ。誠に仁の術なるべし。されども多くは書籍に明かなりといへども、身を護るにはうとく、色にふけり酒に長じ、貧家の病を踈にし、富人の治に心をつくす。いはんや、人扁鵲が手なければ、誰か過なからん、過つときは人をやぶり、甚しければ人をころす。百人を治して、百人を生かすとも、百人は生くべきの理あるものをこそ活かせ、死すべきものを活かすにあらず。扁鵲が技を以てすら、「吾よく生くるものをいかす、死せる人をいかすにあらず」といへり。その壹人は生くべきものを殺すなり。しからばその功と罪と、いづれか重かるべき。されども是は醫道の罪にあらず、醫を學ぶものの過なり。故に、醫は仁の術といふべし。醫者は仁の術を施す者といふべからず。もし人あつて、吾萬人治して萬人を活かすといふとも、我はまことゝせじ。死すべき人ならば、十人治して十人死すとも、醫者の罪にあらず。

年老い云々―仲平は實賴より二十五歲長ず

の家に降さば、我と實賴となり。吾已に年老い身不肖なり。實賴年壯に才あり。我もし禍を免るる事あらば、實賴に利あらじ。我皇家の爲にこの人をゝしむ、故に讓らず」と語られけり。藺相如は國のために命を惜み、是は國の爲に身を惜まず。その君に忠ある所は一なり。

○醫に望聞問切の四つありといふ說

今人病をうけ、醫師を招かば、明なる處に臥し、委しく病の始末をとき、脈を察せしむべし。病人多くはくらき所に臥し、病の樣子も語らず、唯脈ばかりによつて療治をもとむ。醫者も名醫とおもはれんとて、聢々にとはず。古の神醫も望聞問切の四を以てす、望とは其色を望み樣子を察し、聞とは聲氣に聞き、問とは病の次第を委しく問ひ、さて脈を切て藥を與へしなり。今の醫、神醫に比せばその及ばざる事千萬億。その及ばざる技を以て脈一いろにて病をわかたんは、決してこの理なし。病家も醫に困させんとならばよし。もし病をいやさんとならば、醫に望聞問切をつくさしむべし。これ吾言にあらず、雲林の龔廷賢いへり。

常式―尋常、あたりまへ

刎頸の交―死生かはらざる深き交際

ばおもふさまに恥をあたふべし」とて怒りけるを、相如聞きて廉頗出づる日は病と稱し出でず。ある日途にて廉頗が來るをみて、車をかへして避け匿れたり。相如が臣等無念におもひ、「吾等親にわかれ妻子をすて君に仕ふるは、君の人となりを慕ひてなり。然るに廉頗にかくまで雜言せられ、おぢ恐るる事かくの如し。常式のものとてもかゝる恥辱は蒙らず。吾等もとより身不肖に候へば、いとまを賜はりかへるべし」と云ひける。相如留めて、「汝等、廉頗と秦王はいかにぞ」と云ひける。「それは秦王勝れり」と云ふ。そのとき相如、「秦王の威あるさへ我是を辱めたり。われ怯しといふとも一人の廉頗恐るるにはあらねども、秦我趙を攻めざるものは、我と廉頗と二人あるを以てなり。二人爭はば一人は傷くべし。然らば國の爲にあらず。國の急難をすて、私の恨を快うせんは忠臣にあらず」と云ひける。廉頗是を聞き大に身を悔い、相如が家にゆき、涙を流し罪を謝し是より刎頸の交をなし、趙の國おだやかなりし。朱雀院の御宇、あやしき星出でけり。天文博士是は大將の家の禍なるべしと勘へける。時に小野宮實頼右大將にして、枇杷仲平左大將なり。小野宮右大將の家には是を禳ふとて、祈禱のしな〴〵盡されけり。枇杷左大將の家には何事もなし。ある人其仔細を問ひければ、左大將、「星もし禍を大將

御史―文筆の官

頸の血を以てけがす―さしちがへんどいふこと

○忠臣國の爲に命を惜みまた身を惜まずといふ話

趙の國の臣に、廉頗、藺相如といふ二人の臣あり。廉頗は手づよき大將にて、しば〳〵戰ひ數勝つ。其後秦の國より、いろ〳〵として趙を取らんとしけれども、此二人ありて謀り難し。因て趙王に約して、澠池といふ處にて、秦王會せられけり。酒酣にして秦王、趙王にこひて琴を奏めける、趙王琴をひかれけるとき、秦の御史前んで、「その年月その日、趙王にことをひかしむ」と書き留めける。相如缻をとりて、秦王にすゝめうてと云ひける。秦王怒つてうたず。相如進んで缻をとり跪き「君もし缻を擊たずんば、五步の内頸の血を以て大王をけがすべし」と。左右のもの相如を殺さんとしけるを、相如目を張して叱りければ、恐れてあとへ退りけり。秦王是非なく缻をうつ。相如趙の御史をめし、「その年月日、秦王に缻を擊たしむ」と書かせけり。秦の羣臣、「趙の城十五を秦に獻ぜよ」といひければ、相如「秦の都咸陽を以て趙に獻ぜよ」と、始終酒宴をはるまで、一分の辱をうけずして國にかへりけり。この功により、その位廉頗が上に出でけり。廉頗憤り、「我れ軍の功を以て、彼が口さきの功名の下にたゝんこそ安からね。相如にあは

云々—天處レ高聽レ卑（三國志）

瓢簞にて鯰云々—おさへてもその詮なき譬

その事顯れその禍を蒙らざるはなし。その罪牛裂すべし。

○分別なき者に怖ぢよとの説

太閤秀吉、御咄のもの伴内といふ者有り。ある夜話の時、「世の中に何物が至つておそろしきぞ」と問ひ給ひけるに、皆「上樣ほどおそろしきはなし」と云ふ。伴内聞きて、「いや〳〵上樣は正直にまし〳〵て、身に過なければ氣遣ひなし。世の中に無分別者ほどおそろしきものは候はず。無分別者は物の聞わけなく、用捨をしらず、我儘をはたらき、理非の辨なければ、何か渠が氣にあたり、いかなる事をかいひやぶり、思はざる難をやなしなん」と云ひければ、太閤悅び感じ給ひしとなり。誠に世の中に理非のわかちしらぬもの程おそろしきはあらじ。物は理によりて服する樣にありてこそその分もあれ。百姓の水論しけるを聞きしに一人の男何やらんいひて、「此事が目にはかゝらざるか、目は何の爲のものなるや」といひければ、「我目は面の文なり」と、すこしも負くる色なし。かくいはんには肝心の理いはんとも、瓢簞にて鯰おさふる類なるべし。人食犬の樣なるものなれば。僻事いはんとも除けて通すべし、

嚚—心のねぢけたる

天は高きに

の里何れの國なりとも、鑑みてしるべし」ある人の曰く、「此理かくの如し。又あしき事は聞きやすく、よき事はきゝ難きは如何に」予が曰く、「酒は口に甘くして病をかもし、色は心に快くして人をつからす。朝寝する人は、など然は朝寝するとて起したるは忠なれど、寝たきときは入らざる事とおもふものなり。よし〳〵寝よといふは諂なり。されど寝たき時はうれしきものなり。かゝる假初の事にだに、よき事は耳にさかふ。まして大事にのぞみてをや。よく〳〵工夫なくんば入らざる事とおもふべし。傍觀八目とて是を隣の息の事になしてみよ。いかに嚚なる人とも、早く起きよと云ひしが忠と思ふべし」

○陰惡必ず禍を蒙るの説

憎みても憎むべき者は、なき事を造り云ひて、人に惡名をとらするもの、毒害して人を殺すもの、我は賢人のふりして窃に人を陷に入れ、又人をば毒害し己は長く世に生きはだかり、榮曜し旨き事に逢んとは、さり迚は黒き心ばへなり。これよりみれば、或はさしちがへ或は討ち果すが如き、その心に害なし。然れども天は高きに居て卑きを見る。

溢れもの——
無頼漢

は似たるものなり。かくの如く手を入れ足を入れするほどに、いかなる人をも迷はし、一旦さかゆるものなれども、夕立の漲り來る如く、岸も堤も崩しもてゆく樣なれども、只一時のことにして、費無極も殺され、增田石田もほろびたり。又正しき人は物にへつらはず、此方よりもとめては、立どころに富貴を得るといへどもせず、計をまうけて我身の快うする事をせず、賄にふけらず惡しきをばいさめたつほどに、惡しき人の樣に俄に炎のもえ出づる樣の事はなし。物に憐みふかく、利にふけらず貧きものなり。又善き人は、いつ迄生きても人に愛せられあかぬゆゑに、長生しても猶惜しまるるなり。惡しき人は、四十そこらにして死しても、人にうとみあき果てられ、長生せし如く思はるるなり。廿日日の照りたるは一日とも思はず、三日雨の降りたるは十日もふりたる心地するが如し。百年の歡樂は短かきに似て、一日の憂は長きに似たり。一斗の水、一握の泥を入るればその水ことごとく泥の如し。百人のうち五人七人の溢れものあれば、その鄉はことごとく溢れものの樣におもはるるなり。善きも惡しきも命はかぎり有るものなれば善き人とて長生すべきにもあらず、惡しき人とて早く死すべきにもあらず。されども一度榮え一度衰ふる內、善を積む家は榮え、惡をつむ家はおとろふる事多し。何れ

にきはまりしに、増田來りて、利家謀ありゆき給ふべからずとて、しひてとゞめ申しけるゆゑ、病に託しゆき給はず。増田又利家の宅にいたり、前つかた少し悪く障へ候ふもの有りて事果さず、この度招請あらば然るべきよし申すにぞ、利家まへかたの事吾も心に恥づる事あり。またまた欺きをうけば人にあふべき顔なしと申しけるを、増田、さきの事　内府東照宮なりもふかく後悔し給ふ、この度招き給はば必ず來り給ふべしとなり。よつて又招請の日定り、その日になりしかば、増田また東照宮にいたり、利家姦謀あり必ず往き給ふべからずと、詞を盡してとゞめけれども、東照宮此頃も約に違ひ、心甚だこゝろよからず、再び約に違ふべからずとて、已にいでんとし給ひけるを、増田僞りて書狀を認めしをふところより出し捧け奉る。東照宮あやしみ給ひ、俄に故障有りとて此日も延引遊ばしける。利家この事をふかく憤り給ひ、細川忠興をよび給ひ、われ年老い、人の爲に侮られ候ふ事かくの如し、一生の恥とこそおもひ候へ、路を足下の領分丹後にかり、加賀にかへるべしとの給ひしを、忠興聞き給ひ、この恨は尤に候へども、今かくの如くにして歸らば、世の人は怯しといふ、威權もすたれ、秀吉の顧命にも背き給ふにあらずやと咎め給ひける故、増田が謀もむなしくなりけり。よくよく姦人の心

五大老―徳川家康、前田利家、毛利輝元、上杉景勝、浮田秀家

るは、郤宛何とぞ令尹を招き酒を進め度由念頃に申候と云ふ。又郤宛が方に行きて令尹この宅へ來り酒をのまんとなりといひければ、郤宛悦び、賤しき我宅へ令尹來らるべき事身の面目此上なし。さりながら何ぞ饗應の品もなしといひけるを、費無極聞きて、令尹は武具を甚だ好めり、もし來らるる日は武具を門に列ぬべし。令尹來らば見るべし、時にこれをとりて獻ぜられよといひ、さて其日になりければ郤宛かたの如くとりしつらひて待ちける。無極急ぎ令尹にゆき色を變じ、さて〳〵某君を誤らんとせし、郤宛が門には武具森然と立てならべたり、是二心の色と見えたり、先達て吳の軍にも、吳の賄をうけて一軍にも及ばずかへれり、いよ〳〵疑はし、疑ひ給はば人を使はして見給へと云ひける。人を使はして見しむれば、太刀鉾弓箭、無極が言に違なく陳ねたり。令尹大に怒り、燒討にして郤宛をほろぼしける。慶長の頃、大閤秀吉薨じ給ひ、人心もまだ靜ならざりし時、五大老ありといへども、東照宮と加賀利家卿の右に出づるものなし。石田三成、增田長盛とはかりて、この兩人心をあはせ給はば、吾輩志を得る事あるべからずとて、石田增田中よからぬ眞似して、增田は神君におもねり、石田は利家にへつらひ、隙をうかゞひける。一日利家、東照宮を招請あらんとて、東照宮も渡御あるべき

操狂言—淨瑠璃芝居

發明—智ある人

出頭—幅きの家來

のなり。夏さり冬來り、夜翌け日晏るるが如し。然れどもあしき事は耳にいりて心にさかはず。目に見て心を悦ばしむ。人の君たるもの、すこしく防ぎ守るの心おこたれば、佞人きそひ進むものなり。佞人すゝめば親子夫婦の中をへだて、兄弟君臣の怨をなす。是亂の階なり。佞人は計を廻しへつらひをなし、いかにもして君の心に適はんとたくむものなれば、現在惡人とはみえぬものなり。操狂言にする如く、惡人なりとて面あかく眼ふとく、かりそめにも方外なる事を聲ありたけにさけびていふ物ならば、誰かこれに迷ふべき。惡人は智ふかく詞あまくして、たえてその氣先みえぬものなり。酒を飲み色を好むが如き、人間の至つて樂しく面白きもの、是に過ぎたるものなし。たとへばかくの如し、終に身の讎となるは、後にぞおもひ合するものなり。いかなる發明の人もここに迷はざるはなし。昔楚の平王の臣郤宛といふ人あり。正しき人にて、國人もあつくなつきけり。時に呉の國より、掩餘燭庸などいふを大將として楚を攻めけるに、呉の國內亂ありて君ころされけるゆゑ、掩餘燭庸も皆餘の國に出奔しける。此とき郤宛楚の大將として拒ぎ戰ひしが、此亂を聞きて人の亂に乘ずるは不祥なりとて、直に師を引入れけり。平王の出頭に費無極といふもの有り。郤宛をにくみ時の令尹子常にゆきていひけ

にはあらねども、釵ひとつにして七十萬といへば、これ妖物なり。かならず禍と相隨はん」といへり。數月の後女又かへりて、「員外郎馮球といふものの妻求めたり」と語りける。王涯聞きて、「わづかに郎吏の妻として、首の飾七十萬ならば、久しくあるべからず」といひしが、はたして程なくその身も亡びけり。賴家のとき、山門一揆をおこしける。佐々木左衞門太郎重綱も討手にむかひけるが、父高綱法師これをおくり、重綱が武具の美しきを見て淚を流しける。高綱の兄入道經高、入道盛綱そのよしをとひければ、「武具の美なるは身に害あり。かれ兵をしらず、此度生きてかへらず」といひしが、果して討死しける。討死はもとより武士の本意とはいひながら、武具の美なるは早く人の目にもつくもののゆゑに、賴義もうつくしきを亡瑞の鎧とて、ふかく戒め給へり。

○善人惡人盛衰夭壽の解

ある人問うて曰く、「治れる世は少く、亂れたる世は多く、惡人は多くさかえ、善人はおとろへ、惡人は富み、善人は貧しく、惡人は壽く、善人は夭きが如きは如何」予こたへて曰く、「是說あり。善は陽の正しき也。惡は陰の邪氣なり。陰陽は互に消長するも

約體なく〳〵
放縱

勞而不㆑伐。有㆑功而不㆑德。厚之至也。

と宣へり。手柄ありても、身に勞しても、我こそと人におごるの心なからんこそ德のあつきなれ。わが分をしらざるより、賤くして高ぶり、貧くして富めるを學び、一段づつも吾が居るべきところよりさきへ〳〵とすゝむ程に、襤褸著つるときは木綿布子も羨しかりしが、布子にもあへば小袖著たくなり、夫より綾羅錦繡もかざりたくなる。歩行する時は馬も羨みしが、馬にのれば駕籠、駕籠より乘物輿と只管に高大になれる事、是を僭上といふ。約體なくともいふべき歟。布子きるべきものは布子、歩行すべきものはいつもかちと、分限の外をしたふべからず。高席につきたるは勿體ありてよきものの樣なれども、親よりも一段上に坐したらんは、片腹いたくこそ有るべけれ。みな謙の道をしらずして奢り恣なるよりおこれり。八佾は天子の樂なるを、季氏もちひたりとて孔子ふかく歎きたまひしも、その分をしらざる故なり。家は貯ふべき道具も我分限より過ぎたらんは却つて恥づべき事なり。唐の文宗の時の相國王涯が娘、寶訓といひし人の妻となりけるが、かへりて父にいひけるは、「玉の釵のきはめて細工手をつくせるあり。價七十萬錢なり」といひける。王涯きゝて、「七十萬錢は我一月の俸金なれば、汝に惜しむ

上蔡と云ふ所の人にして、博學にして多才なり。秦の始皇につかへ、位宰相となれり。されども、その心あくまでおそろしきものにて、書籍あれば人いろ〱の事をしりて、上の處置をもいふ物なりとて、天下の書をあつめて燒きすて、儒者をあつめ坑にいれうめ殺し、始皇崩じて、その太子扶蘇と、大將蒙恬などを殺して、扶蘇の弟胡亥を位につけ、二世皇帝と號し、民富めば謀反をするなどとて、成敗きびしく、年貢つよく取立て、督責の術とて民をなやましける。右いふ如くみちてはかくる習なれば、又趙高といふものの讒にあひ、咸陽の市にてきられけるとき、その子にむかひ、故鄕の上蔡にして犬をつれ兎かりせし、貧しきむかしをくやみなげきしかど、夫さへかなはぬ身となり、一門從類ことぐ〱くころされけり。李斯忠をもちて君につかへ、民を憐み、世を濟はば、この後悔はあるまじ。是らも易の亢龍の戒めをしらざる也。人々その己が分といふ事をしれば悔なし。子は子の分あり、臣は臣の分あり。たとひ天下に並なき忠をつくし、孝をつくしたりとも、是臣となり子となるものの分なり。吾こそ世にもかくれなき忠孝をなしたれとて、それを鼻にかけ、親にほこり、君におごらんは、謙の道にたがひ、忠臣孝子といふべからず。孔子謙の心を釋いて、

ればひき、水も流れて卑きにつく。鬼神造化のあとも、草木繁りては枯れ、人盛にしてはおとろふ。人情も奢り恣なるものをばにくみ、へりくだり恭しきをば愛す。甲斐の信玄、板垣彌次郎が扇に、

　誰もみよみつればやがてかく月のいざよひの空や人の世の中

と此歌をかきて賜りしは、謙德を愼めとなるべし。人の至つて貴きは天子なり。されども九五の位に坐す。易の乾の卦☰☰下よりかぞへて五にいたる、是九五なり、是れ猶上に一爻をのこし、天の道をおそれみつゝしみ給ふなり。故に易の上爻は、亢龍有レ悔とて、龍の天にのぼるが如し。盡くのぼりつめたる時は下らねば適はぬゆゑに、始めて悔しく成りたる也。是天子のみの事をいふにあらず。かりにたとへていふ也。一升入る器あり、一斗入る器あり、一石いる器あり。一升いる器に九合いれ、一斗いる器に九升いれておく時は氣遣ひなし。一升いる器に一升、一斗入る器に一斗いるる時は、すこし障りても打こぼして、剩へ器さへ損ざすやうになりゆくもの也。ましてや一升入るものに二升もいれんとはかるをや。易の象に、亢龍有レ悔、盈不レ可レ久也といへり。足利鹿苑院義滿は、太上天皇とまでなりしも、譽むる人はなし。秦の李斯といひし人は、

紬の小袖、兩面無紋の黑、附たり紅梅の帶五條と云々。

二百年になんく\として、その風すでにかくの如し。近來、酒店遊里次第にひろく、農をいとなむものは少く、そのうへ膏烟草如き無用のもの世にひろまる。是れ國家の貧しきもとゐなるべし。慶長十四年東照宮かつて烟草を禁じ給ふも、深く益なき事を察し給ひてなるべし。

○謙を守れとの説

易の謙の卦は、艮の卦を下にし、坤の卦を上にす。☷☶坤は地なり、艮は山なり。山の地のうへに高く出でたる、時として騫け崩ることあり。山地の下にかくれてその高きを示さず。坤は順にして、艮は止まるなり。物に順ひとゞまるべき所にして、進むことをもとめずして止まるゆゑに、人のきらひ妬もなし。是謙の德なり。謙はへりくだるといふ字にて、物に高ぶらず、吾をつゝしみ、奢ざるなり。故に易の彖傳に、

天道虧レ盈而益レ謙。地道變レ盈而流レ謙。鬼神害レ盈而福レ謙。人道惡レ盈而好レ謙。

仰いで天を見れば、日高く昇れば昃き、月正に滿れば虧く、俯して地を觀れば、潮も滿つ

なる人のすべき事にあらず。東坡李公擇に與ふる書に、

口腹之欲。何窮之有。每加節儉。惜福延壽之道。

といへり。誠にいろは性をきるの斧、味は腸をとろかすの藥なり。富貴の家を見るに、情慾味もとむるに隨ひて有るゆゑに、一時心をこゝろよくし、口を爽にするを悅んで、身の勞るるをしらず。中壽を保つ人は少し。山野の人は求むべき貯もなく、日々東にはしり西にはしり、慾と味も求めがたく、故に多くは壽し。是れ東坡が惜福延壽といふ所なり。今海內久しく太平の化にほこり、奢侈の風日々にきそふ。謹んで古をおもふに、武田信玄の制詞に、

妻子之衣類、壹万石所持之士者、京染等の小袖、五千石より下は薄板、五百石より下は紬、百石の內外は布子たるべき事。

又いはく、

親族の間、一とせの內振廻の義二度、二汁三菜之外可停止事。

又三好筑前守義長志を得てのち妻の衣帶を京にもとむるとて、

一日、表は無紋の綾、裏は國紬。二日、表は國紬の長濱染、裏は爾太山絹。三日、奥

なり。限ある財を以て、窮なき望を遂げんとならば、日々に萬金を費し、天下をあげてその用をなすとも、つくる事有るべからず。入るを計りて出し、財を節にし用をつゝしむは、天の道なり。しはきは、財を惜しむ。始末は、財を節にす。節はふしといふ字にして、竹に節有る如く、よき程々にて止まる事あり。しはきは多く財を貯へんと也。始末は用ふる所あるが爲也。孔子、夏禹王を謂く、

菲飲食而致孝於鬼神。惡衣服而致美乎黻冕。卑宮室而盡力乎溝洫。

と、平日吾口體を養ふもの菲きは、鬼神に享祀する者は豐に潔うせんとなり。常の衣服を文らざるは、祭の衣冠を鮮にせん爲なり。吾居る家を卑うするは、井手溝塘如きをいとなまんとなり。是はかしこき君の敎、下々迄もその分々相守るべき事なり。青砥左衛門夜に入りて出仕しけるに、いつも燧袋に入れてもちたる錢を、十文誤りて滑川へおとしけるを、其邊の人家へ人走らかし、錢五十文出して炬十把かひ、是をともして終に十文の錢をもとめたり。さて云ひけるは、「十文の錢は只今覓めずば長く水底に沈みて失すべし。五十文の錢は商人の手にありて失せず。彼にあると吾に在ると、何の差別かあるべき。かれ是六十文の錢を失はず、豈天下の利ならずや」と云ひしとかや。是吝嗇

行人―接待役

の品さま〴〵なり。たとひ是等の才ありても、その場〳〵に使はざれば、吾存分の働なりがたし。大工の木をつかふが如し。いかによき材木を集めたりとも、梁となるべき木を柱とし、柱となすべき木を棟となさば用には立つまじ。漢の高祖を名君といひしも、能々その人々の能を見たて、張良を師とし、蕭何を相とし、韓信を將とせし故なり。もし韓信を師とし、張良を先鋒となし、蕭何を行人なんどなさんには、たとひかちをとるともその驗おそかるべし。近頃片桐石見守は茶人の聞えありけるが、煙草の火入唐金のわたり物にて、いかにもおもしろき器也。人みなよき香爐なりと云ひけれども、石州そのまゝにして閣かれける。ある人その仔細をとふ。石州の曰く、「是火入とすれば上品なり。香爐とすれば下品也」とや。誠にこの心をもちて人をつかはば、人々己一杯の器量をつくし、國家の益ともなるべきか。

○吝嗇儉約の辨

吝嗇はしはき也、儉約は始末なり。おなじ事の如く心得たらんは僻事なり。その跡似たりといへども、その用處大に同じからず。夫財寶は限あるものにして、望は窮なき物

○人の所長を擇ぶべき事

閑際筆記にのす。伴氏生質寡欲也、尾山氏吝嗇なり、相交る事睦し。ある人伴氏にとうて曰く、其元と尾山氏このむ處同じからず。然るに甚だむつまじきは何ぞや。伴氏の曰く、「尾山は才藝我にまされり。唯財に嗇し。このゆゑに我この人と交る事十餘年に及べども、渠に我ためとして一錢を費さしめず。是を以て相善し」といへり。人誠に長き所あり、短きところ有り。その長き所に交り、短き所に交らすば、德を得る事多かるべし。昔、歐陽永叔、易の繋辭を以て孔子の書とせず。文中子とるべからずとす。韓魏公これと相親しかりしが、此事を知りて終に話こゝに及ばざりしとかや。永叔も深く韓魏公の德に服して、百歐陽修を累ぬとも、何ぞあへて韓公を望まんといへり。朋友の道、義において忠に告げ正すべき事あり。勢いふべからざる事あり。能々工夫あるべし。ひとり朋をとるのみならず、君の臣を使ふもしかなり。人の才同じからず。國の政をしるべき才あり。敵をきり旗を奪ひ城をのり山を碎くの才あり。國の財を量り用をとゝのふるの才あり。他國へ使し君命を辱めざる才あり。よく君を諫め人を規すの才あり。そ

退轉—零落

しなひて世をわたる由こたへけるに、此もの何事をかなすべきとて放しかへし給ひしとなり。或は畜をもとめ木をきり、首途家移、方を立て日時を改め、禁忌甚だ多し。東家之西、西家之東とて、東のかたの家の西は、西の家東也、南に居るとおもふ人も、又その南に居る人のためには北也。屋敷は水難なかるべく、山潮など來らず、月日の影正しくうくる所をよしとす。されどもあるじの心あしくば、家退轉の基なるべし。婦は婦德正しく、從順至孝ならば、方あしくとも繁昌すべし。烏の啼き犬の咎め、鼬梟やうの物の啼き、菌の生へ、燈のきゆるにも、忌み嫌ふ僻の深くて、心を惱ます如き、笑ふべし。孟嘗君がいへる如く吾命を烏犬などに受けなばさもあらん、もし命を天にうくるとならば、彼等いかんぞ人に禍をなすべき。口あるものは鳴き羽あるものは飛ぶ。人の物いひかたるか如し。禽獸はもとより天地の偏氣にして無智のものなり。夫に萬物の靈として天地と竝び立つて、三才ともなるほどの人、かの無智の禽獸に敎へられなば、人はた禽獸の下に立つべきか。例へば數代相傳の君、譜代の家來につかへたる如し。皆理といふものを知らざるよりおこれり。いたむべし。

女子なれば母を害すといへり。是に因つて田嬰快からずおもひ、努々是を生育つべからずといひけるを、其母かくして是を養ひ、田文と謂ひけり、長なりてその兄弟へ賴み、父田嬰に逢せけり、田嬰悅ばず、その母に謂ひけるは、「吾この子を養ふ事なかれといひしに、何ゆゑにかくはこしらへけるぞ」と云ひければ、田文畏つて、「何ゆゑかくは五月の子を忌み給ふや」と、問ひけるに、「五月の子者長與ㇾ戶齊將ㇾ不ㇾ利₂其父母₁」と答ふ。田文きゝて「人生れて命を天に受くるか、又命を戶にうくるか。もし命を戶に受くるとならば、隨分その戶を高うすべし。誰かその戶とひとしかるべき」と云ひける。田嬰も理に屈し、その後は餘子とおなじく事へけるが、田嬰子供四十餘人ありし中にも、此田文こそ孟嘗君とて、齊の國も此人有りしゆゑに、隣國よりもおもくおもはれける。今男をころす女、女を殺す男などいへるも、往々しるしをたててみるべし。盡く然あるに非ず。又その外の年の人も、早く夫に後れ妻に離るるもいくばくぞや。是はその人々の幸不幸なり。全く年のしわざにあらず。明の太祖、天下を得給ひてのち朕と年月日時を同じくして生れたらんものは、いかゞ有るべしと思召しあまねく尋ね給ひしに、一人をもとめ來れり。見たる所やせつかれたる野夫なり。「汝何を業とするぞ」と問ひ給ひければ、蜜十三籠をや

縄の如く、上になるもの下になり、下なるもの上になり、變化定りなきものなり。例へば一握の糠をとりて水にながさんに、先だちて流るるあり、後れて流るる有り、風にふかれて何かたともなく吹きゆくもあり、又先だちたるが石に礙へられておくれ、後れたるが先だつも有り。おなじく掌に入れ、一同に掌をはなれても、そのゆく處各同じからず。又一本の木なりとも、一段は神を彫り佛を造り、首をかたぶけ手を合せて人に貴まれ、一段は踏板足駄の類となりて人に踏まれ、木屑は薪となりて灰汁桶の苦みにあふ。おなじく生をうけながら、その用ひらるる處は天壤也。よつておもへば年月日時をくり合せ、易の六十四卦に配し、一代の吉凶をとくは覺束なき事なり。且甚しき害ともいふべきは、その生年によつて、女男をころす事有り、男女をころす事有り、弟に丑の年の者あれば嫡家に祟有りなど、口にいふのみならず、書に筆し人を誤る事勝て歎くべからず。諺に、盲千人、目明千人といへども、盲千人目明一人にも及びがたければ、一人の手一河の流支へがたく、人の心に城をなし郭をなし、その惑ときがたし。異朝にもかゝる事ありしにや、齊威王の少子に靖郭君田嬰と云ひし人の妾懐妊して、五月五日に子を生みけり。その頃の諺に、五月五日に生れたる子は、男子なれば父を害し、

物をいめば、草とる日とてもなくなり侍る。よき日なりとて惡事をなしなばあしかるべし。惡日なりとも善事なしなばよかるべし。目のあたり試むべき事には、天火地火の日なりとも、五穀を植ゑて、よく培ひ耘りたらんには、よき日を擇みて植ゑ、培はず耘らざるよりは遙によかるべし。もし又麥の春の霜にいたみ、稻の秋の風にあれんは、吉日にうゑたるも、惡日に植ゑたるも、おなじく損はるべし。もし又洪水火難等に逢はんには、吉日に建てたる家も、惡日に建てたる家も、おなじく波にゆられ、又一片の燼となるべし。武王以甲子興、紂以甲子亡といふ事あり。周の武王殷をせめ、甲子の日にあたりて殷紂王を亡し給へり。同じく甲子なれども、武王の爲には吉日にして、紂王のためには惡日なり。湊にかゝる船の、東にゆくは西風を順風といひ、東風を惡風といふ。又西にゆく船の爲には、東風順にして、西風不便なり。もとより風に順逆はなく、吾ゆくに順逆あり。日に吉凶なし、我に吉凶あり。とかく惡しき事をする日はすべて惡日なり。よき事をする日はすべて吉日なり。吉凶豈外にもとむべけんや。適日を擇まずして成就せざる事あれば、手をうつて日時をえらまざる故なりといひおもふ。然あらば吉日選みてんには、千が千成就すべきや。世の中の吉凶禍福は人間の常にして、例へば糾へる

五行ー木、火、土、金、水

梅園叢書　巻之下

○五行家の説害多しといふ論

物として其弊あらざるはなけれども、陰陽家の説尤も人に害ある事多し。その事はもと陰陽五行を推して旺相死囚勞の理を出でずといへども、遂には枝により葉により、大に理に戻る事あり。四季に大將軍遊行の方ありて、春は東、夏は南、秋は西、冬は北を塞りとして、諸事動作にいむ。正月丑、二月辰、三月未、四月戌、五月子、六月卯、七月午、八月酉、九月亥、十月寅、十一月巳、十二月申の如き月塞とし、六十甲子、寅より午に至り金神遊行の方とし、日を以ていへば、子の日に子の方、丑の日に丑の方をいむ。又方に金神七殺の方あり。九坎、五貧、八貧、十死、歸亡、往亡、凶會、大禍、赤口、赤舌、狼藉、滅門、沒日、滅日、黒日などいひて、多く事を廢する事あり。成程一通俗にしたがひ、冠婚の如き大事には、吉日を選むもよかるべけれども、物毎に忌み嫌ふの心ふかく、時を失ふ事愚なるに似たり。諺にも陰陽師の門に蓬たえずとて、あまりつよく

易、春秋

持齋―齋戒をたもつなり

をつくるためなり。書をよむは身を修むるためなり。笠置の解脱上人、如法の律義興隆の志ふかく、六人器量有り氣なるものを見たて、持齋律學せしが、その内一人、のちには持齋もやぶれ、己が房に兒ども數多おき愛しけるが、佐保川といふ川にて魚をとらせ、自ら下知して弟子の僧に火をたかせけるに、鍋の湯あつくなるまゝ、魚跳り出でけるを、兒是をとり、手水桶の水にすゝぎ鍋に入れけり。房主悅び、「よし〳〵よくしたり。兒どもは夫底におめぬがよし」と謂ひける。同宿の僧、「是は犯戒にては何ぞ」と問ひければ、「聲聞戒には波逸提、菩薩戒には波羅夷なり」と答へける。しらずば無知ともいふべきを、憖ひに戒相明に說きけるこそをかしけれ。されども、ひとり此僧のみにあらず、此轍をふまざる事はかたき事なり。書を讀まん人この僧のために笑はるる事なかるべし。或は過をかざり人にほこるの具と心得、手にも足らぬものなど取りつめ、或は身の過など人の異見にあへば、いろ〳〵勝手によき事とり集め辯にまかせて云ひまくる。たとへば食は身を養ふべきものなるを、饐らして人をも食傷させ、吾も食傷したるが如し。

如水軒—名は孝高
畠山—重忠、重保の父
平賀武藏守—名は朝雅
四書—大學、中庸、論語、孟子
六經—詩、書、禮、樂、

その器小きに似たり。誠に局に臨むときは、盛衰勝敗ありて、甚だおもしろきものゆゑ、夜のあけ日のくるるもしらざる物なり。よつて是を木野狐ともいへり。晋の陶侃といひし人枰を江にしづめしも、事に害ある事を察してなり。近頃黑田如水軒、石田三成と怨をむすばれしも、その事碁より起れり。畠山が讒にあひしも、平賀武藏守と、六郎重保と碁を爭ふより起れり。さいへばとて此事知らざれといふにもあらず。身謙り、人と爭ひいかるの心をやめて遊ばゝ、時として養生の道ともなるべし。

○書をよむは身を修むるのためといふ說

書をよむにも、日用の事に交るにも、一つ〳〵かへりみて我身のためにせば、あしき事は制となり、よき事は鑑となり、日々にその德進みて時として書には怠るとも、學には益すゝむべし。學はまなぶと訓じて、鳥の飛びならひ、猫の玉をとるも、みな夫々の方をまなぶなり。人は人の道を學ぶが學なり。四書六經も、人となるの道人を治むるの道をこそ說き給へれ。是によつておもへば、日々の事みな學なり。書をよむとも、身をかへりみ察する事なくんば、一向草紙淨瑠璃本をよみて心を慰むべし。鏡を見るは貌

道理申し立てけるとき、地頭手をはたとうち、泰時のかたにむかひ、「あらまけや」と云ひければ、並居ける人々一同に笑ひける　泰時うちきゝて、「いみじくも負けけるものかな。某代官として久しく成敗しつれども、かゝる事承はらず。あはれまけぬるときこゆる人も、適はぬまでも陳ずる習ひなるに、前の一通さもときこゆる所、領家の御代官申さるる所肝心ときこゆるに付き、何事なくまけ給へる事返す〴〵もいみじく聞え侍り。正直の人にて御座けり」とて、打泪ぐみ感じ申されければ、初めわらひつる人々はにがり切つてぞ見えける。是によつて「訴論殊更の僻事もなかりけるにこそ」とて、まけ樣を感じ、六年の未進の物、三年迄ゆるしけり。たとひ訴論まけになり、いかなる事にあはんとも、僞はいふべからずと、わが心を欺かぬ誠ゆゑ、人をもかくは感ぜしなり。

○碁將棊に遊ぶ人の箴

碁將棊握槊その品は變れども、人の心を奪ふ事は同じ。或は一二の遊侶を迎へ、或は旅路の憂をわすれ、鬱をひらき生を慰めんにはよし。又何も務むる營みもなく、手を拱き人事などいはんよりは、物と相忘れんはよかるべし。平生の勢力を是につくしてんは

無き名ぞと人には云ひてありぬべし心の問はばいかゞ答へむ（後撰集　讀人不知）

起請―神に誓ひ誠を表はす誓書

せば、筈にあふ事あるべからず。常々心にかけて帚灑したらん座席と、俄に蜘の圍とり柱ふきたらんはいかでか見まがふべき。人平生をたしなまずして、その期に臨み僞に文らんは誠の我掃除なるべし。如見其肺肝とて、人欺くべからず、我心を欺くなり。

　僞も人にいひてはやみなまし心のとはゞいかゞこたへん

この歌の如く、人をば欺くべけれども、心に心を顧みて、いかに今の如く誠ならざる事をばせしぞいひしぞ、人をば欺くになどて自らの心を自らは欺ける、と咎めたらんには、自ら恥かしくなり、ひとり居ても顙より汗出づべし。畠山重忠、鎌倉殿の不審を蒙りし時、「僞なき旨を起請を以て申し上ぐべし」と有りければ、「我一生僞を云ひし事なし。僞なきと申し上ぐれば此事に限りて起請をばかくまじき」とて、終に書かざりしこそ、勝れていみじくきこえ侍る。人は我意の有るものゆゑに、一旦我がいひいだせし詞は、たとひ惡しと案じ當りても是非に云ひ募りて我を立つるものなり。是腐ちたる實の如し。實といふ物を探題失ひたるなり。常式の者この意あれば、人に憎み疎んぜられ。人の主人となり、奉行頭人なんどこの意あれば、人をやぶり國をそこなふ。北條泰時政をしられける時、下總國のある地頭、領家の代官と爭論あり。對決に及ぶとき、領家尤なる

四知—後漢楊震の言

子を實といふは、實は則ち誠なり。一つも誠ならざるもの有りて、腐れたるものは生ぜず。痛みたるは苗痒く。人の誠も尚かくの如し。昔衛の靈公と云ひし君、夜夫人南子と共に坐し給ひけるに、遙に車の轟く聲しけるが、闕下にして聲なく、闕下を過ぎて又鳴りけり。靈公「誰なるべきや」と、南子にとひ給ひければ、「是は蘧伯玉なるべし。禮に下公門式路馬といふ事あり。忠臣と孝子とは不爲昭々信節、不爲冥々惰行、といへり。蘧伯玉は衛の賢人なり。夜なればとて禮を廢てじ」と云ひける。靈公人を使して見せしめけるに、果して伯玉にて有りける。人知るまじきとて欺くは妄也。四知といひて人しらずとおもひても、天しる地しる神しる吾しる。いかでかおほひかくすべき。たとへば一升の米、日々に二三十粒をとらんとも、措かんともしれざるべし。然れども久しくおく時はまし、とる時はへる。草木も朝見し色も、暮に見し色も、きのふ見しも今日見しも、さして變らぬ樣なれども、誠といふものすこしの間斷なき故に、いつ太るともなけれども次第にふとるものなり。人の見ぬ間とて間斷あらば、草木も思ふまゝにはのびもすまじ。深き谷の蘭も、遙なる山の紅葉も、人なしとてもよく薫り、うつくしく照ればこそ、人至りたるときも香きよく色麗しけれ。人の至るを待ちて香をはなち色を出さんと

るもの、燒くによつてなるもの也。儒者は火葬を忌む。その有無はしるべからず。このもの有りとも何かせん。

○誠といふの說

一勺の水を海に入れて、海の水增したりといはんは愚なり。まさずといふは妄なり。水をくはふる所は我にして、增すと增さざるとは我にあらざる物は、强ひて其辨をもとめずして可也。我に在る處の誠をつくす、是れ君子の道なり。誠とは、うそをいはざる事とのみ心得たらんは愚なる事なり。ある人司馬溫公に誠にいる方を問ひければ、妄語せざるより入るとぞ。成程妄に語らず、うそをいはぬより、誠の道には入るなれども、虛言をいはぬを誠とはいはぬ也。僞をいはぬに對する信は小さし。僞なきに對する誠は大なり。罌粟の子煙草の實は至つて小さきものなり。地に落さば目にもかゝらぬ樣なれども、內に一つの誠といふ物あつて、奪ふべからず、隱すべからず、昧ますべからず、覆ふべからず。その時いたるに及んでは、芽を出し葉を生じ、花を開き實を結ぶ。その子を水に腐らし、火にやきて芽を出さずといふは、その子の尤ならんや。是によりて物の

富―むじんの如きもの

ふべき。たとひその事かなふとも、神のしるしにや、又もとより然あるべき筈にやありけん、しるべからず。一つ二つかゝる事有りても、すべて有るべき事にもあらず。近世はやる富といふものの如し、千百人の内に仕合なるもの有りて、一人金を取りたるとて、吾もさこそと、生業も打ちすてかゝらんに、取ることも有るべし。大かたはとらぬものなり。中に小賢しきものはその得失を考へ、始より買はぬほどに、損もなく得もなし。ある人の曰く、「然らば神も佛も無用のものか」予が曰く、「然にあらず、天照太神は我國の太祖として、天皇孫長く此國を治め給ひ、高御座北極の星とともに動かず。人は更なり、雲にかける鳥、水に潛む魚まで、その徳澤を蒙らざる物あらんや。仰ぎても恐あり。その有りがたき所を渇仰すべし。尙その所々の徳澤ある、神しかく愼み守るべし。我親方の如く心得たらんは、いかばかりか勿體なき事なるべし。孔子曰く、「敬㆓鬼神㆒而遠㆑之」となり。遠ざくとは、なれあなどるべからずといふことなり」

○佛舍利の辨

佛子の舍利ある事を稱揚して儒者に誇る。古來種々の辨あり。おもふに是は氣血の凝れ

父母兄長の災をいたみ、天に祈るが如き尤なり。人はもとより天地の間に妊まれ、天は父地は母なれば、或は年の旱にあひ不熟にあはんには、雨をいのり、年を祈る、すべて吾實にあり。或は大赦を行ひ、窮民をすくひ、奢を省き、人の心大に悦び和する樣にして、年をいのり雨をいのらんに、などか感應なからん。人の心和すれば、天地も感應するものなり。香花を供へ、僧巫に祈らしめんは、抑末なるべし。今の人神に詣で佛にまうで、何事をつぶやくとおもへば、或は曰く「家運長久」或は曰く「子孫繁昌」或は曰く「二世安樂」又曰く「七難卽滅」すべて我勝手によき事のみ取りあつめて、神の正直、佛の寂滅なるものをばとり失ひ、災難にかゝれば、世の中には神も佛もなき事かと騷ぎあへり。「死生有ㇾ命、富貴在ㇾ天、」といふ事をしらば、かゝる非分のもとめはあらじ。今日の事にも、吾敬ふべき人には、衣服を改め物每に念を入れ、麁忽なる事もいはぬ樣につつしむものなり。いかに神物宣はぬとて、心やすくおもひ慢り、人にさへ云ひがたき事を、「この者は我妬くおもひ候へば殺してたび候へ」「此女にあはせて賜び候へ」「富貴にならして賜び給へ」など、是れ非分の望にあらずや。上に立たん人に「かれをばころして賜べ、是をば我に下しおかれよ、米下され、金下され」と、理不盡の望せんに、誰か尤とおも

におき酒を酌ませけるに、かの弩の影うつりて蛇の如し。よつて是は弩の影なりと悟しければ、杜宣大に悦び、是より疑解け病いえけり。是は此あたりの事なりし、ある禰宜、小村祭の返りに夕立にあひ、大鼓もちながら濡れ〳〵て過ぎけるを、是をばしらで又壹人同じく、雷の鳴るがおそろしさに耳など抑へて走りけるが、俄に電ものして霹靂しければ、あはや我かしらのうへに落ちかゝりけるかと覺えて、かたへの溝へ落込みけるに、禰宜も同じく上に落ちかさなりて、互に肝を潰し只一息に遁げけるが、其後「我こそ正しく鳴神といふ物みたり」といふに、いかなる物ぞ」ととへば、「隣の村の禰宜何がしに小しもかはらず」と云ひければ、人々噴出しけるに、「然な宣ひそ、慥に大鼓までもちて居られたり」と云ひけるとぞ。世上の妖怪おもふに此類多かるべし。夫れ一生の間を觀ずれば、慶あり、哀あり、貴うしては公侯となり、零落しては非人乞食ともなり、生るる事あり、死する事あり。此世の中の姿なり。花ちれば子を結び、葉落つれば芽を生ずるが如し。この所をよくしりて、非分のもとめをやめ、君臣父子夫婦兄弟の道をつくして、生死貧富は命に委すべし。然いへばとて、我生業をもすてよといふにはあらず。すこしも非分のもとめをせず、生業をいとなみ、此上を命にまかすべし。前にいふ如く、

眞言陀羅尼―梵語の咒文

握り彼が手に入れ、「かの幽靈にむかひ是何ぞと問ふべし。之をしらずば必ず來るまじ。若しらば黑か白かをとへ」と云ひければ、いそぎかへり「是は何ぞ」と問ひければ「碁子」といふ「黑か白かと」問ひければ、その色をこたへけり。男恐れて又道人にかくと告げければ、「さぞあらん。直にその碁石を持ち行き、數はいくつと問ふべし。幽靈決して數をしらじ。その時此碁石を投付けなば、幽靈全く來るまじ」といひけり。男又立かへり、「數はいくつ」と問ひければ、答へず。ときに碁石を取りて投付けたるに、搔消すやうにうせけるが、再び來らずとなり。吾心の妄想より起るものなれば、我しる事をば彼もしる。碁石の數は我知らざる故彼しらず。彼しらざる時には決して出でず。吾こゝろ決定する故目明にして眼花なく、耳さわやかにして蟬も嵐もなきが如し。故に眞言陀羅尼、是によつて魔魅決して近づかじと決定する故、是ををかすものなし。漢のとき、汲の令應彬といふ者、主簿杜宣と云ふ人に見えけるに、ともに酒を酌みけるが、高き處に弩をかけ置きけるが、杜宣が盃に映ひ、宛然蛇の如く見えける。快からずは思ひけれども、しひて是をのみけるに、其日より胸腹裂くが如く、療養手をつくせどもしるしなし。其後應彬行きて事の仔細を聞き、きつとかの弩をみつけて、强ひて杜宣をおこし、もとの所

張遼むかへて打ち殺しければ、つゞいて斯樣なる物四迄いでけるを、盡く打ちころしてける。餘の者は怖れて地にふして居たり。仔細に是をみるに、人に非ず獸にあらず、怪しげなるものなり。遂に其木をば切取りけり。その年天子より司空に辟され、侍御史袁州刺史となりけり。天地のかぎりなき、其變怪も又かぎりなしといへども、是正人君子をかすにたらず。變怪にあらざれども變怪とみれば自ら變怪なり。化物にあひたりといふ、多くは夜なり。勿論かたるものは陰物にて、夜氣に乘じて出づといへども、夜は朧にして物の文目もわかたぬものなれば、松の木の繁れる、石の立ちたる、尾花の戰ぎまで、あやしく見ゆるものなり。これをうろたへものゝ、見誤りて唱へたるが多し。かゝる事をかたるものは、必ず慥に見たる如くかたるものなり。又平生虚をいひなれたるものは、跡かたもなき事をも、理窟よく拵へてかたるものなり。成程世上にかかるものなしといふにもあらねど、さまで澤山なる事にもあらず。こはしおそろしと思ふ時は、其虚に乘じていろ〳〵のもの變怪をなすことあり。昔、あるもの妻の死しける、出でやせましと思ひ居けるが、昔の有樣の如く夜々來りける。男大に難義して、祈禱手をつくしけれどもしるしなく、ある道人にゆきて問ひけるに、道人碁をうち居けるが、碁子を一

て、大に驚き、かくと申しければ、「我僕なきをしりて、手傳するにこそ」と云ひて見やらず。又、公、家來のものを呼びけるに、犬、人の聲してこたへけるを、孝順なる狗とてほめられけり。又獨坐して居られしに、鼠など大分集り前に手を拱して居たりけるを、「汝が輩食にうゑたりや」とて食をあたへけり。又ある夜鵂鶹の家の軒に來りてなきけるを、家の者どもうたんとてひしめきけるを、「かれは晝目のみえぬゆゑに夜飛ぶものなり。南のかた越にゆくとも、北のかた胡に行くとも、彼が心にまかすべし」とて、打捨ておかれけり。又ある夜、女ども多く集まり、公の前に立ちけり。公是をみて、「我床を堂の下におかんや」といひければ、集まりて舁きおろしけり。又「もとの所にやりてんや」と云ひければ、もとの處にもち行きけり。「しからば持ちて市にゆきてんや」と云ひければ、女ども再拜して、「是寛厚の長者なり。犯すべからず」とて皆逃げちりけるが、其後は何事もなかりしとなり。又漢の張遼といふもの田を買ひけるに、田の中に大なる木あり。耕作の邪魔となりければ、人を切りに遣しけるに、切口より血出でけり。人人驚き返つてかくと申しければ、「老いたる樹は汁出づるものなり」とて、自ら下知して切らせけるに、中に大なる穴ありて、長四五尺ばかりなる白髮打垂れたる人の如き物出でて、張遼が方に歩みよる。

いかでか是をにくまざらん。神は人を護り、佛は世をすくふとこそきゝ侍れ。「木一本きり候、花一枝折り候」あるひは「參り年のあしかりけり」などとて、無下なる目に人をあはせんは、人だに長しき人はかゝる偏執はなき事ぞかし。是等も皆病苦災難は、時としてあるものといふ事をしらぬゆゑなり。もし又かゝる非分の祟をなす佛神あらば、その祠ともいへ堂ともいへ毀ちすつべし。其權なからん人は、左樣の所にゆかざるべし。唐の狄仁傑といひし人は、淫祠千七百處を毀ちけるとかや。豐前小倉の城内に一つの小き祠有りけり。何の神といふ事をしらず。城主「此地穢多し、城外清淨なる地を擇み遷すべし」と有りけるに、俄に眼痛み出だし甚しかりけり。人々「是は神の祟なるべし。祠を移す事しかるべからず」と云ひければ、城主いかつて、「穢しき地を清淨の所に移さんと云ふに、吾何の過かある、夫に祟をなす神ならば、邪神なり。恐るるに足らず」とて、急ぎ其祠をこぼち、城外に持出だし焚拂ひけるに、眼もおひ／＼いえけるとなん。又一種妖怪あり。ひとり狐狸のわざのみならず、犬猫蛇猿やうのもの、木石深山大川、いろ／＼の精怪あるものなり。されど正しき人をば犯し得ざるものなり。むかし魏元忠公未だ家に居られし時、ひとりの婢ありけるが、庭にひとつの猿來りて火を焚きけるをみ

迚あしくも思はず。あしき夢をばよき夢のさしつぎとなし、よき夢をばあしき夢のさしつぎとなす」と云ひし、一時の戯言ながら、おもしろく聞え侍る。右云ふ如く、神に祈り佛にちかふも、我靈所自然に感ずる事あり。又病癒えなんとし、或は災已に去らんとする時にあたりて、その驗の如く思はるる事あり。又狐狸の業として、色々の怪しき事などしいだして世にはやる事あり。一旦その言しるしある事もあれども、久しうしては其驗なきものなり。又機を設け或は幣を動かし、あるひは佛に光明さゝせする如き事をこしらへ、人をたぶらかすものあり。是も大勢ゆく中には、病なほるもあり。死病にあらざれば、のちはよきものなり。是等のもの、いかでか人の禍福をなす事あらん。中にもわきてかなしきは、病難災苦にあひ、物の辨もしらぬ神子山伏やうの者ども、ことごとく鬮などとりて、其神の祟、其佛の祟と驚かせば、大に恐れわなゝき、家財重寶も惜しまず取出だし頼むにぞ、過分の得して、驗なければ主人の信心なきを云ひ、供物の足らぬなどのよしる。稍快き時は、大に誇りおごるこそやすからね。もし吾行ひ理にもとるに於いては、その神其佛と限るにもあらず。天神地祇或は人、誰か是をいからざらん。神や佛のしわざにもあらざるを、神佛に僻事いひかけてん、佛神照覽あらば、

孫光憲—宋の學者

忠寛と召すと聞きなして、あわたゞしく御前へ參りけり。「是は何事ぞ」と有りければ、「召され候ひつる」と申しける。「さる事なし」と仰せければ、猶鷄の聲する方をさして、「あれ忠寛と御召の候ひつるぞ」と申しける。燈はひとつ光りながら目を病む人のみるには、五色の輪相かさなり、虹の如く煙の如し。一物もなき大虚も、花ちり蟲の翔るが如し。何の音なき所にても、耳をやむ人の爲には、嵐のはげしく吹きしきり、蟬の喧しく鳴くが如し。實に此事あるにあらざるも、一心顚倒すれば種々無量の變怪、眼に遮り耳にそふ。我嘗て史を讀みし時、秦の二世皇帝、關羽、張飛など夢み、詩集を閱せし時、孫光憲などと詩など作りし夢を見けり。是によつて思へば、僧徒の或は極樂にゆき、閻羅王にあひ、地獄の有樣など夢に感ずる事さも有るべし。夢はもと心の影像にしてあやしむにたらず。ある人のかたりし、「おもひもよらぬ事を夢にもみるなれど、傘さして鼠の穴にはひる夢は見ず」といひしを、かたへの人の、「此話きゝたらん人はみる事有るべし」といひしは、尤におぼえ侍る。夢は心の靈より發すれば、偶にさきの事にあふ夢も有るべけれど、夢毎に然あるものにもあらず。或は五臟の病により、あやしき夢もあるものなり。ある人のいひし、「我はよき夢見たりとて、嬉しともおもはず、あしき夢見たり

發向して―はやりて

魚一喉をその處に殘し置きけり。頃く有りて、其主往きてみるに、最前の麏はなくして、鮑魚のみ有りけり。因て大に怪みをなし徧く語り傳へけるに次第に發向して、病をいのり、福をもとむるもの引きもきらず。終に宮をたて、鮑君神とあがめ、巫など數十人集まり、もてはやしける程に、數百里聞傳へ〳〵、その事大かたならず。其後程經てかの商人來り此由を聞き、是は我置きし魚なりとて、堂に上り取りてすてけるが其後何のしるしもなく成り行きけり。

物之所レ聚斯有レ神、人共奬成レ之耳。

といへり。一喉の鮑魚、さまで禍福をいかでかなし得ん。されども人の信仰するに至つては、この心迷ふがゆゑに、病ましぬれば運盡きたりと思ひ、或は神のうけなきと明らめ、驗あれば神の德とおもふ。物毎我心にかく有らんとおもへば然ある樣に覺ゆるものなり。鷄はいつもその鳴く聲にかはりはなけれどもコツケコウロとなくかと思へば、コツケコウロといふが如し。東天光と啼くかと思へば、東天光といふが如し。取つてかへろときけば、とつてかへろと云ふが如し。和州菩提山の忠寬正信房といひしは、よく眠る人にて、人、眠の正信と云ひけるが、ある夜鷄のなきけるを、寢耳に、御所より

問はるるに、夫の詞に違はず。よつて奉行、「見付けたるもの夫を引込めずして元の主に返さんとするは正直なり。今主といふもの七つあるを落したるなれば此軟挺には非ざりけり。是をば夫婦の者にたぶべし。彼主は七つあらんを求めて取るべし」とぞ判かれける。

○物の怪の辨

靈驗は、我信の有る所にあり、強ち何の神何の佛とさすべきにもあらず。鰯の頭も信向せん人は、その驗を得べし。佛舍利なりとも信ぜざらん人には、しるし有るべからず。もの我心より靈なるはなし。心のむかふ處自らその信あり。鳴物もたゝくときにはなり、たゝかざればならず。我一生餘念なく信向せんに、などかその感應なからん。磁石の鐵をすふも、磁石鐵をすふの誠あるゆゑに、鐵感ずる事ありてよる。唯の石を以てすはせんとせば、いかでその驗有るべき。幻術者の幻をなすも、平日の力すべて爰にあれば、人の目を奪ふ樣の事もあるものなり。一向そのしるしなしといはんも偏なり。昔唐汝南鮦陽といふ所に、田にしてひとつの麕を得たり。主いまだ取らざる内、商人ども車に物を積みて通りけるが、是を見てとり、車に乘せ去りけり。不意の物なればとて、鮑

麕—鹿の屬
鮑魚—乾したる魚

瞿曇―佛

軟挺―銀を棒狀に引伸ばしたるもの

縱橫の五尺にたらぬ草の庵結ぶもつらし雨なかりせば

と讀みし人もあり。瞿曇の敎はいざ知らざる事ながら、人情をもつてはかるに、恐くはその道とする所、大厦廣門の謂にはあらじ。堂塔寺院、輿馬僕從、衣服家具は、たとへば匣の如し。我道とするものは、たとへば玉のごとし。匣いかばかりいみじく裝ひたりとも、玉なくば何かせん。匣そこ〴〵にしつらひたりとも、玉だにあらば人誰か是を厭ひ棄つべき。

○遺物したる主と拾ひたる者と曲直裁判の話

宋朝夫婦餅をうりて生業とする者、あるとき、道の傍に銀の軟挺六つ嚢に入れておとしけるを見付けけるに、もとより正直なるものどもにて、何とぞ返さばやと普く觸れけるに、その主といふ者來りければ、是を渡しけるに、「三をば御邊に奉らん」と云ひけるが、惜くや成りけん、「此銀七つありしに、六つあるこそ不審に候へ」と、怪みけるを、「一つとり候ふ心に候へば、何しにかくは返し申すべき」といへども、兎角して論果てず、所の太守へ訴へける。太守見付けたる者をば正直と見ながら、別の處に妻を召し、事の仔細を

あるひは鹽をさし、或は水をいれ、いろ〳〵とそのよき樣に正して忤はざるゆゑに、きはめて旨き味となる。同とはその心の合ひたるにまかせ、善惡の差別もなく、成程尤と同ずる計にて正す事なければ、水に水をいるるが如し。幾久しくかゝりてもよき味にはなるべからず。是同也。

○堂塔建立の說

宇治殿平等院を建立し、阿彌陀堂供養有りけるに、一山僧何がしの阿闍梨を御導師に請じ給へるに、施主分に、「此御堂造立の故に、地獄に落ちさせ給はんこそ淺猿く侍れ」と說れければ、聽聞の人人興をさましける。供養過ぎて、「いかゞして此罪懺悔し侍らん」と有りければ。「この御堂造立の間、非分に人を惱し給へる分を、御得分の物にて償ひ返し給はば目出度侍りなん」と申されければ、その後悉ぐ尋ねきく、人夫迄もいとまの分をぞ給ひける。今日堂塔供養壯嚴とて、餘義なく人をすゝめ、あるひは金銀の利息に人を潰し、夫役にくるしめ、玉を蒔き、金を鏤め、我は顏なるは、かの阿闍梨のいひし地獄にこそ落つべけれ。心だにその道に適ひなば、堂塔の奇麗にはよらざるべし。近ごろ、

宇治殿―關白藤原賴通

と感ずるなり

君子之交云々—莊子に出づ

纖芥の間—いさゝかのことより。

は、よく〳〵察すべし。此事貴賤によらずと雖も、尤も人の上たらん人の思ふべきことなり。左程に心得ても、人の氣に入らざる事はいはぬものなり。又その異見を聞きて、夫通例の事、その方差圖に預るべきかなど、横さまの利口に、正しき人は口を噤み、痒き所を搔くやうなる人のみ集り、我身の過はいふ人なければ、知ることなくなりゆくものなり。然いふ人定めて親切ならんかとおもふに、一旦勢ある時に手をつき、足をかゝへしには似ぬものなり。是を炎凉の世態とて、火あり煖なる中こそ、打會ひて手を炙るものなれ。炎盡き火消えては、そのほとりを見やる人もなきものなり。又勢ある時より、左のみ媚諂もせざりし人は、零落れたりとて昔にかはる心はなし。

君子之交淡如レ水、小人之交甘如レ醴

といへり。

一旦膝を交へ手を携へ、兄弟の如くいひ睦びしも、恨纖芥の間におこり、腕を握り齒を切る事あり。醴は甚だ甘しといへども、久しうては香移り味變ず。水は始より味もなく香もなしといへども、幾年をかさねてもかはる事なし。故に君子の親み交るを和といふ。小人の親み交るを同といふ。和とは鹽梅の如し。たとへば一杯の羹といへども、

宋—春秋時代の
心に劒をとぎ—恨み惡む
辭—厭はし

天下を受くれども、諂へりといふべからず。義にあらずんば一錢の錢、半片の紙なりともいかでか心に快らん。むかし宋の子罕（襄十七年）と云ひし人に、玉を獻ずるもの有りけり。子罕受けずして、「我は貪らざるを以て寶とす。女は玉を以て寶とす。爾が寶をうけんとすれば、吾寶を失ふなり」とて、終に還しけるとなり。然こそなからめ。音物のなきにより心に劒をとぎ、或は正しく諫言にても云ふ人をば、此節かれより辱を受けたりとて、其ひまを伺ひ取りておとす。誠に慾なきより淸きはなく、慾あるより汚しきはなし。又正しき人は人わらへども、然とおもはざれば、容悦をとつて笑はせず。與ふれども義をはかりて漫にとらず。事の沙汰につきても、非をまげて是とせず。人の氣色のあしければとてその爲に身を屈せず、或は時として異見を云ふ、事情に親切なる事のみいふ。ゆゑに是らは結句無禮者、苦者、或は佞者などと怪めらるるもの也。勿論一流、人の心に障る事のみいひて、手柄の樣に心得たるもの有りといへども、是は道理にたゞぬ事をいふものにて、正しき人とは其わかち分明なり。人に諫め正さるれば、彼がやうにいへども、渠もこの過ありとて、却つてさきの人の惡を捜し求めて、露改むることを知らざるもの也。とかく我心に辭なる事を多くいふ人は、よき人と心得、うまき事のみいはん人

衒ー人を欺くもの

藝をしるべし。吾もとめば得ずといふ事はなかるべし。或は博奕に耽り、又色をこのむが如き、親のをしへなしといへども至らざる所なし。この心を移して道をもとめば、何事か求めがたからん。

○上たる者は下の邪正をよく察せよといふ説

大小のわかちはあれども、人の上に立たん人は其心得有るべき事なり。兎角人の上たらん人には、其下に立つものはいかにもして其人の氣に入らんとのみ思ふものなり。故に頤を動せば左にわしり、眸を動せば右にわしり、勝負をあらそへば得をさせ、理窟をいへば道理を附け、其者の心にも僻事とおもひても、十に九ッは言はざるものなり。色を好めば色を勸め、味を好めば味をすゝめ、故なき是式の進物に、酒肉は更なり、幣帛財寶唯その人の氣色のよからん事を希ふ。肩をそびやして諂ひわらひ、御髭の塵を拂ふ。是等はよく〳〵心に明なる所なければ賣僧衒の堺分ち難くして、正直律義の人と見なすものなり。得るに臨んで義を思ふとて、我ために宜しき事あらん時は、是は義か不義かと其わかちを考ふべし。强ち金銀ていの事のみには非ず。義に當つては舜、堯の

もとづく—身を入るゝ

父雖不父子不可以不子—古文孝經序にあり

人に美しく衣紋引き繕ひたらんこそ、本意なるべけれ。良といふに限りなく、理に窮りなければなり。聖人の智も學ぶ事をすてず。況てや其以下の人をや。犬は無智のものながら、よく教へにるは敏く、教へざるは用に立たず。又は愛に溺れて、わきの人の指南さへ親の心に僻事とおぼえ、唯寒からん饑じからんとのみいひ思ひ、その我儘氣隨もやがて直らん、長ならば家業にもとづくべしとおもふ内、月日人を待たねば、早指南の頃もすぎぬ。心ありてよき事いふをば、渠をにくむと心得、白地にそしりにくむ。是劍のうへに密をぬりて小兒にあたふるが如し。一旦あまく快よしといふとも遂には舌をやぶるべし。

　世の中の麻は跡なく成りにけり心のまゝのよもぎのみして

といふ如く、麻なくしては、蓬も思ふまゝにゆがみねぢれて蔓るべし。親たらん人の分には、それ〴〵の師をもとめよく〳〵教ふべし。其上にあしからんこそ子の罪なるべけれ。いとほしき子を杖にをしへよとは、道にかなひたる諺なり。しかればとて子の心に、吾は親の教へざればとて、親の過の如くに心得んは子の道にあらず。「雖父不父子不可不以子」といふ事あり。親たとへ教へずとも、子たらんもの勉めてその道其

鏡の事をいはずとなん。古賢奇物を尊ばざること斯くの如し。人の姿は天に得るものながら、今男女美質あるものは挑むもの多し。挑む者多ければ節を失ふ事多し。質醜きものは挑むもの少し。挑む者すくなければ節を失ふ事すくなし。老子の詞、果して吾をあざむかず。

○物に譬へて子たる者の教を説く

庭に栽うる草木も伸びたるを抑へ、倒れたるをたすけ、繁れるを洗し、長きをたちてこそ自然とおもしろき姿も出來るものなれ。又直にのばさんとなれば、小枝をかき、ゆがめるを揉めなどすれば、直にのぶるものなり。うちすてて閣きたらんには、さのみ思ふほどにはなり難かるべし。人の子を生育んも、有のまゝにして教なからんは惜しき事なり。五穀も生ゐたるまゝにてくさぎる事もなく、培ふ事もなくば、必ずよくは登るべからず。兎角手を入れてだによく登る事は稀なるもの也。生付よしとて教へざるはよき刀とてねたばつかぬが如し。よき刀のうへにねたば付たらんには、なほ〳〵よくきれぬべし。生質うつくしからん人も、裸になして出だしたらんには文なくぞあるべき。美しき

ねたばつかぬ―研かぬ

良田萬頃日食八升大厦千間夜臥八尺（趙清獻公座右銘）

切羽―鍔の兩面に添へたる薄き金物

鎺―刀身の鍔元にはめたる金物

鹽冶判官―名は高貞、南北朝時代の武士

伊豆守仲綱―源頼政の子

應ならんこそ長久の術なるべけれ。詮ずる所、大厦千間夜臥八尺、良田萬頃日食二升とて、たとひ大なる家に金銀を鏤めたらんも、坐する時は膝をいれ、臥す時は足を伸ばすばかりに過ぎず。たとひ萬町の田あり、膳に山海の珍味をつくすとも、腹をふくらかすまでの事なり。著物は寒を防ぎ、道具は用に適はば足りぬべし。刀はよくきれ、印籠は藥をだによくもたば、切羽鎺は銅にて、根付は小き瓢簞なりとも事足りぬべし。夫よき物を貯ふれば我は人にほこるの氣あり、人はうらやみ愧づるの心あり。刀をよく飾りてさしける男、ある人の刀のあしかりけるを笑ひけるに、拵のあしければとてきれぬ物かとて打果しける事ありし由、間際筆記などにもみえたり。鹽冶判官は妻の美きに身を失はれ、伊豆守仲綱は馬の良きに命をおとせり。宋の孫甫といふ人に、ある人硯をあたへけり。その直三十千となり。孫甫「この硯何故にかくは價の高きぞ」ととへば、「此硯常に濕あり。墨をすらんとする時息を以て呵すれば水流る」とぞこたへける。孫甫是を聞き、「硯たとひ一日に一擔の水をつくすとも、纔にあたひ三錢にすぎず、此物何にかせん」とて終にうけざりしとなり。又宋の呂蒙正に鏡を獻ずるものあり。曰く「此鏡よく二百里を照す」と。蒙正笑つて、「我面小し。何ぞ二百里を照すの鏡を用ひん」とて、二度その

佐々木—源三秀義

いつとなく心も變り髪伸すもあり。嬉しさのあまり、憤の餘に思ひたる事は、後には違ふものなり。頼朝石橋山の合戰にうちまけ給ひけるに、佐々木が粉骨を盡しけるを感じ、「吾天下を得ば、日本半國を以て賞すべし」と有りしかども、後には此沙汰なかりけり。

○理窟と道理との辨

理窟と道理とへだてあり。理窟はよきものにあらず。たとへば、「親、羊をぬすみたるは親の惡きなり。親にてもあれ惡きは惡きなれば直に訴ふべし」といへるは理窟なり。「親、羊を盜みしは惡きながら、親惡事あればとて子是をいふべき樣なし」とて隱したるは道理なり。「人死してはふたゝびかへらず。歸るべき道あらば、なげきても歎くべし。かへらぬみちなれば歎きて益なし」といへるは理窟なり。「人死して再びかへらず。歸るべき道あらば歎かずともあるべけれど、かへらぬ路こそ悲しけれ」など歎くは道理なり。

○分限相應こそ長久の術といふ説

老子曰、「美好不祥之器」と、是によつて思ふに、我家衣服道具にいたるまで、我分限相

言名付ー許嫁

一入染の薄紅葉ー忽ちに色のかはるたとへ

逢レ人只說三分話未レ可二全拋二一片心一

と多くは左樣御尤の世の中なれば、始の程は親しきものなり。その時心の奥底もなく云ひつくして後日に悔む事あるものなり。さりながら是は一通の論にして、唯世のありさまをとくものなり、もし義にあつく信を守る人あつて、同じく心を合せんは、其上の事やはあるべき。又幼約束とて、まだ幼き後紐子共などを、時の中よきにまかせ、言名付して悅ぶことあり。此事誠に變なくんばよかるべし。されど人間十年憂も悅も打かはるならひなれば、あるは富めるが貧しくなり、あるは身上の難にあひ、あるは病、あるは不和、終に人の笑ひとなるもまゝある事なり。又はかりそめに通ひなれて、曉の鳥をうらみ、來ぬ夜の鐘に待ちわびなどして、偕老同穴と誓ひけるが、一入染の薄紅葉いつしかに心うつろひて、夜離の床をうらみかこつ心のやるかたなく、口舌嫉妬の端となり、恩愛忽ち引きかへて、神に咀ひ佛にいのり、或は理不盡の心中、或はひとり縊れ、一門親族の面をけがす。是等はもとすでに正しからざればいたむにたらず。或は若き女などの、新に夫におくれ、生きて世にあるべくも覺えず、いづくの淵瀬にも身を投げんなどおもへども、さすがに死にもやらで髮などきりたるが、月日の立つにしたがひて、

梅園叢書巻之中

○早分別に後悔多しといふ説

苟且におもふと、とくと考へはかると相違あるべし。昔、ある君樓をかまへ、是に登りて詠められしに、遠近の風景限なくおもしろかりけり。只一方にその臣何某が家の森ふかく茂りて、眼を蔗りけり。よつて、かの臣をめして、彼はかねて敏きものなれば推量すべしとて、此樓より四方の風景を望むべしとなり。かの臣心づき、家に歸り我あたりの樹の目に障ればこそ、かくは招き給ひつらめとて、已にきらんとせしが、いやく君の心をよく察するものと思はれては、行末むづかしとて、知らぬふりして打捨ておきけり。其後君何やらん計の有りしとき、心敏き臣等疑を受けけるが、此臣ばかり右の事思ひ出で給ひ、何の疑もなかりしとかや。善となく惡となく、一旦の早分別に後悔する事多きものなり。あるひは友達の中よく交りて義の兄弟と云ひしも、一朝の怒に敵のおもひもなすものなり。古語に

はれなきにあらず。然るを都に逃げのぼり、頼朝追討の院宣を申しうけ、芳野山にてはひとりの靜にわかれかね、兒女子の涙をしぼられし」など、一人の義經、よしと思ふ人の論と、あしゝとおもふ人の論は、まことに雪と墨なるべし。そのあしき所をすて、よき所をとる。是れ人を用ふるの道なり。その惡きをばあしとし、よきをばよきとする、是れ公の論なり。また其分分の相應について云ふことあり。鼠を甚だ大なりといふとも、牛の小きには及ばじ。蛇を甚だ短しといふとも、蚯蚓よりは長かるべし。今日人をよしといひて譽むるも、惡しと云ひて毀るも、その場〳〵を考ふべし。

共に天を戴かざる云々―父讐弗ニ與共戴ㇾ天（禮記）
法皇―後白河法皇、

をつかふ。是等の指南をこそかへす〴〵もいたしつれ」と申しけるにぞ、親も理に伏しける。信濃の國薗原といへる所に木あり、遠くより見れば帚のかたちの如し。よつて是を帚木といふ。されど近づきてみれば帚に似たる所もなく打繁れりとかや。誠に遠くより見聞くと、親しく見聞くは、多くは此帚木の類なるべし。凡そ人の物を批判するも、吾このむ所をこそほむるものなれ。俠士に歌よむ人の評判させ、日蓮宗に眞宗の評判させんに、いかでか公論あるべき。同じ道を二人して行かむに、一人は健かにしてこの道近しといひ、一人は疲れて遠しといはん。是道に違ひあるにあらず。心にちがひあればなり。たとへば義經のことを論じて、義經をよしと思ふ人のいはんには、「此人誠に幼きより常人にてはおはしまさゞりけり。共に天を戴かざる讎を報ぜんと、夜々院を出でて劍をうち、遙に秀衡が人となりをみたて、是より飛鳥も落つるばかりの勢の平家を二三年のうちに攻めほろぼし、亡父の恥辱をすゝぎ、法皇の宸襟をやすめ奉り、再びたえたる源氏をおこし、兄頼朝を天下の武將と仰がしめたり」と云ふ。又義經に不ㇾ滿人は、「なるほど此人戰爭一通りは自由を得たる人ながら、平氏を亡し恣に忠盛の女をいれ、梶原景時と詮なき口論、大將たらん人のしわざに似ず、腰越より追ひかへされしも、い

理不盡—無理のこと

一人は勝ち一人は負くべし。勝ちたる人は奉行をほめ、負けたる人はそしることなり。又あしき人なりとも、それに伴ふ人は、是をよしと思へばこそ交るなれ。我よしと思ふをばほめ、我あしと思ふをばそしる習ひなれば、その毀譽によりてその人の善惡も分ちがたし。おなじ一盃の酒ながら、上戸は「醉ひておもしろきものなり」といひ、下戸は「ゑひて苦しきものなり」といふ。まして人傳などにきかんことは覺束なきことなり。昔、人ありて、其子をある寺へつかはし置きけるに、暫くありて逃げかへり、住持のことを誹りけるは、「我に月代剃れといひければ例の如く剃りけるを、そりやうの別きてあしきとさん〴〵に叱られ、あるとき我厠にゆきけるを見て、何とて厠へは行きし、不屈なり、向後厠へゆくべからずといひ、其後朝飯炊くとて味噌をすりたるに、これも味噌をするがきこえぬとて、理不盡の次第、殆ど困窮におよぶ」とてかたりけるを、親聞きて、「さりとては出家にも似合はざる事なり」とて、いそぎ山に登り右の事ども語りけるに、住持聞きて「いや〳〵さやうのことにてはなし。常々髮よく剃る故、このころ剃らせけるに、いたく眠りて、これ見たまへこの如く切りこみ候ふ」とて、是を見せ「そのうへ厠も常の厠へはゆかで、奥なる隱所へ行くをとがめ、味噌も常の味噌をさしおき、客へ使ふべき

牀頭―茶店のこしかけ

つかひやう、夫々に付けてその仔細ある事、つとめざれば知りがたし。善をすればよく、惡をすればあしきとは知れたることながら、よきにも仔細ある事なり。勤めてまなばざれば其理わかちがたし。今知るといふものは、多くは知らざるなり。西施の美きことは知らざるものなし。然れども西施の爲に心を傷ましむる者はなし。東隣の娘そのかほよきこと西施に及ばざれども、心この爲に動く。甘露は天下の至つて甘きものなり、しかれども飲みたきと思ふ慾なし。牀頭の醴は時として好むことあり。是れ知るにも厚薄のちがひあればなり。圍碁は小藝なり。然してその勝つべき理をたづぬれば、たゞ先をするにあり。先をすれば勝つと云ふことは知り易き事なり。さりとて先はしにくきものなり。善事のよきは知りやすくして、善事をするは難き事なり。

○善しと譽むるも惡しと毀るも必ず察すべしといふ說

毀譽は人の大節なり。然りといへども世擧りて譽むるも必ず察すべし。人こぞりて毀るも必ず察すべし。況や一人はほめ一人はそしるをや。たとへば訟事あらんに、兩方理なりと思へばこそ、互にいひつのりてやまざるものなれ。是を奉行のさばかんに、兎角

李白―唐の詩人

今日やまず、明日やまず、今年止ず、明年やまず、然して後そのしるしあり。人一生の力をその道に用ふるさへ、尙その奧義にいたるはやすからず。況や我一月半月、乃至一年半年のつとめを以て、他人一生の功に比せんとす。思はざるの甚しきなり。むかし李白書を匡山によむ、漸く倦みて他行せし時、道にして老人の石にあてて斧をするにあふ。是をとへば「針となすべきとてすりし」と云ひけるに感じて、勤めて書をよみ、終にその名をなせり。小野道風は、本朝名譽の能書なり。わかかりしとき、手をまなべども進まざることをいとひ、後園に躊躇ひけるに、蟇の泉水のほとりの枝垂れたる柳にとびあがらんとしけれどもとゞかざりけるが、次第々々に高く飛んで、後には終に柳の枝にうつりけり。道風是より藝のつとむるにある事を知り、學んでやまず、其名今に高くなりぬ。

○知ることは易く行ふことは難しといふ說

知る事は易く、行ふことは難し。然れども委しくしらざれば行ふべからず。たとへば農業のごとき、時をたがへず蒔き、草かり糞かへばよくみのるとは誰もしれど、唯その事をしりてせざれば益なし。又その知るにも、時を考へ、培のかひやう、鋤きやう、鍬の

秦穆公祕藏の馬を亡はれけり。時に岐下といふ處の民三百餘人是を殺して食ひけり。官人どもこれを見付けて、法度に行んと云ひけるを、「畜生のゆゑに人を殺すべからず。馬の肉を食ひて酒を飲まざれば人にあたるものなり」とて、酒など賜ひて赦されけり。其後隣國と戰おこり、穆公すでに危かりし時、彼の三百人のものども命をすてて拒ぎ戰ひ、終に勝軍となりけり。されば天地の間、春夏は物を生じ長じ、秋冬は物を枯らす。その枯らすといふものも、草木五穀みなみのりて來年生ずべきものの基をなせば、枯らす内に生ずるの理あり。今物をころし人を殺さんも、助くるが爲にして殺さばさもありなん。此理を知らずしてみだりに物の命を絶たば、大惡無道の人なるべし。

○學に志し藝に志す者の訓

今の人、或は學に志し、あるひは藝に志すもの、一旦憤を起し、晝夜を分たず勉めはげむといへども、已に一月を經半月を過ぎ怠る心早く生じ、吾つとめ至らざるとはいはで、性質の過に諉す。馬ははやしとて朝暫くはしりてやまんにいかでか牛の終日ありかんに及ぶべき。谷間の石の磨け、井幹のまるくなるも、豈一朝一夕の力ならんや。

莠―稻を害する雜草
鱗―魚類　羽毛―鳥獸
尤き―きはだちたる
瘭疽―指先に生ずる腫物

なるほどその道を修する出家道人は、蚤虱ごときものもみだりに殺さざる事は其律あればなり。豆をうゑ粟を蒔かんに、その蓬莠をかりすて、その上にもあしき苗をばとり捨て生育るにぞ登るものなる。今日政事などに預るべき人は、其利害の大小を考ふべし。江海の鱗を漁り、山林の羽毛をとるも、これに命をつなぐものあり。就中野猪の稼をそこなひ、熊狼の人をくらひ、小にしては雉兎鼠等の災をなす。殺さざればその費あげて數ふべからず。盗人の國中を横行し、或は恣にして上の法度を背き、或は人を殺害する如き、皆その尤きものなり。是いはゆる蓬をかり莠をさるのたぐひなり。瘭疽といへる腫物の甚しきを、指をきりて療治する事あり。齒などのゆるぎいたむに、此齒をぬきて去る事あり。此指此齒惜しきに違はなけれども、總身の苦痛には換へがたし。此者どもも可愛からぬにあらねども、多くの人の歎にはかへがたし。然れどもかねて國人に仁義の道を敎へず飢寒に及ぶ樣になして、其民罪を犯し盗をせんは、敎と政の至らざる故なり。敎へずして人のよからん事を願ふは、手習させずして物を書かんことを求むるが如し。民を貧しからしめて盗人を禁ずるは、田をほして稻のあしきをにくむが如し。國に罪人多きは執政の愧なり。一縣一邑を主どる身も此心得大切なるべし。昔

手を入れ云々—緣を求め寄り

す所小刀用にたゞず、小刀のなす所刀用にたゞずといへども、其一體を論ずるに、小刀は刀と同じく論ずべき物にあらず。ひとり是のみならず、不學にして學者ぶり、人に問ふ事をはぢ、不才にして能を衒ふ。貧しくして富めるを學び、賤しくして貴ぶる。孔子常なき人を、「なけれども有りとし、虚しけれども盈てりとす」とのたまへり。是等の類なるべし。

○贔屓といふ言葉はいふまじきといふ說

贔屓といふ事は假にも云ふまじき事なり。理非を正さば理のある所なり、何ぞ是を贔屓といはん。今勢ひにつく人、手を入れ足をいれ、誰人のひいき、誰人の引懸にあづかると、嗚呼がましく時めき悅ぶは何の心ぞや。あさましき事どもなり。芝居の役者野郎などのいはんには相應の言なるべし。

○物の命をたつもまた助くるの理ありといふ論

物を殺すはよきことにあらずといへども、一我意に殺生せずと心得たらんも惡かるべし。

色代―禮を施して

もの我よりおとれる者あり。我より劣れるものは見やすかるべし。われよりまされるものは見がたし。蟷螂の臂をはりて車に向ふは、自らの力をはからざればなり。高雄の文覺、西行がふるまひをきゝてかたはらいたく思ひ、「其法師來らばしたゝかに打つべし」などつね〴〵罵りけるに、或とき西行高雄に至りけるに、文覺これを迎へてける。文覺が弟子など、定めて例の荒氣、よも唯事にてはあらじと思ひけるに、さはなくて、むかしより知れる人に逢ひたる如く、こと〴〵しく色代して遠く送りて別れける。弟子等不審におもひ、其事を文覺にとへば、「いやとよ、西行は我にうたるべき者にあらず。動すれば我をこそ打つべき氣色あれ」と云ひしとかや。されば人此所に暗くして、自らまされる人の上にたゝんとす。或は其及ばざる事を知ると雖も、及ばずとすることを忌み憚りて、その人の過をたづねてそしり、我能をかぞへてかざりほこり、尙甚しきは怨みそねみ、はては害心を起すなり。人各聖人にあらざれば其非を見付けていはんには、誰かあやまちなかるべき。譬へば、刀は紙をきり、楊枝をけづり、梨柿の皮を剝くが如き、一切日用の事にもちひんには小刀には遙におとりぬべし。さらばとて敵にのぞみ戰をいどむにあたりて、小刀何の用にか立つべき。小刀のよき所あり、刀のよき所あり。刀のな

ち、つひに終を全うしける。辭世に、
命にもかへぬひとつをうしなはばにげかくれてもこゝをのがれん
人の至つて大切なるものは命なり、命にも換ぬひとつは義にあらずして何ぞや。村松是を求めて是を得たり。宜なるかな、四十七士の員に列り、名一天を動しける事。

○技藝勝れたる人愼みかたの事

技藝は人の嗜むべき事なり。藝勝れたらんは愼みも亦いよ〳〵重かるべし。さなきは人の妬にあふものなり。倩これを鑑みるに、我に甚だまされる者をばその失をもとめてそしる。我に少しく勝れるものをば妬む。我と相敵する者をば吾よりおとれりとす。我より劣れるものをば侮りあざける。是藝に遊ぶ人の病なり。

○劣れる者は見わけやすく勝れたる者は見わけ難しといふ説

西施愛〻江〻、嫫母棄〻鏡〻といへり。西施は昔の美人なり。江に臨み自らの影うつるを愛す。嫫母は惡女なり。我影をにくみて終に鏡をすつ。我身と人とを見るに、われより勝れる

間中—ひまのあること

義央—原本義秀とあり

ぶり、朋友の交りを失はしめ、その惡至らざる所なく、猶自ら人の腹心と思はるるが如き。是れ心をぬすむの盜人なり。盜人の至りて大なるものは心を盜むの盜人なり。その次は國を盜む盜人なり。穿踰の盜人の如きは盜人の至つて小きもの也。國を盜むものは侯となり、鈎をぬすむものは誅せらるといへり。實なるかな、穿踰は輕き事ながら察せずんばあるべからず。壁をうがち墻をこゆるの事はあらねども、一紙半錢の事により交易の間、子の親の物に於ける、弟の兄における、奴僕の主人における、盜人の列なるべし。親しければとて盜むべきやうはなし。諺にも針とるもの車をとると云へり。色に耽り博奕を好める人を見るに、十に九此失なきはなし。吾輩の如き、天地の間に悠悠として、少壯の努むべきをしらず、老の至りなんとすることをはからず、飽くまで食ひ暖かに衣て、自ら守るの節なく、人を敎ふるの術なく、幾か間中の好光陰をぬすむぞや」

○村松喜兵衛の辭世

近頃淺野内匠頭長矩の家臣、村松喜兵衛入道隆圓、大石良雄等の義士と、吉良義央をう

人の曰く、「盗はすこしく志ある人はせず。頑愚の人に說くべし。豈中人以上の失ならんや」と。予が曰く、「然らず。盗人も數あり。壁を穿ち垣をこえて人の財を盗む、これ穿踰の盗人といふ。或は人の家に押入り、あるひは往還に待伏し、人をきり衣裳をはぎとる、是を野伏强盗といふ。足下の云ふ所は是等の盗人なり。足下一を知りて其餘を知らず。上、君に事ふるの忠なく、下、國を治むるの術なく、中、自らの職分に怠り、坐に大祿をはむ。是れ位をぬすむの盗人なり。謀をめぐらし僞を行ひ、君を弑し國を奪ふ。是國をぬすむの盗人なり。詩書を腰にし、口法語を絶たず、退いて其隙をうかゞへは、父子相爭ひ、兄弟相鬩ぐ。これ儒をぬすむの盗人なり。頭をゆるめ三衣をまとひ、我慢偏執の心つよく財利にふける、是法をぬすむの盗人なり。人のよき言をぬすみ自らの利口とし、我行のあしきをいひまはして愧づる事を知らず。是言をぬすむの盗人也。窃にあらゆる惡心をおこし、顯に善を示して外面堂々たる君子あり。是善をぬすむの盗人なり。心に無量の僻事をふくみ、色をかいつくろひ肩をそびやかし諂ひわらふ。是れ色をぬすむの盗人なり。人の志の在る所をはかり、其人の機をかんがへ、その喜ぶべき事をなし、忌む所をさけ、父子の親しき情をさかせ、兄弟の恨を起し、夫婦恩愛の中をや

枕の上の寢物語にも、長子の善きことをば少くいひ、我子の善き事のみ數へたてていふより、男の親も何れをいづれの隔てはなけれど、その詞十度百度にかさなれば、さては此子は愚なりけり、この子こそ賢りけれと思ひつき、是は次第にしたしくなり、彼は次第に疎くなり行くことあり。不幸にして此變に逢はん人はよく〳〵慮るべし。曾參は孔門の内にてもわきて孝行なる人なりしが、その母機を織られけるに、一人來りて「曾參こそ人を殺しけれ」と云ふ。母機を織る事やまず、少しも騷げる色なく、「吾子は人など殺すやうなる者にてはなし」とて手やめもせず。かゝる所に又一人來りて「曾參人を殺す」といふ。されども母前の如くいひて驚かず。時にまた一人きたりてかく云ひければ、「さてもかゝる事あるにや」と、杼をすてて逃げけり。後にきけば曾子と同じ名の人にてありけるとぞ。曾子の賢、親子のしたしき中さへ、度かさなれば疑ひの心起るなり。まして常體の人の中をや。

○盜人の名目種々あるといふ説

盜人はすまじきものなり。盜のすまじきといふ事を知らば、是より義に進むべし。傍の

雲泥萬里—違の大なる譬

閔子騫—孔子の弟子

ひしが、果してその夜盗人に遭ひけり。彼の親、吾子をば智ありてよく察したりと思ひ、隣の人をば此人かくこそいひし、若しや盗人の手引などしつらんかと疑ひけるとなん。さればそのいふ詞も同じ言にして、聞く人も同じ人ながら、子と他人との隔てあれば、その思ひやう雲泥萬里のたがひとなる。同じ秋の夜も、少年遊樂の燈の前には明けやすきを恨み、孤婦愁思の閨の中には明けやらぬをかこつ。秋の夜に違ひはあらざれども、志各異なればなり。今實の親生きて再びいふとも、その言假令同じ事もあるべけれど、已に繼子の心に隔あれば、同じことばも怨の端となる。閔子騫幼かりし時母におくれ、父再び娶りて三人の子をぞまうけける。この母常に閔子を惡み、冬の著物には蘆の穂など摘みて絮となし著せける。されど閔子少しも恨みず、母を敬ひ弟を愛しみけり。其後父この事を知りて、大に怒り、母を追出さんとしけるを、閔子止めていふやうは、「母ましまさば某一人こそ寒からめ。母もし歸り給はば三人ともに寒からん」と、さまぐ〵にしてなだめけり。母も此事に感じて遂に慈母となりけるとぞ。誠に親のみ惡しきと思ふべからず。又繼母となる人も、始のほどは嗜みて最愛みけるが、とかくする内子などまうけ長るにしたがひて、いつしか兄弟の分を忘れ、我子を世に立てんと思ふより、

金言耳に逆ふ—爲になる言は快く聽くことを得ず
まだしき—行き届かぬ

○繼母と前家子との話

世に繼母繼子の中とて、十に七八はよからぬものなり。是れ說あり。實の親は、たとひ杖をとりて指南などするとても、恩愛たがひに深きがゆゑに、暫く有りては互に如在なくなりゆき、他人も見咎めもせぬものなり。繼しきは世の習ひとて、子はや、定めて繼母なれば、心中に打とけは爲給ふまじと思ふもの、すでに胸中に横りて失せず。これ不和をなすの基なり。よりて假初にいふ事もむかへて聞く故に胸に逆ふ也。況てや、其子に教訓などせんに、然なきだに金言耳に逆ふならひなれば、わが過ちは思はずして、「是もまだしき故なり。誠の親ながらへてあらば、かゝる憂目にはあはじ」など、世をうらみ述懐し、頑是なきわかき同志、理非わかたぬ隣の嫗や嬶など、その品は何ともしらで、「すはや此人も繼子惡みする」とて、彼子と呟き語り、長しき異見は露なくて、いろ〳〵とそゞろをかはれ、互にへだて多く重り、果は怨敵の思ひをなす。昔或人の家に屛損じたりければ、其子のいひけるは、「かく屛の損じ候ふ。盗人こそ入るべけれ」といひける。暫くして隣の人來りて、その子の云ひし如く、「屛の損じ候ふ。盗人こそ入るべけれ」とい

○人のあしきを捨てよきを取れといふ訓

愚ならん人のいふ事もよく〳〵察し、善きことあらば用ふべし。ましてや賢き人の言をや。今、人過ありて、其非を人に正さるれば、「昔の誰某もかゝるあやまちはありし、況や吾等ごときの人をや」などとて悛むる事をばしらず。是小人の過は必ず文るといへるなるべし。人の善き所をすてて、其悪しき所のみを取りて手本となさば、何の際限あるべき。たとへば料理をするが如く、魚鳥の羽鱗骨腸なんどあしきものをばとりすて、そのよき所をとり、その上にも鹽梅して、酢を加へ酒をさして旨からん事をこそもとむれ、旨き肉をばすて、羽鱗骨腸を用ひ、筍は皮をもちひ、飯はもみを炊ぎたらんには、いかでか是をよしといはんや。米は五穀の首、鶴鯉は魚鳥の最上なれども、今の如く拵へたらんには、藿の汁、藜の和物にも劣るべし。物の直からん事を欲せば、準縄規矩を用ふべし。是をばさしおきて、杓子を取りて定規とせんには、千萬年を歴るとも直くはなるまじき事なり。今の人あしきをとりて身の過を覆ふは、是ぞ誠の杓子定規なるべし。

○交際の道心得あるべき事

權貴の家と女おほき家とには屢出入すべからず。主人留守の家長居すべからず。主人欠伸せばはやく立つべし。人來りて問ふ事ありとも志他にあらば詳かに說くべからず。吾好む事なりとも人好まざる事をば語るべからず。朋友にも深切の異見再三にして可かずんば止むべし。我なすべしと思ひ立ちたる事は明日ありと思ふべからず。貧しき人は疎みやすく、富貴の人は親みたきものと知るべし。金銀にのぞみては爭心起るものとしるべし。

○和歌を引て材藝ある人の箴を說く

勝つことをこのむは人情の常、まされるをにくむは人欲のつねなり。この故に材藝有る人は猶愼むべし。木林を出づれは風かならず折るといへり。近頃、材智は身の讎と云ふこゝろを、中院通躬卿の御歌とてうけたまはり侍りし。

人に見よおのがえならぬ花の香にをりつくさるる梅の下枝

を數ふる每に箭一筋をはなつ。直駒いかりて敢て伏せず。「吾其時は大臣ある事を知りて、天皇の尊き事をしらざるのみ。餘事我辭謝せじ」と、さんぐ\に罵りけり。馬子腹をすゑかね、劍をぬき腹を潰し、其後首をきりけるとかや。其身正からずして、人のよからん事を求むとも、人いかでか其罪に伏せん。たとへば火をたかずして湯の熱えむことをもとむるが如く、酒をすゝめて醉ふなといふが如し。

○物每に一得一失の理ありといふ說

金は天下の至寶なり。これを貯ふるものは家富めり。されど是によりて身を失ふ者あり。人參、黃耆は藥の隨一なり。されどこれを服して命をおとすものあり。劍術兵法は身を衞るものなり。されど是によりて身を殺すものあり。醫術は人を救ふもの也。されど是によりて人をころすことあり。飮食は生を養ふものなり。されど是によりて我體をやぶる事あり。國の大臣は國を治むべき者也。されど是によりて國を亂るものあり。此さかひ能々工夫すべし。

陶淵明―晉の人
無體に―無理に

て行譴しけり。その後樞密院より出しけるもの。亦あやまりて印を倒につきけり。時に中書の者ども右の如くにせんといひけるを、王旦聞きて「さきの樞密院よりの仕方よしと思ふやあしとおもふや」といへば「あしければこそ」といひけるを「人の惡しきと知りてその惡しきを學ぶ事やある」とて、其事は止みにけりとぞ。陶淵明小者をおきて子に遣すとて、「是もまた人の子なり愛して使ふべし」となり。是等はみな道をみること明かなるが故に事に泥まず。或人、ひとの物を無體に所望しけるに、「貴殿のほしきほどわれも惜しきなり」といひしとかや。わが欲しきものは人も惜しきなり。此理をわきまへざるは理にくらければ也。崇峻天皇の御時、山猪を獻ずるものあり。時の大臣蘇我馬子、奢恣なりしかば、天皇これをにくみ給ひ、「いつか我きらふ所の人をきる事、この山猪の如くならん」と宣ひしを、馬子に告ぐるものあり。馬子おそれて東漢直駒といふものをして天皇を弑せしむ。是より直駒、馬子が寵を得て、其第宅に出入して内外の隔なく、大臣の女河上娘に通ひけり。是はもと崇峻天皇の嬪御なりし人なり。馬子この事を聞きつけ大に怒り、直駒が髮を庭前の木の枝にかけて、弓を取りて是に向ひ、「汝わが言を用ひて天皇を弑す。汝愚にして我いかりを慮らず、我を諫めずして天皇を弑す」と、一つの罪

人の榮辱にあふも、富貴の人の憂苦も貧賤の人の憂苦も、十の指の長き短き違ひはあれど、その痛異ならざるが如く、人に貴賤貧富の差等はあれど、憂苦哀樂の違あるべからず。

中書—執政

○恕の道の説

世話に、「身をつめりて人の痛さを知れ」とは、賤しき俚語ながらよく道にかなへり。身の痛き事をしらば、人も痛かるべしとしりて人に施さぬなり。よろづにつき、人の善惡は見えて、身の善惡は見えぬものなり。さるを、人の善を見ては是にしたがひ、惡を見ては身に懲りなば、何れか敎の道にあらざらん。或は我子のわれに不孝なるを見ては、われこの道を以てわが父につかへざれ。我弟のほしいまゝなるを見ては、我此道を以てわが兄につかへざれ。我身に骨の折るる事は人の身にも骨折れ、我身に悲しき事は人の身にもかなし。一切みなしかなり。是を恕といふ。大學には絜矩の道といへり。宋の王旦といひし人、寇準と云ひし人と同じくつかへて、王旦は中書にあり、寇準は樞密院にありしが、中書より出しけるものに印を倒につきて遣しけり。寇準速かに人を遣し

どもその身五戒を外にし十惡を事とし、傍に佛に諂はんは、醫師の藥をすてて能書をよみ、疾の癒えんことをもとむるが如し。先五戒を守り慈悲ふかく物にあらそふ事なくして、心しづかに後世ねがはんは、まことの道心者なるべし。

○上たる人の心得下たる者の痛となる說

一村の長は一村の人の命是にかゝる。一縣の長は一縣の人の命これに係る。一國の主は一國の人の命是に係る。天下の主は四海の人の命これにかゝる。人の命こゝにかゝるといふ事をしらば、其任の重き事をしるべし。夫一个の民は惡をなし、罪科に行はるといへど、自ら爲して自ら其咎をうくるのみ。假にも人の長ともなるべきものは、我慮り一度誤れば、すべての人その難をうく。暫くも薄氷をふむの心をわするべからす。又貧しき人富める人の隔あるべからず。曹子建が詩に、

十指有₂長短₁痛惜皆相似。

といへり。小指は母指よりほそく、母ゆびは中指より短しといへども、其病をうくるに臨んでは、小ゆびの痛も母指のいたさも皆異ならず。富貴の人の榮辱にあふも、貧賤の

五戒―偸盜邪婬、妄語、殺生、飲酒
十惡―殺生、偸盜、貪欲、愚痴、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、瞋恚
薄氷をふむ―愼むこと
曹子建―曹植、魏の文帝の弟

祐筆―書き役

知音―至極最なる言

分々體々―各其の分に應じて

阿鼻焦熱―阿鼻焦熱も地獄の名

九品蓮臺―極樂淨土に九階段あるをいふ

けるに、利長祐筆に命じて一番首と記さしめたまふ。彦太郎辭謝して、「否一番首は大晉藤藏にて候。某はその次にて候」とぞ申しける。一番首をとりたるよりも遙にまさりて殊勝なり。武士は誠にかくこそありたけれ。

○武田信玄の知言

武田信玄の曰く、「人は唯我したきと思ふ事をせずして、いやと思ふ事をするならば、分分體々全く身をもつべし」となり。

○後世を願ふに心得違多き事

今の人、後世願ふも施をするも、十が八九名と慾となり。人と毫釐の利をあらそひとりて、堂塔を建立し、奴僕にからき目見せてかたへに施し、口舌爭論の片手に念佛申すは、却行して道を急ぐが如し。いまの後世ねがひ施する人を見るに、阿鼻焦熱の物語りに肝をけし、九品蓮臺の上に生れて百味の飲食に全盛を盡したき慾よりなるべし。さなきは彼人こそかゝる善根をなしつれと、人の稱讃にあはん事をもとめてなり。然れ

は非禮をうけずといふも、こゝをいへる事なるべし。

○織田信長恩賞を賜ふ話

たとへば家に失火事あらんに、平生家の者に戒めて火を大事にし過なかりし人は賞せられず、火事に望みて鬢をやき眉を焦せし人は大に賞せらるゝが如し。されば常に火を愼みけるこそ、火事出來て働きし人よりは手柄なるべきを、却りて何の沙汰もなし。織田信長、今川義元と沓掛山にて戰のとき、梁田出羽守計をすゝめて、終に勝軍となり、毛利新介大に働き義元の首を取りてけり。信長馬より下りざる內、沓掛村三千貫を出羽守に與へ、馬より下りて新介を賞せられけり。誠に信長に非ざりせば、出羽守の功名新介に次ぐべかりしを。

沓掛山の戰
—桶狹間の戰

○雨森彥太郞軍功を讓る事

加賀利長松山の城を陷れたまひけるに、利長の小性大音藤藏年十六なりしが、先登して首をとる。雨森彥太郞これにつゞいて城にのり、おなじく首をとり、早く馳せかへり

を勞し身を苦しめて祈らんよりは、かへりて我德を修むべし。この上にて災あらん是命也とおもふべし。禍福は命あり、人力の及ぶ所にあらず。此理を悟らざる人は、網を結ばずして魚を羨み、わなをすてて兎をもとむるなり。決して此理なし。偶いのりて得ることありといへども是偶然なり。祈るが爲にして得たるにあらず。たとへば、小兒に侍人を問ふが如し、侍人返るべしと謂ひて歸りたりとも、是小兒の占委しき故といふべからず。たゞ偶然なり。もし祈願の志有りて求むることあらば、齋戒清淨にして衣服を改め、心をひそめ妄意を動さず天に告ぐべし。今の俗然らず。或はこの災のがるべく此病さるべくば堂塔を建立すべし、鐘を鑄るべし、鳥居を立つべしなど噪ぎあへり。畢竟是等は佛神と商ひするなるべし。是は猶病に臨み難にあふのとき、一身主とする所なき人は、かくもあるべき事なり。或は訴論色慾により、奸佞嫉妬により、人を害せん事を計るともがら、神木に釘をうち、佛像を倒になしていのる。此事ゆめ〳〵人にあたるべからず。自らその災にあふべし。昔漢武帝、鬼神の說に迷ひ、殊更越の巫を信向ありしに、董仲舒と云ふ臣しば〳〵諫め奉りしに、武帝彼巫をめし仲舒を詛せしめ給ひける。仲舒正しく南面して經論を誦詠しけるが、何事もなく、巫即時に死しけり。神

惻々―いたみおもふ
賣僧―諂ひて幸を求むる

己に歸る習なり。或は酒にやぶれ色につかれ、吾天年を損す、みな自らもとむる所なり、顧みて身を悔ゆべし。神にへつらひ天を欺きて、此孽のがるべけんや。孔子病み給ひしとき、子路（孔子の弟子）祈らんと乞ひしかば「丘が祈ること久し」と宣へり。其いのるとは、平生の動作道にそむかず、今この病にあふものは是命也、しかるを何ぞ鬼神にいのるべきぞ。子路固に孔子に告げずして祈る事あらば、弟子惻々の心なるべし。邵康節の詩に、

禍如許レ免人須レ諂福若待求天可レ量

といへり、是よくいひつくせり。自ら禍の階をなし、是を悔い顧みる事をしらず、鬼神に祈りて免かるべくば、鬼神にも賣僧すべし。鬼神も善を善とし惡を惡とする事能はずんば、幽冥の中恐るるにたらず。まことに諂ひて免るべし。吾行いまだ福を得べき基なく、天に求めて得べくば、天も亦邪正虛實を分つ事能はず。天もはかるべし、人すら賢き人は賄賣僧の爲に最屓偏頗の沙汰に及ばず、況てや鬼神は冥々として昭々たり。天は高きに居てひくきをみる。蒜を食ふものは必ず臭く、酒を飲む者は面酡し。其箸をとり盃を酌むを見ずといへども其事自ら明なり。己が私の智を以てこの過をかくさんとするは愚なり。蒜の臭と酒の氣とは猶かくすべし、天は必ず欺くべからず。心

つど〳〵—其度毎に
鬼神感格—神の靈が感じて到るなり
洋々乎—廣く滿つるさま
巫祝—まじなひ、祈をするもの

るべきや。是れ人情止む事を得ざるよりおこれり。祭る時にいたつて、吾心、ありし昔の事などつど〳〵に思ひ出られ、なき面影かくこそ有りし、かくぞせしと思ひつゞけて誠をつくし、祭る時その誠の心おほふべからず。鬼神感格洋々乎として上にあるが如く、左右に在るが如し、「この境よく〳〵思ふべし」

○禍福は命なりといふの論

世俗巫祝の道を信じ、災を得難に臨み病にかゝるの時、願を結びて佛神に祈る。是固に所謂なきにあらず。周公旦、兄武王病にかゝり給ひ、成王（武王の御子也）尚幼かりしかば、爪をきつて天に祈り給ひしとぞ。親兄或は君上の病をうる時、子となり弟となり臣となるもの、寢食する事能はず。如何ともすべからず。爰を以て天にいのり、鬼神にいのる。固にこの心かくの如くならざる事を得ず。我身に於いてはしからず、太甲に曰く、

天作孽猶可ㇾ違、自作孽不ㇾ可ㇾ活

といへり。不意にして孽にあふは、吾招く所にあらざれば終には免るべし。又君をうらみ、父母兄長にさかひ、人を讒し人を殺し、あらゆる積惡誠に己より出でたる者は、

陶朱猗頓―支那古代の富豪

吉公は匹夫より起り、已に日本を掌握し、其心猶あきたらず、朝鮮を攻め明にいらんとす。天もし是に年をかし、且勝つ事を得せしめば、その心明にしてとゞまらじ。一生何の日かあくことあらん。利にひかれ慾に動さるれば、富陶朱猗頓を欺き、貴きこと人の位を極めても、憂愁の地を離れず。故に富貴の外に富貴あり、樂の内に不樂あり。

○生前死後の理

死生の說明ならず、やゝもすれば異端の說にまよふ。予易を讀んで原レ始反レ終といふに至つて、豁然として悟る事あり。死しての後は生れざる前の如し、生れざる前吾しらず、死しての後吾いづくんぞしらん。宜なるかな、聖人其しるべき所をもとめて、其知るべからざる所をいはざる事を。かたへの人の曰く、「しからば人死して靈なし、祭祠も無用の事なるべし」曰く、「然らず。人死して靈なしといふにあらず、又有りといふにあらず。生れざる前しるべからず、死しての後吾何ぞ知らん。故に孔子も、未だ生をしらず、何ぞ死を知らんと宣へり。火きえて尙暖かなるものは、其氣存する事あればなり。況や人情已に死したりといひて、道行く人に別れたる如く、跡とふ事もなく打捨ておか

少艾―少女

安東省庵―筑後柳川侯の儒臣

福田―善根をつむ

愛するは子なり。酒若し美物ならば、豈子の呑む事をいとはんや。是千古の公論といふべし。上戸と下戸とは氣稟なり。醉ふと醉はざるとは節にするにあり。壯にして少艾をしたふ、人情の常なり。ひとり人のみならず、水にすむ鳥、山になく鹿も、皆その偶をもとむ。しかはあれど、人は義方の教あり。媒をまたずしてめとり、牆をこえて處女をひく、人としもいはんや。是、學者入德工夫の第一也、花の顏春を妬み、柳の眉月を欺き、目に挑み心にひかば、鐵心忽ち融し銳氣忽ち碎けん。故に氣千里をのみ、勢萬人をとりひしぐも、こゝに至つて過たざるはすくなし。朱子も

世上無レ如二人慾險一　幾人到レ此誤二平生一

とて自ら警め給へり。白樂天が詩に、

狐假二女妖一害猶淺。一朝一夕迷二人眼一。女爲二狐媚一害卽深。朝々夕々迷二人心一。

といへり。學者心をとゞめざるべけんや。安東省庵いへることあり、

無レ求是至貴。知レ足是至富。安レ心是至樂。

予其地にいたらずといへども、ふかく其言葉に服す。身萬乘の君となり、富四海を有てども、長生を欲し、福田をもとめて身を勞し、終にその貴きことをしらず。近比太閤秀

如く―此下に、畏れ戒めていふ語を加へ解すべし

邵康節―宋の儒者

微醺―ほろゑひ

浩歌―大いに歌ふ

子の人なるべし、

○酒食欲の誡

酒食欲の三、是れ人の大害といふべし。酒は少し呑むときは憂をはらひ鬱をひらき氣血を循環す。されど飲酒の人節をしらず、飽くまでのみ狂走喧嘩などして、宛も狂人にことならず。小にしては病を釀し、大にしては禮を失ふ。むかし邵康節酒をこのむ、酒を名づけて太和湯といふ、只飲んで微醺して止む。故にその詩に

性喜飲酒　飲喜微酡、　飲未微酡　口先吟哦
吟哦不足　遂及浩歌、　浩歌不足　無可奈何

いふ心は、生附酒を好む、のむにやゝ酒氣面にめぐる事をおぼえ、詩など朗詠してやむとなり。よく酒をのむの道を得たり。近き比松平伊豆守信綱は一時の賢君なりしが、ある夜咄の序、臣等酒の德をのべ君にすゝむ。信綱の宣ひけるは、「汝等みな子あり。その子の悉く酒を呑まん事を願ふか、飲まざらん事を願ふか」と有りければ、臣等暫く默して居たりしが、「子は酒を飲まざらんこそ親のこゝろのやすく候へ」と答へける、人の至つて

梅園叢書

豐後　三浦晋安貞著

卷之上

○詩を說いて道に志す人に喩す

詩曰、厭浥行露、豈不夙夜、謂行多露。

誠に道に志さん人は、此詩を味ふべし。是は女子淫人を絕つの言なりといへども、詩はその意ひろし。厭浥とうるほへる行のほとりの露繁ければ、夙におき夜におきて君に隨ひたくは思へども、露にぬれん事の傷ましければとて、思ひとゞまりたるなり。人各聖人にあらざれば、情にひかれ欲に動されざるはなし。或は色により財により酒食により、或は憤怒により好樂により親愛による。されど是はかくはあるまじき事なりと、身の汚を露にぬるる如く、よく〳〵道のあるべき所をもとめて、欲をとゞめんは、誠に君

所レ爲、行不レ知レ之、含レ哺而凞、鼓レ腹而遊（莊子）

雲萍雜志終

鼓腹—赫胥氏之時、民居不レ知レ

て山くづれ、雷に撃るる、大かたは天地不正の氣滯るところある時は、そのふさぎたるを催促すの、順環にして、不思議なることにあらず。人たま〳〵これが爲に横死を得るものは、多くは凶惡無賴の徒にあり。そは天地不正の氣、人の惡心怒氣に應ずるなり。所謂同氣あひもとめ、同聲相應ずるの理としるべし。

一狐は奸智ありて、疑ひ多き故に、かれがよこしまにひがめる性を忌みて人愛せず。狸は癡鈍にして暗愚なれば人も憎まず。予筑紫にまかりし頃、ある寺にやどりける夜、あるじの僧の「あれ聞きたまへ。今宵は月のさやけさに、狸どものあつまりて腹つゞみをうつなり」といふに、耳をすませば、その音はるかに響けり。砧のおとにやあらんとうたがへば、左にもあらず。向ひたる岡のこなたに、一むらの藪ありて、他には人家なし。狸どもそこにあつまりゐて打つなり。住持云ふ、「われこの寺に居ることおよそ九年になりぬ。三とせ過ぬる秋よりして、人々この音を聞きつけぬ。予もいぶかりて、そのところを尋ね見るに、只狸が栖める穴のみあり」といへり。あくる日行いて見侍るに、はたして人家は絶えてなかりし地なり。太平の民は鼓腹すなど古語にもいへば、腹つゞみはめでたきためしにや。

嗒焉—思ふことを忘るること

なゐふる—地震するの古言

命をもすつるほどの心なければ感じ應ぜざるなり。人とまじはりて人を賴むもこれと同じかるべし。小町、能因が雨乞も、歌を詠ぜしのみにては、天地も感じ應ずべからず。天地もうごかし鬼神をもあはれとおもはする歌にても、その讃歎してよむ者の誠心なければしるしあるべからず。

一「一言寺の庫裏を働ける老婆あり。年七十になん〱として多辯いはんかたなく、あけくれ人の噂をいひ、無益の是非をのゝしることいとかしましくうるさければ、ある人諷諫のこゝろにて云ひけるは、多辯長舌なる者は、その意氣をむなしく勞して、嗒焉呼吸を養はざれば、必ずともに短命なりと物語りければ、それより後は、かの老婆なほ長生やしたかりけん、物いはんとしては止みぬるさまいとをかしかりしとぞ。さばかり、生きのびたる老婆の、猶いつまでか世にあらんとての心づかひ、欲にかぎりのあらざるよ」と、物がたりせし人のありし。

一暴風家を倒し、洪水人を溺らし、地震りて崩れ、雷おちてうたれ死するなど、世にこれらのたぐひを、なべて天災といへども、昊天なんぞ人に災するの理あらんや。此わざはひは、人みなわれより招くとしるべし。暴風の氣、洪水のまゝ出づる、地震り

うたてし—
忌むべし

うたてし。東海道を通りける頃、予が宿りつる驛亭の妻は、狆を愛すること類ひなく、飲食ともに狆に口うつししてあたへ、他より食物などもらひたる時も、主人に聞えもせずして、まづ狆にあたへて後に、人にも食はせけり。主人も愚昧にて、かゝることを妻にも許せば、狆に對してものいふこと、あたかも人に對するにおなじ。これによりて、あたりの者この妻に他名して、狆のかゝとぞよびける。その妻おのれが子なければ甥を養子としつれども、狆となからひよろしからずとて、讒言をかまへて甥を退けしとぞ。此甥おもふに、われを狆に見かへしとて詫もせで、再び家にかへらず。人みなつたへ聞きて、さらに子となるべきものかつてなく、その家つひに絶えにけり。この妻養子を愛すること狆の如くせば、その家ながくさかえたらんを、愚夫愚婦の所爲、邪路におもむく、かゝる類ひ世にいと多かり。

一 鴨の長明に、守りを給はれとある人の乞ひける時、

守りとはおのれもしらず小山田に弓もて立る案山子なりけり

とよみてつかはしけるとぞ。神佛の靈驗を得んとおもふには、己が心を正しうして、その正しき心より念ぜざれば、感應あることなし。おのれが信を神佛に通ずるには、

いかでか人を害し人の物を奪ふべきや。任せぬよりして、命に易へてかゝる業をもするなり」と云ふに、「左あらば今より我徒弟となりて、世をのどかにくらし、生涯無事に過ぐるの志はなきや。もし二人ともその志あらば、今より直に伴ひて、法をつたへて一庵の留守居ともなして得さすべし。よく〳〵思案してしたがふべし」とて、持ちたる路資を取出し、二人に分ち與ふれば、賊また顏と顏とを見合せ、土に掌をつきて、「左もなし給はらば、けふよりして頓に志を改め、御弟子となりて、これまでの罪障を亡し侍りたし」とて、こがねをば手にだに觸れずして、頭をさげてゐたりしが、入道は大によろこび、懷よりかみそり取出で、二人の盗賊が髻をなぎ捨て、法師となして、武藏野なる草庵にともなひつれ、一人を善心坊とよび、一人を法心坊と名づけ、武野念佛の弘通をなして、めでたき往生を遂げたりとぞ。入道徒弟十餘人のうち、この二人その始めなりしとかや。黒谷夜話に見えたり。

一犬猫をふかく愛するものは、大かた人には情愛のうすきものなり。貴人はわきまへあれば、さやうのことはあらざれども、下司には多かり。飼ふものに不便を加ふるほどならば、人にも情はふかゝるべき理りなるを、かへりて左もなきは、心底世にもいと

縁の下へ奥ふかく投入れ、食ひたる體にもてなさんとせしを、蕎麥掻の、椀のそこにひたとつきゐたれば、おもはず椀をも縁の下へ投入れたれば、なか／＼容易くいだすべきやうもなく、ありあふ杖などにて、かき捜し尋ぬれども、さらに得ることなければ、事のよしあからさまにわびて歸りぬとぞ。物食ふにもほどのあるべく、しふるにも限りあるべし。

一熊谷次郎、入道して關東へ下向せる折から、たゞ一人近江路より美濃へ越ゆる山中にて、盗賊二人前後を支へて、「路銀衣服をわたすべし」とて、兩人刀をぬきつれ逼りにければ、入道笑ひながら、「いと安きことなり。その方等も命をかけて賊をわざとするは、身過ぎの爲とおもはれたり、路銀衣服ともに遣すべし。さあれど、こゝに尋ぬることあり、聞きたるうへにてともかくもすべし」といふに、賊もその詞のはげしきに猶豫して、「いかなることをか尋ぬるぞ。とくいへ。聞かん」といふまゝに、入道の申さるゝは、「汝はたゞ欲のみに賊をなすか。又身を立つるところなくして、過はひの成りがたくて賊とはなりしや。このふたつの返答を聞かまほし。そのうへにてとらするともとらせぬとも、わが心に任せん」とあれば、賊等は互に顔見あはせつゝ、「飲食だに自由ならば、

にして、一家絹布を見ることはなし。この家に制禁の箇條あり。

掟

一商人たる身分、重ね著にても絹の類を著すべからず。たとひ分家の者たりとも、掟に背くものは身帯暖簾取りあげの上同家業相成申間敷事。

本家相續人誰

一予が畫を敎へたる曉山といふ者、遊歷せる折から、信濃に妻をもとめ、善光寺の邊に世帶し、烟草を商ふことを家業とせしが、得意の家にて蕎麥の粉を搔きて馳走せらるるに、好物なりとて、したゝかに食ひければ、給仕するもの、その大食に興じて、しひては出ずを、腹のふくるるもいとはで食し、さて飽きぬることを詫ぶれども、聊耳にも入れずして、間をうかゞひては盛りて出したるに、胸迄滿ちて腹には入らず。「このうへは湯にても給はるべし。それにて送り食ふべきぞ」とて、給仕のものを退けたるあとにて、左の袂へ食ひたるさまして入れたりければ、給仕の者は湯を汲み來るを取りぬるひまに、椀を持ち行き、こたびは山の如く盛りあげ、是限ぞとすゝむるに止む事を得ず、また湯をもとむ。身はわらぢにて腰かけ居たれば、給仕の來らざるまに、

許和歌をよまるるにやとありければ、「左樣のこと未だ心がけ侍らず」といへば、又仰せらるるには、「凡大家を守るもの、文の道に志し厚く、風流のおもひふかゝらざれば、よろづかたくなにして和ぎなし。修身、齊家の道は、和ぐうちに堅固を備へざれば、人なづきがたし。その人となりて風雅の心絶えてなく、この國に生れて歌の一首もよむことを知らぬは、聲なき鳥を蒔繪などしたる籠に飼ひぬるにひとしうして、美々しく構へたる家のあるじのかひもなし」とあるに、休翁恥づる心を生じて、やがて大納言を師範とし、詠じたる和歌多かる中に、東武のかたへ下りしころ、

秋といへば月も淋しきならはしをたれかあかずの沼に見るらん

此の歌、人の辛苦をたへ忍ぶの意を述べたり。ある時、古今和歌集の序に、貫之が康秀の歌を評して、歌のさまの身に負はざるを誹謗して、商人のよき衣著たるにたとへしを見て、愕然とおどろき、わが身のうへをさとり、これよりして生涯、身には肌著といへども、綿服をきて絹を纏はず、おそれつゝしみしとぞ。家内の妻子はさらなり、奉公びとのするゞゝまでも、衣服の制を嚴にしておごりなからしめたり。蒲團といへる古を思ひて、綾羅錦繡の類はいふまでもなく、よるの物などすべて木綿のみ

として、くさ〴〵の物をもてなし、扱いひわたしけるやうは、「吾今そのもと達の働をもて、家業日にまし繁昌せり。我等一人の所爲にあらず、衆人ほねをりて、我に忠を盡し給はるがゆゑなり。けふの酒食は謝禮の寸志にして、格別の珍味にはあらねど、こゝろよく過さるべし。かゝれば、今日一日は予が客にして、奉公人にあらねば、大かたの座興はゆるすべし。たゞ我まゝに、醉を盡して、唄ふべし、はた舞ふべし」とて、家内はその日他所行して、奉公人の遠慮をさけぬ。此休翁が取りたてたる分家、諸國に多し。今猶、朔日、十五日、二十八日の三日を饗應の日とす。その日は家にもてなし、遊び日は他所へ行かするなり。遊びは遊山、戲場はもとより、遊里といへども差別なく、主人が慰むほどのことは奉公人にも慰ませ、私する者は忽ちいとまをつかはすが例なり。家法は、はやく人を取立て分家せしめて、つとめて怠らざれば、家に身を損ずるのともがらなく、本家ますます繁榮して、今なほ家業さかんなり。休翁いまだ隱居せざりし頃ほひ、用ありて京に出でて、何某の大納言にはじめて見えまゐらせしとき、用のことすみたる後に、くさ〴〵物がたりの序、大納言の仰せられけるは、「その

やしみあなどる
不毛の地—荒れたるところ
濟度する—衆生の苦をすくひ悟の所にわたす
糟粕をなむ—形式のみを眞似る

きのふと過ぎけふとくらして、年月を送りけるが、此老爺それよりして不毛の地には物を植ゑ、また山林の下草を刈りては市に賣り、夜は繩なひ莚を織り、あるは人の爲に雇はれて、晝夜寢食を忘るるばかり働きければ、三とせがうちに三百貫目の借財をすませ、院主を太秦に移轉させけり。院主移轉の時、かの老爺が働きの莫大なるを謝せんが爲に、伴ひゐて安居さすべしとすゝむれども、「われらは此山に八十年も住みなれたれば、他へ行くの志なし」とて、終にゆかずなりぬ。その後院主多くの謝物を贈りたれども、少しも受けずして云ひけるは、「院主は人を濟度するの役なり。物なければ教化しがたし。我等財を持ちたりとも、人の教化も出來ざる身に、不用の財はありて益なし。財の用は人にありて、不用の者に入らざる物なり。身を終るまで食料さへあらば、何をかその餘を求むべき」とて、かくて又後住にもいとねもごろにつかへしとぞ。

一泉州堺の休翁は、茶道にくらからぬ人にて、古人の糟粕をなめざるものなり。予とともに洛にありけるころ、茶道具等は皆自らが好むところをあつらへて、諸家の法則にかゝはらず。もと豪富の家を起ししはじめを聞くに、休翁手して料理することを好み、

さみしーい

住居するとて、さま〴〵の物もとむる折から、先持佛を得んとて、日蓮の木像ありけるを見て、價をきゝ、又法然の畫像のあるを見て、價を聞けるを、伴ひたる人いぶかりて、「その許は何宗にておはすぞ」と問へば、菅野わらひて、「我等何宗と定まりたることもなし。依りてこの二祖の中にて、價の下直なるを買ひてその方の宗旨とならんとおもへり」といへり。物にかゝはらざるおもしろき志なり。

一比叡の山なる飯室谷の松禪院に、ひとりの老爺あり。坂本の產にて、農夫の子なりけるが、父母におくれて、十四歳の時よりこの寺に住居し、今年九十六歳なりとて、予其者にあへり。せい高く耳目健にして、齒牙かけたる所なく、白髮にして頰骨あれ、いとたくましくして力あり。他へいでて他の物を食はず、京へいづるには飯を握りて腰につけ、尋常の人の爲る二日の用を、ひと日に足してもどりければ、寺にはなくてかなはざる人といたはりて、使ひけるに、院主三百貫目の借財ありて、移轉することあたはざるを深く歎きければ、老爺わらひながらに、「こゝに今二とせ辛抱したまへかし。われら働きてその借財をつぐのひすまして移轉させ申すべし」と云ふ。院主心のうちに何をかいふやとさみしおもへど、老人の詞なれば、たのむといひしばかりにて、

も、兒等に契約せし事は、正しく守りて忘るることなく、ある時牛を引きたる童の、唄などうたひ通りければ、長年はあと追ひ行きて、わらはを呼びかけ云ひけるは、「我をその牛にのせて、川端まで行けかし」といふに、童うけがひ答ふるやうは、「御身を乗せて行くべきが、賃には何をかたまはるぞ」といへば、長年は我家をかへり見て、門に生ひたる松を指さして、「何れの樹なりとも、その方が望みに任すべし。とく〳〵やれ」といふに童よろこびて、長年を川ばたまで乗せ行きたり。その後、三とせがほどをへて、ひとりの男、童を伴ひ、長年が家に來りて、長年が父にむかひ、三とせ以前の約束を物がたりければ、長年幼心の戯なれども、かの童はこれを誠と心得、牛にのせたる賃をはたるに、いかにいひ解きても肯んせず、いかゞはせんといへば、長年が父これを聞くより、「さもありぬべし。約束なせしにたがひなくは、切らせて遣はすべし」とて、童に望ませ、門前なる大樹の松を、杣に命じて切らせ、牛飼にとらせけり。里人はこれをいひつたへ、名和が約束の松と呼びて今にはなし傳へたり。

一菅野藤四郎といへる人、料理の道にもくはしく、もと淡路の產なり。ある國司につかへて後、流浪せしころ、予が許に來りて、二とせばかりを送れるに、ある時、町家に

の死したるがありしを、箸もて取出で給仕の輩に見せじと、膳部のかげに隱されしとぞ。いとありがたきことどもなり。

一予が閑窓のもとに、こつ〳〵と聞ゆる音終日やまず。いかなるものゝひゞきにやと、窓を推してこれを伺ふに、老さらぼひし翁の、眼がねをかけて、筵の上に石臼の目を切りて居たり、予翁に問ふ、「石臼の目を切ること、その數日々に幾ばくぞ」翁こたへて云ふ、「切る日もあり、切らざる日もあり」といふ、又問ふ、「老翁齡いくばくぞや」こたへて、「今年七十一なり」また問ふ、「子孫ありや」答へて云ふ、「娘あり、はやく婿をむかへて、孫三人あり」予云く、「已に娘あり、婿あらば、老翁かゝる業はせずともありなん」翁の云ふ、「家に六人の過はひするに、婿一人の働にして、他に資くるの輩なし。われ臼の目を切りたりとも、活計を補ふべきの資力に足らずといへども、欠伸のみに徒に光陰を送らんよりは、せめては鼻紙の料をもたすけばやと、かゝるあぶなき業をもしつる」と笑ひぬ。人の親の子をおもふめぐみ、高きも賤しきも異なることなき、いとありがたきものとは思ひぬ。

一名和又太郎長年は、その父嚴にして、教訓の屆きたる人なり。をさな遊びのまじはり

みな〳〵打おどろき、「扨こそ黑法師がしわざなり」とて、多勢手わけして、行方を尋ねんとするに住持とゞめて云ひけるは、「彼もし金を持ちて行きたらんには、最早尋ぬるに及ばず。われさきに人をして求めしむるは、欠落して旅へ出でなば、さこそ不自由なるらめと、路資をもあたへつかはしたくとおもひしゆゑなり。已に八拾兩といふ黃金を持行きなば、さし當りて困りぬることもあるまじければ、とかくする中いづこへか身を寄すべし。此事只ひそかにして、尋ぬることあるべからず」とて、後は詞にもいださずなりぬ。

一むかし、ある國の守は、短慮いはんかたなく、獵に出でたる折からに、暴風砂を吹きて口に入れども、うかひだにせずして、食物に砂ありとて、給仕の輩をしりぞけなどし、只諂ひ媚びぬる族を容れて、忠ある臣下を損ずること數多なりしが、ある時、いかにして心やつかざりけん、鯉のあつ物の中に、鉤ばりのありけるを取出して、膳の上に載せおき申されけるは、「かゝる麁畧の調理いたす者は、みないとまを遣すべし。庖丁の者には切腹申しつくべきなり」とありければ、料理せしものは切られにけりとぞ。飮食のために、人を失ふこと心あるべきことなるべし。梁の昭明太子は、飯の中に蠅

野干―狐
迷惑の人―まよへる人
いひしろふ―云ひあふ

術なんぞ奥儀あるべき。かの的人は狐を役するなり、野干食の爲にかれに隨ひ、身をその衣服の中に遁れて、形容を迷惑の人に現はす。的人を打つものは、虚空を打つなり。予はその遁れし衣服を打てば、野干の死骸もあるべきなり」といはれたりしが、その翌日はたして人の噂に、老狐の丸に當りて死したるが、難波の里にありけるとぞ。師は能く道をおこなはれて、邪魔のありかを知れる達人といふべし。

一遠江國相良に、平田寺といふ精舍あり。いつのころの住持にや、いと慈悲深き人にして、多くの徒弟を教育する中に、黑法師と異名を取りし惡僧あり。その性、人に諂ふことなく、よろづわがまゝにふるまひけれども、住持は嚴しく戒むることをせず、「歲だに經なば、己より恥ぢて、その行狀は直るべし」とて、すなほなる者を、却りてきびしくして惡僧をばさほどにもせざりければ、人々の云ひけるは、「愛する弟子なるが故に、かばかりの人にも依怙の心あるべし」などいひしろふうち、ある時惡僧の、寺を出奔したり。住持はおどろきつゝ、人をしてこゝかしこ求めしむれども、行方の知れざりければ、人々集り、何か失せにし物もやあると穿鑿するに、折からに四五日前かた、賴母子講會に取りたる黃金八十兩を、住持が手箱に入れおけるが見えざりければ、

かきん―瑕瑾にて恥辱の意

絕えてなかりしかば、そのころ世上に噂いと高かり。さて砲術の師範する翁何某といふあり、その術のすぐれたるをもて、門弟百有餘人あり。ある日、門人來り集りて、何くれと物がたりのちなみに、的人か術を感じ、「かゝるあやしきものを打ち得ざるは、我らが藝のかきんなり」とて、師に請ひて「かれをうちて給はれ」といふに、師は此事を聞くよりも、頭をふりて云ひたるは、「正統の火術を傳へ敎ふるものゝ、さやうの野業仕を打ころすなどと云ふことは、予が敎導の法にそむけり。無益の殺生なれば捨ておくべし」と門人を諭せども、おの〳〵聊かもうけ引かず、「いかに師の仰せらるゝことゝても、世にもしさる業を爲す輩多くあらば、火術は學びてせんなし。今より師弟の約を辭ししりぞき申すべし」と、詞をそろへて述べければ、師も業にさゝはりあれば、是非におよばず、「さらば的人を打つべし」とて、その事を廳に訴へ出でて、見使を請ひて門人あまた引きつれ、野外に至りて的人を打たんといふに、的人をどり出でて、「こゝをこそ打ち給へ」と敲くに、師は鐵砲に玉をこめ、火ぶたを切りて、衣類を打ばて、的人烟の中に斃れたり。門弟驚き平伏して、師が砲術の妙を得たるを貴び、「いかなる法にて打ちとめられしにか、奥義を許し給はれかし」と、みな〳〵しひて乞ひぬる時、「この

難く、忠を有てる奉公人も、賢き主を得ざればかたし。主従互に心をうかゞひ、白眼競してわたるもの、繁昌したる例なし。そもく、天の命をうけて、世を治め給へる方は、晝夜月日の如く、萬民の爲に心勞しばしもいとまなし。その他の諸民は、あけくれ名利に耽り、走りて國を治むる勤めもなく、己が眷屬をやしなふに、身の勝手のみをあがきて、專とするは飲食と淫欲のみなり、その心犬猫などと同じかるべし。人を萬物の靈とするは、主從に仁忠備はり、親子に慈孝をたもち、兄弟愛敬をいだき、夫婦柔和とゝのひ、朋友信義のねんごろを深うして、しかして後に、人の人たる尊稱あり。かくてぞ一切有情の物の司となりて、畜類と異なる天下の靈なるべし。つらくおもふに、その萬物の靈たる人、古より世に念を殘すに、惡事は種々の怨靈多く、善事に至德の念をのこしし例いと稀なり。口惜くはづかしく、又淺ましきことにあらずや。

有情の物―生物

一難波の野外に、的人といふ野業仕あり、裸にて腹をさし出し、「この處をねらひ打て」と、自らわが腹に指ざし詈り、丸を込みたる鐵砲をうたせて、黄金をもてかけろくとしつるに衆人なぐさみにこれを打てども、飛鳥の如く身をかはし、丸を避くるに的るもの

かけろく―賞金

身をつめりしことなければ、人の痛みを辨へざる、世事に目のなき獨合點、手前ぎはめの不人情にして、硏にかけざる鈍刀の如く、磨かでおける鏡にひとしく、慳貪はにぶきよりいで、邪見はくもるよりおこる。これらの人五常は名のみ聞き知れども、主從と約するはいかなる義、親子と契るはいかなる理、夫婦と緣むはいかなる誼、朋友と交はるはいかなる道といふことを、身にとりつとめておこなはざれば、心にも感じ得べきにあらず。假令不仁の主といふとも、その因淺からずして、君と憑み、慈悲なき養父、邪見の繼母たりとも、契り深うして子となれば、不仁の君は臣が忠を盡すのよき的にして、無慈悲の親は子が孝行の目當なり。かくて、主の爲としあらば、こらへがたきもあくまでこらへ、親の爲としあることは、しのびがたきもいよ〳〵忍ばば、その他の堪忍辛抱は、ものの數にもあらざるべきを、この行ひなき輩は、人の形は受けながら、犬羊鳥蟲にはおとるべし。犬は夜を守るの性ありて、飼はるる家にあやしきを吠え、羊に遜讓の心ありて、兄弟乳房の順に違はず。鴉は母鳥に反哺し、鳩に三枝の禮あり。鶯の時鳥をやしなひ、螟蛉の裸蠃を子とするの類ひ、人常に知るところなり。およそ、一家の繁榮は、かしこき主人ありといふとも、忠ある人を得ざれば

たび此事をいはば、夫婦の緣を絶つべし」といきどほれば、此後妻もいはずなりぬといへる話を、ある人來りて予に告げければ、予はその無きを無きとして返さるることの能はざるを悔ゆれば、告げたる人又彼處に至りて、予がいふことをその人にかたるに、その人こたへて云ひけるは、「人は不實をなしたりとて、その交りを絶するは知己親友といふにはあらず。欺くも不實もその折からの是非なきにして、世に始めより詐僞をかまへて、人に交はる輩はなし。そのいつはるとあざむくとを許さざれば、知己親友とは云ふべからず」とて、予が詞に答へけるよし。そのことをきゝてよりも、借りたる黄金の緘も解かねば、封じたるまゝをその人に返して、「予はその許を試みしぞ」とて、ます〳〵厚く交はりぬ。

一憐愍ある主人に忠を盡し、慈悲ある親に孝をいたすは、誰も爲すべきことといへども、めでしるすべきことにこそ。愍みなき主人、慈悲なき父母といへるもの、世にありとしも覺えねど、さはあれ、主人もし下々の心をおもひやるほどのなさけもなく、養父繼母となる人に產の子をそだつる慈愛なきひと〴〵もたえてなきにしもあらざるべし。かゝれる人の心には、奉公人は威をもて自在に召仕ふべきものと心得るは、わが

雞黍―人を宿して食を供するをいふ

刎頸の交―最も親しき友

いで、しのゝめの曙をなぐさみ侍りぬ。

一酒數獻にいたるときは、味ひなく、肴數種におよぶときは甘みなく、烟草數ふくに及ぶときは、にがみを生じ、茶數碗におよぶときは、香ばしからず。

乏しかりし時を忘れて食好みこのみの多き秋のやま猿

一予が江戸にくだるころ、親しく交はる友ありて、雞黍の約を結ばんことをもとむれば、諾して後に、その志を見ばやと、ある時、「食客五人を養ふに、賄の事薄ければ、一人に黄金五兩をあてて、二十五兩貸し給はれ」と、その人に乞ひければ、いと安きことなりとて、みづから持ちきて貸しけるに、此歲の末の債逼れば、「又二十五兩貸せよ」といふに、先に貸したることをもいはで、こたびももて來り貸しにけり。そのまゝ三とせを過ぎつれども、こがねのことは少しもいはで、前にかはれる心もなく、いよ／＼親しみ交はりけるに、その人はからず禍ありて、多くのこがね入ることあれども、少しも色に出さざりけるが、その妻、夫に云ひけるは、「五十兩のこがねをかりて、七とせ過ぐるに返さざるは、欺き奪ふ心ぞ」といふに、「否とよ、彼人予をあざむく心なし、乏しきがゆゑに返さざるなり。刎頸の交情は、婦女子の知れるところにあらず。ふた

いはけなき―幼き
たのめて―たのみにして
おのがじし―銘々に

雲萍雜志　巻之四

一朝がほを栽ゑたる日より、芽ざすを待つは、子を育つる親の心もかくやとばかりおもひしらる。二葉よりいや葉生ひいで、いと細やかなる蔓の、垣ほに取つくさまは、いはけなき兒の、ものをたのめて立ちそむるに似たり。つるやゝこえ葉いよゝしげりて、この蔓かのつるにそひ、彼のつるこの蔓を卷きて、あらそふが如く競ふが如きは、路にまどへるものを案内するさまあり。あるは登らんとするものの手をとりて引あぐるさまなど、繪にも巧めるものをや。花はその日〳〵に色かへて、おのがじしに染めなして、夙に興くるの勤むるを勸むるに異ならず。しのゝめのけふ明け行く程、露を含みたるが、そよ吹く風にもまれて、おもげにおきあへず、ふりこほせば、こなたの花の、その露をうけて、雫も漏らさざる、すべて君臣相いつくしみ、父子相あはれみ、夫婦相むつび、兄弟相たすけ、朋友相したしむにひとし。人の世にあるも、この花の如く、その日〳〵をいとなみなば、さかりもいとながく久しからめと、まだきに起き

臥しけるに、夜あけてかの畫師がもとに住持來りて、けふゑがき給へる鶴の姿は、かやうにやそめぬらんと、よべ覗き見たる姿のさましして見せければ、打おどろき、禪師には、わがゑがかんと思ひかまへし心を、はやくも悟り給ふはいかに知り給へるにかと問ふに、いやとよ、昨夜そのもとのやうすを、そとうかゞひて知りたりといへば、畫師それよりして、二枚はゑがかずして、杉戸の畫に、檜木一樹をゑがきていで立ちぬるとぞ。この檜木をゑがきし後、東國へ下向の折から、東海道箱根の山中にて、檜の木の枝の心にかなひたるがありければ、東國へは下らずして、ふたゝび泉州一國寺へ立越えしかば、住持見て大におどろき、東國へ行き給ふと聞きしに、又もや來られしはいかなる事にか、といふに、さきに畫がきし檜の木の枝、ひと枝足らぬところあり。箱根にてその意を得たれば、わざ〳〵立ちもどりたりとて、一枝をかきそへ、いとまごひしていで去りぬとぞ。畫に魂を入るるといへるは、かゝるたぐひとおもひぬ」といへば、ある人も感じてかへりぬ。

愚老も所用ありて京へのぼり、事によりては一年も在京せんもはかりがたしといふに、彼畫師きゝて、それこそいと名殘をしきことに候へ、さあらば年來の恩謝に、何か少しの畫をのこしまゐらすべしとて、心がまへのみにて、又四五日ほどふるに、住持は何をゑがくと、見たくて待てども絶えて筆をとらず、或夜、小坊主の、住持が居間に夜ふけて來り、ひそかに申すやう、かしこに行き給ひて、そと覗きて、畫師のありさまを見給へとさゝやきけるに、やがて小坊主にいざなはれて、畫師が居間をうかがふに、明り障子の腰板に身をよせて、さまぐ\の姿をかへつゝ、寐起するありさまを見るより、小坊主を引寄せ、來よかし、のぞくべからず、はやく臥せよとて、その身も寢間に入りたり。あくれば、畫師まだきに起きいで、一間なる障子にゑがくを見れば、みな臥したる鶴なり。畫勢不凡にして、丹靑の妙いふべからず。さあるに、又の夜はいかにとうかゞふに、前の如く、夜もすがら寐ずして、あけなばかくや畫かん、とやせんかくあらましなど、獨りつぶやきつゝして臥しぬれば、住持もしらぬ顏にて過ししが、十日あまりにして、その鶴およそ卅四五羽をゑがけり。またも夜ふけて覗き見るに、こたびは肘をはり足をのべ、手を口にあてつつて、鶴のふしたるさまを見て

我かけをわれぞと思ふ世の人にものいふ口はもたぬ影法師

一ある人予がもとに來りて、「繪に魂をいるると申すことは、いかやうなることをして畫き侍れば、魂は入り候ことぞ」と問ふ。予こたへて云ふ、「すべて繪にはかぎらず、何ごとにても實心をこめてさへ致さば、たましひの入らずといふ物あるべからず。他のことはいざしらず、繪に魂の入りたるとおもふは、諸國にて種々名畫も多かる中に、我見し泉州左海に一國寺と云ふ精舍あり。この寺は、千の利休もしばらく居られし時、物好を盡して、庭園座しき五間ほどもあり。一間には檜の樹一本をゑがけり、一間には臥したる鶴二十五羽ばかりをゑがきてあり。いづれも彩色ありて、古法眼元信の筆といひ傳へたり。そのかみこの繪をかける畫師、この寺に寓居すること三年ばかりの中に、何ひとつ畫きたることなく、碁をこのみて只それのみ日毎の樂みとして、あるはこゝかしこ遊びあるくに、はやく三とせを經たり。一たびだに筆をとりしこともなきは、いかにも心得ざる者かなとおもひて、あるとき住持の申されけるは、その許畫をもて一家をなせりといひながら、筆を取りたることもなく、圍碁にのみ年月を過さるるはいかにや、我衣食の費をいとふにはあらねど、何處へなりともあそび給へ、

知らするためなり。」農人町家までも、今は紋ありて、定紋のあらそひあれども、もとより、農夫商賈ほどには紋はなきはずなり。羽織といふものは、道服にて禮服にあらず。これに紋をつくること、いよ〳〵いはれなしとおもひぬ。世の中のうつり行くありさま、多くはみなかくの如し。

一都會に住める者は、美服を着し、美味を食して、瓦葺の家に起臥し、片田舍に産るるともがらは、麁服麁食を常とし、むさくろしき所に住むも、生涯人の果報の身にそなはる。雲泥の相違はあれども、米を作る農夫米を食せず、絹を織る蠶婦絹を着せず、耕牛宿食なく、倉鼠余粮あり。萬事、分は己に定るといへども、各衣食のためにおのづからいそがはし。

一風情はこなたよりむかふる物か、將むかふより見するか。さらば、むかふにありて我方になしとおもへば、われにありてまたむかふになし。

　ながめやる雪の山路の朝ぼらけ何といをぬる一家のぬし

一月見にいづれば、われに隨うて來るかげ法師あり。汝はわが影なる歟、人のかげなるかと問へば、返したる歌とて、

小夜衣の云々—遊女は姦淫の罪を防ぐ爲に設けたるものなれば

かはるべきものかは。こや、小夜衣の重ねぎをいましめつるための設なれば、あながち孝悌忠信なしとはいふべからず。

一髪かたちの風俗はさらにもいはず、衣服調度に至れるまで、時々の流行もしばしのうちにして、いさゝかのたがひはあれど、又もとのさまにかへれり。されば先へも出でやすく、あとへも戻りやすき中ほどに居るべし。烟草といふもの、むかし南蠻より種を傳へて、我朝に流行すること、後一たび絶えてなかりしを、ふたゝび流行して、都鄙ともに翫ぶことなり。火の過ちあるをもて、停止となりたれども、人情の好み、やめがたくてや、今は貴人も召さるることとはなりぬ。その頃のことにやありけん。洛に落書あり、

止めたきは公家のあし輕長刀法師のたばこ元伯の醫者

一予がいとけなき時までは、忍び提灯といふものありて、貴人の私用にしのびて、夜行などせらるる折などは、提灯に替りたる紋をしるしてともせしが、その事流布して、誰も〳〵かはり紋をつけざる者なし。これはもと、人にその人としられまじき爲の用意なりとぞ。されば公卿武家に限るべし。旗に紋を染め、幕に紋をつくるは、誰某と

麁食をもいとはず。予はしばしの教だもせず、麁食に堪へずして歸らんことをおもふのこゝろざし、いと拙く、心術の至らざることゝ、みづから悔いたり。

一肥後の國に、名產三品あり。八代燒、八代蜜柑、合瓢なり。この中、合瓢の損じはなるゝ時は、何糊にて附けてもつかず、飯へ薯蕷を加へて、よくねりて附くる時は、はなるゝことなしといへり。

一蘇鐵の葉の枯れたるを黑燒にして、胡麻の油に和し、蓄へ置くべし。金瘡切疵には、いか程のことにても、酒にて洗はずに愈ゆること妙なり。楠正成が家の法なりとて、左海大松屋のあるじ、予に傳へたり。予が友中根彌次郎といふもの、遺恨によりて切られし時、ふかさ四寸ばかりの疵口へこの藥をつけて、忽ちに全快せり。

左海―泉州堺

一遊女町をくつわといふは、文字に亡八と書けり。所謂、孝悌忠信禮義廉恥の道を亡ふよりの名なりと云ふ說あり。されども、遊女町たりとて、中には孝悌のためにうられて、年たけては主人によくつかへ、忠を盡してその家を起させ、信を以てなさけある客とかたらひて、ふたつの心を抱かず、慈悲を推して、行儀をみださゞる時もなきにあらざれば、何ぞ亡八といはんや。實は嘘の奥にあり。うかれ女といへども、人情は

は、君子はそのところを失はざるにありといふ語に符合せり。

一ある國の守の長臣、倹約を専として國政を司る。折しも、不用の役の多きを省ける時、足輕の組百貳十人ありけるを、六十家として事足るべしと評議一決しける時、主君の仰せ給ふやうは、「六十人の者には暇をつかはすや」と尋ねらるゝに、「仰の如くなり」とこたふ。「そのものどもは獨身なるか。また兩親妻子等あるものもあるにや」と仰せられしに、こたへて申すやう、「何れも親も妻子もあるものにて候」と申しければ、「さあらば暇をつかはしなば、多勢のものどもみな路頭にまよふべし。少きはおほきに替ふべし、衆きはすくなきにかへがたし。今大身の内には、萬石ちかく取るものもあるべし。それを二三人暇をつかはしなば、まのあたり三萬石ばかりの有餘あるべし」と仰せ出でられしによりて、その議はやみたりとぞ。良君は、仁心もまたうすからざることゝ、人々申しあひぬ。

一河内の巣先といふところに、一年ほど居ける時、常に麥飯のみ食ひてければ、食にうみてかへらんとする時、おもひけるは、日蓮は稗飯を食として、法を邊鄕僻地にすゝめ、親鸞は越の國分にありて、師教の恩を思ふ。弘通の僧は、身を樹下石上におきて、

身をすてゝこそ浮ぶ瀬もあれ―上の句、山川の末に流るゝ橡殻も（空也上人繪詞傳）

ば百金に申しうくべしとて、買取りて左海へ持行き千兩に賣りけるとぞ。比興なきあき人、いと殊勝におもはる。

一人世の浮沈は常にして、盛なるかとおもへばおとろへ、衰へたるは又さかふること、常の理なれども、おとろへたる身は落しおふせざるものなり。「身をすててこそ浮む瀬もあれ」と、空也上人よみ給へるはうべなるべし。大江何某といふ人、九萬兩にあまれる身上、零落して後、身を惜まず、即ちみづから魚をあきなひ、荷ひありきつゝ、知る人の方をめぐりて、「今よりわれ魚あき人となり候ふまゝ、日毎にまゐり候へば、ひとへに引立のほどを給はれかし」とて、これまで美服にて交りたる輩の家へ、つゞれの容にてたのみ行きければ、人ゝその志をあはれみ感じて、魚渡世日ましにさかんにて、天滿なる何某とて、今現にその家相續したり。常にかの大江某のいひけることに、「金錢は、きたなくまうけて、きれいにつかふべしと世にいへども、我はさにあらず、きれいにまうけて、又きれいにつかふなり。飯は飯櫃にあるべし。他の器に入れたるは、食するに心よからず。屎は厠にありては、さもなくおぼゆれど、他のところにあれば、いと／＼むさくきたなし。人の身の上もこれと同じ」といへり。この詞

古田織部――秀吉の頃の有名なる茶人

一守邪とは、醫書の樞要にして、人の行ひにていはば、油斷せざるなり。よろづの事も、みづからゆるす所よりして、よからぬことは出で來るなり。甚しく寒き時は、風邪にもおかされぬものなり。寒さのゆるみたる時に、邪氣に感冒するにて知るべし。これはさゝいなることとゆるす時に、はや大惡のきざすもとと思ふべし。邪も氣のゆるむとき入るなり。されば小事を守らざるが、大事の始とこそ思ふべし、古歌に、

かばかりのことはうき世のならひぞとゆるす心の果ぞかなしき

一ある人、古田織部より傳へたる、はねつるべといへる香合とも知らで、さもなき器物の中にまじへつゝ、道具商人を呼びて、この類長持に五棹ほどあり、見わけて買取るべしとて見せけるに、多くの商人打見つゝ、これかれ目利するうち、大坂屋勘吉とて目のきゝたるもの、此香合を見て申しけるは、この品よろしきものと知り給ひて、かくは麁末にし給ふや、また知り給はざるにや、「これこそ織部のはねつるべといふ香合なり。我等はこれのみ買取り申したく、その他の品々は、よの人々ともかくもし給へ」とて、他の品にはさらに心をかけず。さて「これをこそいよ〳〵賣拂ひ給ふにや。今一應のおんこたへを承はりたし」といふに、「いよ〳〵うり拂ふなり」といへば、「さあら

「われら大坂の者なり。過ぎこし道にて、餓鬼に附かれしにや、飢ゑてひと足も進み申さず、大いに難澁におよべり、何なりとも食類の御持合せあらば、少しにても賜はり候へかし」といへり。予心得ぬことを申すもの哉とはおもへど、旅中別に食類のたくはへも無ければ、刻み昆布のありしを、「これにてもよろしきにや」ととらせけるに、大いによろこびて、直に食したりき。予問ふ「餓鬼のつくとはいかなるものにてあるぞ」といへば、こたへて云ふ、「目には見えねど、此あたりに限らず、ところ〴〵にて、乞食など餓死したる怨念、そのところに殘り侍るにや、その念餓鬼となりて、通行の者にとり附き侍るなり。これにつかるゝ時は、腹中しきりに飢ゑて、身に氣力なく、步行も出來がたきこと、われら度々なり」といへり。此もの藥種を商ひ、諸國に註文を取りに、一つねに〳〵旅行のみせしとぞ。世にはさやうのこともあるものにや。他日、播州國分寺の僧に尋ねけるに、この僧申しけるは、「われ若輩のころ、伊豫にて餓鬼につかれたることあり。よりて。諸國行脚せしをりは、食事の時に飯を少しづつ取りおき、それを紙などへつゝみて袂に入れ置き、餓鬼につかれたる時遣すためなり」といへり。心得がたきことにぞありける。

とあるさなといふ詞の解し得ざりけるが、長柄に行きて知りぬ。

一宇治、木幡、淀、竹田あたりは、昔遊女多くありたるところなり。古き洛陽の地圖に、小掠姫町といふところありて、遊女町なり。そのかみは多く水邊に居たること、古書に見えたり。あさ妻舟の圖などもおもひあはすべし。

一池田五半は、酒造家の豪富たり。予所勞ありて、有馬の湯あみして、歸路、極月の廿日あまり、かの五半を訪はんとせしに、折から廿九日のことにて家計に混雜の時なれども、五半予を見るより、「いかなる幸にか。思ひがけなき枉駕なり」とて、座敷に請じ侍り。さま〴〵の物がたりし、予も過ぎしことどもいひ出でて、その夜はやく丑に過ぎたり。宵のほどより、酒食のもてなしありて、「今宵はわが方にとまり給ひて、めでたく、わが家にて年をむかへ給へかし」とて、夜の明けぬる迄ものがたり侍りぬ。「さぞ草臥れ給ふべし。ひとやすみし給へ」とて、臥しぬるころまで、家内より家事の用を、あるじがもとへ云ひ來ることひとつもなかりき、予これを感じて、五半が風流のこゝろざしをしたひぬ。

一伊勢より伊賀へ越ゆる道にて、予がゆくあとより、一人の男いそぎ來りていふやう、

をやぶるに及べり。

一餅は食滯するものなり。多く食すべからず。餅に食傷したるは、救ふべき術なし。口は病を入れて禍を出すの扉なり。かゝれば一言以て智とし、一言以て不智とす。人心の表なり。心におもはざることをば、いはずといへども、みだりに思はざることをいふは心と表裏す。

一何によらず、物の少きは長久のもとなり。多く物をたくはへ持つは、禍を招き身を勞するの媒なり。されば、財寶多くもちて、生涯乏しくくらすは、只財寶の多からんことを好む者なり。衣食に薄くして、財を持つ者、只多くつめるを生涯のたのしみとして、終に財寶のために、身命を亡すなり。欲少き人の目より見る時は、夏の蟲の火を取りにおもむくに異ならず。

一浪華の長柄に遊びし頃、農家にて稻麥等の穗を打落すものに、床几の如くして割りたる竹を横にならべ立てて、さなといふ具あり。むかしよりありたる物にや。ある古歌に。

苅りてほすわさ田の稻の八束穗にさなもうもるる秋は來にけり

なし。つかはざればまた過つことなし。人は五行を取りて、悉く皆つかへり。是を以て過不及多し。世人火のみをつかふに妙術ありて、金をつかふに妙ある輩を見ず。多くはこの金のために己を勞し、身を亡す者少からず。さあれば、火木土水この四の物にのみ妙を得て、金をつかふに拙しとおぼゆ。人もし金をつかふこと、火をつかふが如く自在を得るものあらば、生涯過つことあるべからず。

一 遊樂は費なることにあり。費をはぶけば樂みなし。慰みは無益なるものにあり。無益をいとふときは慰みなし。おもしろきは危きところにあり。あやふきを避くればおもしろきことなし。長生は勞と食とにあり、勞せずして食に過不及なければ、命天然を終ることを得べし。調度と人身とおなじ。多くつかへば損じ、つかはざるもまた損ぜり。されば養生は過不及なきを守るべし。病は不養生にありて、世に氣を屈託するもの常に病なきにあらず。

一 酒はいかほどの大酒にて痛飲したりとも、一睡して精神をだに靜むる時は、和して身を損ずるにいたらず。醉ひて是が爲に犯され心を騷がす歟、または女色におぼるるが故に、精神虛耗して心膀を破り、瘀濁胃中に痼疾となりて、血道を腐敗す。曳いて腎

りくあり。常にあきなふ家に來りて、食事をする折から、その家の奉公人、多勢あつまり、かの翁に云ひけるは、「御身の荷ひたるものは、その價いかほどばかりの品にや」と問へば、翁こたへて「銀十五六匁ほどの荷なるべし」と云ふ。又問ふ、「京の町は人の行かひ繁きところにて、もしあやまちてみな碎くまじきものにもあらず、さやうの時にはいかゞするや」といへば、「それこそ過ちなればさることなしとはいふべからず。さある時はそのことをありのまゝに述べて、我等も年久しく商ふなれば、壹荷ぐらゐは情にて借受けて商ひ申すなり」といふ。又問ふ、「その上にも又碎くまじきものにもあらず。その時はまたいかゞするや」となじりいへば、「いかに問屋なりとて、數度の無心もいひがたければ、その折こそ、其許達の如く奉公なりとも致すより外にせんかたなし」といへり。

一龍神は水をつかふに妙なる術を得て、一滴の雫をもて暴雨を降らし、波濤をも起すといへり、又人は火をつかふに妙なる術を得て、一炬の薪を加へて以て萬物を烹燒す。天地の際にあるものは、木火土金水の五つより外なし。これより萬物を造化して、萬類形容をことにするに、龍神の水術、五行の中水のみつかふに妙ありて、他の物に術

もなく、觀音とても何國にもあつく信心され侍れど、勢至ばかりはさほどに尊敬するともがらもなく、又勢至を安置する大伽藍もなし。勢至は功德もうすき菩薩にや、經を見たりといふ人も希なりとおもはれたり。これを人にたとへたらんには、美婦人の愛想なきとひとしかるべし。又衆生緣のうすきか。同座し給ふ佛にさへ、かゝる仕合せ不仕合せあり、いはんや今日の凡夫に於てをや。

一 一休禪師、紫野におはせしころ、人の書をもとむるものあれば、「御用心」と書きて與へぬ。しひて他のことをもとむる者あれば、「御用心〳〵」と、いくつも書き給ひ、又上に、只といふ一字そへて、「只御用心」とかゝせ給ふこともありとかや。いとおもしろく、その語すべての事にかよひて、敎訓とはなりにけり。予もまたそれにならひて、用心の二字を合せて、一字に作り書けり。その文に云ふ。

鳥渡見れば忍ぶに類し、麁忽に見れば恩にひとし、はるかに見れば思ふに似たり。

天龍寺の觀道といふ僧これを見て、「棄恩入無爲眞實報恩謝」といふ文意に、何となくかよひてをかしといへり。

一 伏見より、年七十歳ばかりなる老翁、土偶人、瓦器のたぐひを荷ひて、洛中を售りあ

井戸、熊川ーいづれも名物の茶碗
金岡ー巨勢氏
元信ー狩野古法眼

萬石、十年に十萬石を餘せり。左あらば、日々をつめずとも、一大名の家計、何ぞ町人の財を借ることを用ひんや」といへば、某唯々として歸りぬ。

一予がもとに、高金につのり購へる香合あり。ある方へ賣る時、人の云へるは、「左ばかりの名器人も知るところなれば、持ちつたへ給へ」とて、いたく止めたれども、賣りたり。やむことを得ざればなり。思ふに、武家にて武具をうらば恥辱なれども、衣服をはじめ茶器などは、賣拂ひたりとも、いさゝか家瑾といふべからず。井戸、熊川の名物、金岡、元信が名畫たりとも、國民の飢渇を救ふの德なし。ある諸侯、領國飢饉のとき重寶の名器をうりて、窮民をすくひしことあり。いとありがたき仁政といへり。

一牡丹花肖柏、西山に居られし時、百金を賊に奪はれ、ノ貫は山科の草庵にて、茶器をうりたる錢七十貫を、盗人に取り去られたり。盗賊は金銀と衣服を殊更に奪ふものなれば、在俗の人は格別にして、世を捨てたるわび人は、華美の衣類と金錢をば儲ふべからず。家の調度もなるべきほどは。土器と紙ばかりのたぐひにて濟すべきことなり。これ、賊を防がん第一の用意なるべし。

一彌陀如來、觀世音菩薩、勢至菩薩の三尊は、おなじ格に信ずべきを、彌陀はいふまで

徹の法―周の税法、十分の一の賦課

一ある侯、十萬石を領しながら、困窮せられしころ、大坂にて豪富の町人、その侯のまかなひするに、すべて儉約を以て專とするとて、家來の祿をへらし、諸事の入用を減して、上向きよりはじめ麁食して、下みなこれにならひ、なほ諸家のつきあひをも省きたり。かゝれば、家中いよ〳〵ひがみ、下ます〳〵いやしくなり行き、收斂盜臣いよ〳〵增長して、窮迫はじめにいやまし、何某その仕法を憂ひて、予にこのことを嘆きけるに、予こたへて云ふ、「物本末あり、事終始あり。終にすべきことを始にして、後にいたすべきを先にする時は、ます〳〵あしきはさかんにして、善事かくれ、家國の經濟における、私欲のうすくして、誠忠なる者をわけてえらみ、衆人心をあはせて、徹の法を行はゞ、いかほど困窮し給ふとも、年を追うて富さんこと、改めいふべきにあらず。賄はせて利を得んとするは、民と利をあらそふなり。國家を治むること、いにしへよりして云傳ふるが如く、奇字の謎の意ばへあらまほし。この文字をわくるときは、上に立んとすれば下可ならず、下可ならんとすれば、上立ず。家を治むるの法、まづ損じたるところを修復して後、おひ〳〵かたむけるを起すべし。十萬石の領中、一萬石をなきものとしてたくはへ、九萬石を以て家法をたつることあらば、一年に一

り、里言、方言こと〴〵く變ずることありとも、連音の移聲をすべて正す時は、同じ火を、關東にてはひーとのみいひきれども、五畿內にてはひィーと連ぬるなり。枸杞を、關東にてはくーことといへども、五畿にてはくこウーといへり。すべて、紅粉をにーとばかりいふべきを、べーといふことを蒙らしめて稱ふると、同じ例なり。これは詞の訛といふものにはあらず、音便の序にして、國地の自然に生じたる詞なり。五音たてよこに通ふ通音の詞はいづれも、國の根本といふをしらず。通音も訛にはあらず、訛は四聲の內にて淸音、濁音といへども、自然より出づるなり。上すみて下濁るは自然の通稱なれども、洗濯は五畿に下をにごりて唱ふれども、關東にては下すみていへり。これ國土は自然なれば、下濁用の字にごるとも定めがたく。戲れに、

大根とはねつる文字ははねやらではねずともよき牛房ごんぼう

一華咲翁の滑稽、みな人の知るところなり。一日予がもとに來り訪ふ。折ふし世人多く草庵に來りて、月花の物がたり絕えざる中にも、「崇德院は天狗にならせ給ひて、讚岐に崩御ましく〵、菅公は雷となりて、筑紫に薨ぜられしといふことまでを、ものがたりする人は多かれども、實說を詳かにかたれるもの一人もなし」とて嘆息せり。

に下るにのぞみて、濱荻は、與左衛門に、わが父母もろともに、江戸へくだりたきよしの願を申しけるに、許されざりければ、客にかたらひ、事のよしを嘆きけるに、其客豪富の商人にて、彼が孝心を感じ、「いとやすき望みかな」とて、路資をあたへて、あるじ與左衛門に頼みけるに、「費をいとへばこそ、かれが願も聞かざりしなり」とて、事もなげに承引きたれば、濱荻は兩親をも伴ひつゝ下りけり。濱荻勤めの中おこたりなければ、他の遊女もこれにならひて、その家繁榮し、主人も亦數多の益を得たれば、高砂といへる茶店をしつらひ、濱荻が親達につかはしたり。かの濱荻はたしなみよくて身をつゝしみ、明くれに父母をかへり見て、勤めながらも、日々に親のもとへ行きかよひけり。かゝれば、郭の中にても、誰か賞譽せざるものなからんや。その頃濱荻が發句に、

うき人に手のはづかしき火鉢かな

後に、ある貴人に根曳せられて、出雲の國にいたり、親子三人にてめでたき暮しとなれるも、孝の惠みなるべし。そのころ、行儀難波とて、その名を傳へたり。

一開語、語路、清濁、連聲とて、國々、山川、海谷の深淺高卑によりて、その詞のなま

紹智—藪内氏、茶道の宗匠

をいのるに、かならず驗あり。何の花にてもさゝげて、鼻より血の右よりいづれば、左の陰嚢を摑り、左より出づれば右をにぎりて、拜すれば忽ちに癒ゆるといへり。

一紹智かつて、士明といふ香爐を得て、火いけとなして、朗干法師の訪ひ來られしをりに出だせり。朗干師撫でつさすりつ、香爐をほめられたり。ある時、又來りてその香爐をつく〴〵と見て、申されけるは、「かばかりの名器を、何とて火いけにはしたまへるや」といへば、紹智笑ひて申されけるは、「此器火いけとして遣ひ侍ればこそ、貴僧が目にもつきてをしまれ侍るなり。香爐にして床におきたらば、左ほどには思ひ給はじものを」と云ひしとぞ。この詞、人のうへにも通ひて、いとおもしろし。

一島原の難波屋與左衛門といへる遊女屋に、濱荻といふ太夫あり。もとは播州高砂の商家惣七といふものの娘にて、人の家に嫁しけるが、その家衰微に及びて、夫に捨てられ、親のもとにかへりけれども、親の家もまた衰へて、父母を養はんが爲に、與左衛門が方に身をうりて、遊女とはなりしなり。その頃與左衛門は、江戸の郭へ移りける時にあたりて、よき遊女をつれ行かんと、十一人の遊女をえらみける中に、殊に濱荻は、その志尋常ならず、風雅の道にもうとからざれば、わけてあはれみをかけ、江戸

いはんかたなく、至つて重し、往昔の質素たることをおもひやるべし。今や赤銅眞鍮の笄、あるひは竹などにて造れるもの、丹波但馬の在所にてもさゝず。予が祖父の物がたりに、「むかし大原にて、男も笄をさしたり、近きころはさす者無し」といへり。竹にて短くつくり、結ひたる髪へ横にさしけるとぞ。また塔をも掘りいでたり。表に家根の如く筋ありて、重ねたるものと見え、内は悉く穿りくほめたり。好事の者、求めて手水鉢とせしが、その買ひ求めたる人、多くは瘧を病みたる故に、後には所々に捨てありしなり。後、また心あるもの、拾ひあつめて、再びもとの塔に重ねて、寺院に建てしが、いと古代のものなり。貴人の塚じるしにやと思はる。

一京師五條坂の左に、ひくき平地あり。叢澤となりて路なし。鳥邊山より下りに入れば、數歩にして、親鸞を火葬したるといふ所あり。鳥邊野といふよし、古老の物がたりなり。一基の古碑を存せり。弘長二年十一月廿八日とゑりてあるのみ、あたりに荆棘生ひしげり、人跡たえたり。むかしは、一向宗の門徒、遺骨をこのところに持來りて埋みたりとかや。

一誰人の塚といふことしらぬ古墓、歌の中山の入口にあり。鼻血の出づるとき、この塚

—玉川にさらすたつくりさらさらに昔の人の戀しきやなぞ(拾遺集)
藜の羹—粗食
太牢—美食

がつの樵路をわかち、露深くして草舊壘の礎を埋め、月さびしうして尾花白刃のひかりをまじへ、旌旗風にひるがへりて、松に白鷺を宿し、翠桃枝をたれて、丘に弓弦の糸をたち、利鏃いたづらに田園にくじけ、寶刀むなしく壤の中にうづめり。花鳥に時を感ずれば、歌舞の榮華もまのあたりにして、月にむかしをしのべるときは、錦繡にほこれる盛衰も、紅葉の色のうつろふに見えたり。殺氣長く昇平の日影に消えて、戰塵に似し雲もなく、人家軒をならべて、路に竈のにぎはひをつらね、ゆくかた〴〵に踏分けし數多の道も街となり、ありといふなる迯水も、俊成卿の比興とはなりぬ。

一藜の羹を食ひて、太牢の滋味をしらず、破れたる溫袍を着て、嚴冬のはげしきをわたり、財寶を多くたくはへて、他の人に讓る者を、金の番人または有財餓鬼などとそしるものあれども、人欲の私なく、行ひ公道の人と謂はんも、亦可ならずや。

一洛の燈籠庵は、そのむかしに小松內府の燈籠を造られし所なれば、その名殘れりとぞ。六波羅より東南にあたりて、小高きところなり。ある時家をつくるとてそのあたりを掘りけるに、笄の如きもの多く出でたり。銅にしてその形丸く、左右に圓く合せたる玉の如きもの附きたり、長さ一尺あまりあり。予が友文鎭にしたるを見たり。古雅

標有梅―詩經の篇名

縈紆して―めぐりめぐりて

さらす調布さら〳〵に

のまうづるにともなはれ、青梅村より御嶽山に登れり。このあたり、承平のころ平の將門が舊壘多く、すべて古戰場とぞ。道しるべするもの、江戸の人にして、もとこのあたりの產なりといへり。

一武野古戰場記に云ふ、武を崇め、嶽の高きに藏して、神威を承平の和にしめし、文を黎民の際にやはらげ、德を國家の仁政にしきぬる、むさしの國御嶽の山は、叔倉子義を違へぬ標有梅の、青梅の里まで、江戸を去ること十有三里にして、行程に山河橋陵なし。青梅村中、金剛精舍古樹の梅あり、四時實を結び、熟すれども綠のいろをかへざるが故に、青梅の名あり。連山西北をめぐりて、さながら絶壁に似たり。閭巷を過ぐること十町ばかり、狢澤を下れば、溪路斜にして棧あり。村落に流を入れたり。日向の和田といふ、朝日にむかふ名なるべし。一顧すれば、多摩川の流をへだてて山々水にそばだち、石にむせぶ流れの音、谷にひゞきて、人のあらそひわたるが如し。山河すべて縈紆して、數里の間に屈曲し、峯にかくれ谷にあらはれ、「さらす調布さらさらに」と詠じたる昔の歌の姿なり。山聳えては、頂きに露臺のあとをとゞめ、岸崩れては石に楯澤の名を殘し、往古に戰場の樞要たるも、陰欝たる叢澤となりて。僅に山

時としておしうつる―聖人者不ㇾ凝二滯於物一與ㇾ世推移（楚辭）

人を俗物と見下すべからず。その俗物の目より見れば、また高慢なる者は、角立ちて至つて無益に見ゆるなり。君子は、時としておしうつりて、よく俗と交はる。かゝるが故に、俗物に入れられざれば、やはり俗物なり。學びの道は、粋とならざれば質なり。かゝれば、書籍は粋となるの助けなれば、知りて表へあらはさず、隱して入る時につかひ、不斷ほこりかなるは、人さらに用ひざるなり。

一人に饗應せられたる物をうましとおもひ　家にてこしらへ食する時は、外にて食したる時よりは味ひうまからず。いかにとなれば、おもひまうけて食ふがゆゑなり。食ははからずして食するものにうまみはあり。されば、麁食たりとも、うまきは思ひよらざる所にあり。すべて、食はうましまづしといふことなし。その時と處とわが腹中とに應じて、口に適ひたるより、うまき物はあるべからず。空腹には、生鹽を添へたる湯漬も、山海の珍味よりもうまし。繪の道もしかなり、初に畫きたる如くと望む人あれども、寫し出でなば格別、筆勢墨色すべて前によることなく、おのづから發せし勢ひ、ふたゝび倣ひすることありがたし。

一予江戸にありしころ、武甲山にまうでて、日本武尊の舊地を拜せんと、雨降山かけて人

らは和歌などきらひなり」といへり。「何とて有がたきことを嫌ひ給ふぞ」といへば、「世にすべて和歌などよみ物よく書く人などは、みな身帶を持つものなくて、身不埒にして家産を傾くるもの多かり。故に左樣なることは少しもいたさず、只家業大切につとめて、金錢多くたくはふるより外のことはいたし申さぬ心得なり」といふ。予また云ふ、「然あらば、書狀、手紙、證文、送狀、あるひは關所手形、船手形等までもなく、又奉公人も請狀なくて通用し給ふや」といへば、主人笑ひて、「それは昔よりあり來りし法なれば、何ひとつとして用ひざることなし」といふ。「ありし法は、もと何人の始めおきたるぞ」といへば、「左やうのむづかしきわけは存じ申さず。それは誰人にても知り傳へたること故、それにて事は濟むべきなり」といふ。予又云ふ、「かゝる文の傳はることは、もと歌の道より出來て、今書をつたへて、その法はたてり。さすれば、御身家をとゝのへ身を修むるも、この事ありて成就す。和歌の道、書の道、何ぞ修身齊家の害なりといはんや。行ふ者の心にあるべきなり」といへば、主人口を閉ぢて謝したり。

一學問して博聞多識となるは、人情を察して世路に行屆かんが爲なり。聖人賢者の世話やき給ふも、高ぶりて物しり顏せよとの敎にはあらず。されば、理に明かなりとて、

はあらず。わらははつれそふ夫のこゝろざしあしくて、他妻に溺れて、捨てられたる身なり。女の操二人の夫を持たざるを貞とすとあれば、たゞ世をあぢきなく思ひすてて、今の身とはなりぬ。小鹽にわび住ひするは、この地の閑寂を愛してゐるにはあらず。甥の坊主の、里の寺に緣あるをもて、こゝには居るなり。折ふし來たまはば、よりて憩ひ給へかし」といふに、何となくゆかしきところあれば、墨筆をかりぬるに、「もし歌よみ給はば、麁相の短冊あり。これに書きて給へかし」とて、出だしければ、うちくもりたるに、鳥の飛びたる繪あり。たゞ人の扱ふべきものとも見えざりけれども、あしき墨もて書きてつかはし歸りぬ。

そめて濃き色もをしほの山風にもとのみどりへ歸すもみぢ葉

一借用とだにいへば、千金の重きも奪ふべしとは、藤房卿の詞にして、借錢の多きを苦にやむものあれども、借錢より先この躬は大借なり。世人錢の利をおそれて、天の理をおそれず。借錢何ぞ身を亡すの禍あらんや。理に滯る時はその身忽ちにほろぶ。

一池田何某とて酒造家ありけるが、隱居して瀧澤といふところに住みけるころ、尋ね行きけるに、こしかた行く末のものがたりする序に、「和歌は詠れけるにや」といへば、「われ

小鹽—京都の北にあり

長がかへりし後、高橋いでて、「いかなる御事ぞ」と尋ねまゐらせければ。大納言の仰には、「さりとては麿がおもひしとは違へり。五月雨には四時の如く、雨のさまいろ〳〵にふりけるゆゑ、春雨のさびしきにくらべ、夏の夕だちにたぐへ、秋の雨の其のすごきにかこち、冬の雨の寒きにもたとへたり。このことふるき物がたりにあれば、それをしりたる句にやと、ゆかしく尋ね侍れども、然はなくて、雨の只ふり盡すとのみ作りしこと故、比興とはおもひ侍りぬ」と仰せられし。

一小鹽の山のこなたに、由留木といへる里あり。紅葉するころ、こゝかしこ逍遙しつるに、柴垣麁末にゆひめぐらして、草の花さかりに、虫の音などたゞならずおもしろく覺えたれば、夕ぐれをもいそがで、暮れなば月にたどりなんと、猶奥ふかく行きて見るに、草にて結ふ庵あり。こはよしある人のかくれ住むにやと、入りて床几を乞ふに、其さまいやしからぬ尼の、たばこの火など持出でて「内へ入りて休らひ給へ。京にておはすや」など、ねもごろにいへるものごしの聲ね、いよ〳〵たゞならずおもへば、「かく世をのどやかに過し給ふこそ、尋常のかたともおぼえず。和歌など詠じ給へるにや」と、庭のもみぢのかつ散るを惜めば、「いなとよ、さやうに世をおもしろく過ぐる身に

まずんばあるべからず。

一信貴の毘沙門堂に四季連歌の句合あり。その中に、「五月雨に年中の雨ふり盡し」といふ句あり。何某の大納言聞しめされて、「何ものの申したるにか、この句のぬしを尋ぬべし」とありける時、高橋某そのゆかりあるものに問ひければ、彼あたりなる村長の申したる句なりとて、わざ〳〵御使の消息を給ひて、もし京へも出づることのあらんには、必らず參るべしとのことゆゑ、いとありがたくてかの村長わざ〳〵京へ出でて尋ねまゐらするに、「然あらば逢ひて物がたりせん」とて、一間へ通し給はれば、村長云ふ、「風流の面目、雲の上までも聞えけんことこそいとありがたけれと、存じまゐらするなり」と云ふに、大納言も四方のはなしありて、さて尋ね給ふは、「年中の雨といへる趣向のおもしろくおぼゆるからに、その句意を聞きたく侍れば、逢ひ申したり。いかなる故事かありて、かく申ししか」とありければ、村長こたへて云ふやう、「別に故事と申すも候はず。只五月雨のきのふもふり、けふもふりつゞけて、あすも亦かく降りくらしなば、一年の雨も、この頃のさみだれにふり盡しぬべきと、思はれ候心より申したる外は、所存なく候ふなり」と申しければ、「面白くおぼゆるなり」とて入り給ひぬ。村

天の道は云々—天之道損レ有レ餘而補レ不レ足（老子）

塞痞—ふさがりつかふ

に飛入りて果てたりとぞ。

一或商家の奉公人、武家の下部といさかひして、下部を打擲して、いさかひに勝ちたりとて、店にて自負するを聞きて、主人大いにいきどほり、「兼々云ひつけ置きしに、人といさかひするのみならず、下部たりとも、武家奉公の人は、世を治め給ふかたぐ＼の召仕る天下の役びとなり。おのれは商人の手代、私渡世の奉公する身分をもて、武家の召仕る人といさかふこと、不屈なり。わが家風にかなはざる者なれば、只今いとまをつかはすなり」とて、わびたれども聞き入れずして、その宿へ引き渡しぬ。

一天の道は、滿つるをかきて、足らざるところを補ひ、地の道は、盛なるところを減じて、衰ふる所を扶けたり。萬類みな麁物を生じぬれども、人取りて飾るが故に、美麗となる。されば貧は常なり。富めるは集むるが故なり。あつむるは物を滯らすなり。天地はとゞこほることを嫌ふがゆゑに、萬類をみな促して、しばらくも止めず。そのとゞまるもの凶年となる。洪水、地震、大風、大雨、火災、人に在りては、塞痞停滯よりして、百病を生ず。易に云ふ、財寶を倉に納めて守らざるもの、是は盜人に奪ふ事を教ふるなり、化粧して美服を着しぬる女は、我を犯せといふにひとしとあり。愼

ひたぶる—ひたすら

はうそといふ中にも虚實の根ざし、ともにその中にあるべし。刀を打つもの、なまりがねの焼刃に刃がねをかけて打ちあげたるは、とぎ込みてその切あぢはがねのみよりもよろし。よくきたへ打ちあげたるなかにも、鍛冶の心にかなへるは、十本のうちに一本あるかなきかなりといへり。

一木曾義仲の臣畑六郎左衛門、わかきころ人のむすめにちなみて、娶らんことを乞ふ。その女は飛騨の山住にして、椀具の木地を挽けるものの子なり。女の母こたへて云ふ、「いやしき者の子にて侍れば、なか〳〵に武士の妻となるべきものにてはなく、育から人まじはりもおぼつかなく思はれ侍れば、ひたぶるに辭退まゐらするなり」といふに、媒の人畑にこのよしをいへば、畑不興にて、「我小身ゆゑに、不足におもひ女をくれざるにや」と云ひやりければ、その母またこたへて、「我等年老いぬれども、欲に耽りぬる心はなし。武士のならひ、もしも畑殿の討死などしたまひたる時、おめ〳〵と親里へかへり侍るやうなる志にては、武家へ嫁したりとて、恥かしきまゝ、斷り侍るなり」とあれば、六郎左衛門その詞を感じ、とてもかくても妻とせんとて、終にめとり偕老の契りあさからざりしが、元暦の亂に、六郎左衛門亡せたりと聞きて、この妻深谷

迷のひとつ―徒然草の句、迷は色欲の迷なり

いひ爭ひしが、終に零落の人に云ひ勝たれて、鹽鱒を買ひて歸りぬ。さて道すがらのほど、はなしに、世にある人の云ひけるは、「そのもと何とて鰹のうまきをすてて、鱒のうまからぬを買へるやといへば、零落の人わらひて、「今日は、そのもとより我等への饗應にせらるるなれば、鱒にしかず。鰹は御もとの如く常に美味を食し給へる人の、たま〳〵食ひたまふものなり。我は常にうまきを食はざれば、鱒の味ひにしかず」といへり。

一人の信は、おのれが信を以て引出だし、人の僞も、おのれがいつはりより引出すものなり。僞りも遂ぐるときは信となり、信も遂げざる時はいつはりとなれり。されば嘘も誠も、交はるものの心にありて、己誠ありて人に嘘あることなく、おのれ嘘ありて人に誠はあるべからず。唯人としてむづかしきは、心の疑ひとつなり。兼好法師は、「迷のひとつおそろし」と書きたれども、まよひも表にいづることあれば、おそろしといへども、おそるるに足らずして、捨てやすし。疑は心にありて、あらはす所なきが故に捨てがたし。かゝれば、おもふこと内にあれば色外にあらはるるといへり。しかはあれど、差別そのまじはりのうちにありて、よろづあらはなるこそよけれ。これ

世にある人
―富める人

す。箕子一たび嘗めて、延齡の良藥と賞し、二度なめて心を擾すの媒とおどろき、三度なめて國家を失ふの基と悟れり。勞なく憂なき時飮むからず。

一世に、文事もなく、藝術をもさまで習ひ得ざる者の、書きたることは、感に堪へてなみだを催すほどのことはなきものぞかし。薄命の人の書きたるものには、すべて感涙にたへ難きこと多かり。鴨の長明が方丈記、吉田の兼好がつれづれ草、みなひとたびは零落して、世のありさまを悟りて、身を顧みたる人々なれば、綴りたるものどもあり難くめでたし。書よみたるばかりにては、よろづふかきに通ぜず。

一幼き子のもて遊びに、風猿といふものあり。その和歌何人のよみたるにかありけん。「登れ〳〵、のぼる時はくだる、くだれ〳〵、下る時はのぼる」と端書して

すがりゐる竿に手足も括られておのれ動くとおもふ猿かな

とあり。この歌の意を思ふに、人間一生の勤行身をよく詠じたり　竿は業にして、旗は天地の間にありて、風は身を扶くるの氣なり。

一世にありし人、零落したる人のもとに行きて、ともに連れ立ちて市にゆきて、鹽魚を買ふ時、世にある人は鹽鰹を買はんといふ。零落の人は鹽鱒を買はんと、たがひに

濃きは疾くちるものにて候ふ」

一修行の詞に、「花は雨の過ぐるにまかせて、紅ます〳〵色をそへ、柳は風にもまるるに随ひて、縁いよ〳〵ふかし」

一無用の重器は、貴きあたひをも費してもとむれども、秘めおきて日々の用には立たず。無益の妾は、多く財をもいとはずして愛すれども、家をとゝのふ足しにならず。美味は、高直にして少きものにあり。樂しみは費にして、不用のものにありとしるべし。

一夏日の七快

湯あみして髪を梳る。掃除して打水したる。枕の紙を新にしたる。雨はれて月のいでたる、水をへだてて燈のうつる。淺きながれに魚のうかみたる。月のさし入りたる。

一飲酒の十德

禮を正し、勞をいとひ、憂をわすれ、欝をひらき、氣をめぐらし、病をさけ、毒を解し、人と親しみ、緣をむすび、人壽を延ぶ。

一古人罰酒の法あり。三合を飲酌の限りとす。もしこの法を失ふ時は、家を亂し身を亡

所帶―世帶
了俊―今川氏、足利時代の人
おもしろの世云々―これも繪の讃

を足せども、この地に用なきものとて取らず。家にかへり給ひて後、便りあらば、米を少しにても贈り給はるべしとて、念頃に藤の棧迄人に送らせて、さすりて行けかしと度々いへるよし、大事に行くべしといふ意にや」と、宿のあるじものがたりき。おもふに、深山幽谷にわたりては、かゝる地もあるにやとおもへば、行きても見たき心地なんせらるる。

一拂子の讃に云ふ、遊ばんことをほつす、遊びて足らず。樂まんことをほつす、樂しみて足らず。僞らんことをほつす、僞りてたらず。貪らんことをほつす、むさぼりて足らず。終に盜まんことをほつす。

一所帶の箴に云ふ、天下は一人の天下にあらず、萬民持合の天下なり。身帶は一人の身帶にあらず、家内持合の身帶なり。了俊は獨味を制し、正成は二菜を戒しむ。

一男女打まじりて、酒たうべ花を見るに、傘さしたる繪に「おもしろの世の中や、恩をわすれぬほどあそべ。おもしろの春雨や、花のちらぬほどふれ。おもしろの酒もりや、こゝろみだれぬほど斟め」

一紅葉の詞に、「人と契らば、うすくちぎりて末とげよ。もみぢ葉を見よ、薄きはおそく、

もあらず。溪間を遠くへだてて、その大きさ二抱もあらんと思ふばかりの樹に色紅にして黄をおびたる花、今をさかりと咲きたり。夏の事なれば、あまりの暑さに、案内の人は木の葉をいたゞきたり。さていふやう、此花の大きさこゝより見ればさ程にもあらず、この川の末尻といふところに、この花のちりて流れ行けるを拾ひしものあり、花びらのわたり一尺余もあるべしと語れり。いかなる木の花にか、たえて知る人なし。遠江の國人は、これを京丸の牡丹とて、今猶ありといふ。この頃は人もゆきかふことありて、この地へもいたれど、この花のある溪へ尋ねゆきて見たる人なしとぞ。舟筏も通はざる地にして、人の用なきところなりといへり。四五軒の家ある中に、長とも見ゆるものの家は、寺院めきて佛畫を懸けたり。その畫幅は、一向宗の眞向光明の彌陀にひとしき、大いなるものなり。食物のみを供へ、松をともして燈明とす。花を手向くることとなし。夜は燈火なく、炬をもて業となせり。土人は皆惣髪にして、男女ともにおなじ。髭は鎌にてきるといへり。子供も皆惣髪にて、衣類には麻のあらきを織りて、尾花、蒲の穗など入りたるを着たり。夏も寒しといふ。かの男濱松へかへるにのぞみて、泊りたる家あるじに、錢もて謝しけれども、他國はかゝるものにて用

一東海道濱松といふに宿りし時、家のあるじの申すは、「この所より天龍川に添ひて、十五里ほど山に入れば、遠江と信濃の國のさかひなる川そひの地に、京丸と呼ぶところあり。その地は他より人の行きかふべきところにもあらず。國の境に、藤の蔓もて長さ五六十間もあらんとおもふほどの棧をかけたり。所の者は京丸の棧といへり。巾せまくして、行くにさへ目くらみ、魂きゆるばかりなれば、かの地へ行くものとてはいと稀なり。誰が親の世には、京丸へ行きたることのありなど、只噂にのみそのところのこと語りつぎて、見たる人もなきに、この宿の下男好事のものにて、京丸見で來らんと、しばしの暇を乞ひて、かしこに行きたりけり。その地は家わづかに四五軒ありて、農の業はすれども、常の食に米は聊かも食はで、稗に小豆を交へて粮とす。この男が行きたる家はその中にも長と思はるる者にて、麻の織りたるに、尾花を入れたる、新しき夜の物を出して着せたるのみにて、敷けるものは家のあるじもなし。枕は木の角なるをもて臥さしめたり。所の人のかたりけるは、この山を登りて凹かなるところより見れば、珍らしき花ありとて、案内しければ、男行きて見るに、はるかなる岨のもと、ながれあり。水勢の屈曲して、激する聲のいさぎよきけはひ、いふべく

一如―同樣

佐川田喜六―名は昌俊

寺に居しころ、料理の方、菓子の方など心得ありければ、時として禪師にまゐらせける。この者性質放逸にして、萬の事にかゝはらざるが、禪師常に他より物をもらひたる時は、膳部のものを一つ器に打まじへて、食し給ふことを見て、「何とて料理の調ひたるものを、さやうに無下にはし給ふぞ」といへば、禪師わらひて「邪正は一如なり、飲食にも善と惡となし」と宣へるに、意仙はうけがはずしていふやう、「禪師にはさもあるべし。われらは眞僞別如心なり。やはり調味のまゝがよろしきぞ」と申しければ、その後は左もしたまはざりしとぞ。

一東野州、佐川田喜六がもとへ、「今日の御書翰に雪のことなきは、近ごろ遺恨に候」とある返事に、

眺常ならず候へども、昌俊事は、月花をのみ格別にめで侍れど、雪はさほどにうかれ申さず候。人も乏しきものは寒がり、雪深き國にては、吹雪にしまかれなどして、凍え死ぬるもの多しとあれば、悦びおどるほどにはなられず候。東路の旅に、由井といへる宿に宿りし夜、はじめて雪の降りければよめる、

眺にはあかぬ箱根の二子山誰がこす嶺のみ雪なるらん。

雲萍雜志　卷之三

一ある人、茶は諂ひありといふことを利休に問ひし時、こたへけるは、「わが友に丿貫といふものあり。われを茶に招きし時、時刻を違へたる文おこしたり。刻限をたがへずして行きけるに、内なる潛り戸の前に穴を穿り、上に簀子を敷きて、あらたに土を置きたり。われは心なくその上にのりて入らんとする折から、地の土くえて穴に落ちたり。穴の底に土のねりたるが中へふみ込みたれば、とりあへず湯あみして再び入りけるを、人々の興としたり。此事、かねて、期明といふ者、山科へおはさばかくと、はやく我にものがたれど、主のこゝろづかひを我かねて知りたりとて、穴に落ちざらんは志を空しくすることの本意なさに、穴としりつゝ落入りぬ。扨こそその日の興とはなりたり。茶はひたすらに諂ふとにもあらねど、賓主ともに應ぜされば、茶の道にあらず」といはれし。

一杉野意仙といふ醫師、豐後の國より京に出でて、一休禪師の心に適ひ、しばらく大德

れば、母をも養ひ姉をも身をうらせまじと思ひあまれど、頼まん人しあらざれば、神佛より外にたよりもなく、この御堂の本尊に七日參りの願をかけ、この事かなひ侍らずば、命をめされ候へと祈り申すなり」とて、さめ〲と泣きければ、賊はたがひに顏見合せ、二人なみだをはらひつゝ、貰ひなきして、「扨は孝心の娘かな。よくこそ母を大切におもひ、姉をも大事にしつるぞ」とて、かの二人は何事をかさゝやきて、憐をもよほし、盜み取りたる金銀に衣服をそへ風呂敷に包み、小女に與へていひけるは、「今より母になほ孝養を盡すべし。われら旅のあき人なり。不便に思ふまゝ、褒美にこれを取らするなり」とて、蓑笠きせてかへしけるは、至孝の心に感じてや、毘沙門天の利益にて得さしめ給ふにも異ならずと、その頃人のかたり傳へし。

つげ給ふな」とて、大雨もいとはで、「夜半のほどに一里あまりもへだたりたる峠の堂へ出で行きけるが、辛うじてそこに辿り行きて見るに、堂の内赫々として火かげのかゞやきければ、いといぶかしくおもひて内をうかゞひ見るに、二人の賊ども、雨にぬれたる衣類を焚火にほしてゐたり。いかで賊とは知るべき、旅人の雨やどりせしとおもひて、そと内に入れば、賊は物音に打おどろきつゝ、目をとめて外の方を見やれば、十歳ばかりの女子ひとり、蓑笠かつぎて來たり、「雨夜の暗きにたゞひとりこゝに來るは、連におくれしや」といへば「つれはなし」と答ふ。また「いづれへ行くとて此ところへはきしぞ」といふに、「この御堂の本尊へ願ふことの侍りて、しかも今宵は滿願なれば、まうでつるなり」とて、すゝみ入りてしばし拜禮してあるを、かの賊は打見つゝ、「ふもとの村よりもはるけき道を、いかなる祈願ありてまうづるぞ」と問ふに、女子はしばしものもえいはで、つい居たりしが、しひて尋ね問ふに、泣く〳〵こたふ、「わらははは一人の母を姉と二人して養ひまゐらすれども、歳たけ侍らねば心とどかず。父は過し年身まかり給ひて、そのころ田畑も賣りて、今はなく、その日を過さんよすがのなさに、姉の京へ身をうりて母を養はんといへど、わらはひとりに母をやしなふことのかたけ

くだ物をも賣らで母にあたへ、姉は人によりて粮ともなるべきものを乞ひ、二人ともにとかくして日をおくりけるが、ある時二人つれ立ち人なき所にて、ひそかに物がたりけるやう、「わらは母をやしなはんとすれども、御身とともに働きたればとて、なかなかに衣食のふたつ母に届くところなし。おもふに都には人あき人のありと聞けり。そを尋ねて、この身を賣り、その身のしろをもて、母を養ひたくおもへり。御身の歳まだいとけなきといへども、母を大切にやしなひまゐらすべし」と、涙せきあへず、いひ聞かせければ、妹はあねにわかれんことのかなしくて、ともに泣きつゝいらへだにせざれば、このこと母には申すまじとて、なだめすかして家にかへりぬ。その日より、暮れぬれば夜ごとにかの妹の見えざれば、姉は妹が行方をひそかに母に尋ねけるに、「山の毘沙門堂へ心願ありとて、詣づるなり」といへり。殊勝さいとしくおもひゐたるに、折ふし雨のいたく降りけるが、姉の妹にいふやう、「今宵はあめふりて道も暗く、小坂のけはしきを行きてけがありては、かへりて母の歎きもあらん。あけて晴れなば詣づべし。たゞやめ給へ」ととゞむれども、「けふ七日の滿願なれば、母の事姉がこと天王にねがひ參らせて、いかでか僞りや申すべき。ひたすらにゆるし給へ。ゆめこの事母に

ひて、余事までもことかゝねば、物縫ふ職人の見ては、驚くばかりに上手なりけり。予ある時もの縫ふをひたぶるに愛で賞しけるをり、妻の云ふ、「三歳にして母に後れ、繼母に育てられ、いと嚴しき性質にて、五六歳より水仕のわざをつとめ、七歳より手習ひ物よみ裁ぬひを教へられ、實の子ならねば、教訓足らじと、末に至りてそしられんはくちをしとて、羽根つくあそびだにえせで、只物ぬふことなどのみにいとまなかりつれば、折からははげしき母よとおもひしかども、今となりては物縫ふわざを人にほめられ侍るは、偏に繼母のなさけ薄からざる慈愛なり」といへるを聞きて、予がいとけなきころの作文をほめられざるの、いとありがたきをおもひあはせぬ。

一丹波の國と丹後の國なる堺に、毘沙門山と號するところあり。その麓の村にいと貧しき農夫あり。二人の娘ありけるが、一人は先妻の子にして十七歳、妹は十歳なりけるに、父は姉が十歳の時身まかりて、二人の娘母につかふること、孝行いよ〳〵深切にして、母のやしなひ怠らずといへども、幼き輩のはたらき三人の過はひとゞきおよぶべきかたもなく、一人は果物を商ひ日々に市町に出で、姉は山野に行きて薪をこり、あるは人に雇はれてわづかの代にかへて、母をはぐくみ、時として食に乏しきをりは、

て他へ行くとも、價はこゝ許にてきはまれり。その價また他にて高卑ある時は、その許の茶道ははやすたれりとおもひ給ふべし。試みに先買取りて心にかなはば、使ひたのしみ給ふべし」といへば、主人その詞に感じてや、「いかにもおもしろし。風流の道さるべきことなり」とて、いふまゝの價に買ひとりぬ。

一器物にかぎらず、何にても高き價のものは高く、低き價のものはひきく購ふこそよけれ。高きものをやすく買はんとおもふ志、高き人の悅とする所にあらず。むかし、洛の粟田は、淸水寺の境內なるや、又地主權現の社內なるや、主馬判官の建てたる燈籠を掘出でたり。石商人の手に入りたるを、人の求めんとて價を問ふに、金十五兩なりといふ。そのものすぐに求むるにおよびて、淸水寺の役僧聞きて、「二十兩つかはすべし。さるべき方を止めて持來るべし」とて、買取りぬ。今淸水寺の地に存りしとぞ。

一予はいとけなき頃より、詩歌の道を好み、たま〳〵作文などせし折から、稿成りて父に見するに、一としてほめられたることなく、只「無益のことなり」とて、座右に投捨ておかれ、他の者のは見てほめられ給へば、然りとてはいかゞとのみおもひ過ししが、後に妻にむかへたる女の、物縫ふことの人にすぐれて、小袖など一日に一重づつ縫

古唐津―唐津燒の陶器の古きもの

一高貴の人などは、卑き者と利を爭ふべからず。人君たる人も民と利を爭ふ時は、下賤のものの如く志なりくだりて、上をあざむくことのみを考へいだすなり。殷の亡ぶるはじめは、羣臣民と利を爭ひしよりおこれり。ある人隱遁して、茶道に名高かりしかば、茶器を業とする商人多く來る中に、古唐津の水指を持來りて、「金一枚に購ひ給はるべし」と云ふ。予もその席に遊びてありけるが、主人予にむかひていふやう、「ほしき器なれども、金一枚にては高直なり。價ひきくせば買取るべし」といへるを、商人聞きて予に云ひけるは、「知らせ給ふほどの重器を、他の商人の手にわたらば、なか〳〵かゝるあたひにはうるまじきを、われらなればこそかく廉價にもまゐらするなり。只申すまゝに買取り給へかし。利潤うすければ、是よりひきくは納めがたし」といふに、主人また予にいふやう、「いかに思ひ給ふぞ。價高きに過たりと思ひぬ」と云ふに、予こたへて、「その品其許の心に叶ひ侍るにや、いかに」といへば、「心にかなひてほしけれども、價の高ければ求めがたし」といふ。予又答へて、「その價に買取り給へ。いかにとなれば、商人はよき道具なればこそその許をさして持來れり。さあらばこの器金一枚に買取り給はば、器のあたひはもはやそのもとが定規なり。この器、いかなるゆゑあり

か程の不自由たりとも忍ぶに堪へざることなかるべし。たとひ疊一枚の家に住むとも、乘合舟には優るべし。夜泊の切なき、膝を折りて足を縮め、人の足を枕として押合ひ、睡らんとすればゆすり起され、少しまどろむとおもへば鼾に目さめて、起臥ともに心に任せざるは、たとひ一夜といへども、生涯もなほひとしかるべし。

一茶道を好むものの、他の手前をも辨へなく、わが習ひたる義のみ心得、これこそはわが流になくて叶はぬ品なりなどと、無益の器を高料にもとめ、飾りおきたるはふる道具店にもひとしく、見るさへなか〳〵にうるさかるべし。又利休居士が詞にも、「貴き價の器物を愛するは、心利欲に走るがゆゑなり。缺けたる擂鉢にても時の間に合ふを茶道の本意とす」といへり。數奇屋咄といふものにも、主人家居と道具に自負し、客にたのめて云ひけるは、「わが好ける數奇屋のうちに、何によりたることとはなしによろしからざるものあらば、詞にしたがひはぶくべし。少しも遠慮し給はず、いひ給はれ」とありければ、客は諂なき人にて、「家といひ器といひ、行居かざる所もなけれど、只このうちにそのもと一人なからましかば、風流雅境これに過ぎたることはあらじ」といへり。こはいとおもしろき諷諫なり。

ふをりからには、授くべきものあるなり」とて、今まで著せし小袖をとりあげおき、月をわたり日をつみても、衣類のいまだ身に馴れずとて、授くる物もあたへざりしが、漸ひととせも、過ぐるうち、弟、兄の麁服をよろこび、かくてぞ家をも保つべしと、儉を守れるやうすを賞美し、予が草庵に來て告ぐれば、予も亦兄の心を語りて、兄にもよろこびをつけ、「身を麁略の間におきて、しばらく驕飾を廢する時は、求めずしても財は至れり。つとめよや」といへるに、いくほどなく弟、兄をあはれむからに、感じて多くの財を贈れば、ます〳〵かたく儉を守りて身も立ち家をも起し、その富めること弟にも劣らざりけり。

一ある人堪忍の二字を座右にしるしおきて、常にこれを見る時は、おのづから心に止りて日用の心がけよろしといへるものあれど、堪忍は修行せざれば身に感ぜざるゆゑに、堪へざることにもよく忍ぶことなり難し。予も堪忍を守れることをおもふに、乘合の舟ほど事になるに便よき事はなしと思へば、僕一人をつれて、京より夜舟にて浪華へあそび、また浪華よりも亦舟にて京へのぼりつゝ、ひたぶるに舟に泊れるを樂しみとして堪忍の稽古せり。人の世にあること、舟に乘合ひて泊りし折を思ひいづれば、い

業を送るといへども、儉を守るの勤めなければ、いよ〳〵貧しくなりゆきて、多くの財を弟に乞へども、肯んせざりければ、あるをりからに、その兄の、予が草菴に入來り、歎息して言ひけるやうは、「親類多く富めりといへども、兄の貧しきを資けざるは、あかの他人に劣れるなるべし。かゝれば今より商人をやめて、武士ともならんことをおもふ」といふに、予は聞くよりもあはれにおもひ、武道のたしなみあるかは知らねど、さやうのいやしき心を持ちて武士ともならば、危きこと深淵にのぞむがごとく、又薄氷をふむに似たれば、心に一箇の工夫をめぐらし、「弟の資を得んとおもはば、予に傳はる秘し藝あり。いはゆる能の狂言とひとし。教に從ふ心あれば、身を立て家を起すべし。若又稽古に違へる時は、身を亡すこと遠きにあらず。よき慰の戲なれば、師弟の約をかたく契りて、この戲を習ふべきや」と、詞を正して言ひければ、「親屬どもの資もありて、身をも立て家をもおこさば、否めることかは」とて、やがて師弟の約をなしけり。さて衣裳手元にあらざれば、明けて來るを待ちたれば、約を違へず來りけるに、「さあらば指南すべきなり」とて、彼の溫袍を取りいでて著たる小袖と脫かへさせ、布衣の姿に取つくろひ、「著束のその身に馴ぬる迄はその姿にて居るべきなり。衣體整

西行の古歌
年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり佐夜の中山

りて故郷を訪ひ、ひそかに一首の和歌を述べて、子育觀音の堂にちかひ、導引の業を路の資として、主家のたふるゝを再び起せり。その折からの歌なりとて、彼地の堂にしるしあれども、誰がせし業なることをしるものもなかりしに、予が江戸におもむくころほひ、此事を聞き傳へて、庵主を訪ひ尋ぬるに、慈照といへる留守居の僧、此歌を闇記して聞せたるに、感涙をさめがたくて、書とゞめつ。

世に出ずば又とは越さじ我ための命なりけり佐夜の中山

かの唐土の司馬相如が、昇仙橋の柱に題して、「駟馬のくるまに乘らずんば、ふたゝび此橋を過らじ」と書きしは、おのれが出世の志にて、いはば自領の私なり。中吉がこの歌に於ける、忠節のために故郷に誓へる辭藻の意、西行の古歌にすがり、調幽玄ならずといへども、誠を盡すのおこなひに於いては、相如が及ぶところにあらず。諸崎ひとりの女子ありけるを、中吉にめあはせて家號を讓り、庄兵衞と稱せり。

一予が交はりし人の子に、兄弟常に爭ふものあり。兄は砂糖を渡世とし、衣食におごりて懈りつれば、家貧しくしてまうけなく、弟は鹽をあきなひて、麁食麁服し怠らざれば、家富さかえて不足なし。その兄、常に弟が富めるをたのみて、財を借りてその世

魚の羹などすゝめ、誠忠至らずといふことなければ、諸崎おひ〳〵快方におよび、起居もつねに違はねば、ある時中吉主人にむかひ、黄金五兩を取いでて、「吾もひとつの思いれ侍れば、しばしの暇給はるべし。これより浪華に赴きて、主人の家を再興すべし。大利は時を得てうべく、是を元とし、このあたりに小商して待ち給へ。黄金はおのれ理を說きて、主家の支配を勸めたる二人をすかし借りつれば、とかくにいとま給ふべき」とて、涙ながらに願ふにぞ、主人も感涙を留めかね、路資を分つに受けずして、「旅行に財は妨なり、身の退きし頃に習ひおぼえし、導引の業こそ、まことに旅路の資なれ」とて、いと安々と浪華におもむき、おなじきわざにたよりを得て、堂島邊に徘徊するうち、算筆の道くらからざれば、富家のあるじにをしまれて、ことのよし詳に物語りければ、主家を起すの忠節なればとて、力を合せて得させんといへるにより、諸崎を浪華へむかへ、主從もとより、かの中吉が忠功をあらはさんとて、□の内に中としるして、これを家の印とし、今も浪華にとみさかえしとぞ。

一江戸靈巖島、諸崎庄右衞門がめしつかひ中吉は、遠州佐夜の中山なる農夫勘助が子にして、その忠節前文に記す話說の如し。中吉主家再興のため、浪華に赴く時、夜に入

關雎の戒―夫婦和合すること

導引―按摩の業

からゆるす心のいできて、家さへ人にうち任せ、妾宅を營み、庭園の作り、商人に超過し、樹木泉石に萬鎰の黄金を費し、茶道蹴鞠の遊興にふけりて、遂に家人に禮を薄うし、謾りに婬奔のみをことゝすれば、妻は關雎の戒を失ひ、密夫とともに何處へか奔り、從者はこと〴〵く是よりみだれ、下みな貪り掠むることを爭ひ、內には家を保つの助けをうしなひ、外には產を傾くるの借財多かりければ、大厦のたふるゝは一木のよく支ふる所にあらざれば、名におふ豪富の家なれども、つひに財寶を分散して、あるじは逆井といへる片田舍に潛み隱れ、持つたへたる調度のたぐひを、けぶりの代となしつゝも、三とせばかりを送れるうち、身は生を養はざるに勞れ、住家は明暮の乏しきに壞れて、疫にをかされ病重りて、死を待つばかりといへども、訪ふ人だにもあらざりしが、彼中吉は心正しく導引の業を過ひとして、主家のやうす伺ふに、主人の病あつしと聞くより、とみに逆井の里に赴き、しひて看病のつとめをねがふに、不興をゆるされ介抱すれども、その日をおくる過はひだになければ、晝は野菜を商ひて飲食の資となし、夜は導引をことゝとして、主人が藥の料に替へ、夏は枕床を涼しめて、炎熱をしりぞけ、冬は肌にあるじをあたゝめ、身は藜麥の麁粮を營めて、より〳〵鯉

ねぎ―ねがひ

てつぶやくやう、「人のあませし食物など、やはかもらひて食ふべきや」といへる物ごしの耳にとゞまり、童のやうすをうかゞふに、負ひたる子を背なよりおろし、介抱しつる仕こなしの、ねもごろなること、尋常ならねば、諸崎はあるじにむかひ、「幼き兒を負ひたる童は、いづこの家のものぞ」と問へば、「この山かげなる農夫の子にて、このほどこゝら不作にして過はひしがたきもの、多くわれらが家に養へり。童は親の質を繼ぎてや、性直にしてゆがめるをきらひ、調度たりとも曲りてあれば、人しらぬ間に正しく置きて、おのれが食に當らざれば食はず、人の餘せし物を食せず、訥辯にして用をとゝのひ、善をかたりて惡をいはねば、あはれみ養ひ侍りぬ」といふに、諸崎しきりにほししといへば、「それこそ彼が幸ひならめ」と、母と兄とに告げやれば、よろこび來りて、主とともに奉公の事ねぎつれば、こゝに主從契約して、中山にて得し者なればとて、名を中吉と改め、召仕ふに、十年の勤め私なく、すべて主人の非をあげ諫むることしばしばなれば、つひにはうるさく思はれ、忠言耳にさかふのならひ、はては不興をうけ、二十の年に身を退き、ねもごろにせし方を賴めて、しばしがほどは忍びけり。斯れば諸崎のみにかぎらず、財集れば奢れるならひ、己に儉を守るとすれども、おのづ

わやく—理非をわきまへぬこと

ど戴きては食はざるぞ。いたゞけ〳〵」といへども、終にそのまゝ持去りぬ。わやくのさかり、鄙の育、さもありぬべきことにやとおもへど、その面ざしのあまりに氣高く見えたれば、「兒は御身たちの産の子にや。よき子を持たれしことなり」といふに、「いなとよ、子にして侍れども、彼はさるおん方より預りおけるものなり」といふにぞ、げにや氏より育にして、かゝる貴人の子たりとも、その傅のいやしければ、おのづからそのいやしきにうつるべし。人はその地の質を受け、性に有てる土地がらの氣質を天地は左あらしむるとも、非性の草木だに移し植うれば、類を變ふる自然にして、いはんや善なる性を備へし人の際に於てをや。童心百年、取捨おなじく善となく惡となく、幼き時におぼえしことは、身を終る迄忘れざること、七性の身に支ふることなく、無我の心一なればなり。左あれば先入をつゝしみて、はじめに善を敎ふべし。これに似たる一話あり。江戸に諸崎某といふ人あり、予が母かたの緣にして、豪富の米問屋なりしが、ある年、伊勢參宮のかへるさに、遠州佐夜の中山に休らひ、ところの名物飴の餅を食ひける時、多くの兒等あつまりて、羨しげに見るたるに、殘りの餅を兒等に分ち與へたれば、十歳ばかりの童ひとりは、交はる兒等をすりぬけて、床几により

の心にあらざるべし、人の世にある、暫しにして、身をば安きに置くにはしかじと、轉を招きてかたらふに、轉云ふ、「このごろ詩の羔羊の章をよみさしつゝ、この事母にかたらひて、身を退れんことを思へど、母の心をくみかねて、折こそあれと待ちつるに、はやくも心づけ給へば、仰にしたがひまゐらすべし。われ羔羊の章意をおもふに、羊に數の子をうめるも、先に產れし羊をこえて、後に產れし羊の子の、その乳汁を飲めることなく、先後順を違へざること、獸類だにもおのづから道あり。父の遺言を背くに似たれど、兄なる人を退けて、家督の社職を嗣ぎたりとも、悌たる道にかなはねば、獸類にだもおよぶことなし。我禽獸にもしかざる身として、神に事ふるといへども、神慮いかでか納受し給ふことを得べけんや。いざ遁世して、しりぞくべしと」て、兄の務に家督をゆづり、母のふる鄕へ閑居して、孝養ます〳〵至れりとなん。

一予洛陽にあそべるころ、比叡の山ごえに辛崎の松見んと、高野村なる茶店に憩ふに、この里の名產とて、饅頭を造りて家ごとに鬻げり。口取にとて出せるなりから、十歲ばかりなるやつれたる兒の、面ざしのみはいと氣高く見ゆるが、かたはらに來て見居たれば、是を分ちてあたへけるに、取りてそのまゝ食ひしを、家あるじの聲あらゝげ、「な

り。

一ある國の一宮の社司に、化名して羊の大夫といへるあり。妾腹の子を務といひ、後妻の子を轉といへり。羊の大夫、老さらばへ、年七十を超えたれども、いかなる思慮やありけん、務は三十の歳を經ぬれど、妻をも迎へず、家督も讓らでありけるが、大夫が性質懦弱にして、仕ふる神のものいはねば、進退己がまゝにして、心むかざるをりからは、社頭に詣づる勤もせざれば、親を見習ふ子の常にて、務も家に書見る窓はあれども、圍碁すなどりのなぐさみに耽り、終には遊女が色におぼれて、財寶數多費しつれば、父の不興を蒙りて、妾がゆかりに身を隱して、父は病の床にうち臥し、死を待つばかりと人づてにきゝても、わびてかへらんと思ふ志なければ、家督を弟の轉に讓りて、幾程なく身まかりぬ。務は妾の伯父とかたらひ、家督をゆづる證書を僞作し、廳に訴へ出でければ、官令二人の兄弟を召て、社職の道勤を問ふに、轉がこたへ深切にして、務が答明かならねば、國家を守護する職に疎しと、務は家を退けられ、轉に家督は定りけり。後妻つらく〳〵おもふには、佞人こぞりて惡事を企て、事成ず退くといふとも、怨は生涯にわするゝことかたし、子をして仇を得せしむるは、親たるもの

裳をもたげ、肌着をさぐらせつゝ、「斯る胴厚のつゞれをまとへば、帶紐ときて副臥せんは、客に愛戀の情をうとからしむる恥らひは、只わらはがうへのみにあらず、親をして人にあなどらしむるの憂に堪へねば、明けて衣服をあらたにして、又の仰せをねぎつべし。それだに母の命を待つのみ」と、袂に涙をつゝみてければ、商家のあるじも感にたへかね、その過はひに似げなきを賞して、その夜は客をすげなく歸し、明けての契を約すれども、客はかげより伺ひつれば、さきにふたりがかたらひ居れるを、心を合せて、財を貪るたばかりとのみ思ひとりければ、あくる日の夕樓へは約を違へて、從者に下知して辻に忍ばせ、玉野を殺せしついでには、商家のあるじも害せんとはかるに、玉野はそこにをらざりければ、商家のあるじと烏婆の物語して居けるを、二人の者を殺害して、何處ともなく失せたり。玉野は悲歎に肯へ難く、敵の浪華にのがれしと聞き、京都を去りて、かしこに潜み、さしも美麗の面を焦し、醜き尼に容をかへ、しのび〳〵にからうじて、二年經ざる秋の半に至り、をばせの葬を送れるかへりを待ち、母のうらみを浪華に報い、敵の首を廳に乞ひうけ、都にかへりて母の塚墓に手向け、供養しけるとかや。今は烏が墓と土人は呼べど、實は妓女玉野を葬りし跡といへ

やぶさか—吝嗇

造次顚沛—あわたゞしきかりそめの場合

が妬を醸し、忽ち愛想をやぶりて、養育したる丹誠に慢じ、得しらぬものの妻とせんより、妓女ともなしてわが身の樂しみ種になさばやと、舞曲の妓藝を專にならはせ、名を玉野とよびて、遊里にいでて諸客の座興をそふるに、みな人こぞりて寵するにひまなく、老婆はおもひひがみて、子といふものをもたぬむかしにまして、玉野が行住坐臥にのゝしり、衣服の飾りも、表ばかりを華美につくろひ、裏には木曾の麻衣をつづれは、はれの舞曲も場うてして、心のまゝに重ねをしも脱がず。かゝれば他ひとの咎めを防ぐに、絶えて養母がやぶさかなるもいはで、養育せられし情恩をうやまひ、身は捨てられし親をも怨まで、獨己が不德を悔み、疑惑に伐たるるしもとにも、老の力の手弱きを歎き、不義に隨ふ貪著には、衣の蜂もしりつゝ拂ひ、出でては母の徒然を思惟し、入りては薪水の勞に代り、洒掃のつとめ、寢食の度、造次顚沛背くことなく、孝情の至れる、げに感ずるにあまりあり。ある豪富の商人、玉野が美麗なるをもて、わが常に立ち入る貴人へ諂の爲、玉野に數金を擲ちて雇ひ、樓上へ誘ひ行きて媒せんとするに、玉野はその夜は固くいなみて逢ひあふことをゆるさねば、「いかなる故ぞ」と、一問をへだて心のほどをあながちに尋ね問ふに、玉野は襟をくつろげ、あるひは

石女——子を生まぬ女

をば朝まだきに行きてはせがみ、貪欲非道の行ずれば、人々是にあだ名して烏婆と呼びにけり。あるは捨てられたる子を貰ひとり、飢に及ばせて養育にそへたるこがねを貪ることのみわざにしつれば、いつとはなしに人しりて子貰婆ともあだ名せしが、ある時女子の捨子をもらひ、懐にして家にかへるに、その子の美貌いはん方なく、明暮老婆を笑ひ慕へるあどけなき情愛にひかされ、さばかり邪険の悪老婆も、嬰兒が微妙の艶態に、人外の魔心を奪はれ、飢ゑさせ殺すべきの悪念を忘却して、思はずねもごろに食汁をすゝめ、むつかる時は夜もすがらすかして、己が肌にあたゝめ、頼みて乳汁の養ひに寝る目もねずして、はぐくみつれば、いとうるはしく長なりて烏が鷹を育てしと、人もうらやむ女兒とはなれり。すべて兒女子のをとなびつること、痴情ひとたび去りて、愛態次でしりぞき、艶情頓に容姿をつくろふ。いかなる縁や深かりけん、老婆は兒の愛慕に浮かれ、這ひまつはるゝにおもしろく、すがりて立つに慰みぬれば、花とながむる折しもありて、邪のおもひをしばし忘れて、蝶とし見つる時しもあれば横著のこゝろを刹那に亡し、十年あまりを經るほどに、容色嬋娟として、顔ばせ玉の如く、その艶麗たる、世に絶倫の美女となりしかば、誰かは戀情を憎しみ、かの石女

やごとなき—貴き
三昧—墓地

一ひとりの躄を車に載せて、十三四歳の子と覺しきが、綱を肩にかけて曳き、躄が妻と思ふ女の、幼子を背負ひ、六七歳なる子の手を引きて、道路に食を乞ひぬるを見て、ある人予にいへりけるは、「かく乞食の分際として、多くの子をまうけ、引きつれてよわたりすること、せん方なきものなるべし」と笑ふに、予おもへらく、「世はさま〴〵の草の露、うつせはうつるいろ〳〵なれど、世にある人の、親子兄弟夫婦の中にへだてありて、國所を別にして住居する輩にくらべては、たとひ乞食してなりとも、互にむつましく、此乞食が如くありたきものなり。おもふに、車をひける子は孝子なり、子を負ひし妻は貞婦ともいふべし」といへば、その人笑をとゞめぬ。

一京都團栗の辻に、烏の婆と異名をよべる者あり。はじめ、やごとなき方の局に宮仕してありけるが、吝嗇かぎりもなくて、勤めのうちにそこばくの黄金をたくはへ、局身まかりて後、兄の魚商にてありける方に、下居て兄をすゝめていひけるは、「斯ばかりの小利をもとめて、魚など荷ひ歩かんよりは、我がたくはへたる黄金を貸して、日日大利を得なんことをはかるべし」とて、みづからもあまたの金をふところにして、ひねもす霜雪の寒きもいとはず、夜は三昧のあたりまでもはしりありき、夕に貸したる

く戒めたる儘にて捨て置きぬ。又ある時佛具を取出して賣りたるを聞きて、一人の僧又住持が許に行きて、「惡僧此度は佛具を盗み出し賣りたり。われら諫めたりとて更に用ふる所もなく、住持もすて置き給へばぜひに及ばず。われはゆく〳〵禍の寺に及びて、身にもかゝらんことをおそれおもへり。もし彼れを追出し給はずは、われに暇を賜はるべし」といふに、住持は涙をうかべ、「さあらば願ひのまゝにその方に暇をつかはすべし。惡僧は今しばしわが傍に置きて、おひ〳〵諭すべき」といふに、この僧大に住持をうらみ、「我等いとまを乞はば、惡僧を追出したまはんとおもふものから、それをかへりて罪なき我等にいとま給はること、近ごろ依怙の心にあらずや」といへは、住持こたへて、「さにあらず。御身は今わが寺を出でたりとも、いづこへ行きても、はや僧一人の勤はなるものなり。惡僧は今わが傍を離れなば、忽ち捕はれて罪人とならんもはかり難し。さすればわが德もすたれて、一人の弟子を失ふなり。ゆゑに今暫しはかたはらにおきて、彼が命をも延し、かつは嚴く教誡をもせば、善心に立ち返ることもあるべし。それをたのしみにわが傍をはなつ事をせざるなり」といへば、此よしを聞きて惡僧も師の高恩に感じ、やがて善心にひるがへりしとぞ。

舟もやひ—舟を一所にとぶむること

惻隱—あはれみ

夫はそれに入りて、その妻樹々の枝より下げて、つり卸し引上げなどして、谷間の岩茸を取りぬるとぞ。下は幾丈とも限り知れざるところなるよし、見し人ものがたれり。もし過ちて、綱のきれて落ちたらんには、命なかるべし。又伊勢の浦にて、海士の鮑取るには、乳のみ子なんど引きつれて、夫は櫂を使ひゐて、舟もやひするに、妻は海底に飛入り、こゝかしこ貝をもとむるうちに、子の乳を尋ねて、よゝと泣く聲の水底に聞ゆるにぞ、今一つ得まくおもへど、子の泣くこゑの聞ゆるにひかされ、浮びいで、舟ばりに取りつき、息もつきあへず、子に乳をそふるありさま、哀にして實に惻隱の心を發動すべし。世わたる業さま〴〵なる中に、かゝる過はひする輩もあるものを、家にありてその日を樂に過しつる身は、いとありがたきことにあらずや。

一江戸下谷高岸寺といふに、いつの頃にか弟子の僧二人ありけるが、一人は身持律義にして常々寺の爲ともなるべきことのみに心をつくせど、一人の僧は戒行をもたもたで、大酒を好みいさかひなどして、よろづ私多かりしが、ある時什物を取出して賣るを、一人の僧見て、諫を加へけれども聞き入れざりければ、此由を住持につげ、「かの僧追出し給はずは、寺の爲にもなるべからず」といふに、住持は「一先諭し見るべし」とて、嚴し

相あり。つゝしみ給へ」といふによりて、浄味予に問ひけるは、「人相はしかとしたる書にも出で侍ることにや」といへるに、予答へていふ、「人相の書くさ〴〵ありて、その理かならずあることなり。むかし三井寺の永徳僧正の、安倍の泰親に問はるゝやう、われに劒難の相ありやといはれしに、泰親見てありと云ふ、僧正、いかにしてあることを知られたるやといはれし時、泰親答へて、かりそめにも劒難などと申す事のあるまじき御身をもて、あるにかと御尋ねあること則ち其相のある徴なりといひしが、果して木曾義仲都へ亂入の時、法住寺にて、楯の六郎が流矢に當りてうせ給へり。されば、御もとも人相を見せられしところ、則ち乞食の相をまうけ出したるなれば、果したまへ」といふに、浄味は頭をふりて、「身の持ちやうによるべし。相を果すなどとはその意を得ざることなり」とて歸りぬ。それより浄味は四十五六の年よりして、おひ〳〵よからぬことどもありて、その身つひに零落るるにおよび、八年がほど過ぎて、清水坂に乞食となりゐたるを、見し人ありとかたりぬ。浄味七郎兵衛は、阿彌陀堂といふ釜をはじめて摹せし釜師の上手なりき。

一 木曾の山中など、深山幽谷にて岩茸を取るには、籠といふものを造りて、綱をつけて

のうれひなしと、ところの者は申し侍りぬ。

一六憎とて、憎むべきもの六つあり。その詞に、金持ちて高ぶるほど憎きはなく、書を見ずして物識顔するほど憎きはなく、人に物をやりて恩にきせるほど憎きはなく、吝きほど憎きはなく、欲ふかきほど憎きはなく、人をそねむほど憎きはなし。

一紀州に、豪富なる農家あり、田植の日、さをと女凡二百五十人あまりもいづるに、その日の朝田植はじまるころ、近き山中にて、大いなる鷲の犬とあらそひけるが、終に犬をつかみて虚空へとびあがりたるを、他より一人かけ來りて、田植の長にいひけるは、「あれを見られよ。鷲の犬をとりて空に舞ひ侍ると」いへば、其長詞をとゞめて、「さることいふべからず。今苗の植始めなり。衆人この事を知らば、みな大ぞらを仰ぎ見るべし。さある時はこの苗二百五十束ほどのおこたりなり」とて、人には語らざりしとなん。何ごとにても、物の長たる人々、かゝる心がけはありたきことにこそ。

一洛の七條に、淨味七郎兵衛といふ釜師あり。家富みさかえて、多くの人を仕ひけるころ、伏見に人相をよくするものありて、あるとき淨味を見ていひけるは、「御身今は何ひとつ不足なけれども、五十歳を超えて後には、必ず乞食ともなるべきほどのあしき

風鎌—かまいたちともいふ

といへり。その後、また私用ありて、その供人を引連れ出でけるに、折しも夏のころ溝のけがれ水を打ちけるが、平澤が袴のすそより下をけがせり。またく供人大にいきどほり、已に打擲にも及ばんとせしを、おしとゞめて行きければ、供人申しけるは、「いふかひなきことにて候」といふに、「左にはあらず。けふは私用にて出でたり。私に人を罵ること、士たる者の本意に違へり。たゞ堪忍だにせば、世に恥辱といふことあるべからず」と云はれしとぞ。

一伊豆、駿河の海邊にて、魚の海上にあつまり寄る時は、海のおもて、一等高くなりて浪を打寄するを、ナブラともナグラを打つともいへり。漁夫の詞なり。熊野にてもショナブラといへり。文字にかゝば、潮魚群の義なり。ナブラは魚群なり、ナブラといふ詞と同じ。

一つむじといふ風は、春のころは風、地を吹くをもて、土埃を吹き巻きぬ。長閑なる日などにふと風いでて渦を巻きあぐるなり。辻風なるべし。また西國方に風鎌といふもののありて、人の肌をそがるるなり。そぐ時に傷むことなし。しばらくして、破血してその傷堪へがたし。このことをふせぐには、古き暦をふところにして居るときは、そ

へりぬ。秀衡心におもふには、花なきをありしといひしは、彼らが志を見んとてのてだてなるに、四人はみな實はなき花を、我にへつらひてありといへども、泉ばかりは無き故にこそなしとはいへり、勇は錦戸すぐれたれども、諂ふこゝろあり、元良は柔弱なり、伊達は義あるに似て勇なく、泉は勇少しといへども義ありといへり。その後、九郎義經奥州に來りて、秀衡をたのみ居けるころ、鎌倉より討手下向の時、秀衡、泉ばかりに遺言して、義經を蝦夷へおとし、義名を後世にとゞめたりと語り傳へたり。

一予が友としける平澤何某といふ士は堪忍づよき人にして、ある時、主用ありて人多く具して行きける道のほどにて、二階より齒磨をつかひて吐きたる唾の、あやまちて平澤が着せし上下へしたゝかにかゝりたれば、供人大いにいきどほり、その家に入り唾を吐きかけたる者を引出さんとす。平澤止めて、しばしこの家をかるべしとて、その家に入りて、狹箱より着換の上下を取出して着かへけるに、その家のものども大勢いでて侘ぶるにぞ平澤申しけるは、「過なるべし。重ねて心をつくべし」とて出で行きぬ。供人いひけるは、「いかでそのまゝにゆるし置き給へるぞ」といへば、「けふは大切なる主用なり。かゝる些細の事に隙取るべきことにあらず。わが常に守れる堪忍はこの事なり」

泉三郎―忠衡

一子を見ること親にしかずといへり。奥州の秀衡は男子五人あり。兄錦戸太郎は、常によき馬を好みて山野を乗ることを勤め、元良の冠者は、女子を友として遊ぶことを専ら好み、伊達の次郎は、山川の漁獵を好みて他のことをせず。泉の三郎は、武具を好みて、よき物ある時はもとめ來りて、みづから試み、刀劍なども、作物は人にも讓りあたへて、よろしからざるはくじき折りては捨てたりとぞ。何れも文學の道をならはするに、皆嫌ひて、只他の業のみを事とし、泉ばかりは夜を日につぎて、文學の道にこりてつとめたるが、ある時、秀衡は子どもの志をためし見んとて、秋の末つかた、金花山へ皆々を伴ひ、山上に席をまうけて、山河の風景を眺望するをりから、子どもをあつめて申しけるは、「何れも、遙なるあなたの山の尾上に、ひと木の櫻あり、今をさかりと見えて、花の爛漫として開けること、雪かあらぬか、みなみなの目にも、さぞかし見ゆらんや」と申しけるに、おのおの延びあがり立あがりつゝ見て、いかにも父が仰の如く、さくら花今をさかりと見えて、しかもうるはしく見え侍るなり」といふに泉ばかりは暫くながめつれども、櫻花の見えざりければ、父の側にいたりて、「仰に隨ひ見參らせ侍れど、わが眼には花らしきもの少しも見え侍らず」とて、うち連れてか

べし。逢ひたく思ひ給はば、行給へ」とて、さし敎へぬ。野に鋤を持ちて立ち居るものあるを、近よりてつく〴〵と見るに師なり。その有樣、在りし姿にかはりて、それとも思はれざりしが、よく見るにたがひもなければ、しか〴〵の事を語りて、主人がいへる詞を述べて、「その時かすめ給はずば、などありのまゝに仰せ給はざるや」と云ふに、猪飼申すには、「人の疑心は、詞をもて解くべきことにあらず。我かく疑を受けぬるうへは、いか程のことを申したりとも、許容あるべきことなきは人情なり。その時の疑心、後には知るべきこと明かなれども、當意をいかにともせんすべなければ、ひとりの娘をうりて、調達したり。士は不義の物をうけず。況や、金錢に於てをや。その方われに逢ひたりとすべからず。はやく去るべし」とて再びかへり見もせずして、畑を鋤けり。かゝれば、手代さま〴〵にわびて、金を戻さんとすれども受けず。「しひてその事をいはば、その方の身のさゝはりとなるべし。とくゆけ〳〵」と追はれければ、是非なくひと先京に歸り、奈良屋何某といふを賴みて、さま〴〵に侘びなしたれども、「娘が身受も彼等如きいやしき志の輩にはゆるしがたし」とて聞き入れず、返しつる五拾金を手にも觸れず、生涯郡村に老を養ひて終れりとかや。

失せたる人なり」と云ふ。尾州のあき人聞くよりはやく、「否とよ、その金は師が盜めるにはあらず。他の人の盜みたるなり。我等その師の娘にあひて、くはしくことのよしを聞きたり」といへば、問屋のいへるは「何處にて聞き給ふぞ」と云ふに、「われ京にて、宿の者に誘はれ、島原にいたりしに、江口といへる大夫を呼びたり。二年をへだてて上れる毎に行きけるが、この江口はかの師が娘にして、その時富家へ返すべき金のために、身を賣りたりといへり。然あらば、人の難はいかなる時にあるべきか、定めなき浮世にて、いともはかなきことなり」と語りけるに、此事、豪富の家の支配する者、かの問屋が方より聞きぬれば、主人に事の由を告ぐるに、主人は聞くより大に悅びて、支配の者を招きて申すやう、「その方いかにもして京にのぼり、島原に至りて、江口といへる大夫が身受をもすべし。しかし、まづ猪飼が行方を尋ねゆき、師に逢ひてわが行屆かざるをもよく〳〵わびて歸るべし」とて、多くの金を持たせて、江口がもとへ尋ね行きけるに、父は郡村といへるところに、少しのゆかりを求めて、今は人の小作して活計とせりとて、泣々文したゝめてわたすに、支配の者よろこび、郡村に至り尋ぬるに、いと侘しき家あり。人の居らざりければ、あたりの者にとへば、「野に出でてをる

さ、その日の烟だにたてがたく、多くの金に目くれ侍りて、人しらず持ちかへりぬ。あはれこの事沙汰し給ふまじ。夜あけなばその金とゝのへてかへし申すべし。今暫し待ち給はれかし」といふに、支配の者家にかへりて、主人へかくと告げたりければ、「拯こそ」とて舌を巻きぬ。それより十日餘りを經て、金五拾兩を持ち來り、侘びて主人にわたし、我家に歸り、ひとりの女子をつれて、いづこともなく失せにけり。富家には打よりつゝ、人は見るによらざるものなりとて、爪はじきして謗れり。さあるに、その年も暮行くころ、煤拂する折しも、座敷の長押より、反古につゝみたる金五拾兩をうち落せり。みなくこはいかにと打よりて改め見るに、過ぎし頃人に貸したる利の金にして、手習の師をうたがひたる時の金なりければ、互に顏と顏とを見合せて、心得ぬことと、あつまり談合すれども、その師の行くへかつて知れざれば、是非なくそのままにて過行きたり。かくて五年をへて、東國より小刀、庖丁の類を仕込みに來たる尾張の國の商人あり、堺の問屋が見世にて物がたりけるは、「この地に手ならひの師を業として猪飼何某といふ人ありや」と問へば、家あるじの聞きて、「それは五年ほどのあとのことにして、流浪の後乏しく、富家何某がもとにて金五十兩を盜みて、何處ともなく

はてて相手はかへりける後、その金の事を再び支配人の申し出でけるに、主は受取りたる覺なしと云ふに、支配する者は渡したりと爭へども、その金の行方なければ、つらく〳〵考ふるに、持來りしまでは少しの心覺ありつれども、手に取らざれば、いぶかしく思ひてその爭ひいよ〳〵止まず。主の考ふるに、「その時外に來るもの曾てなし、居あはしたるは、手習の師たる猪飼何某のみなり、彼人中々に金などに目の盲るべき人にはあらざれども、人はその時の貧困によりて、其志また變ずまじともいひがたし、若し乏しきにせまりて掠むまじと、極めてもいひ難し」といへば、支配のものも云ひけるは、「それはきはめて何某なるべし。このほど乏しきまゝに、人しらず掠めたるなるべし。それとはなしに試み見侍るべし」とて、序がましく師のもとに行きて、此れ彼れ物語るついでに、云ひ出でけるやうは、この程其許主人と碁を打ち給へる時、われらそこばくの金を主のかたはらに置きたるが見えず。御もとを疑ひまゐらするにはあらねど、そのをり其席へ行きたる者もなく、歸らせ給ふあとにて、なくなり候まゝ、若しや何ぞと取ちがへありて、持ち歸られもやするかと、心安さに任せて尋ね侍るなり」といへば、何某しばし打かたぶきて云ふやう、「さればこそあれ、流浪の身のはかな

ーからかれの火鉢の一種、明の宣宗皇帝の時の年號、

晝夜かたはらをはなたず。ある時八幡より茶をたつる客來りて、濃茶の馳走ありけるとき、さま〴〵物がたりする折から、傍に煙草盆はありながら、心なく客の唾を宣德の火鉢へ、火箸もて灰をほりつゝ、吐かんとする額を、環了指もておしさゝへ、「しばし待ち給へ。こゝに灰吹あり。願くは是へ吐き給へ」といへば、客は面目なく、唾を飲みこみて、「これは〳〵ゆるし給はるべし。常には家にてかゝるふるまひにて候まゝ、それに馴れておもはず不禮せしなり」と詫びけりといへり。「茶の湯は他のことをならふにあらず。かゝることを常にせざるやうにこそ道はたてたるなり」と、環了は物がたれり。予これをきゝて、「額を押へたるがよきや、押へざるがよきや」と笑ひぬ。

一　昔、泉州に豪富の商人あり、圍碁を好みしかば、この道をもて世をわたれるもの、多く所々より入來りける中に、江州にて諸侯につかへたる何某、人の讒によりて、身退き國を去りて、堺に手習の師となり、多くの弟子を集めて世渡りとせしが、折々かの家に來りて、圍碁の相手となりけるに、ある時主人と碁をかこみ居けるに、その家の支配する者、金五拾兩紙に包みて、得意より來りて貸金の利金なりとて、主へ渡しぬ。あるじは圍碁に心を盡し居たりしが、「それへ置くべし。あとにて改むべし」とて、碁打

五月やみ倉梯山のほとゝぎす姿を人に見するものかは

とよみたり。又後藤兵衞尉盛次に、平氏沒落の時、重衡逢ひ給ひて、「われ馬を射られたり。汝が馬を借せよ」とありけるを、盛次否みて、「今われ敵と戰ふの時なり。迯げ延び給ふには、歩にてもありなん。是は雨夜の傘なり。貸し參らせじ」とて走り行きて戰へりとぞ、ある人かたり傳へたる。

はつたい―麥こがし

宣德の火鉢

一石州なる僧のもとへ、京の土產にとて香煎を贈る人あり。めづらしとて湯をたぎらせゐるうち、客の來りければ、「よき折からなり。京みやげにもらひたる香煎まゐらすべし」とて、茶椀の中へしたゝかに入れて、鹽を加へ湯をつぎて、箸もてかき交へ出しければ、客は心得ねどもまづ一口喫しぬるに、苦みありて飮めざれば、やうやうにして、湯もてゆるめて飮みはてたり。僧は頻にしひて、「よくば今一椀まゐらすべし」といふに、客辭退してかへれり。この客京へ來りし時、予がもとにて此事を物がたりぬ。田舍には香煎さへ飮むすべしらざる人もありけるなりといへり。これは麥のはつたいと違へたる心得たがひにやありけんと笑ひき。

一長樂寺の環了といふ僧、宣德の火鉢を得たり。日々に寵愛して、絹にふき袖に撫でて、

らば、おのれを慢せざるの人なければ、必ずその理に伏すべし。

一奈良の二月堂にて、むかしは青竹にて麁末なる茶筅を賣れり。老若男女これをとゝのへて、詣でたるしるしとしてかへりぬ、家にありては、是をもて茶をたて、客をもてなすこと、南都の風なり。今はこの茶筅たえてなし。昔を思ふに、青竹の茶筅麁なるに、茶を立てて老をやしなふことならはしとせしを、今時はあたひたふとき器にて茶をして、心を勞し壽を縮むる人少からず。昔の人今の人と懸隔あることかくの如し。

一人の身帶を能くすることの傳法は、高きも賤しきも、萬事心得あることなり。千石領する人ならば、九百石にてまかなひ、百石づゝ年毎にあまし置くべし。一家百兩づつの入用たらば、九十兩にてまかなひ、十兩をあましおくべし。その他はよろづ儉約にありて吝嗇にすべからず。儉はなすべきを致してかゝざるが儉約なり。吝はすべきをせずして惜むが吝嗇なり。儉約は家をおこし吝嗇は家を倒す。

一本三位重衡、平氏さかりの頃、參內の折から、帝より、扇の地を賜はりたる時、ほととぎすを一羽畫きたるを折らせられしに、過ちて鳥を切りはなち尾のみ殘りたるへ、歌よめと仰せありたる時、

重衡―平清盛の子

荏柄平太―和田氏、名は胤長

權頭兼遠が祖―時代相違せり

一相州玉繩といふところは、荏柄平太が所領にて、平太あやまちありしとき、北條時政のはからひにて、平太に繩をかけて、諸大名の中へ引出したるに、和田義盛が一門なるをもて、九十三騎一黨、賴朝にそむきて、鎌倉をやきたり。此とき玉繩の領所を沒入して、北條に賜ふとあり。亂後和田の輩を尋ねられしに、朝日奈義秀一人のみは、その行方をしらずといふ、義秀は鎌倉のみだれより、信濃の國へのがれて、埴科の八代寺に隱れ住み、木曾山に入り、樵夫を業として、壽を終れりとぞ。權の頭兼遠が祖なりといへり。

一淀川にて鯉を取るに、漁夫水中に入りて、鯉と竝び居て、脇へかいこみて浮み出づるを、抱鯉と云ふ。近き頃よりの事なりとぞ。人を諫むるの道も是に同じ。はじめは一人のあしきことと共にならびゐて、折よきところにて、善におもむかすること肝要たるべし。人を異見するにも、大かたの人は、その者の非なることを擧げて、異見す。いよ〳〵容れざるなり。まづその人の功を擧げて、是を賞美し、「かゝる功をなしながら、いかでかさるよろしからざることにおもむくや。よろづ任すべき人がらなるを、たゞよろしからざるの志よりして、今までの大功を失へり。その善に歸すべし」とあ

重陽—九月九日の節句

夢窻國師—名は疎石、高德の禪僧、後醍醐天皇、足利尊氏の尊信を得たり

雲萍雜志　卷之二

一何某の大納言の姉君、重陽の酒宴せられける折から、座敷へ蜘のいでたるを、婢女の扇もて取らんとすれども、とり得ざれば、やがて打たんとしつるを、姉君とゞめ給ひて申されけるは、「そと紙もてとらへ、包みて庭へはなちやるべし。かまへて殺すべからず」と申されけるに、婢女申しけるは、「蜘はそのまゝはなちおけば、數多の子をふやし侍れば、ころし候ふべし」といへるに、「いなとよ、さゝ蟹とてわらはなど和歌にもよめる蟲なり。猶出でたりとも、必ず殺すべからず」と申されしとぞ。

一夢窻國師の書かれたるものに、人は長生せんと思はば嘘をいふべからず。嘘は心を使ひて、少しの事にも心氣を勞せり。人は心氣だに勞せざれば、命長きことうたがふべからず」とあり。鐵拐仙人の讚に、

　仙人は不養生せず腹立てず物ほしがらずそれでなが生

とあり。

ありー道こそなけれ云々―世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞなくなる。面打―舞樂の假面を製する人

らず、只このうちに延臥して、やがて出じとはおもひそみけり。

一羯摩乗親は、きはめて面打の上手なりけれども、ひととせに一つは打たず、性酒をこのみて醉ひて舞ふことを樂しむ。ある折から老母のいへりけるは、「はや米の櫃には蜘の巣をかけたり。勤めて打つべきにや」とせめければ、乗親おどろきて、「さあらば今日よりして懈らず打つべきなり」とて、籠りけるが、四五日を經て面を打ちてあつらへたるかたへ持行き料を持歸りて母に渡しければ、母よろこびていへるは、「多くの金を得しは面いくつ打ちたるや」ととふに、「八おもて打ちたり、されども心にかなはざるがその中に七面あれば、みな家にのこせり」とて、取出し見せたり。鬼女の假面なりければ、見るさへおそろしとて傍におきたり。その夜盗人入りて、親子臥したるを伺ふを見て、母かの鬼面を顏におほひて、眼の穴より見ながら、「やよ盗人の入りたるぞ。乗親起きよ」といひけるを、盗人見て、あと叫びおどろき、いづくともなく逃失せぬとぞ。

好む人

六德傑―低恨なかく名づけし也

歌舞の唐詩―唐太宗の舞に七德舞

庭前十畝ばかりを柴として苅ることなし。世人これを取殘しの柴とよべり。蝶の來るを待つなり。また庭園に鶯日毎に來り鳴くをよろこび、梅なくてあるべからずとて、洛東にもとむれども、心にかなひたる古木なければ、人を雇ひて探りもとむるに、嵯峨に老木の大いなるありと聞きて、多く價を費して、庭園に栽ゑたりけるに、梅をうゑたる日よりして、かの鶯いづくへか行きけん、終に來らずなりぬ。

一六德牒記に云ふ。綾羅錦繡もて夜の物を造り、薄もの生絹に蚊のわづらはしきを避くるは、定紋に片意地はりて、紙子に淺瀨を渉ることをしらざるなるべし。土燒の火鉢ひとつは、道具買も遺念なく、紙もてつくれる蚊牒一張、紙屑かふ者の眸をうながすはともあれ、盜人をして心を動さしむることなかるべし。薄紙一重に世塵をさけ、濕をのぞきて寢冷せず。風を入るゝ時は水濱にあるよりも涼しく、書を見る時は螢雪の窓よりも明し。寢ぎたなき姿を人に見せぬばかり、夏侯が妓衣の巧にもまされり。晝はまろめて屛風のうしろへ投込み、打目を正すせわもなし。秋去り冬來れば、被りて霜雪のはげしきをも凌げば、一物にして六用あり。彼太宗が歌舞の唐詩にはよらねど、われ是に名を與へて、六德の牒とよび、道こそなけれど、驚きたる山の奧にも思ひ入

大王色を好む―孟子が齊宣王に對して言せる語

忘らるゝ云々―忘らるゝ身をば思はでちかひてし人の命の惜しくもあるかな

名鑑―よき鏡

騷客―文人墨客風雅を

ず。士として色なければ人なづかず、農として色なければ物育たず、工として色なければ巧みなく、商として色なければ人問はず。天地の間、何ものか色なくしては、一日も世に立ちがたかるべし。孟子にいはゆる大王色を好むの辨おもふべし。

一人倫の交りの戀の心より出でざるときは、仁忠、慈孝、柔和、愛敬その信悉く人情なし。親の子をおもふ心、死なんと覺悟したる心、この他は誠なし。此誠心戀慕よりいでて、戀情なき時は、不仁の君に忠を致すものなく、不慈の親に孝を盡す者なし。古歌に遠くは顏淵が吾猶能せんの詞、近くは右近が忘らるゝの歌おもひやるべし。

戀せずば人は心のなからまし物のあはれもこれよりぞしる

一鬢鏡附玄に、奉公に主君の眼鏡あり、召仕ふものをして人と成さしめ、慈悲に親の眼鏡あり、子をして善となさしむ。予に鬢鏡あり、人の一寸と遠方を見ずして、吾が身の一尺と足もとのことを見せしむ。若しその袖のくもりを日々に拭ひて、おのれが魂を見ぬけば、假令照魔天眼の名鑑ありとも、求むるに足らず。世人鬢鑑を懐にして、他の是非と世の善惡を見出すことあるべからずといふ。

一穗積氏の老母昌貞尼は、洛の高臺寺に隱居す。風流世にすぐれたり。騷客門に充てり。

節にのぞみて智力を遺すところなし。行ひたゞその見ざる所をつゝしみて、聞かざるところを恐るるの外なし。

一主人はおのれが仁の及ばざるを歎きて、臣の不忠なるを尤むべからず。臣はおのれが忠の及ばざるをなげきて、主の不仁なるを怨むべからず。親はおのれが慈悲の及ばざるを歎きて、子の不孝なるを諭すべし。夫は妻の不貞を歎かずして、おのれが和の及ばざるを歎くべし。妻は夫の不和をなげかずして、おのれが不貞なるをなげくべし。兄は弟の不敬なるを歎かずして、おのれが不哀の及ばざるを歎くべし。弟は兄の不哀をなげかずして、おのれが敬の及ばざるをなげくべし。朋友たがひに人の不信をなげかずして、おのれが誠の及ばざるを歎くべし。君として臣の過をかくすは仁なり。臣として君の非を隱すは忠なり。親子、兄弟、夫婦、朋友互にその過をかくす時は、慈孝、哀敬、貞順、信誠おのづからその隱せる中にあるべし。僞も表を包むまでのつくろひにしてやむべし。飾るとも僞のために誠の本を失ふべからず。

慳貪にして邪見—無慈悲なること

一年若くして色なければ、無骨にしてしとやかならず。老いて色なければ、慳貪にして邪見なり。世に色氣といふは專ら愛敬のつやをかねいひて、あながちに婬欲のみにあら

依怙―偏頗

さくら花大原の山に折る音のをうなが業と誰かおもはん

一神佛を信ずるの法は、神佛同體の印をむすびて念ぜざれば感應なしとぞ。されば天の惠を受けんと祈る者も、天のなす如くに私なくする時は、惠なしといへることあるべからず。人と交はるは人と同意たるべし。神の心は鏡の如し。佛の心は光の如し。天の心は依怙なく、人の心は人と同じ。

一人善に動かざるものは、惡にも動かず。この念こゝに生ぜざれば彼念かしこに生じ、轉變してしばらくの間も止む事なきものは心なり。此出づるところをよく知らざれば、惡を退けて善を行ふことありがたかるべし。善は人の本心にして、常の持つところのものなり。惡は念より起して、他より入來るものなり。耳目鼻口の取次、心の善なる、あるじに告げて萬の事をなすは、召仕ふ人と同じ。その召つかふものに、善をこのむあり、惡をすくあり。此二つを差別すれば、五常みなその中に立つべし。おのれが心の好きなる事のみを致して、嫌へることをさけぬるは、則ち私のいづるところなり。人としてこの私を勝手として、よろづ行ふ時は、獨して圍碁の上にあるが如し。おのれにまされる人と圍むとき、心轉じて勝手を得ず。私欲をすてて決斷する時は、大

鐺底—釜のそこ

の家にいたりて、魚肉を盜めり。人を養ふも亦復然り。

一影法師問答の文。汝吾が生れし時より、吾がかたはらに在りて、しばしの間も離ることなしといへども、わが親にもあらず、子にもあらず、主にも召使にもあらず、妻にもあらず、乳母にもあらず、只あけくれ吾がなす事のみなして、更に他の業をなさず。喜ぶことなく、怒ることなく、あはれむことなく、樂しむことなし。おもふに目しひたる者を友とすれば、是を見せんとするにわづらひ、耳しひたる者を友とすれば、これを聞せんとするに煩ひ、啞を友とすれば、是をさとさせんとするにわづらふ。汝今吾が有なるによりて、汝が無を守るとも、吾又汝が無によりて、吾が有を守るところをしらず。そも〳〵汝は吾が影なるか、はた又人の影なるか。

一飯釜の讃に、萬鎰に募るの勤めにおけるや、明くれいとま明なければ、飲食に乏しからず。人の世にある是とひとし。此ものの德たる、孝に鐺底の焦を削りて、冥利に湯の粉の洗ひながしを捨てず。驕はわづか茶飯に酒の半椀を加へ、儉はあまねく大根葉割麥の糧を守れり。日々に琢磨の功成りて、光家内の繁榮をてらす。

一大原女の讃に、力は蕪子が薪水の勞をたすけては、辯は口が北郭の才をも諫む。

とて、反古の中より一枚探り出せしを貰ひて歸りぬ。その文左の如し。

早く損ずれども、木でするものを土で造り、土でするものを金にて拵へず、木でする物は木にてつくり、土でする物は土で造るべし。金でならざるものは金にてつくるべし。調度は損ずるをいとひて、木土にて濟むものを金にてするはよろしからず。

秋篠與平。

とあり

一常陸の國風に　疫癘、痲疹、疱瘡など流行の病あるときは、鹿島大神へ祈念して、里民歌を唄ひて踊ることあり、その歌に、

護摩んど―
護摩堂

誠やら、伊勢と春日の御社、彌勒茶船がつゞいた、舳艫には伊勢と春日の御社、やしろでは何がおもしろい、護摩んどでは護摩をたく、御手洗では稚兒が垢離とる。その護摩をなんとたきそろ。氏子繁昌とたきそろ。

一猫を飼ふもの、多くは猫をやしなふことをしらず。飯をあたふるに鰹ぶしを入れ、肉味を加ふ。猫は常に厚味を食とする時は鼠をとらず。猫は麥をたきて、味噌汁をかけ與ふべし。その他の食を與ふべからず。常に肉食にならはすれば、肉なき時は必ず他

顰に傚ふ—みだりに他の眞似をすること

我等思ふには、いかなるわけにて節數七つある板をもとむるにやと、いぶかしさに問ひければ、師の建てたる席に、床板の節七つありければ、それを擬するなりといへり。笑ふべきの甚しきにあらずや。師の造られしときは、定めて節なき板のなきまゝに、ふしある板にてせられしなるべし。さあれば、いかに師のあとを慕へばとて、わざ〳〵疵あるものをもとむるは、道を嗣ぐにはあらで、顰にならひて、師の疵をあらはすと同じかるべしとおもへり。この道は只きようにせよといふにはあらず、きたなからずあり度、道具とても足らぬ所を、何かにてその時の間に合するを、馳走とはするなるべし。すべておもしろきことは足らぬところにありて、足り過ぎたるに雅なることなし。人には皆癖ありて、さま〴〵に好みを致せども、癖を捨てざれば風流の道人にはあらず。理に入りて理を遁れたる人ならねば茶好といふのみにて、茶道の人とは思はれ侍らず」とて、その立居振舞など奥床しく、この者を連れ行きて家にて養ひおきたく思へり。何か書かせみやげにもしたくと乞ひけれども、無筆なりとて遂に書かずなりぬ。予はあまりのおもしろさに、「記念にあるじが造れる卒都婆を一本求むべし」といへば、「めでたからぬものなり、やめ給へ。さあらばかねて書けるものあり。是を參らすべし」

削りさし—削りかけてそのまゝにすること

調度—道具類

たら—楤の木、五加科に屬する喬木

るに、堂守とおぼしく片目しひたる男の、卒都婆を造りゐたるを見て、「主も細工せらるゝにや」といへば 削りさしたる卒都婆をかたへに置きて圍爐の灰かきならし、鉋屑焚きて、古びたる鑵子に湯をたぎらせ、茶澁のつきたる茶椀を丁寧にあらひそゝぎて、大坂よりもらひし茶なり」とて、懇に煎じあたへぬ。予も心よく二三椀を喫して、しばし憩へるうち、主のいへるは、「われはもと此地の産にてもなかりしが、もと調度の指物を職として、二十一年ほどは京にくらしつれども、不仕合なること打つゞきて、歳はより目は惡し、少しのしるべにて、今はこの地に老い朽ちぬるなり。茶の湯といへる事も、始めはかゝるすさびより起りけるにや」などいひつゝ、菓子を椀に盛りていだしつれば、予とりて見るに、たらの木の芽に味噌をくるみて炮りたるなり。「珍らしき口取かな」とて、いとうまく食ひて、茶數椀を過しけるうち、主の申すは、「我等京に在りし頃、數々の茶人宗匠など馴染まゐらせて、茶席にも迎へられ、薄茶點つることも習ひおぼえ侍れど、大かたの人は、茶の湯を別のことのやうに心得給ひて、あつらへ物等もいとむづかしく候。東山にて何庵とか申す宗匠の建てたる席を羨しく思ひて、その好のかたに建てたしとて、注文取りしに、床板を松にして節七つあるを好めり。

もあれ、命ありとて財なくば、生きてのかひなしと思ふ」といへば、亦右衞門は十萬兩を主人にそのまゝ奉り、「今日までの事は奉公の身なれば仰にそむきがたし。今より我身には願ひの侍れば、暇賜はりてこの上のことは許し給へかし」とて、いとまを乞ひてわが家にかへり、若干のこがねを緣ある輩に配り分ち、身帶をしまひ、頭をそり圓智坊と改名して、大融寺の徒弟となり、京へいでて庵室をかまへ、日々に托鉢して、洛に終れり。そのゆかりの者大融寺に塚を建てたり。石に刻める辭世の歌に、

落ちて行く奈落の底を覗きみんいかほど欲の深き穴ぞと。

奈落―地獄

一洛に須藤健十郎といふ人あり。溫厚篤實の儒者なり。予が東山に寓居せしころ醒が井に住みけるが、四條を通行することはなくて、用あるときは五條三條をまはれり。遊里芝居などの道はさけて通らざりけり。常に儉約を守ることを專ら人に敎訓して、自らは木にて鯛の形を彫ませ、常に膳部のかたはらに置きて、「一肉の美味、頃臾の舌頭にあり。大丈夫何ぞ飲食に心をもちふることをせんや」といへり。

一生駒山を越えける日、秋篠といふ村はづれに、如意輪觀音を安置する堂あり。さすが名におふ山色風景、郊野のながめおもしろければ、此堂に立寄りて、煙草くゆらしけ

べし」とありければ、畏り又五とせをも經ざるうちに、一萬兩に倍して主人の前へいでて吹聽しければ、主人また大に賞美して、「この一萬兩をこの度は十萬兩にして見すべし」といへるを、亦右衛門かしこまり申しけるは、「始め賜はりし百兩を千兩にいたし、その千兩を一萬兩にいたすまでは、ほねをれ侍れども、此一萬兩を十萬兩になさんこと何の仔細か候ふべき」とて、三とせも經ぬ間に十萬兩に倍して來れば、主人その働きを感じて、「その辛抱この上は差圖すべきにもあらねど、この度は百萬兩にも倍すべし」とあれば、亦右衛門答へけるは、「十萬兩のこがねを以て、百萬兩にすることは、辛勞するに足らざるなり。さて承り侍り度ことあり。當時主家の御身帶いかほどの御儲にて侍るにかと問へば、主人こたへて、「わが身帶にはいかほどといふ限もあらざるなり」といへば、「さほどの儲おはしても、その上にも猶こがねを欲しと思し召し候ふにや」といへば、「猶欲しとおもふこと、いまだ飽くことをしらず」といふに、亦右衛門またた申しけるは、「さあらば此こがねを倍することをば、是を限りとして給はれかし。我等は命こそ寶なれ。命ありての上の財なり。命なくては財ありても益なし」と申すに、主人云ふ「我はまたその方とは心得かた遙かに違へり。財を持ちてこそ世にあるかひ

つとむること凡十餘年なれども。明くれ心を盡し費をいとひ、家業を大切にするの志滿足せり。今その褒美として金百兩のもとでを遣すなれば、これをもて何處へなりともその方が心に任せ家を持ち、出精して千兩の利倍を得ずんば再びわが家へ出入るべからず」といへるに、亦右衞門は忝く思ひ、かの百兩を受けとりて、禮を謝しいとまをつけて、京都に登り、つら〳〵おもふに、商の道多かる中に、大商して大利を貪らんとする時は、かへりて必ず損失あるべきこと常なり、かゝれば日々に費となるものを賣りて渡世とせば、小利といへども益あるべし、その中、紙は利のうすきものといへど、日用多きものなれば、唯麁紙の捨るべきをあきなふべしとて、西の洞院に所帶して、麁紙を業とし、紙屑を買ひて、漉かせては賣りけるに、百兩をもと手として、三とせばかりがほどに三百兩の利を得たり。又その金にて廣く家業をなしけるに、また五年に千兩にもなりければ、やがて浪華にいたり、主人にまみえて、「かねて賜はりし百兩を、八とせかせぎつるほどに千兩にはなし侍りぬ」とて、主人へ事の由申しのべたりしに、主人大に賞美し、「その方わが家に勤めしころより、尋常ならぬ志と思へるゆゑに、かくはいひつけたることなり。こたびは此千兩を持行き一萬兩にす

西の洞院―京都の街の名

此法師、尋常の者ともおもはれざれども、京にては只、念佛坊主とばかりよびて、その行状を知る人まれなり。

一有馬に湯あみせし時、日暮れて、湯桁の中に、耳目鼻のなき痩法師の、ひとりほと〳〵と入りたるを見て、予は大に驚き、物かげより窺ふうち、早々湯あみして出行く姿、骸骨の繪にたがふところなし。狐狸どものわれを誑かすにやと、その夜は湯にも入らで臥しぬ。夜あけて此事を家あるじに語りければ、「それこそ折ふしは來り給ふ人なり。彼女尼は大阪の唐物商人伏見屋てふ家の娘にて、しかも美人の聞えありけれども、姑の病みておはせしとき、隣より失火ありて、火の早く病床にせまりしかど、たすけ出さん人もなければ、かの尼とび入りて抱へいだしまゐらせし人なり。その時燒けただれたる疵にて、目は豆粒ばかりに明きて物見え、口は五分ほどあれど食ふに事たり、今年はや七十歳ばかりと聞けり」といへるに、いとあり難き人とおもひて、後も折ふしは人にも語りいでぬ。

一浪華に紀伊國屋亦右衛門といへるは、大家の商人なりけるが、そのかみ年まだ若かりしころ、本家何某につかへて正直なるがゆゑに、主人是をあはれみ、「その方わが家に

一枚起請―起請は誓書の義、此文は法然上人の一枚起請に擬してかける也

肉食すれども、決して寺にて食することなし。女犯もあるまじとはおもはれねど、寺には老婆をも嫌ひて、丁稚下男のみを仕へり。この正念が書きたる一枚起請と辭世あり。

隱居一枚起請

もろこし我朝の、もろ〳〵の智者達の致し申さるる隱遁の隱にもあらず、又學問して道の心を悟りていたす隱遁にもあらず。只不用の者の爲には、世の妨となるまじとさへ心得れば、疑ひなく氣樂なるぞと思ひとりて、隱居するより外、別の仔細はさむらはず。但し、肝心の世わたりと申すことの候へども、みな衣食住のうちにこもり候なり。この外に欲深きことを存せば、諸人のあはれみにもはづれ候べし。假令薦をかぶり、糟糠をなめ、人の軒端に臥せるとも、食ひては寢、食ひては遊ぶ、君が代のありがたきを忘れば、身は安樂になりたりとも、生きたるかひもあるまじく候あなかしこ。

辭世

來て見ても來て見ても皆同じことゝらでちつと死んで見ようか

るべし。なべて人はよろしきことは己れが事とばかりおもひて、あしきことはみな他人のうへとのみ心得るならひにて侍るぞ」と申したるに、禪師こたへて、「よしく〵心得たり」とて、筆をとり給ひて、

佛家に住在すれば、いましめを以て本とし、三寶の海に入れば、まことを以て本とす。身死して、巖根にありては骨また淸し。

と書して、「これより外にめでたきことは知らず」と宣へりとかや。

托鉢一食を乞ひあるく

一都近く岩はなといふところあり。そこの念佛堂の庵主を正念坊といへり。もとは黑谷に居て、念佛の上手と呼ばれ、日々京へいでて托鉢する。人々その聲のよきにめでて、米錢多くほどこしけるが、此僧寺にありて飯を炊きたる時は、櫃にうつして肩にのせ、持佛の前の位牌あるところを一遍づつまはりながら、「それ饗げ、それ饗げ」とて持來り、その後人にも食はせ自らも食ひて、別に佛器などへは盛りても供ぜず。茶湯もこれと同斷なり。さればとて、何にても佛前へ持行きたる上にあらざれば食することなし。漬物の壓にも、石なき折は、境内に建てたる石地藏を持來りて、鹽梅よくつけて下されかし」とて、載せ置きけり。總てかくのごとくのふるまひして、更に物にかゝはらず。

君君たる人―君の道をつくす君
打つけ―いきなり
物いまひ―物を忌み嫌ふこと

を盡し名をなすの妨なるべし。われ飮食だに足らば、都へ出でて榮耀に誇るの志なし」とて、迎への輩を洛に歸して、自害して果てたり。次郎悲歎に堪へずして、暫しのいとまを乞ひ、故郷に歸りて老母のなきあとをとぶらひ、洛に立ち歸りて、淸水寺に供養の地藏燈をいとなみ、いよ〳〵忠勤をはげみ、相國につかへりといへり。この事平家ものかたり、盛衰記などに見えず。かゝる忠孝をあげずして、させる功もなき人のやうにしるし傳へたるこそ恨なれ。人は惡のみをあぐれば、善人もあしくつたへ、善のみあぐれば、惡人もよき人の如し。難波次郎は無道の君につかへたれば、至孝誠忠ふたつながらうづもれたるはいと口惜しきことならずや。もしその仕ふるところ君々たる人を得ば、實に臣々たる士とやいふべき。

一　一休禪師紫野におはせし時、宅間何某御こゝろやすく參りて、物がたりのついでことに、御異見申すやうは、「君には尊き御僧にておはしませども、餘りに打ちつけに人を敎化し給へば、在俗の輩は物いまひなどいたせるものどもばかりにて、かへりて弘通に便りよからで志あるものも、はては遠ざかり侍るなり。不凡のやからは格別、凡夫にはとかくめでたき事を申させ給はりたし。さあらば悅びて歸依し參らする者多か

蓬蒿—雑草
被袴—衣裳

一ある諸侯、隱居せられて、副邸に宗廟をうや〳〵しくしつらひ、朝暮廟參の折は「天地大恩の報謝、太平主恩の報謝、先祖代々高恩の報謝、」とのみ唱へられて他の勤行なし。何某の僧正といへるがこの侯に見えしとき、「など後世のことは御願ひなきにか」と申されければ、「後世の事は、予がねがはんよりは人の念じおけるがおほかれば、それをもとめんとおもふなり。予はそのよくねがふことの熟したるものに布施して、後世の事は買ひ得ん」と申されたり。此の侯よく後世の道をばわきまへられたまひしにぞ。

一平氏の士の傳を書きたる中に、難波次郎が篤孝至純の事を載せたり。次郎が母は小松殿の乳人に仕へて、嚴直大慈ふたつながら全く、歳六十にして故郷に歸り、攝州難波に住す。居るところ蓬蒿人を沒し、家きはめて貧しかりしが、次郎常に母に仕ふることいよ〳〵恭謹にして、農業のいとま薪を負ひて市に鬻ぎ、身に被袴なしといへども、母には滋味を盡せり。後平家に仕へて、邸を洛中に賜はり、母を迎ふるに、母行かずして云ふ、老嫗年すでに六十に餘れり。世に在るの日少し。汝今官に仕へ身を立て家を起すの時至れり。さあるに、ひとりの老嫗の爲に心ひかれて、奉公に懈らば、忠

及びなん。たゞそれのみ心にかゝり侍れば、一旦命助かりて、母を養ひ送りて後、死につきたく思ひ侍れば、いかにもして命を助け給へかし」と、涙ながらにひたすら頼みければ、助八聞くより憐に思ひ、「孝心の者にはあるまじき、わづかの口論より事起り、過つて人を殺すこと言語に絶えたる愚者といへども、孝養の志にめでてたすけつかはすべし。母を大切にせよ」とて、いましめを解きておひはなちて、みづから此よしを廳に訴へ出でければ、罪人を私に逃せし罪輕からずとて、助八をとらへ、罪人を尋ね出すまで禁獄せしむべしとて、三年が間獄屋にありしうち、助八は病みて死せり。尸は身よりの者同じ町なる易行院に葬る。その妻次て助八が墓所に自殺して、同穴の契りむなしからず。今にその寺にあり。

一ある人予に畫を學ばんことを乞ひて、さて云ふやう、「僕畫を學ばんとおもひおこししよしは、他の物を畫くことをもとめず。たゞ富士と達摩とのみを畫きたし」といへり。「それも上手とならんことをも求めず。富士はいかにも富士と見え、達摩はいかにも達摩と見ゆるやうにかきたし」といへり。この詞尋常にきこゆれども、いとおもしろし。すべての藝何によらず、このところをよくわきまへぬる時は過不及あるべからず。

ひ違へるところなきを知れり。篤實の性人のそねむを愍み、他の人をたのめて異見をなし、己れに敵するものをよくするを以て、終にはあしき輩も隨へり、陽報を待つの心少しもなくして、人しらず、陰德を施し、家業のいとまある時は、往還に出でて、路を造り、溝あるところへ橋をかけ、只後事のためのみに志を盡すこと、あげてかぞふるにいとまあらず。

一昔、江戸なる山の宿に、大捌助八といへる糯の問屋あり。助八の人となり、性直にして義をこのみ、義に違はざる行ひあるものをば資け、義に違ふものは豪強の士たりとも是を許さず、常に德行ありて、俠者の聞えも知らざる人あらざりき。ある時過ちて人を殺せし者の、捕れて町の番屋に預けられしが、其者のいひけるは、「大捌ぬしに逢ひまゐらせたきことの侍れば、今宵かのところへ連行き給はれかし」といふにぞ、此よし助八につたへければ、いかなる者にかとて、助八行きて伺ふに、かつて見しらざるものなれば、「その方は予がいまだ知らざるものなり。何の用ありて逢ひたきよし申すにや」といへば、その者答へていへるには、「我等口論の上にて、あやまちて人を殺し侍れば、死はいさゝかも悔いざれども、一人の老母あり、我等死し侍る時は母必ず飢に

一ある人の妻、夫の爪を取りぬるをとゞめて、「けふは辰の日なり。爪を取り給ふべからず」といふ、傍の人これを聞きて、「いかなることにか」と問へば、「辰は龍なり。龍は爪なくてかなふべからず。大切の日なり」といふ。かたはらの人笑ひて、「さあらばそのもとは酉の日ばかりに時をつくりて、雄鳥をすゝめらるるにや」といへば、その妻大いにいきどほりぬる。

一女は見めの美しきが寵せられて、心の正しきを愛する人はまれに、物は形のめでたきを好みて、この意のおもしろきを取る人は少し。ある家の妻は美人の聞えあれども、妬心ふかくして、夫の放埒なるをいきどほりつつ、常に爭論絶えざりしが、ある時妬みの餘り、夫の留守に縊死したり。夫も大酒の爲に、吐血して身まかりぬ。妻の名を壽といひ、夫を福太郎とよべり。人は名よりも行ひにあり。松竹に千歳をいはひ、鶴龜によろづ代を比したりとも、家を治むるは和合にあり。長生は養生にありとしるべし。

一勢洲關の商家に、吉右衛門といふものあり。實母に孝養至り、四十餘歳のころ家業に出でて歸りける時は、その母いとけなき折からの心を抱きて、吉右衛門が足を洗ひつかはすべしと云ふに、背かずして洗ひ給はるに任せたり。この一事を以てよろづの行

る、世計の第一、衣食を足らしめんが爲なり。さあらば、義をかき恥をもわすれて貪り蓄ふるにもおよぶまじきことにこそ。

一飛喜百翁が利休を招きし時、西瓜に砂糖をかけて出したれば、利休砂糖のなき所を食ひて歸り、門人にむかひ、「百翁は人に饗應することをわきまへず、我等に西瓜を出せしが、砂糖をかけて出せり。西瓜は西瓜のうまみを持ちしものを、にげなきふるまひなり」とて笑ひ侍りき。

能毒—効能と害毒と

一蕃椒はすぐれたる功能あるものなり。總ての藥種に、さま〴〵の能毒を記せどもさほどにはあらず。五穀をはじめ、酒、酢、醬油、衣服、調度のたぐひに多く入れ置く時は、かびを生ぜず。蟲の喰ふことなし。山野幽谷の靄霧、家内濕露の氣を避くるにはこの物に過ぎたる藥なし。

一唐の太宗の時、州郡に寺院多きがゆゑに、國郡これが爲に迫められて、民耕田に餘なしと議して、國々の寺院を沒入すべきよし決定しければ、太宗宣ふやう、「畫圖に寺塔あるもまた風韻尋常ならざるものなり」と仰せありしより、寺を沒入することをやめたりとぞ。

樞機—肝要なること

道を知らざるが故に、耕耘收藏時にたがはず。國中百人耕して、五十の遊民あらばその國必ず飢ゑぬべし。百人耕して十人あそばば、その國果して豐なり」といへば、權兵衞感じて、茶の湯を習ふ心をおもひとゞまりぬ。

一五堪忍といへることあり。聖賢の旨趣よりいでて世業をなすの基、人間安穩の大悟にして修身齊家の樞機なり。是を守る時は勞する事なくして家富み榮え、是を守らざる時は亡ぶ。衣服は何の爲にか著る。寒さを凌ぎ、暑さをいとはんが爲なり。さあらば寒からず著、暑からず著ば、麁服にても厭ふことあるべからず。美服に奢るは、いまだ寒暑の身にしみざるが故なり。寒暑の身にしみなば、筵裸にてもいとふものあるべからず。食事は何の爲にかする。空腹をやめん爲なり。さあらば添物はなくてありなん。添物なくて食の進まざるは、いまだ飢の至らざるなり。飢至る時は糟糠をだもきらはず。家は何の爲にか造れる。雨露をいとはんが爲なり。さあらば無益の造作などなくてありなん。水火の災に家を失はば、人の軒端にてもいとふ者あるべからず。妻は何の爲にか持てる。子孫を嗣がん爲なり。さあらば子孫あるものは妾などもたであるべし。妻子あるが上に、妾を持つは色におぼるるが故なり。財は何の爲にか求む

椀をすゝぎ、又點てて村長がまへに出しつゝ、「いざ菓子を取り給へ」といふに、この度は菓子を取りて食ひ、また茶をのこらず飲みて前におきければ、御師又取りてもとの如くたてて、又村長が前へ出す、村長いひけるは、「我等はもはや澤山くだされたり」と云ふに「さあらば、次の方へ御おくりあるべし」とて、この順にして各一椀づつ飲み、辭退して座敷へ入りて、おの〳〵ひそかにその心勞をもの語りつゝ臥し、「又も茶の饗應あらばいかばかり迷惑すべし。はやく、いとま乞して歸國するにはしかじ」とて、あくるを待ちて發足せり、後に權兵衛予がもとに來りて「願ひたきことの候ふ」といふに、「いかなることぞ」と問ひければ、「すぎし春、伊勢にて恥を得しこと侍れば、茶の手續を教へ給はるべし」とて、しか〴〵の事を物がたり、「今にわすれがたくはづかしく、又口惜しくおぼえし」といふに、予大にわらひて、「そのもとは日ごろに似げなき不見識の人なり。農夫は農家に人となりて農業のことにさへくはしければ恥かしきことなかるべし。茶はもと隱遁の手すさびにして、その道日用に足れりといへども、農夫町人などのいたすべきことにあらず。世をのがれし隱居の後などはともあれ、其許もし茶を學ばば、一村みなこれにならひて、農事に怠りなば、田畠は悉く不作なるべし。村長茶

場うて—場所の時がましきに臆すること

ひもいでず、郡といへる所に乳母のちなみあるを、人に文そへて送らせ、そこにしばし住ましめおき、後に他へ嫁せしむとぞ。人の因果は過去の業といへども、善悪の應報三世はまたず、はやく現世に報ゆることかくの如し。

一江戸葛飾のほとりに、權兵衛といへる村長あり。ある年の春伊勢大神宮へ太々神樂を奏せんとて、村民十三人とともに御師何某が家に宿るに、山海の珍味を盡し馳走ありて後、おの〳〵に薄茶まゐらせんとて、案内して茶室へ招き請じければ、かの村長を始として十三人席につけば、御師は丁寧に挨拶して、心を配り茶を點て、權兵衛が前に出しおきけれども、農夫の身なれば、茶道の心得はいさゝかもなければ、大に心を苦しめ、場うてして思ひけるは、いかにして飲むべきや、人の咄にも、茶は飲みたる上にて順にまはすなどと聞きしが、十三人へ一杯ばかりの茶を飲みかけ廻したりとも足るべからず、又、ひとりして飲み他のものへ鼻あかせんこといかゞなれども、われ村長の身として、今更聞きて飲まんも口をしきことなりと、さま〴〵心のうちに思ひめぐらすうちに、御師は先に出せし口取菓子を村長が前へさし出し、「いざ召れ給へ」としひければ、はつと茶を取り上げて殘らず飲み、前におきければ、御師は取りて茶

をも置きがたく、その妻と共に奔りて、近江の大津驛に手跡の師となりて、世をわたりぬ。五年ほどを過ぎて後、その妻の奈良に捨置きたる女子、父におくれて便なく、人を頼みて、母の大津に在すと聞き、慕ひいでたれども、伴はれたる者こゝろよからぬ輩にて、京にある内この女をそゝのかし、此處彼處さまよひありくうちに、もたらしつる衣類、そこばくのこがねをも奪はれ、終には乞食となりて大津に至るに、いと雪の多く降りたるころ、磯貝が住みける家の軒端に、女子の乞食薦をまとひて打臥しなやめる聲のきこえければ、夜半に磯貝は扉をひらき伺ひ見るに、ひとりの女子なり。不便におもひ妻にこのよしをもの語るに、妻も故郷に女子あることを思ひつゝ、やがて介抱して内へ入れ、土間に莚を敷き遣はして臥さしめ、明日を待ちて出しやる時、「何處のものの身の果にや」と問ひければ、「わらはは奈良の角振といへるところの者なるが、母の身持よろしからで、人にかたらひ家出し給へば、今は父もなくなり、家のあとつぐべき者も、あしきことありて何國へか行き侍れば、せんすべなくて母の大津にましますと聞きて尋ね來つれども、今に逢はず。乞食となりしは、京にてあしき者にたばかられて袖乞せり」といふより、磯貝夫婦はよく〳〵見るに、妻が子なりけれども、い

息災—身に恙なきこと
小人閑居云云—小人閑居而爲二不善一（論語）

からは生酔の糟喰ひなり。人も器物も、つかひ過れば損じ、つかはずに置くときも損ず。息災はみな中庸にあり。過不及なきはよろづ長くたもてり。

一小人閑居して不善をなすとあれども、小人ならずとも閑居して不善をなすもの少からず。されば獨居の閑をたのしむことはいとかたし。大かたは據なく隱居する輩、世間に多し。自得して世塵をさけ、思ひすてて身を遁るるものは格別にして、隱居しながら物を貪り、世路に執著するは、隱居に似て隱居にあらず。近世は隱宅に標札多かるにても知られたり。

一愚者は不用の財を貪るに勞し、賢者は用の財を造くるに樂む。不用の財は限りなし。用の財は限りあり。限りある身を以て限りなき財を求めば、死に至る迄貪欲盡くることなし。されば身を勞して財を聚むる時は、其身終れり。用の財は用の足ることを樂むがゆゑに壽を養ふ。財に不用といふことあるべからずとおもふものあれども、日用の外を散ずる財はみな不用の財なり。

一昔、奈良に磯貝といふ墨師あり。予が父世に在すころはその家盛にして、他國へ墨を商ふ人多く、職人も數多なりけるが、人の妻と密通のこと隱れなくして、その地に身

行ひ、人にも教訓さるるものにあらず。世に悟る者は稀にして只知りたる人のみ多し」といへり。實に確言といふべし。

一世に言行に飾りあるものを見え坊とて譏れども、見えは先づ禮の端なり。見えなきは大かたは不禮なるもの多し。人は自負するをもて、吾人ともに勤むるは自負も亦道具なるべし。自負にも見えにも差別あるべし。ある人大酒を好み、放逸にして物に拘はらず、唐土の劉伯倫、李太白にならひて、人間一生醉ひて此世を過ぐさんと思へり「東坡は竹なければ人をして俗ならしむるといへども、予は一日も酒なければ俗ならしむべし。とにもかくにも酒なるべし」とて、飲ませだにすれば日々に五升にも及べり。此人に何の功あるといへば、只酒飲むことを一藝と自慢して、外には格別の能もなし。能なし猿が大酒したりとも何もおもしろき人とはすべからず。劉倫、李白はもろこしの學士にして、天下をも治むべきほどの器量ある人なれども、佞人上にありて賢者を退くる世なりければ、用ひられざるを知りて、自らさけてその國を去り、時を憂ふる心よりして、屈かぬことを歎息して、そを忘れんとて飲む酒なれば、大酒したりともげにおもしろきふるまひありて、天下の酒客ともいふべし。たゞ酒好にて大酒するや

智には及ぶべく―論語に甯武子のことをいへり

我等はかんにんの四字を知り侍れば、惡口せられても少しも腹立ち侍らざるなり」とて笑ひ居しとぞ。その智には及ぶべく、其愚にはおよぶべからず。

一江戸にて予が親しく交りし友に、佐伯何某といふ人あり。書を好みて食事の傍にも、見臺をするゑて書籍をひらき置きて見居けり。其行ひ篤實にして、常に机上には書をひらけども、決して疊の上におかず、一冊たりとも本箱の出し入れをつゝしみて是を戴きて取あつかふこと、丁寧誠に至れりといふべし。ある書林の店に書籍をならべおきて、その上を跨ぎ或は踏み越えなどするを見て、「かの書林は出世なり難し」といへり。又他の書商の客來りて、求むる時は、その書をいたゞきては出し、いたゞきては取入るるを見て、「やがて上もなき書肆となるべし」とて悦びけり。朱文公が大學章句の序文に、身を修め人を教ふるの道に於てもいまだ必ずしもすこしく補なくんばあらずと云ふ詞を見ては、涙をながして、「人と生れてはその志ずところ儒者たらずといへども、かくありがたきものなり」とて、只幾度もそのことのみをくりかへしてはいひたり。此人の詞に、「大學に能得とあるは悟ることなり。悟るといへば僧法師などの道ばかりのやうに心得たるものあれども、常の人にても五常をよく悟り得ざれば、身にも

發明—怜悧なること

等は、おのれが一箇の料簡をもて身を立てんことをはかりて、その親々の敎ふる手かき物縫ふことなどをば後にして音曲遊藝を習ひつるを、捨置くは親兄弟の過ちなり。是は人を便りとせざる育てやうにて、縫ひ紡ぎの道を知らざれば女の性をうしなふ。その智男より少きものゆゑ、おのれをはぢてよろづ嗜む事を專とせざれば、人倫にはづれたるふるまひ出來れり。されば おのれ發明たりとも、つゝみ隱して、人の發明を常の鑑として身を守るべきものなり。

一ある人文盲なるものを異見して、「世の交りは他の事はいらず。唯堪忍の二字をよく守るべし」といへば、文盲の人は頭をかたむけ「かんにんとは四字にて侍らずや」と指をもてかぞへ、「御許にはおぼし違へなるべし。かんにんと四字にて侍る」といへば、異見せし人云ふ、「愚昧の人かな。堪忍とはたへしのぶとよみて、二字なり」といへば、又かうべをかたむけ、「たへしのぶならば、又一字ふえたり。五字となり侍るべし。何と仰せありとも、我等は四字とおもひ侍れば。四字にてかんにんはいたし侍るなり」といへるに、その人又云ふ「汝か如き愚昧の文盲は實に諭しがたし。人に似て蟲同樣なり。おのれがまゝにすべし」と、大にいきどほりければ、文盲の人笑ひて、「何とも仰せあるべし。

ひ、大阪にも此例し多し。人も是とひとし。己れが產れたる地に在りて、身を堅固に修め、家を大切に齊ふることなりがたきにや、人みな他國に出世するもの多し。故鄉に居る時は、己れが我儘をふるまひ、よろづ油斷して、身を過ち家をも失ふ。他に出でぬる時は、堪忍もいたすとはなしに堪忍びて油斷なければ、おのづから身を治め家をとゝのふ。かゝれば故鄉にありて他國へ出でたるの心を盡さば、身を損ずるの過ち少かるべし。田村明神は在世のみぎりも、人欲の私するを嫌ひ給ひて、只世を救ふの御心淺からざりければ、庇をかして表屋を取られ給ふことなどいとひ給はざるべし。凡そ人は唯身を修めんことを專らとして故鄉をはなるることあるべからざるなり。

しゞま―無言の行

一「貴人にしゞまの御遊と云ふは、人々つどひ給ひて談話の中に、一度は無言にて戲れ給ふをいふなり。しゞまはしづまる間といふ事を略し音便の詞にして、閑を守るなり。壺矢五寸乃至一尺を度としてものいふ時は鐘を打ならす」と、何某の物語せられしことあり。今やこのわざ絕えてなしとぞ。

一善きことをせんとするはいと難し。只惡しきに移るまじとだに心を附けぬるこそ修行なれ。修行はいつまでといふ限りなし。身を終るまでするを修行とす。わけて婦女子

長田の庄司—忠致

勅勘—天子より受けたる譴責

洛—京都

田村の社—坂上田村麻呂を祀る

を失ふ時は、その情自然と薄くして、離別もまた遠きにあらず。仁義遜譲は禮を厚うするの中だちにして、この禮、媚諂と背を合す。智は痴とさしむかひ、誠は嘘と隣る。さあれば心安だてと愛想づかしは、いつも同居と知るべきなり。

一長田の庄司が義朝を討しことを不忠と書きたれども、長田の庄司は、尾張の野間の内海に平相國より領地を賜はりて居りける故、内海の庄司なり。義朝妻縁によりて庄司を便りとして忍び居しこと、不覺といふべし。庄司は高望王の裔にして、その祖勅勘のことによりて、尾張に配せらる。子孫内海にのこりてありけるなり。義朝の臣鎌田兵衛、その後遁世して西佛法師といふ。遠江の國にありて、武藏相模の間に終るといふ。遠江に鎌田兵衛が建てたる藥師堂遺れり。

一洛の清水寺なる音羽の瀧は、應永年間に新に水口をつけて、此ところへ水を引きたり。そのむかしは音羽山のうち所々へ落ちたりといへり。此瀧を汲みて湯あみするときは、瘧を愈すこと功あるをもて、諸人下流を汲めり。水上に東山の雫より、こゝに音羽の名をとゞろかす。田村の社は、清水寺のいまだ草創なき前よりあれば、地主權現と云ふ。觀世音は此社地を借りたるゆゑの名なり。庇を貸して表屋を取らるる世間のなら

千利休―名は宗易、茶道に長ず、豊臣秀吉に用ひらる

飛鳥川云々―世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵は今日の瀬となる

蓮胤―鴨長明の法號

と夫を諫め、つひに雞をも飼はずなりにき。

一　山科の隱士丿貫は利休と茶道を爭ひ、利休が媚ありて世人に諂多きことを常にいきどほり、又貴人に寵せらるることをいたく歎きて、つねに人にかたりけるは、「利休は幼きときの心はいと厚き人なりしに、今は志薄くなりて、むかしと人物かはれり。人も二十年づつにして志の變ずるものにや。我も四十歳よりして、自ら棄るの志氣とはなれり。利休は人の盛なることまでを知りて、惜しいかな、その衰ふる所を知らざる者なり。世のうつりかはれるを飛鳥川の淵瀬にたとへぬれども、人は替れることそれよりも疾し。かゝれば心あるものは、身を實土の堅きに置かず、世界を無物と觀じて輕くわたれり。みなさやうにせよとにはあらねど、情欲限りありと知れば身を全うし、知らざれば禍を招けり。蓮胤は蝸牛にひとしく、家を洛中に曳く。我は蟹に似て、他のほれる穴に宿れり。暫しの生涯を名利のためにくるしむべきやと、いとをしくおもふ」といへりとぞ。丿貫世を終るの年、みづからが書きたる短冊を買得て灰となし、風雅は身とともに終るとて歿しぬ。無量居士と號ず。

一　夫婦の中のしたしみも禮あるうちは珍らかにして、その情至つて深く、また厚し。禮

を催す折から、その子廿六歳にして後妻は廿五歳なりけるが、二人とも其席に出でてともに客をもてなすにぞ、主人酩酊のうへにて、座興に乘して云ひけるは、「我等五十五歳にして二十五歳の妻を持つこと、誠におとなげなしといへども、緣のいたすところにして、據あらざればなるべし。しかれば悴に對し面目をも失ふことなり。かく並びたる樣子を見るに、悴が妻にして相應の年ごろなり」といひけるが、いつしか後妻とその子と終にひそかに通じて、家に居ること叶はで、他國へ走りて夫婦となれりとかや。その親たる一言より、若輩の心みだるる基とはなれるなり。人は多言を愼むべし。多言はやぶれあり。譏をもとめ身を亡すは口なり。農夫町人たりとも、一言もつて知とし、一言もつて不知とするは、古人の誡なりつゝしむべし。

自鳴鐘―時計

一ある人時刻を知らん爲にとて、自鳴鐘を求めんとするを、その妻是をとゞめていひけるは、「明くれにかくる世話のみにあらず、くるひたる折からにはその隙を費し、自鳴鐘のために、かへりて時を失ふこと多からん。やめ給へ」といへば、「さあらば庭鳥を飼ふべし」といふに、その妻又とゞめて云ひけるは、「時刻は人のうへにあり。汐の滿干もこれとおなじかるべし。自鳴鐘鷄を便りとするは、勤めに怠るもののいたすことなり」

たる手拭取捨て、「我あきなへる饅頭は世常の製にはあらず。殊に上品に造りて高貴の方へも奉る菓子なり。左あらば乞食などの分際にて食ふべき品にはあらざるなり。汝もしわが家の菓子を食ひたく思はば、人なみ〳〵のものとなりて後に求めに來るべし。汝諸人のあはれみを蒙り、はつかに露命をつなぐ身を以て、錢あればとて、上菓子を食ふことのあるべきや。世をおそれざる不屆の族なり。とく〳〵行くべきなり。須臾も店先を塞ぐべからず」と、いたく叱りて追立てければ、かの乞食は頭をかゝへて、何處ともなく迯失せぬ。

綸言―君主の言

一世を治め給ふ聖君賢主は、一言もつて天下の規則となれば、綸言汗の如し、出て再びかへらざるの語あり。武家にも、二言なく一たびいひ出でたることを違へざるは、侍たる人の常なり。さあるに、農夫町人など大かたの人は、武士に二言なしといふことは知りつつ、我等ふぜいはと、己より不料簡をそへて、きのふ約束したる詞もけふ違ひ、今いひたるをも後にたがへて、義理をかく輩少からず。たとひ農夫町人たりとも、義を守ることなければ、おのれ〳〵が家も齊はざるなり。ある家のあるじ五十五歳のころ、妻の身まかりければ後妻をむかふるに、年いとわかし。客の悦びに來りて酒宴

雲萍雜志

柳里恭稿

卷之一

一京にて大佛の餅饅頭流行し、こゝかしこにて商ふうちに、四條畷に此饅頭を鬻げる近江上味といふものあり。或時見世先へ乞食來りて「饅頭を十ばかり賣りて給はれ」といふに、主人いで來て「非人には商ひせず」と云ふ。乞食のいへるは、「我等とても同じ人なり。錢をもて買ふに、商ひものをいかで賣らざるや。この理りを聞くべし」とて、詈りけれども、主人は聊挨拶もなくて居たりけるが、詈ることのあまりにはげしければ、主人見世先へいでて「さらばその譯申し聞かすべし。下に居れ」とて、乞食にむかひ、「汝等如き乞食に賣らぬといへるその仔細は、乞食となりて、かやうの菓子を食はんとおもふ不所存いはんかたなし。無益なれども耳あれば聞きおくべし」と、乞食がかぶり

大雅終に裏の垣を越えて歸りしとなり。又ある時には從者數多引つれ、馬上にて野路を過ぐるに、女乞丐の絃歌して錢を乞ふ者にあひて、やがて其絃をとりて自ら彈きすさびて輿に入り、金を與へて去り、またもとより妙手なりき。凡所ㇾ爲、人の不意に出づるは、王子猷に似たりとやいはん。客を好むは鄭莊、孔北海の風あり。近世畸人傳採要

柳澤淇園傳

淇園柳澤氏、諱里恭、字公美、一號玉桂、通稱權太夫、大和郡山同姓の士なり。文學武術を始めて、人の師たるに足る藝十六に及ぶとぞ。佛學さへ心得て、倶舍論を聞し僧もありけるとかや　中にも畫に長ず。朱舜水傳來の彩色の法を紀の祇南海に學びて、殊に人物の設色、世これを賞す。水に漬し力を用ひて揉洗へども落ちずとなん。爲人曠達不拘、客を好みて才不才をいはず、寄食せしむるもの幾人といふ數をしらず。或はかりそめに來りたる者をも年をへて還さず。家祿多けれども、之が爲に乏しきに至る。初め、某の年侯使として、登極の御賀のため都にのぼりしついで、大雅堂にまみへて相歡し、これより往來たえず。ある時大雅、大和に行きしに、路費盡きたれば假初に立ちよりて之を借るに、例の如くとゞめ門を閉ぢて還さず。家臣又いふことあり、「幸に留りて内を好まるるの病を諫め給はれ。多欲のために身を亡ぼし給はんを憂ふ」といふ。こゝに、大雅諫めて、其由を說きて曰く、「もし諫に從ひ給はば止らん。聞き給はずば速に還ん」と、主人首をふりて、「諫にも從はじ、還しもせじ」と、ますゝゝ門を堅くして守らしむ。

予が性、遊歷を好み、名勝を探るの癖あり。西遊の折から、浪華の蒹葭堂を訪ふ。雅談の晷を移すに至る。時に主人一書を出し、こは柳淇園手澤の隨筆にて、いとおもしろきものといへり。予更けてこれを讀むに、世のいましめ人のをしへともなるべきこと少からず。手卷をはなつことあたはず。やがて一本をうつしかへり、ひめをさめしを、此ごろ書肆のもとめによりて、再び讀みかうがへあたへぬ。

桃花園のあるじ識

雲萍雜志序

柳洪園之爲人、天資風流溫雅而猶且胸中之洒落、世以所知也。常以書畫所交遊、一時有名之士、無不往來者。都鄙藝苑之客無不識洪園者。其平生隨聞所錄、積年重日二十餘卷、多是勸懲之話說也。手澤之本遂爲予藏弆。頃中井某者、撮其旨趣、補其缺畧、題曰雲萍雜志。予曾每閑暇寓目、則如對其人焉。聊弁數言於卷端云。

丙辰之秋日　　浪華葭蒹堂主人　恭識

芳洲といへるは對州の文學なるが、此書を著して家にのこせり。正德信使の時、彼國の正使趙泰億といへる人留別の詩あり。曰く、

絕海誰奇士。芳洲獨妙譽。能通諸國語。且誦百家書。
落拓寧非數。才華儘有餘。明朝萬里別。回首意何如。

芳洲の身、世ほどしるべし。故に錄す。

鳩巢老人直淸跋

一段は序の如し。第二段は凡例の如し。

芳洲雨森子著

たはれぐさ終

にてこそ候へ。それも常に過ぐるといふまでにて、限りあるべし。石と、矢とは、他のものに候へば、堅き石の、柔かになる、脆き矢の、強くなる理やあるべき。不審と思ひ侍る」といひしに、「いかにも矢も強くなり、石も柔かになり侍るまゝ、よく思ひて見給へ」とて、その後は應へもなかりしとぞ。

一 近江の片田舍に住める人ありしに、その名やゝ世に聞えしまゝ、或人尋ねゆきけり。葎生ひ茂る野邊の、さう〴〵しき柴の庵、扉半ひらき、年頃四十あまりなる人の、文開き讀めるを見て、それぞと思ひ、「御名聞き傳へて參りたる」といへるに、此方へとて、茶など出しもてなせしさま常ならず覺え、稍ありて、「儒者は世を事とし、莊老は世を忘れ、釋氏は世を遁れ候ふ。いづれか我が仕業と心得侍らんや」と問ひしに、「誠に愨き心ましまさば、物事其理に當り給ふべし」「世の中はいかゞして治まり、いかゞして亂れ候ふや」と尋ねしに、「何時とても上たるひとの御寢所より起り侍るなり」と答ふ。面白くおぼえ、それより古へ今の事など、朝夕二十日あまり語りてかへりけるとぞ。

此物語は世の中の何とかいへるを始めとして、近江の片田舍といへるを終とす。第

わが師―木下順庵

王充―後漢の人

る人のいへるは、言詞の外に人を感ずる事あるにや。「頭上三尺の天といへることは尊し」と、わが師は常に語りき。

一此國天主のをしへをいたく禁じ給ふ、遠き慮なりといふべし。有りがたくおほゆ、

寶永の末いたりやといへるもの、屋久の島に來り、長崎におくられしを、すでに誅せらるべきに極まりしに、先づ其樣子を見給ひてこそとて、正德のはじめ關東に召され、揚り屋に置かれける。その頃ものしりて、智惠あるといへる人、その國の事ども精しく聞かむとて、折々往きて會ひけるが、「其敎を聞くも、釋氏のいへると、物の名違ひたるまでにて、變りたる事なければ、取るにも足らず候へど、其人柄は常ならず覺え、心に忘れがたく思ひ侍る」と語りしまゝ、妖人の人を惑はす事、眞に恐しき事なりと、深く危みしに、それより三年あまり過ぎて、窃にその法を傍なるものに傳へしといふ事顯はれ、咎に行はれき。

一「楚の熊渠が石を臥虎なりと思ひて、鏃を沒せるを、王充が論衡に誠なりといひし。其意いかにや」と、或道知れる人に尋ねしに、「火事あるとき、力弱きものの、重き荷物を負ひかたげして出づるを見て、その理をしり給へ」とありしかば、「それは我が身の力

す。朋友といへば、我れと姓を異にする人、いやしくしては鰥寡孤獨、ほかにしては實教雜類、みな〳〵朋友に屬せり。されば天下の人、何れか我五倫の中ならざる。一視同仁にして、之に處するに義をもてするを、聖人の道とはいへるなり。

一「善を勸め惡を懲らす事、聖人の教、佛の道、何か違ひあらんや」といへる人のありしに「さはさる事に侍れど、其善といひ、惡といへるにこそ、ちがひあるべけれ」と、或道しれる人いへるとぞ。

杭州道林禪師、人目爲鵲巢和尚。白居易問佛法大意。師曰、諸惡莫作、衆善奉行。

一物讀する人、動もすれば、鬼神の事を、そこ〳〵におもへるもの多し。これは世の人の佛に諂び、淫祀をたふとぶを見、咽ぶによりて食を廢するにや。天子は天地を祭るといへるよりはじめ、經傳に記せるを見れば然にあらず。

一或人、神は聰明正直にして一なるといふ言葉を擧げて、「聰明とはいかゞいひたる言葉なるや」と尋ねしに、「一念こゝに起れば、そのまゝ知り給へばこそ」と、わが師なりし人答へられしに、其座に侍りたる人ども、いづれも背中に水をそゝぎたるやうにおぼえ、感悟したりき。今書き附けて見れば、さまで變りたる事にもあらねど、眞に會得した

先づ其近きをとりて先とせば、益なきにはあるまじ。されど勝れて賢き人は、をかしと思ふなるべし。

一佛の教に王法を説けるは稀なりと聞けり。是は其位にある人にゆづりたるなるべし。されば、その位に在りて其道を知らざるは、佛の心にも協ふまじ。

一或人の佛道を謗るとて作れる文を見るに、大方僧法の惡業をのみあばき出して、佛の道の是非には及ばず。かくいはば儒生の良しからぬしかたいかほども書きあらはし、聖人の教を謗るべし。影を見て形を思ひ、流れをさぐりて源を知るは、眞に然る事なれど、末の費ある事のみをいひて、其もとのいかゞやとしらざるもうるさし。

一明の陳繼儒が佛氏を天下の大養濟院なりといへるは、季世の特見なるべし。韓退之も其位にゐて、その事に任ぜば、おほかたは三代をもて法とはせじ。

一五倫といへるは天下を擧げていへる言葉なり。君といへば君の親戚屬し、臣といへば士大夫の朝にあるもののみに限らず、農工商、婢妾奴僕、みなそのうちにこもれり。禰より上つかた、孫より下つかた、祖といひ孫といへるは、父子に屬し、再從三從黨をおなじうするは兄弟に屬す。おつとといへば、夫の親戚屬し、婦といへば婦の親戚屬

禰―廟に祭りたる父の稱

にはちがへり。かくあるゆゑにこそ、若き愚なる人に、物教へをして見るに、幾遍となく、言ひ聞かせても、履を隔つる痒さを免れがたし。韓人のその國の言葉にて、唐土文をなほせるを見るに、これも其國の聲律にもとりて、讀がたけれど、訓はみな常の言葉なれば。女童まで、文の意知り易く覺え易し。羨ましといふべし。

一某唐土韓の言葉にて、長き事など物語りするを、傍より見たらんは。この國の言葉にて、此國の人と、物語するに、違ひはなからんと、思ふなめれど、然にはあらず。そのうちには、いかほども知らざる事はあれど、前後の釣合にて、かゝる事をいへるなりと知りて應答するなり。唐土の文よむ事も亦然なり。史記漢書などいへるもの、朝夕手馴れて、その事も大かた知りたる事なれば、之を讀むに何の支もなく、皆々合點したるやうに覺ゆれど、これも上下の釣合にて、かゝる事なりとは知れど、精しく見れば、近き言葉と思ふうちに、いかほども明かならぬ事多し。その明かならざるよりして、記憶する事も疎く、文書く助ともなりがたきゆゑ、譯語といふ事心づき、附竹に同じからんやと、虞れなきにしもあらねど、破箒の捨て難く、若き人にはをしへ侍りき。覺ゆべき文ども、いかほどといふ限なければ悉く斯くすべきにはあらねど、

學びて―學而時習之（論語）

ぎ、自然のひゞきありて、聲律に協ひ、覺え易くよみやすきを、文言葉とはいふなり。唐土の文、此國の文、文の形はちがへど、其理は同じ。此國の名ある假字文をよみて見るに、言葉つゞき自然のひゞきありて、口の中和かに、意面白くおぼゆるは、此國の聲律に協へばなり。唐土文に點附けて、此國の文となしてよめるは、字を逐ひて譯し、助語もなく、又音にてよむ文字もありて、假名にてかける文の言葉つゞきにあらず。此國の聲律にもとれる故、口のうち強くしぶりて、覺え難くよみがたし。言の次でも、此國の文にはちがひ、訓といへるもの常の言葉ならねば、文の意も容易くは知りがたし。此三つの難き事あればこそ、われ人の若きより物學びして、頭の霜となるに至りても、唐土人はいふにや及ぶべき、韓人にも及ばざる、恨めしといふべし。

一助語といへるは、假名文に用ふる、けり、こそ、して、などいへる類なり。ことばの次第ちがひたる事、記事の文には、とりわけ多し。訓といへるもの、常の言葉にあらずといへるは、學びて時々習ふといへるを、はじめ此國常の言葉には、まなぶといふ事を、稽古するなどといへど、まなぶとはいはず、ならふといへるは、始めて人に物ならふ事をいひて、熟するなどといへる意にはあらず。より〳〵といへるも、常の言葉

てんぽ―無鐵砲などの意か
もぎだう―不法
古學翁―荻生徂徠
垂加翁―山崎闇齋

一同じくおろかなるとよめど、戇の字は、他の文字に違ひ、戇類勇而非勇といへるときは、てんぽなる意と見え戇諫といへるときは、もぎだうなる意と見ゆ。文字事みなしかなれば、此國の人唐土の文字しる事、眞に難しといふべし。

一此國の眞字にてかける文は、文字の位倒まなることありといへるは、古學翁の誘はれしより、人皆心づけり。其外文作る法を敎へ、譯文などいへる事始まり、文の道開けたるやうにおぼゆ。垂加翁の經學を誘はれしにならひ、その功少からずといふべし。されば詩經の何ぞ害あらざらんやといへるを、「不瑕有害」とかき、荀子の「われは文王の子たり」といへるを、「文王之爲子」とかき、禮記の、「山者不使不使渚者」といひ、春秋繁露の、「不可一日一日不可」といへるなど、文字の位常に違ひたるも多し。其一つのみ知りて、止むべきにしも非ず。かゝる類は、唐土言葉よく學びたる人こそ、其譯を知るべき。

一此國の人、唐土文よむ事は、もと甚だ難き事なり。其難きわけを精しく知りなば、自然と工夫も委くなり、唐土の文に通ずべきにや。凡そ言葉には常の言葉といふものあり。又文言葉といふものあり。文言葉といへるは、其言葉素直にして、言葉つゞき和

いへる如く、この唐音といへるもの、いかゞして出で來るやと疑ふべし。

一助語の事尋ねし人ありしに、「これは此國の人の知り難き事なり。和歌によむ、かな、けり、らむ、などいへるを、いかゞして唐土人に知らせ侍らんや。いかほど精しく言ひ敎へたりとも、この國の言葉知らでは、深き心持辨へあるまじ。此國の人は、かゝるところはかゝる助語ありと、見覺えたるばかりにてかけど、其道精しき人の認めたる文を見るに、是は違ひたるにやと思ふことは少し。心を用ふる事深ければ、自らかくあるにや。不思議なると思ひ侍る」と答ふ。「唐話を學びなば、その理明かになり侍らんや」と問ひしゆゑ「唐話學びても、此國の人は知りがたかるべし。柳子厚が杜溫夫に與へし書を見て知り給へ」と答ふ。

一或人の物語に、同じく、すなはちとよめど、輙の字は、いつとてもといふ心多し。乃の字は、かくしてこそ、かくありてこそといへる心あるゆゑ、かたき言葉といふなり。悅歡懌喜いづれもよろこぶとよめど、心は少しづつちがへり。正適方といひ、須當可といへるも、亦之れに同じ。かゝる文字くはしくその別ちありてこそ、古き文をもよみ、又自ら文をも作るべきなれど、此國にては、取違ふる事のみ多しといへり。

其眞を失ひたるなるべし。

一文字といへるもの、もと唐土より始まりたれば、訓は、韓も此國も各その國の言葉にて附くれど、音は唐土を學ぶほかやあるべき。出羽の枳殼になりたるといふに心附きなく、字音も此國にて定まりたるやうに覺ゆるは、愚なりといふべし。

一知客といへる事、唐土の字音には、つうけといへるを、此國の人それを學びいつとなく字音變りて、今はしかといへり。韓唐土にも、かゝる事あり。此國のかけすゞりといへるを、學びて、韓人は各其素利といひ、此國のつきをといへるを學びて、唐土人は讀急、または土器といへり。風氣のちがひ、聲音の同じからぬゆゑ、かくは變ずるなり。近頃ある古董客を見しに、むすこべやとて、この國にて持囃せる獸の皮はその國の言葉に、うすんこをるべあんといへるを、此國にては、あやまりてむすこべやといへるなりと語りき。誤りたるにはあらず、初めは、うすんこをるべあんといひしかど、いつとなく變じて、むすこべやとなりたるなり。一つを擧げて、萬づみな然なりと知るべし。今人の習ひ覺えたる唐音も年久しくなりなば、これも出羽の枳殼にて漢音呉音にも違ひ、唐土音にもあらぬまた一樣の字音となり、今の漢音呉音のことを

し。これ漢音のはじめなりと、見聞抄に見えたりといへり。されば今の漢音といへるものは、唐土音の、出羽の枳殼となりたりと知るべし。唐土音といへる事を、今は唐音といへど、むかしは漢音といひたるなり。

自註、中臣鎌子爲二内大臣一在二三十七代　孝德帝朝一、而吉備歸朝在二四十六代　孝謙帝朝一。案二國史一、十六代　應神帝十五年、百濟國王遣二阿直岐一貢二良馬一。阿直岐能誦二經典一太子菟道稚郎子、延以爲レ師。阿直岐薦二同國人王仁一以爲レ勝二於己一。乃遣レ使聘召。越翌年來朝。亦師二事之一。此時阿王二人所レ授者當二是韓音一。蓋韓音卽吳音也。則政事要略所レ云吳音始二於三十七代　孝德帝時一者似二乎可一レ疑、豈時世悠邈字音訛誤至レ是釐而正レ之歟。

一此國の唐音をまなべる人は、上より讀み下して、文の長短をよく知れるゆゑにや、その言葉知り易く、讀み易く侍る。いづれも唐音を學び給へど、信使にしたがひ來りし中學士といへるもの、敎へしと唱和集にみえたり

一孝謙天皇の十三經を授かり給ふも、吉備公歸朝の後、唐土音にて、上より讀み下す事を學び給ふなるべし。されど甚だ難き事なるゆゑ、其後就いて學べる人なく、字音も

吉備公―名は眞備

書きたるや」と、喜びあへりき。是等は、唐土音學びたるにはあらねど、その才高く、しかも學いたりて、異國の人をも感ぜしむるなり。

一ある人吳音漢音といふ事を尋ねしゆゑ、「吳音は韓の字音、漢音は唐土の字音にて候ふ。されど年を經て、いつとなく、此國の音となりたるなり」と答へき。

一鎌足の執政たりし時、百濟の尼法明といへるもの、對馬にきたり、維摩經を教へし。これを對馬讀といひて、吳音のはじめなりと、政事要略に記せるといへり。此國の吳音といへるもの、今の韓人の字音に似よりたれば、これも出羽の枳殼にて、はじめ法明が教へたるは、韓國の字音なりしかど、いつとなく今の吳音となれると知るべし。

一吳音といへる名は、法明が維摩經を教へし時、これは吳音なりといひし故に、此國の人は知りたるなるべし。その國の字音にて教へしを吳音といへるは、から國の人唐土といふ事を、今は江南といへど、昔は吳ともいひたるゆゑ、是は唐土音なるといへる事を、吳音といひたるにや。韓國も此國に同じく、訓はその國の言葉なれど、音は唐土の音を學びて、出羽の枳殼となりたるなり。

一聖武帝の御時、吉備公入唐し、其後歸朝ありて、孝謙帝の御時、十三經を授かり給ひ

正德信使—正德元年朝鮮來貢す

り重ねて、大方此國の物讀するに近くなり、目前の事は、唐土人と物語をなせし。生附敏く幼き時より學べる人は、某が如くにはあるまじ。世の倒語といへるもの、はじめは言ひ難く聞き難けれど、後には常となるが如く、まだ無分別不了簡などいへる、無の字不の字を先にいふは、この國の言葉にはあらねど、馴るゝゆゑにより、思慮にも及ばず、耳にも入り、口にもいへば、唐土音學ぶも亦然なりと知り給へ」と答へき。

一上より讀み下して文義の通ずる事人々のよくすべきにしもあらねば、通國の法とはなし難かるべし。生附を見て敎ふべきにや。韓語は、甚だ易し。某韓にゆき、三年力を用ひて、大方支へなきほどに學べり。わが國に同じく反言なるが故なり。

一此國にて文作るといへる名ある人、經義を解きてかける書物を、韓人に見せけるに「これを見候へば經義をも悟り、又は文作るの法をも知り、眞にわれ人の及ぶべきにもあらず。尊き書物なり」といひて、朝夕喜びて讀みけるが、をり〳〵いへるは、「此所には文字餘り、此所には文字足らずして讀みがたし。これは顚倒して句讀をなせしゆゑなるべし。玉に瑕とやいふべき、惜むべき事なり」と語りき。又正德信使の時、四六の啓札を、韓人に送りし人ありしに、「此人はいかゞ物學びして、斯くまで妙なる文をば

蜜柑―原本みつかんと書す

黄檗―禪宗の一派

關東―幕府

譯者―通辯人

たるは甚だすくなし。風氣の異なるゆゑにや。橘は淮をわたりて化して枳となるといへるを、不思議なりといひしに、此國にても、蜜柑九年母などいへるもの、其樹をうつして、出羽に植れば、みな枳殼となるといへり。近頃ある和尚の物語に、薩摩より出づる紅蜜柑といふもの、色もうるはしく、味ひも勝れたれば、その種子をとりて植ゑしに、程なく萌え出たれど、みな〳〵柚となれりと語りき。唐音も一傳へ、二傳へ過ぎば、いつとなく、此國の音となるべし。唐音唐話を學ぶ人は、いつとても唐土人に習ふより外あるまじ。黄檗の課誦はみな〳〵唐音なれど、何事ぞやと、唐僧は疑へるといへり。これも數世の後には、此國の音となるべし。

一唐土音にて上より讀みくだし、文義の通ずるといへること、不審なると思へる人ありしまゝ、「いかにも然思ひ給ふなるべし。されど物事馴るるにこそ候へ。某十四歳なりし時、唐土人に下知し給ふ文、關東より下り候へど、文字の道違る故にや、唐土人讀みかね候ひて、譯者ども集まり、あらためて見せ候ひしと、商物するとて、長崎にかよへる、稻某といへるもの、語りしまゝ實にもと思ひ、二十四歳なりしときより唐土音をまなべり。はじめは、他の事聞けるが如く覺えしかど、年の數は二十あま

といふべし。

一韓人と物語せし序でに、「我國は三聲のみなるゆゑ、詩までは作れど、歌曲はなりがたし」と語りき。韓人は物事其理明かなる故、これは成り、これは成らぬといへる覺えあれど、此國の人の、そこ〳〵につくりて、詩なりと覺ゆるは恨めし。

一「唐土の言葉知らずしては詩作り、文かく事なるまじ」と唐土言葉學べる人は必ずいへるを、「唐土の言葉知りたる人の、詩文を見るに、然まで變りたる事なければ」と、又或人のいへる、「これは皆その一方のみを知れる言葉なるべし。詩文は言葉の精華なるものなれば、言葉を知らずして、いかでか精華をもとむべき。此國の言葉しらぬ唐土人、歌よむといはば、をかしき事と思ふなるべし。されど詩文をよくせぬ唐土人、如何程もあれば、唐土言葉知りたるとて、詩文をよくすべきにもあらず。眞の詩文といへるは、唐土の言葉知りて、しかも才學勝れたる、安倍の何某、釋空海などいへる人こそ恥顏すくなかるべけれ、某唐土言葉すこしは學びたれど、詩作り、文かく事は知らざるゆゑ、某の拙きを見て、唐土言葉捨てたまふな」と、同志の人には、常に語りき。

一凡そ、所有文字、訓は此國の言葉なれど、音は唐土のこゑなり。されど唐土の音に似

へるも、梵字に傚ひて作れりと、芝峯類説にかきたり。唐土人の言葉にも、「七音の作西域より起り、流れて諸夏に入る」といへり。唐土より見れば、西域といへるははるか西の邊土なるに、斯る事をはじめて天が下に滿たしむる、眞に不思議なりといふべし。されど愚なる人は、何の據もなく、此國にてはじまりたるやうに覺ゆるもかなし。此五音相通といへる、天地の間、自然の理數より出でたるものなれば、そのもと、人の拵へたるにはあらず。西域より起りたりといへる事は、涅槃經の文字品を見てしるべし。

一「此國に假名といふものなくば、人々文字を知るべきにと」いへる人あり。これは思はざるの言葉なるべし。唐土の文字西域の梵字韓國の諺文、此國の假名、其外韃靼、紅夷の文字、皆々其國の言葉に應じ、誰始むるともなく、女童下々まで之を用ふ。眞に自然の理に出でたり。假名といふものなくばといへるは、其國々の言葉なくばといへるに等しかるべし。

一此國の詩作り、文書ける人其才學を見れば、唐土の誰、某などいへるに、さまで劣らじと思ふ人いかほどもあれど、言葉の違へるゆゑにこそ。それのみにてやめうらめし

語りき。

一唐土の字音は、四聲そなはり、脣舌牙齒喉の別あざやかなれど、韓の字音は、三聲のみありて、上聲去聲別れず。されど、脣舌牙齒喉の別はあるなり。此國の字音は字ごとに平聲の如くよみて、上聲去聲もなく、又入聲もなし。ふつくちきのつきたる字は、入聲なりと覺ゆれど、これも口にて唱ふる時は、碎音となり、入聲にはあらず。脣舌牙齒喉、その別れ、無きにしもあらねど、國の習し、脣勝に物言るゆゑにや、五音あざやかならず。釋徒の誦經に、いまも四聲別ちて讀めるあり。是は唐土に渡り、その言葉知れる祖師の、此國にも五音を傳へんと、心を盡し教へたるなれど、もと此國のなき事なるゆゑ、今になりては、其則に當らざる字音のみ多し。詩は音調をこそおもしとすれ。この國の字音にて、唐土の詩作るは、調子に協はぬ笙篳篥をもて、樂を奏づるに等し。此後幾千代經たりとも、唐土人、これはといへる詩作る人は有りがたかるべし。

一此國にて、五音相通といへるは、もと韓國より對馬に來り、夫より此國に行れしゆゑ、昔ば對馬いろはといへり。韓國にもそのもとは、西域より出でたるを學び、諺文とい

唐詩選―唐人の詩をあつむ、明の李攀龍の編

唐詩と心得。さにはあるまじ。詩は唐より盛なるはなしといへるは、別に其理あるにや。歌をよくよむ人は思ひやりて知るべし。

一「詩を作るに、字法句法に、心を用ふるはあれど、律詩を作りて章法に心を用ひ、古詩長篇を作つて段落過句に心を用ふるは少し。是は詩を作るの疏節なれど、先づこれよりこそ入るべき」と、功者の人の語りき。

一某詩を作りて、友なりし人に見せしに、「詩の俗語をいむといふ事、人々のしりたる事なれど、俗意をいむといふに心つけるは少し。此詩など俗意といふべし」と教へしかば、實にもと思ひけれど、生附の然らしむるは改まりがたし。詩に別材ありといふは、此故にや。

一「詩に韻をふみ、平仄をあはするは、如何なる故なるかと知れる人、此國にはあるまじ、唐土人に歌詠ませたらんに、此國の三十一文字に定まりたる事、いかゞして、其譯知り侍らんや」と、ある人のいへるを、實にもと思ひ、唐土言葉よくするといへる人に尋ねしに、「唐土人の賤しき言葉まで、自然と聲律に協へるは、その國の風氣にて、かくは候ふ。此國の人の、其言葉學びたる、それほどまでの覺え、いかでか候ふべきや」と

唐詩鼓吹―唐人の七言律詩をあつむ、金の元好問の編

たはれぐさ　下

一唐土の詩、この國の歌、深奧なる事かはりはあるまじ。「詩は作りよけれど、歌は詠みがたし」といへる人あり。是は然ることあるべし。歌は此國の言葉なれば斯詠みては、歌にはあらぬといふ事、詠めるものも、又見るものも、其覺えあれど詩は唐土の言葉なれば、そこ〳〵に作りても、大方聞ゆる程なれば、その身もよしと思ひ、見る人も妙なりと賞めはやすより、歌は詠みがたし詩は作りやすきといふなり。若しも唐土人、此國の歌詠む事あらば、「歌は詠みやすけれど、詩は作りがたし」といふべし。詩は作りやすきといへるは、詩をしらぬ人の言葉歌は詠みやすきといへるは、歌を知らぬ人の言葉なるべし。何れか容易き事ならんや。文作くる事も亦これに同じ。

一唐詩鼓吹、唐詩選、いづれも唐詩なれど、撰者の好めるを集めて書となせるなれば、唐詩の全きにはあらぬを、唐詩鼓吹をまなびて、音調體製、唐詩鼓吹に似よれば、これを唐詩とこゝろえ、唐詩選をまなびて、音調體製、唐詩選に似よれば、またこれを

て、「これは無官なり」と答ふるもあり。又は役は官といふべきなると知れるものもあれど、この國番一通り勤むる奉公人を役人とはいはざるゆゑ、無官なりと答ふるもありき。大官小官の差別はあるべけれど、祿を食みて奉公する人に、官のなきといへる事不審なりと言ひて疑へり。それ〴〵の職掌をあげて、番一通りつとむる人は、直衞官などいふべき事なり。役といへるは、もと士より下つ方、賤しきものの事なり。これも散一無官の大夫などいへるは、位階のみありて、何の職掌もなきゆゑなるべし。無官といへるものにて、無官にはあらず、唐土韓の人は疑ふなるべし。

本意は、民ども皆、城の内に住まはせ、讐ありとも、害はせまじとの事なり。此國は、國の守の住める所を城といひ、二の丸、三の丸などあれど、士大夫のみにて、工商雜類は皆々石垣の外に住めば、軍などいふ事あらば、燒拂はれて、傷つきかつゑるもの多かるべし。是は唐土を學びたきにや。されどこれも善惡はあるとぞ。

一春がすみなどいへるには、靄の字よろし。いつの時よりか誤りて、霞の字を用ふれど、これはほてりする事にて。彩霞、または錦の如しなどいへる、みな〳〵紅なる事をいへり。水煙、山煙、煙景、煙柳などいへる、火をたくけぶりにはあらず。かすめる事なり。

問へる—孔子に

一士といふは、奉公人の事なり。子貢子路の問へるも、いかゞしたるとき奉公人といふべきやといへる事なるべし。唐土にては、學問する人を奉公人とし、此國にては弓矢とる人を奉公人とす。武を尙び、文を尙ぶちがひあれど、農工商雜類の籍にあらずして、仕官のしわざするものは、いづれも士なり。

一此國に、今の役といへる事、韓唐土の言葉には、官といへり。韓人の來れる時、奉公人にあひては、必ず何の官なりやと尋ねしに、此國の人は朝官のみ官といへると覺え

の弟子曾参、閔損、

套語—きまり文句

凱風云々—凱風自レ南。吹二彼棘薪一。母氏聖善。我無二令人一（詩經）

若しは一説にも備ふべきか。

自註、孔子の公晳哀をほめ給へる言葉のうちに、天下行なくして、多くは家臣となるといへる事史記に見えたり。理あるべしとおもふ。

一天子を稱して聖主といひ、臣下を稱して賢臣といへるは、上を壽するに、萬歳といひ、諸侯を壽するに、千歳といひ、常人を壽するに、一百二十歳といへるにひとしく、何れも套語としるべし。康熙帝の事を唐土人に尋ねしに、聖主と答へしを、さては聖人なるやと此國の人はおもへり。然にもあらず。羑里操に、「天王は聖明なれど、臣が罪誅に當れり」といへるを見て、聖の字に疑をなせる人ありしゆゑ、凱風の「母氏は聖善なれど、われに良人なし」といへる、聖の字をあげて答へき、後漢の光武帝の上章に、聖といふ事を許したまはざるは、非分の套語をいとへるなり。いみじといふべし。

一小きなるを牆といひ、大いなるを城といふ。唐土にて城といへるは、大石垣を築き周し、士大夫は云ふに及ばず、工商雜類まで、その內に住ましむ。長安城などいへるを見てしるべし。城定まりたる後、民多くなれば、城の外に住むもあれど、城を築くの

莽賊―王莽漢の天下を簒ひし時代

曾閔―孔子

や」といへるに、その座の人、くつ〳〵と笑ひしまゝ、「否さにはあらず、年たけ給ひては、彼處には好き兒あり、此處には妙なる油木梳ありなどと、朝な夕な、飯くひ茶のむにも、忘れ給ふまじ。その心の如く、學問の事を思ひ給はば、世に名を得るの人となり給ふべし。それに少しも違ひあらば、我れは愚にてすむならんと歎き給ふべし。これを自らその心を試すと申し侍るなり。賢を賢として、之に易ふるといへるも、此意にて、をかしき事にはあらず」といへり。

一孔門の高第、大夫の家に仕へざるは、陪臣となる事を、嫌ひたるにはあるまじ。此時、君弱く臣強く晉の韓、魏の趙など、齊の田氏に等しく、其國を奪ひとり、諸侯となるべき兆、一朝一夕の故にあらず。其勢已に止むべからず。魯の三家もそれにかはりたる事なければ、豫め之を避けずんば、其時に臨み、身を辱しむならんと、豫て思ひ測りて、仕へざるなるべし。漢の孔光揚雄など、あながち小人といへるにはあらねど、機を見る事の明かならず、寵利わすれざるよりして、莽賊禪代の間にあたり、汚辱の名を蒙るに至れり。されば曾閔のつかへ給はぬ、いと尊し。この臆說は、圏外謝氏の說ともちがひ、小注の、上等の人は、敢へてなさずなどいへるには、大にちがへり。

發見―發現

一「父母に事ふるといへるを、父母に使はるるとよみ、道を行ふといへるを、道をゆくとよみたき」といへる人あり、面白き心にや。訓ある文字あり。訓ありて確かならぬ文字あり。德の字、仁の字など、此國の言葉になほし、如何いへるとき、本義に協ふべきにや。

一或人「白きを見てしろきと知り、黒きを見てくろきと知るは、明德の發見なり」と語りたるに、「善念の起るをこそ」と脇よりいへるを、「白きをしろきとし、黒きをくろしとするは善念ならずや」と答へしとぞ。

自註、白白黒黒、是爲明德如何。曰、見父母以爲父母、見子弟以爲子弟、明德也。父母則尊之、子弟則護之。而見馬知其爲馬而羈之、見牛知其爲牛而鼻之、草爲草、木爲木、鳥自鳥、獸自獸、莫不甄別而順處之。孰非明德之發露者耶。桀紂之暴、跖僑之盜、方其靜居而無事也。東方發白而知其爲且、長庚西湮而知其爲夕、明德昭然無時而休。然不謂之德者何耶。失於大也。人之提椀而挈筋、亦無非力、必也有孟賁夏育而後謂之力。提椀挈筋者不與焉何耶。亦失於大也。

一「いかにして學問は成就し侍るべきや」といひしに、師なりし人、「皆達にも戀をし給ふ

受用—實行

といへるよりほかはなきとぞ。此國の人は唐土の字義に疎きゆゑ、深く取過ぎ、却りて受用の妨になる事多し。

一手習するに、半字不成といへる韓人の俗語あり。これも敬の工夫なき事をいへるにや。

一のび〳〵としたる心もなく、其形木偶人の如くなるを敬すとおぼゆるもあれど、然にはあるまじ。瞻視をたふとくし、衣冠を正しくするといへるも、目つかひうろつかず、衣紋つき、自墮落ならぬといふ事なるべし。程子を「泥塑人の如し」といへる、「一團和氣」といへるにつき、思ひやりて知るべし。

一物讀する人、身のまはりを、そこ〳〵にし、髮などかきみだしたる、「容觀玉聲」などいへるを見れば、さはすまじき事なり。

一佩といへるもの、韓人の帶びたるを見、その聲をきゝて、歩趨の節、かくあるべき事なりと、聖の法のくはしき譯をはじめて悟りき。

一武藏の何某、經書のうちにて、一字づつ擧げ、その心をいはせ、漢語にて答ふれば、それは眞の會得にあらずといひて、恕の字を、おもひやりと答へしを、第一とせられしとなん面白き敎にや。

取あひ—戰爭

あらず。國を保てる人は、常に米穀を貯へ、凶荒、または變故の備へとすべき事なるに、然ある國は、十に一つもなければ、民の飢に及び、死にはつるを見て、手を束ぬる外はあらじ。民の父母といへる事、夢にも思ひよらざるが如し。いかなる心にや。

一いつの時にかありけん、取あひありし折節、古き文に、「良しき謀もがな」とたづねありしにある物讀したる人、進み出でいへるは、「昔韓信といへるものの、その名を殘せし、囊沙といへる事こそ、今に用ふべきなれ。又木をきり、道を塞ぐといへる事も候へば、山手はかくしてこそ」といひけるまゝ、「然らば其用意せよ」とありしゆゑ、「いかゞいたし侍らんや」と、事とる人尋ねしに、「袋は布にても木綿にてもよろしかるべし。木は如何にもして、人を大勢催し、太く大いなる木を伐らせ給へ」といひしとぞ。文のみ讀みて眞の働きなければ、その言葉用ふるに足らず。「書をもて御するものは、馬の情をつくさず。古へをもて、今を制するものは、事の變に達せず」といへる言葉あり、書讀む人は心あるべきにや。

一敬の字を、主一無適といひ、齊整嚴肅といひ、常惺々法といひ、畏といふ、何もその至極を說ける言葉にて、近くとりていへば、心騷がしからず、物事、とく〳〵とする

教の法―孔子の

壬子―享保十七年（一七三二）

しやすきなれど、學者は經傳をひきて論ずるゆゑ、其是非たやすくは、別れがたし。漢の宣帝の、「俗儒は時宜に達せず。好みて古へを是として、今を非とし、人をして名實に迷ひ、守る所を知らざらしむるなり」といへる、眞に格言なりと思ふ。されば多くの學者集まりたるとて、物事明らかなるといふ理やあるべき。子游子夏教の法違へ給へるを見れば、若しも政を共にし給はば、その趣き亦違ふべし。

一壬子の年、青く小き蟲の、常には燈火のうちに飛びいるが、幾萬億ともなく、田畠に附きければ、四國九州の苗、皆枯れ失せ、やう〳〵種子を取留むるもあり、または種子共に失へるもありて、米の價貴くなり、飢ゑ死ぬる人夥し。その波、東山、東海、山陽、山陰までに及び、大方は飢に近づき、士大夫まで家人みな粥をすゝりて年を過ごせり。此幾年か豐年のみつづきて、祿を食める人は、米の價ひの賤しきを憾み、商人は賣物のすくなきを憂き事に思ひしに、かゝる疎ましき時になり、はじめて豐年の有りがたき事を知るなるべし。世の愚なる人の、目前の事のみ思ひて、長久の慮なき、皆之に同じ。悲しといふべし。舊き人の物語を聞くに、九十年前、かゝる凶年ありしと聞き傳へたりといへり。某十二三の時も、凶年ありしかど、斯くまでには

九竅なるを憐みて其友之を穿ちて死に至らしめし話、莊子にあり
綱鑑―資治通鑑綱目の類

の人のこゝろだて風儀をまなびなば、禍亂戕害の生ずる事はあるまじ。一物の理は知りがたきにしもあらず。況してあまたの學者を集めて、議論をさせなば、其理いよ〳〵明かならんと、人々思へる事なれど、然はあるまじ。綱鑑などいへる書物に名儒の議論をあつめたるを見てしるべし。封建は國を治むるの大事なるに、善しといへるもあり、又惡ししといへるもあり。伍子胥が父の仇を報いしは、君臣の大義なるに、これも善しといへるもあり、又惡ししといへるもあり。赤穂の何某、四十八人いひ合せ、其主人の讐とりたるといへる使りありし折節、大人なりし人、學者をあつめ、「これはいかゞ御裁許あるべきや」と問ひしに、上座なる學者のいへるは、「主の讐討ちたれば、何の御構ひもなく濟むなるべし」といひしに、その次の學者のいへるは、「いかさま處置あるべし。その儘にては濟むまじ」といひしに、又其次の學者のいへるは、「ほしいまゝに命官を殺したる人なれば、その志は感じ給ふとも、一角の御捌きあるべし」といひけるとぞ。其後聞くに、武藏の何某、これも世に名をいへる學者なりし、かの四十八人は、名を好みてかゝる事をなしたりと、文作りて謗れるといへり、常の人は、何のより所もなく、その身の、心に思へるまゝにいへるゆゑ、そのあやまり正

を不周山に觸れて死せりといふ、丹朱は堯の子、商均は舜の子、共に不肖

四凶—舜の時、刑せられたる驩兜、共工、鯀、三苗の四惡人

龐德公—漢代の賢人

九竅—人體にある目耳鼻口及び下部の九の穴、渾沌王

にもあらず。唐虞の代は比屋封ずべしといへど、丹朱商均、または四凶あるを見れば、人々賢智なりともいひがたし。されど今も、田舍人は律義なる風儀多く、人の大勢集まり、繁昌なるといへる所は、詐勝なるやうに覺ゆ。昔今のちがひ、少しもあらじといへるもまた惑ひなるべし。昔はこの所に村里もなく、宮寺もなかりしにといへるは、多くは近き昔なり。昔は船を繫ぎしといへど、今は海遠くなり侍るなどいへるはいく千世とも知らぬ昔物語を言ひ傳へたるなり。ある年寄りたる人の、物強きを見て、「昔の人に鍛ひちがひたり」といひしに、「昔も今に同じ。鍛ひのちがひたるにはあらず、そのうちの強きものこそ、今に殘り侍るなり」と答へしとぞ。

一漢の高祖の「我まさに天下をもて事とす。いまだ儒人を見るに暇あらず」といへる言葉、宣帝の、「漢家おのづから制度あり」といへる言葉、又は龐德公の「儒生俗士は時務を知らず」といへる言葉など、善き言葉とはいひがたし。されど惡き言葉とも思ふべからず。人情事務をも知らざる人の、書物のみ讀みて、これぞと思へる事には、混沌氏の九竅を穿てるに似たる事すくなからず。政に用ひて、害を生ずる事多かるべし。今の世の、かく治まりて、上下安く住めるはいかがしてかくはなりたるやと、その因を考へ、昔

洛黨云々―宋の元祐の三黨、洛黨は程頤、賈易等、蜀黨は蘇軾、呂陶等、朔黨は劉摯等

共工氏―三皇時代、頭

増して賣るべし。若しも違背せるものあらば、其沙汰あるべし」と言ひ聞かせけるとなん。かくありてこそ政をも知り、教をも知りたるも人とはいふべき。

一「如何したるもの政をば善くすべきや」と問ひしに、行實ありて哀み深く、家人皆憚り敬ふ人こそ政はすべき。文學にはよるまじ」と答ふ。

一世に名をいへる學者多く集め、政をなさしめば、國治まり、民安からん」といひし人ありしに、或人のいへるは、「稷禹皐陶ありても、上に堯舜ましまさずば、唐虞の治は致し難かるべし。凡そ學者たるもの、私の心あるにはあらねど、各その見る所を堅く守り、然もその見る所に、深淺强弱のちがひありて、一樣ならねば、それ〳〵に裁斷し給ふ明君上にましまさずば、議論のみ多くなりて濟むなるべし。洛黨、蜀黨などいへるいづれも今の世までも、尊び思ふ學者なれど、互に爭ひ忌み、終に同じからざるは、自然の理勢なりと知るべし。とはいへど、古へ今の事をもしらぬ庸俗の人に任せて政をなさしむるこそよけれといふにはあらず」

一昔は斯くなりしといへる事に、今に大いなる變はあるまじと思ふ事多し。莊老の、太古は上下無爲也といへるうちに、共工氏不周の山に觸れたるとあれば、皆々無爲なる

壬辰の亂―文祿の役

孀婦―寡婦

仕込―まぜもの

など、唐様とは見えがたければ、知りがたき、さもあるべし。されど壺の碑など見れば、昔は今にちがへり。

一いかにもして唐土人の眞跡をもて學びなば、唐様となるべし。名人の筆なりとて、石摺ばかり學びては、形は似たりとも、筆の意は唐土に遠かるべし」と或人のいへる、故ある言葉としるべし。

一此國の筆法といへるは、壬辰の亂後、虜となりて此國に住る韓人の教へしを、賀茂の甲斐つたへたるなり。されど今韓人の物書くを見るに、筆の意甚だちがへり。韓人の筆の意も、唐土とは同じからず。

一政といへるも、教といへるも、皆善を勸め、惡を懲し、人の心を正しくし、風俗を美しくする事なれど、精粗の別ありて、その仕方ちがへり。孀婦は嫁せずといへる教はあれど、孀婦は嫁すまじといへる政なきを見て知るべし。ある國しろしめしたる御人の、甚じき心ありて道を尊び給へるが、價を二つにせざれと、市井に下知し給ふ。これは政をも知り給はず、教をも知り給はずといふべし。惜むべきにや。或民の司せし人、煙草などいへる類の物に仕込して賣れるを見て、「仕込を除け、それだけ價を

切目云々―論語の句
陸績―三國時代の孝子
引き給ふ―注に

義理をしる事かくは疎きやと疑ひしが、言のちがひにて、意味の通ぜざるゆゑなりと、今こそ知りたれ」とて、大にわらはれしとぞ。舜水の通詞せし高雄某といへるもの、かくは語りき。「切目正しからざれば食はず」といへるに、陸績の母の事を引き給ふを見て、肉はいつとても四角にし、野菜は寸を極めて切る事なりと覺えば、書をよむ事の明かならぬといふなるべし。されど聖人の大防を破りて、心任せにするといふにはあらず。

一「世に持囃せる唐樣といへるもの、誠の唐樣にて候ふや」ととひし人ありしに、「尊圓親王の手跡などこそ、誠の唐樣にて候ふ。今の人唐樣といへるは、懷素、又は米芾などの筆の妙ありて、轉び倒れてもその法を失ひ候はぬ變法を學びたるものゆゑ、誠の唐樣には遠く候ふ。昔より二王の筆を第一とせるは、その法の正しきゆゑにこそ候へ」と答へしとぞ。

一或人筆法を論ぜる言に、「此國の物書く事、尊圓氏の毒を流せるより、衰へたり」といへり。世の中にも知りて知らずといふ事あり。また知らずして知りたるといふ事あり。此言は知りて知らざるも言葉なるべし。筆墨紙、または風聲氣習のちがひにて、尊圓の筆

内則―禮記の篇名

大防―大よその制裁

し。故に今清書するに、前にはゑの假名を用ひ、後には笑の義と説けるを以て、ゑの假名を用ひたり。此書を清書するに、かゝること尚少からず。見る人此のこゝろをえて、見たまはんことをこそ。

一内則の言葉に「雞はじめて鳴き、皆手洗ひ、口漱ぎ」などいへるは、年若なる者の、朝寝して髪をも結はず、寝ねたるまゝにて、親姑のまへに出づるは、不敬の甚しきなるゆゑ、成るたけ早く起き、身じまひし、親姑の、起るをまちて、安否を問へとは教へ給へるなり。女は二十にして嫁し、男は三十にして娶るなどいへるも、愛に溺るるのあまり、其子の緣を急ぎ、親たるの道もしらざるわかき子どもを取合せ、家法の損ずる事いかほどもあるゆゑ、此大防をしめし給ふなり。强ち、二十三十とかぎりたるにはあらず。四十にして仕へ、五十にて大夫となり、七十にて仕を致すなどいへるも、みな其理同じ。ある人舜水の許にゆき、物學びせしをりふし、「内則のことばに從ひ、雞の鳴く時起きて、父母の安否を問はんとすれば、父母未だ起き給はず、父母起き給ふ時を待ちては、内則の言にちがひ侍る、いかゞいたし候はんや」と問ひしに、「此國の儒家といへる人のかける文どもを見て、これほどの書物よみたる人、いかなれば、

褚先生―漢の褚少孫

凡そ、卜法は灼を見て、吉凶をしるなり。卜の字は、そのかたちにして、縱五つ横三つに穿ち、縱をもて燒き、吐よりはじむ。くはしく思ふに、よのつねにはあらず。とほかみゑみためといへるに、世の人もてはやせる說ども多し。或人の臆說に、とは水、ほは火、いにしへの言葉しかなり。かみは、東方の震雷木なり。今も舊き國には、雷する事を、女童の言葉に、かみなり給ふといへり。ゑみは、西方の兌金、兌は說ぶなりといふ。よろこぶは笑むなり。つねの言葉に、ゑみをふくむといへるにおなじ。ためは民なり、民は人なり、春鱗、夏羽、秋毛、冬介、おの〳〵屬する所あり。人は中央に位して、六月の土に屬せるゆゑ、土をためといへるなり。龜卜の事漢の時より明かならざるにや。褚先生のいへるも疑はしく、今の唐土にて龜卜といへるは、其名を假りたるのみにして、まことの法にあらず。此國にては口授祕傳なりといひて、古き事傳はり難し。をしむべしといふべし。又宋人の燕石に似たる事も多し。

私云、依女の依は、えの假名、笑はゑみの假名なり。もしこの吐普加身依女の文字、上代よりかく書き來るならんには、笑の說、穩ならざるに似たり。凡古事記萬葉集等は勿論、順の和名抄撰せられし頃迄の書を見るに、假名を用ふること甚だ正しくして、濫りに其義を誤ることな

しといへるは、如何様の事なるや」と尋ねし事ありしに、「鐙のしたさきを、踵にて踏む心持なり」と、答へしとぞ。此國の鐙を知りて、唐土の鐙を知らぬ言葉なり。をかしといふべし。

一龜を鑽るともいひ、灼くともいひ、契つともいへり。鑽もうがつにして、灼は灼灸の灼に同じく、契は龜をうがつの鑿なり。此國に傳へし卜法を見、又との字を象形なりといひ、七十二鑽などいへる言葉を思ひ合するに、此國に傳へし龜とは、古の遺法ならんと覺ゆ。吐（うるはし）普（うるはし）加身（ひきのまろ）依身（ひきのまろ）多女（まつたし）といへるも、𠧞のだしきにして、くしみ、つけ、さがり、あがり、りやうした、といへるは、𠧞の變なり。細にいへば、とゆるひた、とよりめ、ときれた、とさく、とそれた、とつひた、としひた、といへるは、吐の變なり。ほさらひた、ほみた、ほきれた、ほさく、ほそれた、ほつひた、ほかくめた、といへるは、普の變なり、かみいきしひ、かみをたしひ、かみきれた、かみなかたへ、といへるは、加身の變なり。えみいきしひ、えみをたしひ、えみきれた、えみなかたへ、といへるは、依身の變なり。ためうちとをれた、ためほかとれた、ためきれた、ためぬきとほし、つきため、といへるは、多女の變なり。

破古紙―薬草の名、補骨脂ともかく
水飛―水に沈澱せしめて細粉を得る法

一唐土の科學といへるは、その國の勢なれば、止むことを得ずかくはすれど、もと精しき法といふにはあらず。凡そ人を採るは、その心行をこそ見るべきに、文作らせて、其文のよしあしにより、人柄の尊き卑しきを、究めたらんには、文は巧なれど、其身は用ふるに足らざる人、いかほどもあるべし。九品中正などいへる司を設けて、人を選びし時もあれど、是もその人の良否ありて、たのみがたければ、その法も程無く止みぬ。この國は、國のさま周の封建に近く、國々の士大夫皆其祿を世々にし、幼なきより、年長くるまで、朝夕親み馴れ、人柄の良否、互に知りたるうちより、それぞれの頭すべき者を選びて用ふるなれば、唐土の科擧にて人を採るにははるかまさるべし。

一昔破古紙といへる薬種を知らずして、ふる反古を用ひたると、人の笑へる事なるが、水飛の仕様をしらざる醫師、今もよくあるなり。いつの時にかありけん、龜卜する事をしらず、生龜をとりて、燒きけるに、あまり臭ひの汚はしく、いかに儀式なりとも止めてこそとて、止みけるとなん。唐土の事を學ぶとて、その實を失なふ事、これに限るべからず。ある唐樣をたくみに書けるといふ人、「筆法のうちに、鐙をふむが如

科擧—官吏登用試驗

ひたる者の、力強くして、しかも柔挿手など知りたるにひとし。いよ〳〵學びて、いよ〳〵惡しし。唐土の士大夫といへるもの、いづれか科擧より進み、學問せざるものやある。されど、民を害ひ、國を誤りたるなどいひて、今の世までも、惡み謗れる人少きにあらず。學問したるとて、必ず宜しかるべしといはんや。莊子の、「儒者は詩書をもて、冢を發く」といへる、誹謗にはあらじ。

自註此ことばは、不善學ものを見て、疑を善學ものに致すに似たり。其或有所懲而然歟。

一大事小事ともに、其國々に相應する事あり、又相應ぜざる事あり。三代禮を同じくせずといへども、時により、風俗により、一樣にはなりがたきゆゑなるべし。唐土事好める人は、此國にも、科擧の法あらばよろしからんといへる人多し。これは思はざるの甚しきにや。其法いかゞして立んやと精しく思はば、甚だその難き事をしるべし。また、世の益となるべきやいなやと、ふかく思はばさまで益あるまじといふ事をしるべし。

自註、此言以文應選本非斯國人所能強而爲之亦無益於治也。

柳生の某—但馬守宗矩なるべし
澤庵和尚—德川時代の初の禪僧

もたがひ、世に處するのたすけとはなりがたかるべし」と、ある人答へしとぞ。

一太刀をよくつかひて、名人といへる人のうちには、自然と心の體をしり、また身の持樣をしれるもあり。柳生の何某、澤庵和尚の袈裟を屏風に掛くるを見て、太刀の法を悟りしといへる、さもあるべし。此ほど或る人の話に、都なる人、碁をよくせしが、其子には敎へざるゆゑ、其由を問へるに、「某は、此碁にて、家を治め候へど、とてもそれほどにはなるまじと思ひ、敎へ申さぬ」と答へしとなん。小藝小技にても、かゝる不思議なる事あり。古人の言葉に、「天下の理は一なり」といへば、深く心を用ふるのしるしなるべし。

一碁はおかしきものなれど、國を治め、軍するに譬ふべき事多し。ある碁をよくせるといへる人の言葉に、「碁をよくせんとならば、まづ心の工夫をしたまへ」といひしとぞ。これは常の碁うちにはあるまじ

一學問するほどよき事はなく、又學問するほど恐しき事はあらじ。性質正しき人の物學びしたるは、力あるもの、柔捕手などならへるにひとしく、いよ〳〵學びて、いよ〳〵尊とけれど、性質附いかゞやと思ふ人の物知りたるは、戯れたる人、又は酒に醉

ひしに、入水の格物すると答へし」と語りて笑ひき。これも王氏の筍にひとしといふべし。

一「潮の滿干は、いかなる故なるや」と問ひし人ありしに、「氣昇り地沈めば、水溢れて潮となり、氣降つて地浮べば、水縮りて汐となると、昔の人の言ひ置きし、さもあるべし。されど、かゝる事は暫らくさしおき、只管日用の事に心を用ひ給ふべし。然らずば隱れたるを索むるの誤りのみ多かるべし。貞享某年流星ありて、天の東南の隅、深き谷の如く、うちに凹みたるやうに見え、丹を流したるが如く、赤くすさまじかりき。寶永戊子年には、四國九州の地、白毛を生じ、長きは七八寸なるもありし。享保癸丑年には、畿内の地に、小豆の如く、豆の如くなるもの降りくだり、近江のうちは、四五寸積みたる所もありたるといへり。これみな、目前り見たる事なるが、かゝる事いかゞしてその理を究むべき。これは大變なるゆゑ、究めがたしといはゞ、手もち足ゆく事は、甚だ近き事なるが、いかゞしてかくはなるといへる事、そのもとを究めば、吾人は云に及ばず、聖人といへどもしり給ふまじ。その知るべからざる事は、しるべしとせざるこそ、大知とはいへ。格物といへる事、あしく心得なば程朱の意に

顏を犯す—怒を顧みざるなり

用ふべき、人倫の事を措き、筍といへる草木の理をきはめて、日を暮さば、上の望にも背き、その身の志にもたがひ、大學のまうけは、無用の事となるべし。その上王氏の筍の理を究めんとせられしは、いかゞせられたるにや、ふしぎにおもへり。これは定めて、未だ定らざるの說なるべし。また人のいへるに、「忠孝の理をきはむといふは、親に孝行をし、君に忠義をするは、此理あるゆゑなりと、その理をきはむる事をいへり」と。此言葉もちかくして遠し。親は我れを生み給ふ故、孝行をし、君は我れを養み給ふ故、忠をつくすといふ事、なにかは知り難き事ならんや。いかほど究めたりとも、此外はあるまじ。忠孝の理をきはむるといふは、同じく諫むるにも、君は顏を犯して諫むるはず、親は漸くに諫むるはず、君臣は物事義を主とし、父子は物ごと恩を主とし、君臣の間は、道あはざれば去る、父子の間は號泣して順ふなどいへることを始め、凡そ君父に事ふること千緒萬端皆それ〴〵の筋道を分ちて知るこそ忠孝の理をきはむるとはいへ。

一格物致知といへる事、その說を詳かにせざる人は、必ずとりちがふる事あるにや。韓人の戲談に、「ある人ゆゑなくして、赤裸になり、水に溺るるを見て、何事ぞやと問

王氏―明の王陽明、傳習錄はこの人の著書
本注―大學の註文

を正しくし、心を正しくするのもとは意を誠にするにあることをしりて、先その意を誠にし意を誠にするのもとは、知る事を致すにある事をしりて、まづその知ることを致し、知ることを致すのもとは物に格るにある事をしりて、まづ物に格る。しかれば格物致知といへるは、天下、國、家、身、心、意、内にしては、己ををさめ、外にしては、人を修むる事の上につき、それ〴〵の理を究めて、わが知る所の淺はかならぬやうにする事をいへり。おほよそ、理といへるはかくある筈、かくする筈といふ事ぞかし。例へば、今のはじめて官府に臨める人、日帳記錄を考へて、故事先例をさとり、功者の人にもたづね、自分にも深く思ひて、それ〴〵の理をしり、事をとり行ふを見て、格物致知といふ事をしるべし。然るに、王氏の說に、其身わかき時、筍を見て、その理をきはめんとせしといふ事、傳習錄にみえたり。これは格物致知の極功を說きて、一草一木の微なるまでといへる言葉に拘り、本註の「物は事の如し」といへるを、くはしく見ざるゆゑにや。先王の大學をまうけて、人を敎へ給ふは、才德の人をえらび出し、士大夫の位に置き、大いにしては、朝家の補佐、小さきにしては、一郡一縣の司とし、天下國家の治平をいたしたまはんとの事なるに、第一に心を

天下を治むる云々—大學の語なり

始より、其數いかほどとかぞふるほどにて、生きとし生けるものの、得がたき位に居給ふ御身なれば、よろしき御政ありて、その名記錄にも傳はり、千世萬世の後までもあがめ尊ぶやうにこそありたきに、その御志しあるは少く空しく年月を送り給ふぞいとをしき。

一宋儒の學を、明の人は迂腐なりとし、道學の氣、または頭巾の氣などいひて、嘲りたる事多し。堂にのぼれる子路も、夫子の言葉を悖れるといへば、その見る所淺きよりをかしとおもへる。さもあるべし。されば明儒の言葉を見るに誠に爽にして、熱をとれるものの、淸らなる風に手あらふやうなれど、此風長けなば、堅氷いたらんと、おそれ思ひ侍る。

一程朱の學を論ぜる人ありしに、「愚誣の失あるを見て、詩書の教を廢するにひとしかるべし」と、ある道知れる人答へしとぞ。

一天下を治むるのもとは國にある事をしりて、まづその國を治め、國を治むるのもとは家にある事をしりて、まづその家をとゝのへ、家をとゝふるのもとは身にある事をしりて、まづその身を修め、身を修むるのもとは心にある事をしりて、まづその心

持囃さるといはば、其人正しからずとしるべし。家に妬婦ありといはば、その夫不埒なりとしるべし。

一惜むべしとおもふ事、いかほどもあるなかに、脾胃つよく、骨節たしかに、生れつきたる人、よく養ひなば、百年も難きにはあるまじきに、酒色をほしいまゝにして、夭死するぞ惜しき。生附愚なれば、吾人の如く頭の雪の極むを限り、安き心なく、晷ををしみても、何のなす事もなく、その名一鄕をも出でがたし。世の賢き人は、物事捗ゆき、駈馬に、鞭打つやうなるに、徒事にのみ心をはせ、遂には、草木と共に同じく朽ちゆくぞ惜しき。世の中に痛ましく、悲しとおもふ事、貧しといふよりほかやあるべき。力なきものはいかほど思ひても、心に任せがたし。手前よろしき人は幾重にもこれを惠み、人のためにのみおもひ、つとめて仁慈をおこなひなば、その風義、子孫までも傳はり、めでたき家となるべきに、さはなくして、その身は人欲をもて、貨集むる事のみしりて、其子孫は人欲をもて貨すつる事のみしりて、長者三代なしといへる言葉にひとしく、庫に積みたくはへたる物、終には奢のたすけとなり、失せすたるこそをしけれ。土地人民を保ち、君といはれさせ給ふ御方の、天地の開け

必可信。蓋心術正、則文采風雅、雖有不衍足、自可以居輔相之位、否則徒足以美觀聽而已矣。其於天下國家、復何益乎。後世學者心術之不修、而唯文學之是務、本根之不究、而唯繁文僞飾之是急、幾乎孟子所謂放飯流歠而問無齒決、可慨也夫。雖江戡定以後、上自大藩、下逮侯國、凡主乎政治者、皆從斬將搴旗中出、然大抵朴實、謹愼、不敢放縱、而操行氣節、卓然不群者、無復不少。蓋其心術正也。及至近世、文教稍興、人誦詩書。然率皆非養望自高、則依阿取容。比諸昔時、未見其髣髴。蓋其文華勝而心術有所不足也。鄕里無醫藥而病人寡、都邑有醫藥而病人多。非醫藥之能害人也。酒色之人、而恃乎醫藥所以致病也。此言也、可以警諸心術不正而徒誦詩書。其得罪於名教也。愈益弘矣。由是觀之。人之學與不學且非所論。唯顧心術如何與所以爲學之方如何耳。

一或人の物語に「礎濕はば、雨ふるとしるべし。諸物亂舞などはやるところは、武備疎かなるとしるべし。酒色をこのみ、達者なりとおぼゆる人は、わか死するとしるべし。物事華麗なりといへる國は、遠からずして衰微すべしとしるべし。身持妄りなる人、仕置するといはば、事ある時は、その國先亡ぶとしるべし。口空きゝて小賢しきもの、

武功ありしうちより、人柄よろしといへるを選び、その位におかれしに、人の良否、世の忙しき時見たらんは、勇不勇を知るのみならず、才徳ともにあざやかなるゆゑにや、其心確かにして、大臣の風ありといはれし人少からず。此國も世の中定まりし後は、國々の仕置する人、大方は、武功のすぐれたる人、又は、その子その孫にて、身の嗜みありて、賤しき事もなく、上下恐れ憚り、その名世に顯れたる人多かりき。漢のはじめに似たりといふべし。世の治まるにしたがひ、いつとなく魏晋より下つかたのやうにおぼえ、然ある人は朝の星にひとしく、今は世の例となる人なきにしもあらぬといへば、此後いかがあらんやと、憂へ思へる人多しとぞ。

芸窓筆記に云。或曰、某公以二創業元勳一、儼處二鈞軸之任一、處分謀畫照二耀史册一。唯其不學、可レ謂二楩楠之微朽一矣。曰漢初宰相操行氣節可レ稱二大臣之職一者、多出二於不學無術之武人一。如二曹參周勃申屠嘉周亞夫霍光一是也。其他出二於文臣一者、大約碌々無レ可レ齒者。獨有二一公孫弘、文章才術非二他人比一。然曲學阿レ世徒足三以欺二愚俗一爾。及二其衰一也、所下以喔咿嚅唲保レ寵固レ位、欺二時君一、長二厲階一、結二姦黨一以煽二兇焰一遂成中賊莽移鼎之謀上。如二谷永杜欽張禹孔光之徒一者、豈非二當時所レ謂碩儒一耶。然則武人未二必可一レ譽、而文臣未二

李晟ー唐の德宗皇帝の時の武臣、張延賞は同時代の文臣

たまはりし時、御國の民どもに教へ給ふ文いかがしたゝめ侍らんやと、下部の人のとひたてまつりしに、不性をかまへ、農業に怠るべからず。庄屋組頭の申す事、違背すべからず。右は百姓中へ。百姓ども、油斷せざるやうに下知すべし。私すべからず。右は庄屋中へとのみ仰せいだされ、その他は、年々米穀の豐凶を見て、年貢運上、あるひはかろめ、或はゆるし、こればかりにて止み給へる」とかたれる人あり。これも一道なるべし。

一漢の世、掌故文學といへる官をまうけられしは、その時大臣をはじめ、州縣の司まで、大方は武功の臣にて、不學の人多かりしゆゑなりとおぼゆ。此國も、讀書する人を國に召しおかるるは、いつまでも斯くありたき事なり。

一唐土魏晉の頃より、門地を貴ぶといふ事はじまり、唐の世になりては、專ら詩賦をもて人をとり、いつとなく浮華のならはしとなりしゆゑ、武功をもて進める人をば、武夫悍卒といひて、賤めけれど、文臣の拗けがましきには、遙かまされる人多かりし。李晟、張延賞が事など思ひあはせてしるべし、漢の世は、古へをさる事とほからず、門地を尊むといふ事もなく、また人を採るに、詩賦をもてするにもあらず、すぐれて

郭橐駝―柳宗元の郭橐駝傳に橐駝非三能使二木壽且孳一也能順二木之天一以致二其性一焉爾

聖人―孔子

一或村里の長せる人、民を愛しむの心深く、いかにもしてと思ふあまりに、古き文をも考へ、他の國の、斯くすれば宜し、斯くすれば惡しよ、といへることども取集め、此れは斯くせよ、あれは斯くすなど、度々言ひ訓へけるに、民どもこよなう苦しめりとぞ。下を虐げ納りものなど、多からんやうにするは、末の世のあさましき習ひなるに、只管に、民の事のみ思ふ人は、萬の中に、一人もあるかなきかといふほどなれば、眞に尊く覺ゆれど、その道を得ざれば、却りて民の苦みとはなりけるにや。郭橐駝といへるものの、樹を植る事をいひし言葉、實にもとおぼへ侍る。

自註、孔子有二無郵之謗一子産有二郭殺之誦一を見れば、民難二與慮一始こと、昔よりしかなり。よき人のする事は、先よき事ならんと思ひ、その終を見ずして、得失を論ずべからず。此段の言葉是非あるべし。

一如何程智慧かしこき人も、田作の事は、幾年ともなく其事を手なれて、父母妻子を養ふものには、及ばざる事もあり。また古今のちがひもあり、彼の國の地にはかくしてよろしけれど、此國にては然はなりがたしといふ事もあるゆゑにこそ。聖人言葉にも、老農老圃に問へとは、いひ給ふらめ。「ある國しろしめす御かたの、はじめて國

まふべきや、御腹そこねさせ給はんや、又は御怪我などもやといひて、柔かなるものを、幾重も著せ、食物は、秤にてかけなどして、這ひまはる時をはじめ、抱きすくめて、御内がちみにのみすれば、足のはたらきも自ら遅く、打痩せ、外脆く、思ひよらざる病おこりて、育ち難きのみ多し。醫師は云ふに及ぶべき、乳母守、又は傅まで、かくは爲まじき事と思へるあれど、若しは御痛みありてはと、その身の事のみ思ひて、言ひも出さず。或は、愚にして、上つかたの御子は下ざまとは違ひたると思ふもあり。人の血氣をもて生れ出づる、貴き賤しき、何事か變る事あらんや。古き言葉の、これを愛しむは、まさにこれを害ふ所以なり、といへるを思ひあはせて、哀しくぞ覺ゆる。

一或年長けて子をもちし人、珍しさのあまりに、屏風引きまはし、夜晝となく、抱せ置きけるに、折しも夏の事にて、皆々暑さに堪へかね、代る〴〵して抱きける。三十日あまりして、黄疸の如く病みて死にけり。大人の堪へがたきを見て、幼子はさぞと、思ふ心もなく、慈愛むの害ふなることを知らぬこそ口惜しけれ。かゝる事またあるべきにもあらねど、これに似たることは多しとぞ。

褦—能樂の充字、字の本義は舞樂に關係なし

くなるべきを、しんに覺ゆるは、樂の設けの本意にあらず。異國の音なればなり。

一此國の樂といへるは、褦なるべし。樂の類といふべきものさま〴〵あれど、その音ことに正しからねば、用ふべきにしもあらず。褦は公の振舞より、下々の慰みまで、幾世ともなくもてはやし、しかもその音いやしからずともいふべし。音調節奏はその舊きにしたがひ、唱歌を悉くあらため、此國の樂と定め、聖人世におこり、眞の樂を作り給ふを待ちなば、敎への助とはなるとも、害とはなるまじ。されど其唱歌を作る事、容易きにあらず。唐土大和の、古き文ども、多く讀み、いみじき才德ありて、人情事理に達し、しかも大和詞よく作る人ならでは、作るとも其益あるまじ。難しといふべし。

一幼子を育つるみちは、這ひまはる時より蓆の上に置きて、心のまゝに這はせ、足已に立ちたる時は、心次第に走りまはらせ、幼子は、襦、袴を帛にせずといへる敎に從ひ、著るものは、薄きかたにし、風にも日にもあたりて、外がちに遊び、食物は過ぐるこそはあしけれど、大方はその心にしたがひてこそ、病もなく、健かに生ひたつべきに、富貴の家に生れし幼子は、傅き守などいへるもの、夥しく附添ひ、風引きた

虞―帝舜の時代

一方―只一種の處方

自註、此言樂之所由起也。

一虞夏商周、いづれも聖の御代なれど、その樂の同じからざるは、時代のちがひあればなり。若し聖人をして、此國に生れしめば、此國の時代をかんがへ、樂をつくりたまふべければ、また一樣にはあるまじ。虞の樂、夏に用ふべからず、夏の樂、商にもちふべからず。商の樂、周に用ふべからざるを見て、唐山韓の樂は、此國にもちふべからざる事を知るべし。異代の樂を今にもちひ、異國の樂を此國に用ひたらましかば、醫師の一方をもて百病を治せんとするにひとしく、人の心を感じて、風を移し俗を易ふるのたすけとはなるまじ。

自註、此言唐土之樂不可用也。

一伶人の傳へし樂は、唐土韓の樂のみ多く、此國にて作れるは少し。そのうち廟樂もあれど、おほかたは俗樂にて、しかも音舞容ばかりありて、唱歌はなし。古き異國の事、此國に傳はりたると、韓人までも、めでたく思ひ、不思議なる事にはあれど、教の備へとはなり難し。「音樂ほど尊きものはなし。こなたの心自ら閑靜になり侍ると好事みする人はいへど、その國に相應したる、眞の樂を聞きては、心面白く、いそ〳〵し

鄧析―春秋時代鄭國の人、子產も同國人、

ちひ、治國には輕典を用ふといへる事もあれば、法をもちふる事は、時代と國の勢とをかんがへ、斟酌するをよしとす。

一此國に律の書おこなはれざるを闕典なりといへる人おほし。されど鄧析が竹刑をつくり、子產が刑書を鑄たるを、否なりといへるを見れば、律の書なきもまされるにや。此意は唐の刑法志にも論ぜり。

一「服忌令は、唐土の喪制になぞらへ、五服の親を、悉くかきあらはし、父母の喪は、舊令にしたがひ、その外は日をもて、月に換へよとあらば、人々恩義の輕重を知り、敎へのたすけならん」といへる人あり。實にとおもへり。

一世の中の酒肴、とゝのへもてなすといふ事、さまぐ\ある中に、鬼神の爲にするは、祭といひ、生きたる人の爲にするを、重きは、振舞、輕きは寄合といひ、又は家人あつめ、花月にめでなどするは、慰みといふ。そのもてなしするに、音樂といふものなくば、いかでか歡びを助くべき。誰始むるともなく、聖王起りたまはぬ昔より、いづれの國にも、その國々の音樂はあるなり。唐山、韓、天竺、其外、西洋、呂宋などいへる國まで、みなそのくにぐ\の音樂あるを見て、自然の理なる事をしるべし。

贓吏—不正なることをする官吏
棄市—斬罪の屍を市にさらす刑

きやらず、かゝる事たまさかにはありし。

一「父母の讐には、ともに天下をともにせず」といへるも、周の季世、世の中亂國となり、この國の號令、かの國に及ばず、凶を入れ叛を招くの風儀、はやりたる時の事なるべし。今の時は、まことに八洲の外まで、靡かぬ草木もなく、めでたき一統の御代なれば、人の親を殺せしものあらば、いかにもして尋ね出し、其罪を糺し給ふべきに、その子に任せおかれ、生殺の權を下にかし給ふはいかなるゆゑにや。

一主を殺せる奴あれば、咎なき親兄まで、罪に行はるるはいたまし。

一年滿たずして死にたるは、一かど功ありし人の後もなくなり、其しもなるものの、父母妻子ひきつれ、泣きかなしみ、流浪するありさま、いたましといふべし。

一喧嘩兩成敗といふ事、昏墨賊はころすといへる、春秋傳のおもむきにて、當然なりといふ事、あきらかなるにや。

一公の寶物のあづかりて私するは、其罪盜人におなじ。贓吏は棄市すといへる、宋祖の法にかなへり。

一姦夫淫婦死刑に行はるるは、此國の法まされりといふべし。およそ亂國には重典をも

道家の敎—老莊の道

たはれぐさ　中

一塞翁が馬のたとへは、得るといへるうちに失ふ事あり、失ふといへるうちに得る事あれば、得るも喜びとするに足らず、失ふも憂とするに足らざる事をいへり。善惡といへるも、それにひとしく、秦の長城を築けるは、惡政の第一なれど、萬世の防ぎとなるを見れば、惡しきうちに善き事あり、參耆ほどなる良藥はなけれど、補ふまじき疾を補ひ、人の命を誤るは、善きうちに惡しき事あるなり。忠といひ孝といへるほど、尊き德はなけれど、鬻拳が兵をもていさめ、郭巨が子をうづめんとせしは忠孝のうちに、惡しき事あるなり。物事かくとしりてよく戒め愼むは聖の敎、物事かくとしりて成次第にするは道家のをしへなるべし。

一世の亂れたる時は、勇猛なる人こそ寶なれとおぼゆ。私の怨をもて人を殺し、その處を立退きなどするは、まことに大なる罪人なれど、これは試みの人なりとて、何れの國にも、かくまひおかずといふ事なし。それがし幼き時までは、亂後の餘風除

藏すればにとゞくまで多きをいふ

けやけき—きはだちたる

ば、年配なる人こそとて、問うて決する事多し。それも五六十年には過ぎじ。記錄さへ確かならば、幾百年ともなき長生したる人を、左右に置けるに同じかるべし。されば此國の智慧唐土に及ばざる一つは、記錄に乏しきゆゑにや。

一世の中ほど怪しくをかしきものはあらじ。唐土人の記錄を精しくするは、眞にいみじき事なれど、記錄を考へてけやけき惡事をなし、この國より見れば不思議なると思ふ其君其臣いかほどもあれば、かゝる時は、記錄なきこそましならめと思ふなるべし。

自註、漢儒の經學をもて史術をかざるをはじめ、國をうばふの賊、堯舜湯武をもて證據とするたぐひの事をいへり。

牛に汗し棟に充る｜車に積みて出づれば曳牛は汗をかき、書庫に

暮に失ふに至れり。これも悖うて入ればさかうて出るにて候ふ」と、或年配なる人のいひし、げにもと思ひ侍る。

一「世の中ほど、思ふやうならぬものはあらじ。貨は國の命たるを知らざる人は、妄に使ひすてて、代々の貨をも失ひ、又貨は國の本たるを知れる人は、吝かにして、貨さへあらばとおもひて、世の有様あしくなりゆくを知らず」と、或人かなしみて語りき。

一此國には記録少し。凡そ記録といふは、治亂興亡のあと、萬世までの勸戒となるをこそたふとめ、いらざる軍物語のみかきちらしたる、まことに紙の費とやいふべき。唐土の事を引かんよりは、此國の某かゝるよき言葉ありき、又某かゝるよき行ひありき、某何がしは、然なくて、家やぶれ國亡びたる、などいはば、人の心を感ずる事、もろこしの物語するには、遙かにまさるべきに、記録のなきこそをしく侍れ。唐土にても、記録をつくるには、才學識の三長なければといへり。容易き事にはあらず。

一いづれの國にも、日帳日記などいひて、書き記しおく事あり。年を積みて見れば、牛に汗し、棟に充るほどなれど、大方は、陰り晴れたるなどいへる類の事のみかきて、政務人事にあづかりたる議論號令まで、精しくかきたるは希なり。疑はしき事あれ

唐太宗の故事

漢の帝―漢の孝靈皇帝、西園にて官爵を賣りしを云ふ

董卓―漢の獻帝の時の人、米を儲へて晩年を安くせんとせしも遂に殺さるゝに至る

貨集るとき―孟子の語

貨悖うて―大學の語

愚なる人の志、眞にをかしき事なれど、貨集めするものの、人の怨、謗をも、かへり見ず、悖りて入れば、又悖りて出づる事のいかほども出でき、遂にはその身も危くなり家も滅ぶるに至れる、何か此物語に異ならん。漢の帝の西園の禮錢を貯へて、人の心日々にはなれ、火德の消ゆるをおぼえ給はず。董卓が郿塢の米をあつめて、臍の上に火點す事を知らざる、まことに痛ましといふべし。かゝるゆゑにこそ、「貨集るとき、民散ず」とはのたまひけめ。

一「貨悖うて入れば、また悖うて出づ」といふ事を問ひしに、上たる人、「下を虐げなどし、故なきに貨を集め給へば、天地も平かならず、洪水、旱などして、思ひよらざる事に費多くなり、又はこゝかしこ騷ぎたち、これを鎭めんとするに、限なき軍の費いでき、倉に積みたるもののいつとなく、失せゆくものなり。取るまじきものを取るも、悖ふといひ、有るまじき災あるも、悖ふといへるなり」と、或道知りたる人の答へけるに、「その類は、下ざまにも、目のあたりある事にこそさふらへ。いやしき商人など、公の、その事する人と言合せ、一つの物を二つといひ、麁かなるものを、精しといひ、上を欺き、多くの貨をまうけなどするものは、必ず酒のみ色ごのみして、朝に得たる貨は、

許魯齋―元の許衡

千里の馬云云―漢文帝の故事

雉頭裘―晉の大區司馬程據雉頭裘を獻ず、武帝奇技異服は典禮の禁ずる所なるを以て之を殿前にて焚かしむ

宮女三千―

我れいはずともと思ひ、義を先とし、利を後として、人に讓るもあるべけれど、貴きも賤しきも、貨なくして、何事をかなすべき。許魯齋の「學者は生を治むるをもて先とす」といへる、譏るべきにあらず。されど、財をなすといへるは、その番を節よくする事をこそいへ、下を損じて、上を益し。人を瘠しめて、己を肥すにはあらず。

自註、たからは、漢書曰、貨者國之本也。唐書曰、財者國之命也。賈誼曰、積貯者天下之大命也。損レ下而益レ上、瘠レ人以肥レ己竊之道也。

一千里の馬をしりぞけ、雉頭裘を燒き、宮女三千人を出せる類を見て、上の御身より儉約を行ひ給ふこそ、眞の費を畧くとはいふべけれ。されど、御心附あるは少く、下たるものは、憚りていはず、儉約の名のみありて、其實なければ、國を保つ益とはなりがたし。

一唐土人の物語りに、「或人友達かたらひて、山の麓を通りしに、此山に虎ありて、人を食ふ、此虎を殺したるものあらば、十萬貫をたまふべしと、榜文たちたるを見て、大に喜び、腕まくりなどし、そのまゝ馳けあがらんとするを、傍の人ひきとゞめ、命は惜しからずやといへば、貨だに持ちたらば、命は何か惜しからんと答へし」と語りき。

ざるものぞかし。されど、重き病ありて、下手なる醫師の藥飲みても、朝に飲みて、夕に死するは稀なるが如く、亂のはじめと思ふよりして、世の中亂るゝといふまでは、はるか年月を經るものなるゆゑ、智慧ある人ののちを憂へて、とやかくいふをば、疎ましき事に思ふもあり、又は、片腹痛くおもふもありて、さる事やあるべきと月日をくらしゆくうちに、程なう、再びとりかへされぬ世の中とはなるなり。身持あしき人の、遂に思ひよらざる病つきて、夭死するが如し。古への文ども見るに、いつの世にてもかくあるぞかなしき。朝廷の天工共にし給ふ方々は、かゝる事をこそ、よそに思ひ給ふまじきなるに」と、昔の事を今の樣におぼえ、そゞろに涙ぐみて語りしまゝ、後の世の戒めにもやと、記し侍る。

自註、あまだくみともにする共二天工一なり、國輔佐たる人をいへり、書經に、天工人其代レ之

平天下の章
—大學

一貨は國のもと、財は國の命なる故、平天下の章に、財をなすの事を說き給へり。國家をたもつ人、此道知らでやあるべき。讀書する人、仁義禮樂の事は、文にもあらはし、言葉にもいへど、財用の事いふは少し。これは人の好きこのみていへる事なれば、

時代に行はれたる政令、債務を免ずる令

ずと知り給へ」と、ある道知れる人のいひしとぞ。

一或物知りたる人の、數多集まりて、昔物語するを聞きしに、げにもとおもひ侍る。「上奢り、下たなひたる國の民ども、年貢運上の重きに堪へかね、頭だちたるものなどその役所にまうで、しとやかにその苦みを訴へ、上の憐みをもとむるを、哀訴といひ、或は一村二村、又は一郡二郡、諸人といひあはせ、國の守の事執る人の家におしいり、口々にうつたへ、是非にと狂ひ罵しるを要訴といふ。されば民の哀訴するは、亂のはじめなれど、これは人のふと病ひづきたるが如し。驚き恐れて、今までのしかたあしきを悔み、またよき醫師もありてその疾を療せば、あとは何事かあるべき。民の苦み甚しく、詮方もなく、要訴するに至りては、下のうらみはます〳〵ふかくなれど、上たる人は却つて惡む心のみ出で來、初めは世の批判など恐れ、事勿れかしと靜めなどし、なだむるもあれど、度重なるに及びては、頭だちたるもの、咎におこなひ、嚴しくいましめてこそと、智慧なき人の智慧がましくいひなすを、愚なる人はげにもとおもひ、刑罰をもて、治めんとす。これは、補ふべき病を下手なる醫師に相談して、猛藥を飲み、元氣を撃つに同じ、政の道かくなりては、亂をさる事遠から

一韓國の重き司する人、大勢咎にあひしをりふし、朴射夫といへる翁、窃に語りしは、わが國は、郡縣の世にて、下なるもの、上に進み易きまゝに、自然と讒言も多く、又は、賄賂も、行はれて旦にはさかえ、夕にはおとろへ、世の中靜ならず候ふ、其御國の、皆人その分定りたるこそ、羨ましとおぼゆれ」といへり。これは古き事なり、よく思ふ人は知るべし。

赧王ー周の最末の天子

一「周の赧王の、避債の臺を設け給ひしは、然もあるべし、此國の上つ方は、傳へしその國々のひろさ、昔に同じく租稅の納もかはりなきに、債をはたすもの、その門に席しき、又は御輿にすがるも、たまさかにはありといふ、一葉落つるを見て、天が下の、秋なる事を知るといへば、此後安からずおぼゆ」と、或人の語りき。

一狂歌といへるもの、何時よりか始まりけん。或貴き人の、數多集まり給ひし時、狂歌よくするといへるもの、伺候しけるまゝ、借債の歌よめとありしに、よめるとなん

もとよりもかりの世なればかるもよしゆめの世なればねるもまたよし、

此歌を見るに人の心ありといはんや。

德政ー足利

一昔は德政といふ事、屢ありし」と語れるを、「世の中かくなりては、亂をさる事遠から

周家の八百——周天家を治むること八百六十七年

あらず、「勢なり」といへり、聖人の心にあらずといへるも疑はしけれど、勢なりといへるもさもあるべし。郡縣の世を封建にし、封建の世を郡縣にする事聖智の君ありても容易く成るまじけれど、勢にまかせらるべき外はあるまじ。此國も郡縣なりし時もありしに、いつとなく聖人の法にかなへる封建の御代となり、上下其分を安んじ、めでたくすめることそ誠にいみじけれ。されば、物事聖人の教にしたがひ給ひ、人の心のそこねざる御政行はれば、周家の八百は數ふるに足るべきやと覺え侍るなりと、心ある人の語りき。

芸窻筆記論封建曰封建郡縣、孰優孰劣、古今儒家議論紛紜。余雖庸劣二百四十二年間春秋、一千三百六十二年間綱目、略窺其顚末。間嘗以爲郡縣不如封建。既而屢遊朝鮮觀其郡縣之俗、亦以爲郡縣不如封建。然則彼其以郡縣爲優者、乃古今儒家經遠之慮未審、而折圭擔爵、躋々蹌々上下安分共躋太平。余以爲唯有我國物有固然事有心至蓋郡縣之世者、天下人心、奔競是務賄賂盛行讒毀併興雖有善者難以爲防而已矣。或問賄賂行焉讒毀興焉、何獨郡縣日鈎之利也、商者之遑々酷於工者之役々勢使然也

思へば咀ふ—其人を愛する餘り

舜水—朱之瑜

字の上にて見れば、珍しき事のやうに、覺え侍れど、世の愚なるものは、今も然なり。「人の家には、生死病苦、又は水火の憂など、必ずある事なれば、豫め其備なくては、叶はぬ事なり」といへば、「祝ふ門には福來るとこそいへ。目にも見えぬ、忌々しき事なのたまひそ」とて、女童の、腹立て罵るは、遠く慮るものを、妖言とするなり。又「かゝる身持にては、道にもあたらず。人の思はくもいかゞ」といへば、「惡口いひて、人を辱かしめ給ふ」といひ、泣き哀しむに至れり。これは直言するものを誹謗とするなり。いたましきことなり。

一思へば咀ふといへるも、卑しき諺なれど、面白き言葉にや。人主をして此意を知らしめば、誹謗妖言なりとて、忠直の人をそこなひ給ふ事はあるまじ。

一舜水といへる人、明の末に、其國の亡ぶるをかなしみ、恢復の志ありて、此國に來れるを、水戸に招き師傅の位をもて待ち給ふに、「唐土にては、昔の封建の世まされるかといふもあり、又は末の世の郡縣こそまされりといへるもありて、其の說さま〴〵なれど、此國に來り、はじめて封建の世の風儀といへるものを親く見て、誠に三代の聖人の法こそ有りがたく覺ゆれ」と語られしとぞ。柳子厚が封建論に、「封建は聖人の心に

さうぐ〵し　ー寂し

自註、許胤宗曰、古之上醫、病與レ藥値唯用二一物一攻レ之今人以レ情度レ病多二其物一以幸レ有レ功譬猶不レ知レ兎廣絡二原野一冀二一人之獲一術亦疎矣。

一或人其子を京にやり、醫師にさせしに、著る物のあしく、いかがなりと、消息せしまゝ其事をいひて哭きしに、法印なりし天台の聖のいへるは、「唐土も、此國も醫師の衣服をかざれる風儀期らずして同じきこそ、不思議なれ。佛も莊嚴よろしからねば、庸俗の人は、尊みおもふ事薄き理と同じ事なるべし。されど、外の飾より、內の飾なるにや、それがし京にありし時、宿の主なるものの語りしは、何のなにがしは、豐後の人にて、はじめて京に來りし時、伴ふ人もなく破傘、缺木履、いとさうぐ〵しかりけるが、人柄おとなしきを、尊くおぼえ、諸人慕ひしまゝ、今は世に名を數ふる人のうちとなれりとかたりければ、言忠信行篤敬といへるこそ、外の飾にはまさるべけれ。貴方の御子なりし人も、人々よしとこそいへ、あしゝといふはなければ、後には時を得たまふなるべし」といへりとぞ。有がたき言葉にや。

一昔より、秦の始皇の事を論じて、遠く慮るものを妖言とし、直言するものを、誹謗するといへり。かくありては、その國いかでか滅びざらむ。されど、かゝる事を、文

通介―魏の盧欽、徐邈の見識高くして時流に動かされざるを稱して通介といへり

許胤宗―南北朝時代の陳の人

人參を用ふる醫師あれば、下手なりといへり。世の人、人參の功ある事を知らず」とて、杉某といへる醫師、常に憂として語りき。其後李士材、蕭萬與などいへるものの方書世に行はれ、今日此比に至りては、かろき病にも、人參を用ひざる醫師は少し。若しも人參を用ひざる醫師あれば、下手なりといへり。去る頃又武藏にゆき、杉某にあひしに、「世の人、人參の害ある事を知らず」と語りて、其事のみ憂ふ。徐景山が通介なりと賞めけり。定りたる見識ありて、世の流行に從はざるこそたふとけれ。

一「乳のみ子の癇氣、女の血の道には、醫師の方書を考へて盛れる藥よりは、世の人の家傳といひてとりはやせる藥こそよけれ」といふ人あり。さる事にや。

一韓人の物語に、「毒蛇の嚙みたる所は、早速竹の筒にてつよく押附け、毒氣の筒の中に腫上れるを、利刀にて切り除けば、痛みもなく、皮ばかり切れて癒ゆると」いへり。

一韓の醫師を見るに、人每に妙なるといふにはあらず。拙きも多し。されど、脈をしり、藥を用ふる事、此國の醫師には違ひ精しき樣におぼゆ。疾により藥一種にて効を得る事あり。これを此國の醫師は、單方なりといひて笑へど、許胤宗が言葉を見れば然にはあるまじ。

に任ぜられんとするや彼相とならば、吾當に白麻を壞らんと切言せり、白麻は親任の辭令書
切諫—通常折檻とかく
御目ひらき—開悟
面を破る—怒らるゝを顧みず
まではなれど—原本の儘

にも「安からず覺え侍る」と答ふ。「他の親なれど、年長けたるものゝ憂しと思ふ樣は、安からぬ御事なるに、親しき御親の、朝夕心を苦め給ふ事、少しの御心附なきこそ怪しげなれ」といひしに、恥顏して、何の言葉もなし。其後は親子の中、睦まじくなりたると、語れる人あり。

一或人やんごとなき御方の、藥あそばせし折節參りかゝれるに、「これは唐土人の傳へし、無價の寶といへる藥にて、邂合のかずかさなりても、猶々めでたきなる」とのたまひしまゝ、「藥は五臟をして、平かならざらしむと聞き傳へ侍れば、御痛み所もなきにいかがや」と申せしに程なく御目ひらきたまひけり。

一醫師はその知りたるほどは「それはよし、これはあしゝ」と人の面を破りてもいふべきなれど、然ある醫師は稀なるこそうらめしけれ。

一世の中は、賢きをもて賢きを欺くもあり。又愚なるをもて、賢きを欺くもあり。賢きをもて賢きを欺くまではなれど、愚なる振して、賢きを欺くより、限なうおそろしけれ。

一「それがし若き時、武藏にありしに、其頃までは、人參を用ふる醫師甚だ稀なり。若しも

集を遜志齋集といふ

薛廣德―御史大夫となり、元帝が樓船に乘らんとせしを乘輿の下に頓首して諫止せし人

氣疎く―ばからしく

白麻を裂かんと云々―唐の陽城諫議大夫となりて肯て諫爭せず、裴延齡の丞相

違ひたり」といふ人ありしを、「此國は今までの通りこそ」と、或る道知れる人言はれしとぞ。これを諫なくても宜しといふにもあらず。又百官の良否は、糺すに及ばずといふにもあるまじ。國々の勢を見て、深く思ひたる言葉ならん。知る人ぞ知るべき。唐土にも古は諫官なしといへり。

一漢の薛廣德が「船は危ふく候ふに、橋よりしたまはずば、御車を、血にて汚さん」と諫めしを、海にもあらぬこよらなる河風に船乘り給はゞ、御遊ともなりなんに、餘り氣疎く覺ゆ、白麻を裂かんといへるほどの人、七年まで、何の諫もなかりしこそ尊けれと、明儒の論ぜる、眞に面白く覺ゆ。されど宋儒は、薛廣德を善しとし、陽城を盡さずと論ぜり。これも亦面白しといふべし。

一その子の惡しきを悲しみ、朝夕切諫せし人ありしに、或人のいへるは、「其御身の若き時は、物事御親の命のまゝにありしや」と問へるに、暫しありて「然はなく候ひき」と答ふ。「さればこそ、卑しき諺にも年こそ藥なれと申し侍れば、年長け給ふ後には、氣遣ひ思召すほどにはあるまじ」といひて、その子なりし人を側に招き、「此程道行く人の、言葉爭ひして、年長けたるものを、打擲きなどしたる話聞き給ふや」といひしに、如何

荷蕢丈人―論語に見えたる隱者

仁德帝の御陵―舳松村に在り、方八町、山陵中の最大なるもの

族葬―墓域をつくりて一族をその内に葬る

方孝孺―明の學者、文

處にありては彼處に往かん事を思ひ、此をなしては、彼をせんことを思ひて、心騷がしくはなる。されど心に足ると思へる善き事は、いつとても有るまじ。善惡を忘れて分を安んぜんには如かじ。

一山科のかたはらに、佃業する父子ありしに、道行く人金の入りたる袋を落し置けるを其子高き丘に馳け上り、呼びて返さんとす。「何事ぞ」と問ふ。「しかぐ\」と答ふ。「落すも拾ふも、世の習なるに、入らざる事にかまひて、我が佃業を捨つるぞ」といひけるとなん。この人は、荷蕢丈人の類ひなるべし。

一堺に仁德帝の御陵をはじめ、諸帝の御陵、今も殘りて、之を望むに。大山の如し。古へを好みて、力ある人は、周の法に從ひ族葬すべき事なり。方孝孺の文集に、その理恐しくいへり。尤もなると覺え侍りき。此國にも、遠く慮りたる人は、國を建つるのはじめ、村里隔たりたるつ閒驗き所に寺を造るもあり。人を葬る所を市街の中に構へ寺地の限りあれば、年經たる後は、古き墓を發きて、新しき骸を埋む。眞に慘ましといふべし。

一「此國には諫官もなく、大目附などいへるは、御史の職に當れど、彈劾の式、唐土には

服改まりなば、下著はさまで取繕ふにも及ばず、費えを省くべきにや」と或人の語りき。されど容易き事にはあらじ。

自註、衣服之制、果能如レ此、毎二一件一省レ帛不レ下二數尺一綿亦稱レ此。擧二域內一而算レ之則爲レ不レ貲矣

一衣服改制の仰せあらば、唐土人の眞似させ給ふと批判する人多かるべし。されど朝廷の冠服も、その初め、此國にはなかりき。服の結構或人のいへるは、其大概なり。委くせんとならば、此國の道服をはじめ、異國の服まで、皆々集め、そのうちにて、便宜しき、禮服、便服、尊卑、上下を別ち、新に拵へてより、永久不易の服とは成るべけれ。眞に容易き事にはあらず。

一或人の屋敷を東向に建てられしに、年月の經つに隨ひ、「南向こそ良からん」といへる人次第に多くなり、その後火災に遭ひてければ、今こそといひて、南向になりけるに、「元の東向こそ良かりしに」といへる人、また次第に多くなる。これも火災に遭ひてければ、また東向になりたり。この頃聞くに、「元の南向がな」といへる人多しといふ。また年月たちて火災あらば、元の南向となるべし。また善き事もがなと思ふよりして、此

云々―洋服のことをいふ

さよみ―麻の布の精きもの

とほりを鈕にてしめ、後前の重一樣にするも宜しと覺ゆ。上著、中下著、共に袖下に綿入るる事、寒氣の防となるにもあらぬに、絹、綿の費え、無益なる事ならずや。肩より先膝節より下は、さまで寒からぬもの故、肩より先に當る所は、手通るまでに細くし、綿入るる事もなく、裾は脛限りにせば、手を働かし、道行くにも便あらんと思ふ。背筋を縫ひ通せるゆゑ、腰に當りたる所は破れ易く、道行くには足に纏ふ。下部のものの褄まくりしたる有樣見よしとは云ふまじ。腰より下は縫ひ合せずもがな。かゝる事など、其の道知りたる人に精しく尋ねて、先づ常の衣服を、便宜しく、費えなきやうに改むべきなり。むかしは上衣下裳といひて、上下二つなりしかど、これも便惡き故にや、その後は一續きになり、此國の常の衣服もさあれば素襖がなとおもふこゝろをもて、一續きなる跟まで達く袍を新に拵へ、襟は團領にして、袖は手先隱るゝまでにして是を此國の禮服と極め、五月より八月まで、羅紗、さよみ布、九月より四月迄は、緞子類、絹紬、木綿何れも單にして、其分限に應じて著し、今の袴は、夏は單、冬は綿入にし、腰を除け、脇を縫ひ合せ、二便の支へなく、肌に附け著るやうにせば、常の服は脛かぎりなりとも、袴には綿入、上著は跟に達けば、寒さを防ぐに餘りあるべし。かやうになど衣

素襖—布にて製す、直垂に似て紋所あり、武士の禮服

しか〴〵ともなき—整はざる

異國の人の

物の長短あるを、刀をもて一つに切り揃ふるが如し。されば萬に支なきといふ法やあるべき。愚なる人の、輕き支あるを見て良き法を捨るこそ惜しけれ。

一「昔の公服は、素襖ばかりなりしに、其後今の上下と云ふもの出來、單裏附、綟肩衣など品々ありて、事煩はしく覺ゆ。上著下著など、外に見ゆれば、古き垢附きたるは用ひ難く、自ら取繕ふに至れば、その費も限あるまじ。昔の素襖に復らんには如かじ」といる人ありしに、又或人のいへるは、「然にはあるまじ。衣服は身に便あるをよしとす。素襖は身に便あらざるものなりし故、いつとなくその袖を截り、裾を縮めて、今の上下とはなれるに、今又昔の素襖に復らば、附竹に等しかるべし。襟脇開きて長き下著の見ゆる、さまで大いなる違ひなければ、費を省くとも、何ほどの事かあらん。その上雨などふり、供人しか〴〵ともなきものは、傘の下あまりて濡れしをたれ、遠道行くに股立とりたるも妨げ多かるべし」といへり。

一此國、常の衣服、いつの時よりか、かくは定まりけん、費なる事多し。人の背中は陽にして陰を惡む故にや、甚だ寒く覺ゆ。此國の常の衣服には、上の二重四重なるとき、その寒きかたは、一重二重なり。これは唐土の衣服も然あれど、異國の人の、前の

雄略天皇の后親しく養蠶したまへる類

藥材—藥をつくる材料

邪敎—天主敎

其屋敷々々に桑の木を仕立て、我先にと蠶飼するの風俗となりなば、絲の少き事やあるべき。今も絲拵へいだせる村里なきにしもあらねど、唐土より來れる絲多く、しかも其價卑しき故、骨折り拵へても、賣る所の利少し。人々其益不益を考へ、蠶飼ふには及ばざるなり。此後、天下後世の事を深く思ふ人、上にたち給はば、唐土より來れる絲を禁じ、家々に桑をしたて、蠶を養ふ事を敎へ給ふなるべし」といへりとぞ。

一「唐船を禁じ給はば、藥材はいかゞすべきや」といひし人ありしに、或人のいへるは、「それこそいと易き事に候へ。賣藥の司をたて、代金の數を定め、唐土に渡り、藥材のみ調へ來り、藥店に賣拂へと下知し給はば、何の難き事やあるべき。渡唐を禁じ給ふは、邪敎の恐れあるゆゑと聞き侍るといひしに、それは猶々易き事なれば、これを防ぐの道いかほどもあるべし。しかし藥材のみ調へ來れと、はじめは下知し給ふとも、後々には其法みだれ、ほかのものも調へ來り、上奢り、下私し、罪人多くなり、其憂唐船の來れるには勝れる事あるべし。良法ありても良人なければ、其災救ひ難し、世の中には歎くべき事のみ多し」といへりとぞ。

一凡そ法といへるものは、輕き重きを考へ、其輕きを捨て重きをとりて、一定の法とす。

金銀の少き事知れたるにあらずや」といへるに、又或人のいへるは、「然にはあらず、唐土の金銀あらゆる數をいはば、此國には幾萬倍といふほどなるべけれど、これを用ふる人多き故にこそ、其價貴く少く見ゆるなり。此國はあらゆる數、其少き事、又唐土には遙に違ひたれど、之を用ふる人また少き故、價いやしく多しと見ゆ。たとへば奥すぢ某といへる邊は米多く、其價廉しといへるが如し。米の地より生ずる事、一段には何程といへる數、他に違ひて多きにはあらず。船の便惡く、他國へ賣出すには勝手よろしからず。大方其國のみにて之を用ひ、其用ふる人少き故、價も貴からず、他よりは多きと見ゆ。某斯くいへるは、唐土を勝れりとし、此國を劣れりとせんといへる心にはあらず、世の人、此國は金銀多しとのみ心得、其實を知らざる故に、重き寶を濫に掘出し、或は濫に費し、或は他國に送りて、此國のゆく〳〵禍となる事を顧みざる悲しさのあまり、かくはいへるなり」と答へしとぞ。

一「此國は絲少ければ、唐土より來り賣れる人なくば、衣服豐ならじ」と、言ひし人ありしに、或人のいへるは、「此國の絲元より少きなるべけれど、蠶も、桑も、皆此國の產する所なれば、昔の王后をはじめ、親ら蠶の禮を行ひ給ふ如く、下は士大夫の妻までも、

五行、—木、火、土、金、水

山する人—鑛山にて働く人

一天地と齊く生ひいでたる金、銀、銅を、濫に掘り出し、有りてもよし、無くても濟むといへる、異國の物に換へて、五行の氣を損じ、奢侈の源を長ずるこそ、眞の惜むべきとはいふべき。鐵は此國の產するところ、萬國に勝れたれば、讐に兵を貸すに同じとて、昔より之を禁ぜり。是もよろづ世のため、農器の乏しからん事を恐るるなどいはば、然もあるべし。その國道なければ、竹を伐りたる旗、木を削りたる戟にて、さしも甚じき百二の關も、平地となれるといへば、兵器にはよるまじ。されど渡らぬぞめでたき。南蠻より來れる鐵にて刃をつくり、人々のもてはやせるを見れば、此國の鐵のみ勝れたりともいひがたし。韓の鐵も、此國には勝れりといへり。金すくなくして、吹煉の費に當らざるを、山する人の言葉には若しといへり。

自註、胡居仁曰、金人不下以二布帛一換中金銀上是他有二見識一。

一「唐土には、金銀少く、此國には多し」といへる人ありしに、或人の云へるは、「然にはあらず、此國は金銀を惜む心なく、濫りに山より掘り出せばこそ、多くは見ゆれ。天地のものを生じ給ふ。おほかたは過ぐる事もなく、または足らざる事もなし。此國のみ金氣餘りありといへる理やあるべき。唐土は金銀の價貴く、此國は然無きにて

素器―木地のまゝなる器

ぐんちう―たんちう、緞綢は支那より舶來のもの

たち、百年たちたる後は、何時となく物事重く結構になり、覺えず分限の外に出で、下を虐ぐるに至れり。一事を擧げていはば、器物にはじめは素器を用ひたるに、いつとなく漆器になり、またいつとなく彩畫を加へ、またいつとなく金銀にて裝ふにいたる。衣服とても、初めは木綿を著、いつとなく紬になり、またいつとなく絹となり、それよりしては、緞子、ぐんちうなどいへる、唐土のものを貴び、又は羅紗、猩々緋などいへる蠻國の品を用ふるに至れり。斯る類、一事ならねば、いかでか入るものゝ數、出づるものの數償はんや。其間には、奢を禁ずるこそ政事の要なれと知れる明君賢相なきにしもあらねど、おほかたは小事小物にのみ心を用ひ、大事大物の、いつとなく分限に超えたるといふに心附きなければ、禍亂を救へる益とはなりがたし。

一いつの時にかありけん、材木の費を厭ひ、乘物の積細まりし時、昔はさゝら竹に硫黃をつけ、これをつけだけといひしに、今の世檜を用ふるいかゞなりと、小賢しき人のいへるにより、さらばとて、つけ竹に改まりけれど、ほどなく止みてけり。小事に心を用ふるもをかし。また話のみ聞きて未だ試みざることを、妄りに言ひ用ふるもうらめし。

置くこと、論語に見ゆ

年貢運上―租税

一葉二葉―一代二代

は、「仰せ然る事なり」とのみいひて退くものなり。智慧ある人も、ふと聞きては、さして思寄も侍らずといふべき他やあるべき。これは會議に似たれど、その實は會議にあらず。唐土を學びて、各自その思寄を書きつけて奉るやうにありたきものなり

一世の中の亂れんとする時は、必ず所々に盜賊起る事あり。盜賊といへるは、常の盜人にはあらず。百姓の年貢運上、年々に重くなり、上に訟へんとすれば、咎を蒙り、其の儘にてありなんとすれば、妻子を育むべき樣なきより、止むことを得ず、徒黨を結び亂を起すに至れり。それよりしては、種々の變故いできたり、大藩小藩、思ひ〳〵の心になり、大きなる亂れとはなるなり。脾胃害ねたる人の、百病競ひ起りて死するが如く、恐るべきの甚しきなり。然るに、年貢運上の重くなる因をいへば、上たる人の奢るによれり。凡そ奢といへるは、華美榮耀を好むばかりをいはず、その分限に應じ、入るを量りて出す事を爲すの政なきより、大家小家ともに、常に定りたる年貢運上のみにては償ふべき道なく、民を虐ぐるに至れり。國を建つるのはじめ、多くは物事質素にして、定りたる年貢運上にて經費に餘りありて、自然と仁惠の政行はれ、上豐かに下安く、めでたき世のありさまなれど、一葉過ぎ、二葉過ぎ、五十年

蓬の中の麻ー蓬生ニ麻中一、不レ扶而直（荀子）

大徳ー高徳の僧

告朔の餼羊ー虚禮となりたるのを、古禮のおもかげを存するものとして殘し

の心、次第に薄くなる。これは蓬の中の麻ならぬ、賤しき性質より起りたるなれど、世の中の風俗こそ、上なきものとおぼゆれ。

一「櫻は命短し。いかなれば斯くあるやらん」といひしに、「花多き故にこそ、松、檜には及ばず。天地の理誠に有難くおぼゆ。國も家も繁華なりといへるは、久しからずと知るべき事にや」と答ふ。

一「文書く時、闕字する事、此國の昔は、唐土の如くにはせざりき」と、或公達の語り給ひしとぞ。されど「大政事し給ふ御身の、或大徳の有樣を書き、銅の碑に鏤められしを見れば、大元帥といへるに闕字し給ふ。安からず覺ゆ」と、或人のいひし。

一此國は災異を見て恐るる事少し。されど祥瑞をもて、諂諛の助とする事もまた少し。元日に日食あれば百官に命じて、政治の得失を言はしむる事、强ち言を求むるの實あるにもあらねど、後の世にては一つの儀式のやうになれり。告朔の餼羊に同じく唐土にては捨てざるぞよき。此國にてその眞似し、眞似を眞似するには及ぶまじ。

一衆人會議する時、「この事いかゞ思ひ給ふや」と問へば、上を憚り、傍を見合せ、とやかくするうちに、「我は斯くこそ思ひ侍るなれ」と、頭だちたる人言ひ出せば、おほかた

人も其國を尊めて夷にはあらずといへる心にて、東華と稱へ、若も夷なりといへば快からず覺ゆと見えたり。國々の言葉物語りせし折節、「東西南北ともに、言葉の次第、いづれも體を先とし、用を後とし候ふに、十五省の言葉ばかり、用を先とし體を後とするこそ不思議なれ。其國のことばも、北虜南蠻西域に違なく侍るなり」といひしに、韓時中といへる韓人、「さればこそわが韓國にも夷の字免れ難く候ふ」と答へき。

一世の中は相持なりと、卑しき諺にいへる、誠に道に叶へる言葉なるべし。都ありても鄙なければ、其國立ち難きが如く、中國ありても夷狄なければ、生育の道普からず。藥材器用をはじめ、大事小事ともに、互に助くる事多し。國の尊きと卑しきとは、君子小人の多きと少きと、風俗の善惡とにこそ因るべき。中國に生れたりとて、誇るべきにもあらず、又夷狄に生れたりとて、恥づべきにしもあらず。愚なる人は、田舍人の田舍人なりと人のいへるを聞きて、恥ぢ罵るが如く、何の故もなくその國を中國なりと云はんとす。さる事にはあるまじ。

一惡しきと思ひし事も、世の中に何程も斯る事ありと聞けば、惡をにくむの心、次第に薄くなり、善き事なりと思ひし事も、世の中に然する人は稀なりと聞けば、善を好む

徑山寺—支那姑蘇にあり

也、白虎通作レ薄。

一聖人の風儀にも、狭しと見ゆるもあり、また恭しからぬと見ゆるもありとぞ。唐土漢より後の風儀は、せばしなどいふべきにや。

一或人唐土の風儀を慕ひ、わが骨を徑山寺の側に葬れと、遺言しけるとなり。せめて三代の時ならばこそ。

一「今の世にも、遣唐使もがな」といへる人ありしに、「菅相公の見たまへるこそ甚じき理なりと思ひ給ふべし。日出處天子、又は東天皇などとし給ひては、元より彼國取擧ぐべきにもあらず。須美羅彌古都とし給ひなば、いかにもその使をも入れ、書をも答へ候ふべけれど、使を接するの禮儀を始め、書中の文句、いづれ他の蕃王を待つの式に違ひあるまじ。曲江集など讀みて知るべきなれば、遣唐の御使なきに如かじ」と、或人のいひき。わが國の人高麗の使の下に就ざりし事を、威光の如くおぼえて、漢の匈奴を待つの禮にもちがひ、規模ならぬといへるに、心附きなきもをかし。

一「唐土は世界の中にて、仁義禮樂起りたる聖人の國なれば、中國といへるは理なり」といへるもあり。また「其の國より見ればいづれか中國ならざるや」といへるもあり。韓

服―忌服

自註、三月の服は、夏后氏の禮にして、同姓不㆓相娶㆒は、周禮のみ然りといへり。一つをあげて其他を知るべし。

一唐土代々の風儀を見るに、漢の時までは、古の近き故にや、さはなかりしかど、次第に物事心附け過し、いづれにしたりともと思ふ事、とやかく議論して、無き事を有る事となし。小事を大事となし、おほやうならぬと覺ゆる事多し。一事をあげていはば、御製の詩を、其一代のうちに群下の詩と同じくえらび出し、一部の書として世に行ふ事、此國代々の撰集の如くし、又は法師、女などいへるものの中に書きつらね、我が起臥する所に懸け置かば、狎れ汚すといひ、又は不敬といひて、唐土にては罪を蒙ぶるなるべし。これはその道理さる事なれど、他の事に押移り、物事かくありては、法の網嚴しく、わが豐葦原の豐にして有難き風儀には及ぶまじ。事の別ちもなく、一筋に彼れを學びて、此れを厭ふべきにしもあらず。めい〳〵その時世の勢ひなればまた此れを推して、彼れを罪すべきにしもあらず。「文の弊は、小人もて僿なり」といへる言葉、面白しとおぼゆ。

自註、文のつひへ、大史公曰、文之敝小人以僿、註文尊卑之差也、僿無㆓悃誠㆒也、細碎

孔子の云々—論語子罕篇に「子欲レ居二九夷一或曰陋如レ之何子曰君子居レ之何陋之有」

三代—夏、殷(商)、周

國を指したるにや。大連小連といへるも、此國の人なるべし。孔子の九夷に居らまく思ひ給ふも、此國孝順の俗ある事など、きゝ傳へ給へる故にや」と、或人の語りき。「唐土の外なる國とも、狄といひ羌といひ、蠻といへる、北南西ともに、獸、蟲のつきたる文字なれど、東の國は仁にして壽きゆゑ、さはなきなり」と、唐土人のいへることばあり。唐土代々の記錄をも閲し、又韓の風儀をもしたしく見るに、實にもと思ふ事多し。されど仁といへるも、その道を得ざれば眞の仁にあらず。壽きも、其人々の心にこそよるべけれ。ありがたき國に生れたる人は、その道を盡して、唐土人の言葉、虚ならぬやうにすべきにや。

一この國は人の心素直にして、夏商の風に近し。聖賢をして今の世にあらしめば、おほかたは忠質の間をもて敎とし、事々周家の文章には從ひ給ふまじ。昔王政の盛なりし時、朝廷の官職規禮をはじめ、唐土を法とせられしかど、衰季の仕方もまじりたれば、此國の風俗にもあらず、三代の道にも違ひたる事少しとは言ひがたし。世の書好める人の、動もすれば唐土の事を引きて、古今の異なるありて風俗の同じからぬといへるに、心附きなきはいとうらめし。

六部―吏部、戸部、禮部、兵部、刑部、工部

八省―中務、式部、治部、民部、兵部、刑部、大藏、宮内

夷―夷は大弓の合字

り。その近きあたりには、風に放されて來る韓人、今も多し。一書に、素戔嗚尊新羅の國に下りましてとあり。又韓地に、植ゑつくさすとあるを見れば、尊その地を經略し、根の國と定め給ふにや。天よりして、出雲の國、簸の川の上に下りまし、大巳貴神を生み給ひ、それより根國にいでましぬと。出雲も韓に向へる國なり。

自註、昔三韓をからといひ、西土を諸越といへるに、いつの時よりか、混じてからともいひ、もろこしともいへり。誤なり。

一「八雲、八咫、八幡などいへる、此國にては、木の成數にしたがひ、八の數を貴ぶとぞ。唐土にては、六部、韓にては六曹と官を別ちしを、此國にては八省と定められしも、その心なり」といへる人あり。

一「大いに飢饉せし時、唐土にては、人相食むといへる事、紀傳にいかほども見えたり。此國にては、終に聞かず、獸の肉さへ、忌て食はぬ故なめれ」と、或人の語りき。神の使なりといへる鳥獸、その氏子は食はず、神の鎭めたまへる山は、金、銀ありても、貪れる人開きあけんとはせず。いつまでもかくありたき事なり。

一「此國の如く、大きなる弓を用ふる所、外になければ、唐土人の夷といへるは、もと此

昭穆—昭王穆王
天日嗣—後鳥羽天皇
咸亨—唐の高宗の年號、我が天智の末期
八洲—淡路、四國、隱岐、筑紫、壹岐、對馬、佐渡、大倭

まじ。此三つの理は、天が下知しめす、上なき御寶なれど、周の道も昭穆より衰へたるが如く、いつとなくやう〳〵疎かになり、いとも畏き天日嗣の、隱岐の國に幸び給ふにいたりては、冠裳倒しまに置き、この御寶隱れさせ給ひて、上下安き事なく、戰國の世とはなれりける。されど、天の運行の絶間なく、雲霧のあとたえ、照日と共に、三つの御寶また世に顯れ給ふより、今の世とはなりたり。聖の御時は知らねど、鎖さぬ御代と、唐土人の言傳へしも、かくこそあらめと、有難くおぼゆ。されば、此御寶の顯れ給ふも、また隱れさせ給ふも、上つかたの御責なれば、其理を盡させたまへかしと、祝ひ祈りおもふ」と、或人の語りき。

一此國を吳の泰伯の後なりといへるは、唐の世咸亨と年のなりし時、此國の人、唐土に來り、言出せる事なりと、唐書に見えたり。いかなる人の、かくはいひし。史記に泰伯無」子といへるを見れば、其說の濫なる事明らけし。

一國史を考ふるに、天神瑞穗國を瓊々杵尊にさづけ給ひしかど、其後はるか年を經て、神武帝の御代にいたり、難波より東、始めて職方に歸せしと見ゆ。二尊の生み給ふ八洲、おほかたは今の西海道にて、韓に近し。隱岐、佐渡、越の洲、いづれも韓に向へる國な

關雎乾坤—關雎は周文王夫婦の和を稱せる詩、乾の卦は男の道を示し坤の卦は女の道を示す
難波の役—豐臣氏滅亡
否—正しからず

感じて此書をつくれり。それゆゑ、此言葉をもて、巻を開くのはじめとするなり。

一世の亂るるは、いつとても男女の道正しからざるより起れり。人々の云へることなれども、實に知る人少なし。

詩始二關雎一易基二乾坤一。まことにしる、眞知之爲レ貴也。

一此國の假名にて書ける文ども、言葉の美しく妙にして、人の心を感ぜしむる事、まことにわれ人のいふにや及ぶべき。されど記せる事は、若き、生立つ人などには知らせん事いかゞと思ふ事多し。世の中に斯る事もあるやとおもひなば、人の心を傷ふの端なるべし。世の道の衰へたるより、斯る文もいでき、又斯る文をもてはやせるより、世の道いやましに衰へたるならんと、悲しく覺え侍る。難波の役より、天が下ひとつに統べし後は、年は百年にはるか餘り、幕の府、七葉八葉になり給へど、男女の道、否といへる事、世語にも聞かず。世の中めでたからん例ぞと、有りがたくおぼゆ。

一「三種の御寶は、天地開けし始より、御寶によそへて、三つの理を傳へ給へると、諸家の記錄にも見え、其言葉さまぐ〜なれど、仁み、明かに、武しといへる、他はある

狂れたる云云―狂夫の言も聖人これを擇ぶ(史記淮陰侯傳)

たはれぐさ

上

雨森芳洲著

一狂れたるものの言葉も、賢き人は擇ぶといへるを便とし、見し聞きし、思ひし事どもを、漫に書きつゞけて、世の誹いかゞと恐しけれど、わが後なる人の、庭の訓とも思へかしと、焚く火に燒きもやらず、殘し侍るなり。

一古き記錄の書を見るに、智慧なき人のいへることは、いつの世にても行はれ易く、智慧ある人のいへるは、用ふるものも少し。智慧ある人の言葉は、智慧ある人こそ、さる事ありとはいへ、智慧ある人、いつの世とても少ければ、智慧ある人の言葉行はれざるは宜なり。歎くべきの甚しきなり。

虞翊が諫を用ひず、稅布を增せしより、羌人謀叛せると、漢史に記せるを讀みて、

名家隨筆集 下 目錄

ならずんばあらず。　筆のすさびは關西の儒宗菅茶山(文政十歿、八十)の著す所、其人よく世故に通じて而も眞率簡朴、故に屑々の談片を蒐錄せる緒餘の隨筆、亦滋味の永く盡きざるもの頗る多し。
今本篇を成すに方りては孰れも原本に據りて校訂を加へたれども、春波樓筆記のみは原本といふべきものを獲る能はず。　故に姑らく二三の類本を校讐して其の妥當なるものを採れり。
校訂と頭注とに就きては井口二郎氏を煩はしたること多し。　特に記して謝意を表す。

大正三年八月　　校訂者　武笠　三

者柳里恭（寶暦八歿、五十二）の該博の識と卓落不羈の性との致す所なるべし。三浦梅園（寛政元歿、六十七）は豐後杵築の儒臣にして、謹嚴なる醇儒なり。梅園叢書、梅園拾葉二書の諄々として道を說く所、以つて著者の人となりを髣髴すべし。梅園叢書は曩に百家說林に收められたれども、其第二集を逸したるは久しく讀書子の遺憾とする所たり。故に今本篇に於て之を補へり。司馬江漢（文政元歿、七十二）は一代の奇才、晉に西洋畫の先輩として日本美術史上に地歩を占むるのみならず、又蘭學を修めて多少の科學的頭腦を持し、廣き意義に於て實に當時の先覺者たりし也。春波樓筆記が、其文の蕪雜なるにも拘はらず、讀者をして一種の敬意を以て之に對せしむるもの、亦實に此識見の閃きの致す所

緒言

名家隨筆集下卷收むる所、雨森芳洲のたはれぐさ、柳澤淇園の雲萍雜志、三浦梅園の梅園叢書、梅園拾葉、司馬江漢の春波樓筆記、菅茶山の筆のすさび、渾べて六部、其人はいづれも當時の名流にして、其文は皆一代の珍たらざるは無し。

雨森芳洲（寶永五歿、八十八）は木下順庵門下の俊髦、學德兼備の名儒として一時に推重せらる。たはれぐさは其の精到の見と穩健の識とが、機に觸れ事に隨ひて發して文をなせるもの、其の人情世態を謂ふ所最も著者の見識を見るべし。雲萍雜志が、飄逸の筆を以て人情世態を曲盡し、殆んど一種の悟道觀を讀者の胸底に畫かしむるものあるは、蓋し著

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

名家隨筆集

下巻

